

ISSN 1342-6818

滋賀県立大学

# 国際教育センター研究紀要

第8号

2003年12月



*Academic Reports  
of  
The University Center for Intercultural Education,  
The University of Shiga Prefecture*

Hikone, Japan

December 2003, No.8

## ご あ い さ つ

紀要第8号ができあがりました。

近年、研究者の業績評価の問題にからんで、当該論文発表機関の、学界における水準がことさら重要視されるようになりました。その結果、審査委員会を持つ、いわゆる一流の学術雑誌に論文を発表することが至上命令のように考えられております。ところで、そうした学術誌はそれぞれの伝統にしたがって、一定の手続きと構成を持った上での新しい知見の披瀝を行う形式性を要求します。ですから野球の比喻で恐縮ですが、野茂投手みたいな論文は排除されかねません。

しかし他方、本学の「人間学」の講義に代表されるような、研究者が未知の問題と格闘している赤裸々な姿、それがそのまま提示されるような論文、しかつい言葉で申せば萌芽的発想に満ちた論文の発表もまた大切です。その意味において私は、一流学術論文の、整髪されたピカピカ頭はもちろん重要ですが、同時に、個性に満ち、未整理の発想渦巻く、もじゃもじゃ頭の論文も大切にしなければならぬと考えております。

ただし、そのような論文には発表後、同僚による徹底した批判と討論と啓発とが不可欠です。紀要のばあい、著した本人は四六時中そばにいますのでから、通勤の途中、食事のおりなど、いつでも質疑を重ね、血みどろな知的格闘が年中展開できるのであり、また、それがなければ意味がありません。ふりかえりみますれば、私自身、紀要論文について、上司や先輩の先生がたから、しょっちゅう「君、あそこは誤訳だよ」とか、「相変わらず君は思いつきだけで論文を書く悪い癖がなおっていないね」、「君の発想は観念連想ではなくて妄想だよ」などで始まる細やかな注意を受けたものでした。このように紀要によって若い者たちは、訓練され、長老たちは、逆に模範的論文を著して、研究室の後進に範を垂れてくれていました。

どうか本センターにおいても相互啓発のための合評会がいよいよ活発化し、この紀要の向上と活性化とにつながって行くことを希望いたします。

長年にわたり、本センター教員の平均年令を不当に押し上げてきた深見茂教授が本年度をもって定年退職いたします。替って、第二外国語教育系列では、中国語に気鋭の教授が一名増員として、ドイツ語にはこれまた新進気鋭の青年研究者が一名講師として、それぞれ赴任される予定であります。更に健康体力科学系列と、第二外国語教育系列に一名づつそれぞれ教授、助教授への昇任が予定されております。大学改革の秋を目前に、本センターが名実ともに老廃物を捨て去り、リフレッシュされることは誠に喜ばしい限りであります。組織が将来どのような形をとることとなろうと、最後は人材如何がすべてを決定いたします。本センター各位の一層の精進を切望いたします。

平成15年12月25日

滋賀県立大学  
国際教育センター長  
深見 茂

## 目次 (Table of Contents)

### — 研 究 論 文 —

|                                                                        |    |
|------------------------------------------------------------------------|----|
| 上村 盛人 (Morito UEMURA)                                                  |    |
| ウォルター・ペイターの審美主義 (4) —— 「チャールズ・ラム」について                                  |    |
| <i>Walter Pater's Aestheticism in His "Charles Lamb"</i> .....         | 1  |
| 石田 法雄 (Hoyu ISHIDA)                                                    |    |
| <i>Ontological Implications of Pure Land</i>                           |    |
| <i>in the Contemporary World</i> .....                                 | 15 |
| 外狩 章夫 (Akio TOGARI)                                                    |    |
| ‘Karain’ と ‘The Lagoon’ の話りの構造                                         |    |
| ( <i>Narrative Structure of 'Karain' and 'The Lagoon'</i> ) .....      | 29 |
| クリンガー ウォルター (Walter KLINGER)                                           |    |
| <i>Incidental Vocabulary Learning in a Quiz Game</i>                   |    |
| ( <i>Part I: Without Pre-Learning Activity</i> ) .....                 | 45 |
| 小栗 裕子 (Yuko OGURI)                                                     |    |
| 効果的なリスニング指導法：学習者の視点                                                    |    |
| ( <i>Instructional Factors Contributing to Effective L2 Listening:</i> |    |
| <i>The Learner's Perspective</i> ) .....                               | 65 |
| 山本 薫 (Kaoru YAMOMOTO)                                                  |    |
| “Listening is a Great Art”                                             |    |
| — <i>A Voice beyond the Gale</i> — .....                               | 77 |
| 深見 茂 (Shigeru FUKAMI)                                                  |    |
| テオドル・シュトルムの短篇小説『告白』における                                                |    |
| 夢幻モチーフについて                                                             |    |
| ( <i>The Motif of the Dream-Vision in Theodor Storm's</i>              |    |
| <i>Novella "Ein Bekenntnis"</i> ) .....                                | 91 |



長島 律子 (Ritsuko NAGASHIMA)

*Le Désir d'évasion chez les personnages d'Un Mauvais rêve* ..... 109

呉 凌非 (WU Lingfei)

名詞の値域距離と「的」

*(On the Relationship between the Value Distance of Nouns and "de" )* ..... 125

亀田 彰喜 (Akiyoshi KAMEDA)

情報化社会における個人情報保護の保護

*(Protection of Personal Information in the Information Society)* ..... 135

宮城 茂幸 (Shigeyuki MIYAGI)

狭帯域長相関モデルを用いたテクスチャ画像の  
スペクトルピーク位置の推定

*(Estimation of Spectral Peak Location of Texture Images  
by Using a Long-Correlation Model)* ..... 143

岡本 進 (Susumu OKAMOTO)

加速度計からみた高年者の身体活動量

*(Physical Activity in the Elderly Using the Accelerometer)* ..... 153

寄本 明 (Akira YORIMOTO)

高温環境下運動時における熱中症の発生とその予防

*(The Prevention of Heat Casualty during Exercise  
in a Hot Environment)* ..... 161



— 国際教育センターの活動の紹介 —

|                                    |     |
|------------------------------------|-----|
| 国際教育センター主催のセミナー .....              | 171 |
| 中山 悌一                              |     |
| 日本プロ野球界における選手の体格推移とトレーニングの変遷 ..... | 173 |
| 国際教育センターに対する研究費交付一覧 .....          | 175 |
| 滋賀県立大学特別研究費報告 .....                | 177 |
| 石田 法雄 .....                        | 177 |
| 小栗 裕子 .....                        | 179 |
| 在外研修報告 .....                       | 181 |
| 石田 法雄 .....                        | 181 |
| 寄本 明 .....                         | 183 |
| 小栗 裕子 .....                        | 184 |
| 宮城 成幸 .....                        | 185 |
| 教員による学界ならびに社会活動 .....              | 187 |

# 研 究 論 文

# ウォルター・ペイターの審美主義（４） ——「チャールズ・ラム」について——

## Walter Pater's Aestheticism in His "Charles Lamb"

上村 盛人  
Morito UEMURA

### 1 序

ペイターは1878年10月発行の『フォートナイトリー・レビュー誌』（*Fortnightly Review*）に「ユーモア作家の性格：チャールズ・ラム」（“The Character of the Humourist: Charles Lamb”）と題するエッセイを発表したが、1889年出版の『鑑賞集』（*Appreciations*）に「チャールズ・ラム」と改題してこのラム論を再録している。1878年はペイターが多方面にわたって文筆活動を活発に行った年であり、彼はラム論の他に、「家の中の子供」（“The Child in the House”）と題する自伝風の短編小説、「『恋の骨折り損』論」（“Love's Labours Lost”）というシェイクスピア論、さらに「エウリピデスのバッカナル達」（“The Bacchanals of Euripides”）と題するギリシア悲劇論を発表している。また前年の1877年には、有名な審美主義理論が展開されている「ジョルジョーネ派」（“The School of Giorgione”）を発表し、さらに『ルネサンス』の第二版を出版していた。従来、単独で論じられることのあまりなかった「チャールズ・ラム」を、ペイターの審美主義との関わりにおいて考察するのが本稿の目的である。

### 2 散文作家としてのラムとペイター

「チャールズ・ラム」は19のパラグラフから成り立っているエッセイであるが、最初のパラグラフでペイターは、十九世紀の英国の批評界に、「空想」と「想像力」の区別とともに「ウィット」と「ユーモア」の区別がドイツ経由でもたらされたことに注目する。ウィットは鍋の下でパチパチと音を立てて（楽しそうに燃えている）茨のように現実味の無い過性の楽しいものであるのに対して、ユーモアは涙や想像力による崇高性と混ざり合った笑いであり、そして最も精妙なユーモアはシェイクスピアの喜劇に見られるように、真面目で厳かな気分を伴った憐れみと一体になり、そのようなユーモアから生じる涙と笑いは純粹なものであるゆえに人から人へと伝播していくと述べられている。ここでペイターが言及しているシェイクスピアの喜劇は、上で触れたように、この時期に彼が考察していた『恋の骨折り損』を含むものであることは間違いな



いであろう。エッセイ冒頭でこのようなユーモア論が展開されているのは、後述するように、ユーモア作家としてのラムを導入するための伏線としての役割を果たすためなのである。

さらに注目すべきは、この冒頭のパラグラフがワンセンテンスのみで成立していることである。原文を引くと次のようになる。

Those English critics who at the beginning of the present century introduced from Germany, together with some other subtleties of thought transplanted hither not without advantage, the distinction between the *Fancy* and the *Imagination*, made much also of the cognate distinction between *Wit* and *Humour*, between that unreal and transitory mirth, which is as the crackling of thorns under the pot, and the laughter which blends with tears and even with the sublimities of the imagination, and which, in its most exquisite motives, is one with pity—the laughter of the comedies of Shakespeare, hardly less expressive than his moods of seriousness or solemnity, of that deeply stirred soul of sympathy in him, as flowing from which both tears and laughter are alike genuine and contagious.<sup>(1)</sup>

関係詞や説明の語句が次々と積み重ねられていくうちに文意が取りにくくなり、明快な意味伝達を求める読者を辟易させるようなねじれた構造の文章であるが、一語一句もゆるがせにせず、自分の書いたテキストに対して推敲を重ねたことで知られるペイターであるから、この複雑に入り組んだ文章も彼が意図的に書いていたことは間違いない。“Those English critics”という主語を“who at the ...”と関係詞で繋ぎ、その途中で“together with ...”という説明のための語句を付け足し、その後でやっと“made much ...”と動詞の部分が導入されるが、“between Wit and Humour”を説明するために、“between that unreal and transitory mirth ... and the laughter”という別の表現を用いつつ、その別の表現をさらに詳しく説明するために、“which is ...”や“which blends ...”という関係詞でさらに繋いで行くという風に文章が延々と連なるのである。このような複雑で長い文章はまさにペイターの散文の特質をなすものと言える。上に引いた文章だけが異常に長いのではなく、このラム論の他のパラグラフや彼の他の作品においても、同様に息の長い文章をペイターは数多く書いている。(例えば、ラム論の第3パラグラフもワンセンテンスだけで成り立っている。)<sup>(2)</sup>

ペイターは意識的に技巧を凝らした詩的な散文を書こうと努めていたのである。「詩に多くの美があるように、散文の美も多くあり、そのような美を評価するのが批評の仕事である」(“as there are many beauties of poetry so the beauties of prose are many, and it is the business of criticism to estimate them as such”)とペイターは「文体論」(“Style”)の中で述べている。<sup>(3)</sup>また同じエッセイの別の箇所で、「英語散文の雄弁な力」(“the eloquent powers of English prose”)とも述べており(“Style”, 12n.)、ペイター自身も雄弁で美しさを備えた散文を書くことを意識的に志していたのである。「文学にとって、... 現下の問題は、... 我々の英語を、ラテン語作者達が書いたように書き、... 学者達が書くように書くことである」(“For the literary art ... the problem just now is ... to write our English language as the Latins wrote theirs ... as scholars should write”)、また、「『文は人なり』であれば、文は時代でもある」(“if ‘the style is the man’ it is also the age”)と、ペイターは「あ

とがき」(“Postscript”) で述べて、<sup>(4)</sup>文体には時代が反映されることを伝えている。この見地からすれば、有名なモナリザ論の一節、即ち、“She is older than the rocks among which she sits; like the vampire, she has been dead many times, and learned the secrets of the grave; and has been a diver in deep seas, and keeps their fallen day about her; and trafficked for strange webs with Eastern merchants: and, as Leda, was the mother of Helen of Troy, and, as Saint Anne, the mother of Mary; and all this has been to her but as the sound of lyres and flutes, and lives only in the delicacy with which it has moulded the changing lineaments, and tinged the eyelids and the hands.”<sup>(5)</sup>もまさに彼の審美主義の立場を表明するために書かれた詩的で技巧的な散文であったといえる。息の長いワンセンテンスで書かれた、雄弁で美しさを備えたいかにもペイターらしい散文の一つがここで展開されているのである。そして、イエイツがこの文章を行分けして、自ら編んだ『オクスフォード近代詩選』に、近代詩のひとつとして取り入れたという有名な事件は、ペイターの散文の近代性と詩的性格を如実に示しているものといえる。<sup>(6)</sup>

第2パラグラフで、ラムという人物、そして彼の書いたものがユーモアそのものの説明と実例になっているとし、彼が残した作品は「芸術の一つとして文学を学ぶ者」(“the student of literature as a fine art,” 106) には常に好奇心をそそる興味に溢れていると述べることによって、ペイターは文学を「芸術」(“a fine art”) の一つとして見なしていることがはっきりと示される。時代の経過と共に、より深い主観性(“subjectivity”) によって深められた憐れみが湧いてくると述べて、主観性も時代と共に進化するという考えが示された後で、第4パラグラフ以降、チャールズ・ラムの人生と芸術についてペイターは筆を進める。十八世紀最後の四半世紀と十九世紀最初の四半世紀を生きたラムの作品は「一つの過渡期」(“a transition,” 106) を伝えるものであるとペイターは述べるが、ペイターの生きたヴィクトリア時代後半も、ダーウィンの進化論や宗教に対する懐疑など、さまざまな価値観の転換を見たもう一つの過渡期であり、同じような過渡期を生き、その時代の名残を伝える文体で書いた人物として、ペイターはラムに親密感を抱いているといえる。

テムズ河畔で過ごした楽しい学校時代の後、ラムは、狂気の発作のために母を刺殺してしまった姉のメアリを見守るために、二十一歳以降の自らの人生を犠牲にしたので、彼に見られる「陽気なうわべの下には、運命的な家庭における恐怖、見事な英雄精神と献身があった」(“beneath this blithe surface there was something of the fateful domestic horror, of the beautiful heroism and devotedness,” 107) とペイターは述べる。それで、ラムの代表作、「『エリア』のユーモアを評価するには、彼の人生におけるのと同じような大きな不幸と哀れみが強い底流となって流れていることを忘れてはならない」(“In estimating the humour of *Elia*, we must no more forget the strong undercurrent of this great misfortune and pity, than one could forget it in his actual story,” 108) とペイターは述べて、第1パラグラフでやや抽象的に論じたユーモアの具体例を鮮やかに指摘している。

さらに、[アメリカ独立戦争やフランス革命のような]「大きな世界の潮流の転換」(“the turning of the tides of the great world,” 108) といった過渡期の重大事に関心を寄せてのめり込むこともなく、単調な日々の暮らしを彩るために文芸に献身したラムは、散文作家として「芸術至上

主義の原理」(“the principle of art for its own sake,” 109)を実現していると、ペイターは指摘する。この「芸術至上主義の原理」は、1868年出版の『ウィリアム・ブレイク』(William Blake)の中でスウィンバーンが唱えた「芸術のための芸術」の考え方を踏まえたものである。スウィンバーンは次のように述べている。

Handmaid of religion, exponent of duty, servant of fact, pioneer of morality, she [art] cannot in any way become. ... Her business is not to do good on other grounds, but to be good on her own. ... Art for art's sake first of all, and afterwards we may suppose all the rest shall be added to her.<sup>(7)</sup>

宗教の小間使い、義務の解説者、事実の召使い、道徳の主唱者、そのようなものに芸術は決してなりえない。... 芸術の成すべきことは、他のことのためにいい仕事をするのではなく、自らのためにいい仕事をするのである。... 何よりも先に、芸術のための芸術があれば、その他のすべてのことは後から自然に付け加えられると考えていいだろう。

「芸術至上主義の原理」に対立するものとして、ペイターは、「宗教、道徳、政治といった実用的な考え」(“ideas of practice—religious, moral, political,” 109)があると述べて、上の引用で示されたスウィンバーンの主張を援用しているが、<sup>(8)</sup>この「芸術至上主義の原理」は審美主義的作家としてペイターが目指しているものでもあった。『ルネサンス』の「結び」で、刻々と過ぎ去る瞬間の審美的経験の重要性を説くペイターは、「経験の成果ではなく、経験そのものが目的である」(“Not the fruit of experience, but experience itself, is the end”)と述べ、さらに、「詩的情熱、美への欲求、芸術のための芸術を愛することが最も大切なのである」(“the poetic passion, the desire of beauty, the love of art for art's sake, has most”)と結んでいる。<sup>(9)</sup> また彼は、1864年に発表した「透明性」(“Diaphaneité”)の中で、「芸術の精神で人生を取り扱ってきた人」(“he who has treated life in the spirit of art”)について触れているが、<sup>(10)</sup>そのような「芸術のための芸術」の人生にペイターは憧れるのである。後述するように、芸術としての文学に対するそのような態度を、ペイターは第17パラグラフで、「文学者の宗教」と呼んでいる。そしてラムもそのような態度で人生を送った芸術家の一人であったとペイターは見なしている。

抽象的理論を排し、具体的なものに関わってそれを細部に至るまで仔細に追究するラムは、「尽きることのない共感を発揮することによって...永続的な精神的影響を与えてきた」(“he [Lamb] has reached an enduring moral effect ... in a sort of boundless sympathy”, 109-10)とペイターは述べる。そのようなラムは、ペイターが「透明性」において既に述べていた、「性格の全面的な透明性」(“entire transparency of nature,” 251)の持ち主、つまり、「自分がもっている要素をより高く持っている他の人達に対するあらゆる種類の共感をやすやすと見つける」(“it [this sort of entire transparency of nature] detects without difficulty all sorts of affinities between its own elements, and the nobler elements,” 251)ことができるタイプの人間の一人なのである。また、「事物が進行していく中に流れている大きな底流を共感をもって認識すること」(“a sympathetic perception of



the dominant undercurrent of progress in things,” 252) の重要性についても、触れている。このように、「共感」(“sympathy; affinities; sympathetic”) という鍵概念を仲立ちにして、ラム論はペイターの最も初期のエッセイである「透明性」における主張と重なる部分があるといえる。つまり、自らを空しくして透過した精神で対象に接することができるゆえに、ラムも「透明性」を備えた人々のグループに属する一員といえるのである。(但し、「透明性」では、あるがままの社会に対する不満のゆえに、暴力や革命に通じる反逆性をもつ透明的性格の意義が述べられているのに対し、ラム論では、社会の片隅で、「人として生きることの悲しみ、この世の苦しみ」(“the sorrow of humanity, the *Weltschmerz*”, 110) を共感をもって認識し、記録した文学者が描かれているという点で、これら二つのエッセイには違いがある。)

「この世の苦しみ」(“the *Weltschmerz*”, 110) というゲーテの言葉をペイターは「家の中の子供」でも用いており、それに続くところで、この物語の主人公のフローリアンに「世界の凝縮された悲しみが突如としてのしかかってくるように思われた」(“the concentrated sorrow of the world seemed suddenly to lie heavy upon him”) と書いている。<sup>(11)</sup>フローリアンにのしかかる“the concentrated sorrow of the world”が、ラム論では“the sorrow of humanity”(110)というよく似た表現に変奏されている。また、病気になって弱っていく可哀想なアンゴラ猫のような「物言わぬ動物達の悲しみ」(“the little sorrows of the dumb animals,” 7) や不治の病気にかかったジュリアン(“Julian,” 10) のことが「家の中の子供」で描かれているが、ラム論では、「精神の運命的な病い」(“fateful disease of mind,” 110)に見舞われた姉や「虐待されている動物達」(“ill-used animals,” 110)のために書いたラムに言及している。<sup>(12)</sup>このように共通の要素を多く含んでいることから、「チャールズ・ラム」が、同年に発表された「家の中の子供」と密接な繋がりをもっていることは明白であると言える。

第8パラグラフで、「チャールズ・ラムは絵画の優れた批評家でもある」(“Charles Lamb is a fine critic of painting also,” 111) とペイターは述べているが、『ルネサンス』やその他の著作において、審美主義的批評家として多くの絵画を取り扱っているペイター自身、おそらくラムに親近感を覚えていたのであろう。そして、批評家としてのラムにとって、「彼自身の悲しみ、愛情、知覚だけが今の彼にとって本当のものである」(“his own sorrows, affections, perceptions, being alone real to him of the present,” 111) と述べるペイターの言葉は、『ルネサンス』の有名な「序文」の一節、つまり、「この歌や絵画、あるいは人生や書物において表されたこの魅力的な人物は私にとって何なのか？」(“What is this song or picture, this engaging personality presented in life or in a book, to *me*?” [emphasis by Pater], “Preface” to *The Renaissance*, Hill, ed., xix-xx) と述べて、審美主義的批評の本質として批評家自身の知覚や感性を重視する姿勢と同じものを示しているといえる。

第9パラグラフでは、忘れられていた昔の英国の劇作家達を発見したラムを評価する文章の中でペイターは、ラムの書物には「ある種の繊細で知的なエピクロス主義」(“a sort of delicate intellectual epicureanism,” 112) が伴っていると述べている。ここで用いられている「エピクロス主義」は、自分自身の知覚や感性だけを頼りにして芸術のための芸術の世界に没頭する批評家の



態度を指しているものと考えられるが、ペイター独自のユニークな用法といえる。第 11 パラグラフでも「エピキュリアン」(“epicurean,” 113) という語を用いているが、ペイターの読者には、この言葉は直ちに彼の代表作、『エピクロス主義者マリウス』(*Marius the Epicurean*, 1885) を連想させる。上で触れた、審美主義的批評の本質に関わる態度、そしてこの「エピキュリアン」という言葉の使用を仲立ちにして、ラム論は、『ルネサンス』、『エピクロス主義者マリウス』というペイターの主要な作品につながる要素をもっているのである。

### 3 「自画像の欲望」としてのエッセイ

第 11 パラグラフでペイターは、「昔の英語の偉大で厳粛な大家」(“that great, solemn master of old English,” 113) としてのサー・トマス・ブラウン (Sir Thomas Browne) の文体について触れている。そしてブラウンの散文を忠実に模写しているラムの文体が如何に優れたものであるかについて、ペイターは具体的に次のように述べている。

For it is with the delicacies of fine literature especially, its gradations of expression, its fine judgment, its pure sense of words, of vocabulary—things, alas! dying out in the English literature of the present, together with the appreciation of them in our literature of the past—that his literary mission is chiefly concerned. (113)

特に、洗練された文学の精妙さ、段階的な変化をもつその表現力、その見事な判断力、その言葉づかいに対する純粋な感覚——ああ悲しいことだが、昔のわが国の文学ではこういったことは大切に鑑賞されていたのに、現在の英国の文学では絶滅しつつあるのだ！——まさにこういったことに文学者としての彼の任務は関わっているのだ。

ブラウンに関するエッセイをペイターは 1886 年に書いており、その後、1889 年出版の『鑑賞集』にラム論に続く論考として収録し、英国の散文文学を代表するエッセイストとして詳しく論じている。ラム論ではブラウンの名前はあとでもう一度軽く言及されているだけであるが、ペイターの構想の中では将来詳しく論じるエッセイストとしておそらく意識していただろうと思われる、その意味で、ここでは後年に展開されることになるブラウン論への伏線として触れられていると見るべきであろう。

それ以上にここで我々が注目すべきは、ブラウンの文体を忠実にたどるラムの文体の特徴として具体的にペイターが述べている上に引いた文章である。ラムの文体の特徴という体裁を採りながら、これはまさしくペイター自身の文体の特徴なのである。先に原文で引用したワンセンテンスのみで成立している冒頭のパラグラフや、モナリザ論の一節は、「洗練された文学の精妙さ、段階的な変化をもつその表現力、その見事な判断力、その言葉づかいに対する純粋な感覚」を駆使してペイターが書いていたのであり、そして、「まさにこういったことに文学者としての彼の

任務は関わっている」のである。科学技術の発展と共に、功利主義思想や実証主義的な考え方が浸透しつつあった時代の中で、英国の散文文学はかつてのような雄弁さや潤いをなくしてしまったとペイターは感じていた。そのような十九世紀後半の過渡期に生きたペイターは、時代を映す「英語散文の雄弁な力」をもっていたブラウンやラムに憧れると同時に、彼らと同じように、「英語をラテン語作者達を書いたように書き、... 学者達を書くように書くこと」を目指していたのである。

第 12 パラグラフで、ラムが彼の時代の「生活をありのままに表現する秘訣」（“the secret of lifelike expression,” 114）を備えたユーモア作家であったことが、やや詳しく論じられている。人一倍の理解力で人間のすべてのありようを、その外面と共に、その根底となる精神的状況と密接に連結させて見ることによって、彼の時代を後の時代の人々に魅力あるものにするユーモア作家としてのラムについて語られている。そして、そのようなラムの力量によって、彼の時代の場所や地位や生活の習慣といった特徴が普遍的なものに「変容される」（“transfigured,” 115）とペイターは述べる。「審美派の詩」（“Aesthetic Poetry”）の冒頭部で、ペイターは「時代の現実を超えたところに」作られた「変容された世界」（“transfigured world”）について述べていたが、<sup>(13)</sup>特定の時代を「変容させ」て普遍的な世界を現出できるラムは、審美派の詩人達と同じような「詩的な光」（“poetic light,” 115）をもっていたのである。「鑑賞力」（“gift of appreciation,” 116）や「同質のものに対する細やかな認識力」（“a fine perception of the congruities,” 116）というような表現を使ってペイターは、外面、内面を含めたすべての人間性を観察できる透明性という優れた特性をラムがもっていたことを強調する。

第 13 パラグラフで、エリアを書いたラムはモンテーニュと同じ系統のエッセイストで、個々の細部を洞察する透明性を備えていたことが確認される。それに続く第 14 パラグラフでモンテーニュの名前が再び挙げられ、「自画像の欲望」（“the desire of self-portraiture,” 117）こそがエッセイを書くことの本当の動機なのであり、「あの親密性、あの現代の主観性」（“that intimacy, that modern subjectivity,” 117）と密接に関わるものであり、これは「文学におけるモンテーニュ的要素」（“the Montaignesque element in literature,” 117）とも呼べるものであるとペイターは書いている。モンテーニュ的自画像に関わる感情の親密性について、ペイターは『ルネサンス』の「ジョアシャン・デュ・ベレー」（“Joachim du Bellay”）においても、既に少し触れていた。<sup>(14)</sup> またモンテーニュについてはペイターの未完の小説『ガストン・ド・ラトゥール』（*Gaston de Latour*）に詳しく語られているが、<sup>(15)</sup>「自画像」（“self-portraiture”）という語はペイターの読者には「想像的画像」（“Imaginary Portraits”）という短編集のタイトルを強く想起させるものである。

自画像としてのエッセイを書くことについてペイターは次のように続ける。

What he [Lamb] designs is to give you himself, to acquaint you with his likeness; but must do this, if at all, indirectly, being indeed always more or less reserved, for himself and his friends. (117)

彼が意図するのは読者に自分を差し出し、自分の似姿を知らしめることである。しかし、これ



をするには、常に遠慮がちであるので、自分自身に対しても、友人達に対しても間接的でなければならないのである。

エッセイストとしてのペイター自身の創作の動機と態度がここに表明されていると見るべきである。つまり、「文学におけるモンテーニュ的要素」をもっているラムについて書いているペイター自身も、同類のエッセイストなのであり、先輩のエッセイストであるラムを論じながら、実は、「遠慮がち」に、「間接的」にペイターは「読者に自分を差し出し」ていると見るべきである。このようにペイターはエッセイストとしての自らの立場をも「間接的」に表明している。そして、数多くの「想像的画像」(“Imaginary Portraits”)を書いたペイター自身が紛れもなく、「文学におけるモンテーニュ的要素」の具現者であることは言うまでもない。

第17パラグラフでペイターは、ラムが「希望と畏怖の気持ちに基づいた、あの旧世界の感情を信奉する最後の人々の一人であり、その感情は(ちょうどサー・トマス・ブラウンが『医師の宗教』をもっているように)文学者の宗教といえるかもしれない」(“He is one of the last votaries of that old-world sentiment, based on the feelings of hope and awe, which may be described as the religion of men of letters (as Sir Thomas Browne has his *Religion of the Physician*)”, 120)と述べている。そしてそのような宗教は、アディソン、 그레이、 ジョンソン、 ジェイン・オースティン、 サッカレーによって理解されていたものでもあるとペイターは付け加える。『鑑賞集』でラムに続いて論じているサー・トマス・ブラウンの代表的著作である『医師の宗教』からの連想で、ペイターは「文学者の宗教」という言い回しを用いたのである。そして、アディソンをはじめとする作家達の名前を列挙することによって、このラム論が、チャールズ・ラムだけに当てはまるのではなく、サー・トマス・ブラウンをはじめとする他の多くの作家達にも関わるものであるという、つまり、ペイターの審美主義の特質の一つである、あらゆる芸術家や作品を網の目のようにつなげる間テクスト性をペイター自身が仄めかしているといえるのである。

「文学者の宗教」についてペイターはさらに次のように述べている。

A high way of feeling developed largely by constant intercourse with the great things of literature, and extended in its turn to those matters greater still, this religion lives, in the main retrospectively, in a system of received sentiments and beliefs; received, like those great things of literature and art, in the first instance, on the authority of a long tradition, in the course of which they have linked themselves in a thousand complex ways to the conditions of human life ... (120)

文学の偉大な事物と絶えず交流することによって大いに開発され、そしてそのことによってさらに偉大なるものへと拡張される感情の大きな道筋として、この宗教は、受容されてきた情緒と信念の体系の中に、主として回顧的に生き続けるのである。文学や芸術における偉大な事物のように、先ず第一に、長い伝統という権威によって、その宗教は受け容れられるのだが、その長い伝統の経過において、その偉大な事物は無数の複雑な方法で人間生活の状況と結びついてきた...



ペイターが得意とする例の、ワンセンテンスからなる長文であるが、ここでは、文学に接することの意義について、間テキスト性を重視するペイターの歴史的審美主義が表明されている。「審美派の詩」の冒頭部で展開されていた歴史的審美主義、つまり、古代ギリシア、中世、現代といった時代を超えた「地上の楽園」としての「変容された世界」を生ぜしめる詩の力について述べていたのと同じような考え方がここでも示されている。<sup>(16)</sup>「文学の偉大な事物と絶えず交流することによって大いに開発され、そしてそのことによってさらに偉大なるものへと拡張される感情の大きな道筋」としての「文学者の宗教」について、ここではかなり抽象的なレベルでしか論じていないが、その具体的なありようをペイターは「家の中の子供」や『マリウス』のような小説、そして「審美派の詩」のようなエッセイで詳しく述べている。ペイターの「歴史的審美学」（“historical aesthetics”）について、ウィリアムズは次のように述べている。

They [art objects] are already made, past and separate, but they are also “made” anew through their revival within the aesthetic critic in the present, who trusts them as evidence ... receives their impressions deeply, and then, interpreting, critically projects them away from the subject once more.<sup>(17)</sup>

それら〔芸術作品〕は既に過去に別個のものとして作られているのだが、審美主義的批評家がそれらを過去からの証拠品として信頼し...それらから得られる印象を深く受け容れて、解釈をした後で、主体から批判的に提示することによって、それらの芸術作品はまたよみがえって、新たに「作られる」のである。

これはペイターの審美主義の本質を捉えている見解である。過去に別個のものとして作られた芸術作品に対して「回顧的に」（“retrospectively”）交流をして献身するのが、「文学者の宗教」を奉じるラムやモンテニユをはじめとする文学者の務めなのである。その意味において、彼らも審美主義的批評家ということになる。そのような「回顧的」姿勢によって、「歴史化される視点があるからこそ、『ペイター自身』が審美的対象物となり、ペイターの書いたテキストが文学的読物となる」（“it is precisely the historicizing perspective that transforms “Pater” into an aesthetic object and makes his texts available for a literary reading.”）とウィリアムズは述べている。（2001, p. 98）つまりペイターの書いたテキストそのものが、審美的対象物としての芸術作品になってくるのである。

#### 4 「チャールズ・ラム」と「家の中の子供」

第18、19の二つのパラグラフはこのエッセイを結ぶ役割を果たしている。第18パラグラフでは、人生や文学における表面的には軽いささやかな事柄に暗い世界が潜んでいて、それが「驚くべき表現力」（“a wonderful force of expression,” 121）を孕んでいるのであり、ラムのささいな

言葉や空想が、いつでも事物の奥にある魂の深くにまで刺し貫くような要素をもっていること、つまり、このエッセイの前半でペイターが強調していたラムのユーモアの精神と文体の透明性を再確認している。

最終パラグラフで、ラムは「土地の霊」(“the genius of places,” 122)を感じていたと述べて、65年前のロンドンのさまざまな場所や光景、郊外のエンフィールド(Enfield)やハンプトン(Hampton)について生き生きと描写したラムにペイターは敬意を表している。特にエンフィールドはペイター自身が子供時代を過ごした場所であり、彼にとってもまさに「土地の霊」(“genius loci”)を感じる場所であったはずである。さらにここには、ペイターの生まれる6年前まで、ラムがしばらく住んでいた。<sup>(18)</sup>そして、その「野原の」ひとつで、「筆者はある静かな初夏の日にカッコーの声を始めて聞いたことがあるのを覚えている」(“the present writer remembers, on a brooding early summer's day, to have heard the cuckoo for the first time,” 122)と述べて、「筆者」(“the present writer”)としてのペイターが突如として顔を出してくる。ラムを論じているうちに、エンフィールドという場所の「土地の霊」を共有する者として、それまで「遠慮がち」で「間接的」であったペイターが突如として素顔を現わしたという感じである。このあたりは確かにブルームが指摘しているように、親しい父親的存在としてのラムとペイターが一体化してしまったような印象を読者に与えている。<sup>(19)</sup>

そしてペイターはラム論を次のような一風変わった文章で結んでいる。

But nowhere are things more apt to respond to the brighter weather, nowhere is there so much difference between rain and sunshine, nowhere do the clouds roll together more grandly; those quaint suburban pastorals gathering a certain quality of grandeur from the background of the great city, with its weighty atmosphere, and portent of storm in the rapid light on dome and bleached stone steeples. (123)

もっとよい天気にあふましい事物はここ以外にはなく、晴雨の天気の違いがここほど見事に見られる所もなく、この場所ほど雲が壮大に湧き上がる場所はない。これらの一風変わった郊外の田園風景は、重々しい雰囲気と丸屋根や白く晒された石の尖塔に稲妻がきらめく嵐の前触れを告げている大都会[ロンドン]を背景にして、一種の壮観性を帯びている。

エンフィールドについて言及したペイターが、「土地の霊」を感じるこの場所にたちまち「郷愁」(“homesickness”)を覚えたかのように、嵐を前にしたロンドンを背景にもつ故郷の町に対して満腔のいとおしさを込めた文章でこのエッセイは閉じられている。

ロンドンを背景にもつ郊外の町についての描写は、「家の中の子供」の主人公(フローリアン)の家について書かれた次の描写とよく似ている。

... the house ... stood near a great city, which sent up heavenwards, over the twisting weather-vanes, not seldom, its beds of rolling cloud and smoke, touched with storm or sunshine.(3)

... その家は... 大都会の近くに建っていたが、その都会は、くるくる廻る風見鶏の上に、よく、逆巻く黒雲や煙を巻き上げ、そこに嵐や日光が差し込んでくるのであった。

大都会の上に巻き上がる黒雲や煙は、紛れもなく、産業革命下の煤煙にけぶるロンドンの情景を間接的に描写したものである。そのようなスモッグに見舞われる都会を背景にして、ラムと同じように、「机の堅い木から」（“from the hard wood of the desk,” 122）本物の木々がある郊外の故郷へとペイターの思いが向かっているのである。

ラム論という批評の形式で書き進められてきたものが、小説の風景描写のようなものとなってペイターのエッセイは終っている。「ジョルジョーネ派」において、詩や絵画といった個々の芸術が他の芸術の状態に近づこうとする「アンデルス・シュトレベン」（*Anders-streben*: 他の領域への努力）があることによって、「すべての芸術が音楽の状態に憧れる」と論じたペイターにとって、<sup>(20)</sup>「チャールズ・ラム」という批評芸術と「家の中の子供」という小説のジャンルが交わることには何の違和感もなかったと思われる。既に述べたように、「チャールズ・ラム」と「家の中の子供」は同じ年に書かれているのであって、これら二つの作品に、上で指摘したような同じような要素が色濃く並存していても何ら不思議ではない。

## 5 結び

「チャールズ・ラム」には、複雑な構造のワンセンテンスの文章がしばしば用いられているが、これらは「文体論」や「あとがき」でペイターが述べている芸術的な美に溢れる人工的な文体の実践と見ることができる。対象に共感をもって迫ることのできるラムの能力は、ペイターの初期のエッセイ、「透明性」に通じるものであるし、スウィンバーンのブレイク論から借用した「芸術至上主義の原理」は、ペイター自身が『ルネサンス』の「結び」で取り上げているテーマでもある。絵画批評家として対象に接するラムの姿勢は、『ルネサンス』の「序文」で述べられているペイターの姿勢と同じものといえるだろう。また、ラムの「エピクロス主義」は、ペイターの『エピクロス主義者マリウス』を連想させる要素をはらんでいる。さらに、サー・トマス・ブラウンやモンテーニュをラムと同系のエッセイストと見做すペイターは、「サー・トマス・ブラウン」でブラウンを詳細に論じ、「ジョアシャン・デュ・ベレー」や『ガストン・ド・ラトゥール』でモンテーニュについて書いている。そして「文学者の宗教」という観点から、アディソン、グレイ、ジョンソン、ジェイン・オースティン、サッカレーといった文人達もラムの系譜に連なるとペイターは述べる。いま上に挙げたように、ペイター自身の他の作品、そして他の多くの作家、及び彼らの作品が「チャールズ・ラム」というテキストを通じて繋がっているのである。

以上、個々に具体的に指摘してきたように、「チャールズ・ラム」には、ペイター自身の他の作品、及び他の作家や彼らの作品に関する言及や関連がさまざまになされていて、このラム論は、極めて間テクスト性に富むエッセイなのである。<sup>(21)</sup> そしてラムというエッセイストを通して、



審美主義的批評家としてのペイター自身の思想が、「間接的」にはあるが随所で述べられており、ペイターの審美主義の考察に多くの意味深い示唆を提供しているのが「チャールズ・ラム」という作品なのである。

## 注

- (1) Walter Pater, "Charles Lamb" included in *Appreciations with an Essay on Style* (London: Macmillan, 1910; New York: Johnson Reprint, 1973), p.105.以下、「チャールズ・ラム」からの引用はこの書物に拠るものとし、本文では括弧の中にページ数のみを入れて示すことにする。
- (2) ペイターの散文の特徴である難解な文体の効果については、Megan Becker-Leckrone, "Pater's Critical Spirit" included in Laurel Brake et al. eds., *Walter Pater: Transparencies of Desire* (University of North Carolina at Greensboro: ELT Press, 2002), p. 289、及び、Linda Dowling, *Language and Decadence in the Victorian Fin de Siècle* (Princeton: Princeton University Press, 1986), pp.130-31 を参照。ちなみに、実用的なメッセージを伝える手紙では、ペイターがこのような複雑で長い文体を用いていないのは当然である。例えば、1877年7月14日付けのオスカー・ワイルド宛ての手紙は次のように明快な文体で書かれている。"Dear Mr. Wilde, / Accept my best thanks for the Magazine and your letter. Your excellent article on the Grosvenor Gallery I read with very great pleasure; it makes me much wish to make your acquaintance, and I hope you will give me an early call on your return to Oxford. / I should much like to talk over some of the points with you, though on the whole I think your criticism very just, and it is certainly very pleasantly expressed. It shows that you possess some beautiful, and for your age quite exceptionally cultivated, tastes, and a considerable knowledge also of many beautiful things. I hope you will write a great deal in time to come. / Very truly yours / Walter Pater." — Lawrence Evans ed., *Letters of Walter Pater* (Oxford: Oxford University Press, 1970), pp. 24-25.
- (3) Pater, "Style" included in *Appreciations*, p.6. 以下、「文体論」からの引用はこの書物に拠るものとし、本文では括弧の中にページ数のみを入れて示すことにする。
- (4) Pater, "Postscript" included in *Appreciations*, pp. 260-61. 以下、「あとがき」からの引用はこの書物に拠るものとし、本文では括弧の中にページ数のみを入れて示すことにする。
- (5) Pater, *The Renaissance: Studies in Art and Poetry*, ed. Donald L. Hill (1893; Berkeley: University of California Press, 1980), p. 99.ヒルの編纂した『ルネサンス』のテキストは第4版(1893)に基づくものである。
- (6) W. B. Yeats, ed., *The Oxford Book of Modern Verse* (Oxford: Oxford University Press, 1936), p. 1.
- (7) Swinburne, *William Blake* (1868) included in Edmund Gosse and Thomas James Wise eds., *The*

*Complete Works of Algernon Charles Swinburne* (20 vols., 1925-27; rpt. New York: Russell & Russell, 1968), 16:137-38.

(8) John J. Conlon, *Walter Pater and the French Tradition* (London and Toronto: Associated University Press, 1982), p.37.

(9) Pater, "Conclusion" to *The Renaissance: Studies in Art and Poetry* included in Harold Bloom ed., *Selected Writings of Walter Pater* (New York: Columbia University Press, 1974), pp. 60, 62.ブルームの編纂した『ルネサンス』の「結び」は、1868年にペイターが書いた書評のテキストに基づくものである。

(10) Pater, "Diaphaneité" included in *Miscellaneous Studies: A Series of Essays* (London: Macmillan, 1910; New York: Johnson Reprint, 1973), p. 249. 以下、「透明性」からの引用はこの書物に拠るものとし、本文では括弧の中にページ数のみを入れて示すことにする。ペイターは「あとがき」においても、"those who have treated life in the spirit of art" (241)という表現を用いている。

(11) Pater, "The Child in the House" included in Harold Bloom ed., *Selected Writings of Walter Pater*, p.7. 以下、「家の中の子供」からの引用はこの書物に拠るものとし、本文では括弧の中にページ数のみを入れて示すことにする。

(12) 但し、ラム論を訳した藤巻明氏によれば、ペイターが挙げている *Pity's Gift* の著作にラムが関わったという記録は残っていないとのことである。富士川義之他、訳、『ウォルター・ペイター全集 2』（筑摩書房、2002年）、599頁参照。

(13) Pater, "Aesthetic Poetry" included in Harold Bloom ed., *Selected Writings of Walter Pater*, p. 190.

(14) Billie Andrew Inman, *Walter Pater and His Reading, 1874-1877: with a Bibliography of His Library Borrowings, 1878-1894* (New York & London: Garland Publishing, Inc., 1990), p. 404.

(15) 『ガストン・ド・ラトゥール』は、Macmillan社の全集（1910; 1973）や、さらに、Pater, *Gaston de Latour: The Revised Text*, Gerald Monsman, ed., (University of North Carolina at Greensboro: ELT Press, 1995) で読むことができる。

(16) 上村 盛人、「ウォルター・ペイターの審美主義—「審美派の詩」について」（『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』、第6号、2001）、9—10頁。

(17) Carolyn Williams, "Walter Pater's Impressionism and the Form of Historical Revival," in Suzy Anger ed., *Knowing the Past* (Ithaca and London: Cornell University Press, 2001), p. 82. ペイターの審美主義的歴史観については、Williamsのこの論文と、同じ著者による *Transfigured World: Walter Pater's Aesthetic Historicism* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1989)を参照。

(18) Thomas Wright, *The Life of Walter Pater* (2 vols., New York: G. P. Putnam's Sons, 1907), 1:19.

(19) Bloom ed., *Selected Writings of Walter Pater*, p. 181, n7.

(20) Pater, "The School of Giorgione" included in *The Renaissance*, ed. Donald L. Hill, pp. 105-06.

(21) 本論で具体的に言及した芸術家や芸術作品の他に、「チャールズ・ラム」には、Blake, Webster, Titian, Hogarth, Burton, Quarles, The Duchess of Newcastle, Defoe, Shakespeare, George Fox, Wither's *Emblems* 等、さらに多くの芸術家や芸術作品についての言及があり、ペイターの間テクスト性のさらなる広がり示している。

### Abstract

In 1878, Walter Pater published an essay, "The Character of the Humourist: Charles Lamb," in the October issue of the *Fortnightly Review*. That year found Pater rather active and energetic in his literary production, for he published an autobiographical short story, "The Child in the House," an essay on Shakespeare's comedy, "Love's Labours Lost," as well as an essay on a Greek tragedy, "The Bacchanals of Euripedes." In the previous year, Pater had published "The School of Giorgione" and his revised second edition of *The Renaissance*. In 1889, when he published *Appreciations*, a book of collected essays and reviews, he incorporated the essay on Lamb using a simplified title, "Charles Lamb," and placed it before his essay on Sir Thomas Browne.

The first paragraph of "Charles Lamb" is a long densely packed, complex sentence which is difficult to follow. This artificial Paterian style can be understood as an example of "the eloquent powers of English prose" that Pater stresses in another of his essays, "Style." In his "Charles Lamb," Pater designs "to give ... himself ... indirectly." Here we can detect direct and indirect echoes of his own "The Child in the House," "Diaphaneité," "Postscript," "Conclusion" to *The Renaissance*, "Aesthetic Poetry," *Gaston de Latour*, and "The School of Giorgione," as well as echoes of diverse literary works such as Swinburne's *William Blake*, and writers like Sir Thomas Browne, Montaigne and others who believed in "the religion of men of letters." In this sense "Charles Lamb" is another typically Paterian literary work in which Pater puts his intertextual aesthetic theory into practice.



# **Ontological Implications of Pure Land in the Contemporary World**

**Hoyu ISHIDA**

## **Introduction**

The nature of the problems we are facing in the world today is not limited to the 21st century but can be seen or witnessed at any time or age in human history. All beings living on this planet or in the whole universe have been evolving in order to survive according to the changes of environment or the surroundings—adaptive evolution. We as human beings on the earth have uniquely demonstrated control over the ecosystems of all other organisms or other living beings, and changed the earth according to the way we want it to be: we have predominately reformed the planet solely for the benefits of human beings.

Because of our highly developed scientific technology, the capacity of humans to influence ecology and the environment has greatly changed and become crucially and critically large. Through the development of scientific technology, human beings have been seeking happiness and peace to be in harmony with nature and the universe. As a result, some of us have been leading a pleasant life of comfort and convenience, but we have not been able to resolve our everlasting problems or troubles among human beings, such as wars, hatreds, prejudices and disputes. The nature of human suffering or *duḥkha*—birth, old age, disease and death, has basically been the same, regardless of the time or age.

Pure Land or *jōdo* 浄土, which has been inherited in the human history of spirituality, particularly in the history of Pure Land Buddhism, has been one of the powerful answers to this quandary. This paper deals with what Pure Land can be to the followers of Pure Land Buddhism, and elaborates what Pure Land can mean to us, who live in this contemporary world with its highly developed technology and science.

## **The Location of Pure Land**

There are certainly so many different interpretations and understandings of Pure

Land that it is almost impossible to describe in a simple way what Pure Land is all about. First of all, is it a land? Can it be found on a map? Or can't we locate it geographically on the map, since it is too far from or beyond this world of ours? Or, is it a land that we cannot perceive or conceive through our conventional eyes or minds? Is it a sort of realm or phase of some phenomenon? Is it a stage? Or is it some state?

The most popular and traditional interpretation is that the Pure Land is many millions of miles away in the west, from where the Buddha of Infinite Light (Amitâbha 無量光) and Infinite Life (Amitâyus 無量寿), Amida Buddha 阿弥陀仏, is constantly sharing wisdom of enlightenment with all sentient beings, especially those who are suffering. Amida Buddha works on them by transforming into the Name or *myôgô* 名号, the formula of *Namu-amida-butsu* 南無阿弥陀仏. By becoming aware of Amida's universal compassion and by totally releasing oneself to Amida, one will be born in the Pure Land. Since this whole process is made to come about, in an ultimate sense, through Amida, the nembutsu serves as an expression of one's gratitude to Amida, and birth or *ôjô* 往生 in the Pure Land is to come after one's departure from this world (有相有辺).

A second interpretation of Pure Land is highly philosophical: There is no such thing or substance called Pure Land, since everything is *śūnya* (empty) in its essential nature. This interpretation, however, does not deny the concept of Pure Land (無相無辺). The Pure Land that one conceptualizes does not exist, but is only a symbol, or *upâya* 方便 (skillful means), that leads to profound realization of *śūnyatâ* 空 (emptiness).

A third interpretation is that Pure Land exists anywhere and everywhere: One has only to realize it. Pure Land is not a place where one goes, but comes into being instantaneously when one becomes aware of it. Amida Buddha is not presiding over an ethereal realm, but the "Pure Land is this dirty earth itself."<sup>1</sup> The Pure Land is in the world—but not of the world (有相無辺).

The Sanskrit expression of the Pure Land is *sukhâvatî*, meaning "ultimate bliss," or "that which has pleasure and comfort." The Japanese rendering for *sukhâvatî* or the Pure Land is *gokuraku* ("ultimate bliss"), *jôdo* (the "Pure Land"), or *gokuraku-jôdo* 極楽浄土 ("the Pure Land of Ultimate Bliss"). The Pure Land in the tradition of Pure Land Buddhism, including Shin Buddhism, is the land of Amida Buddha. The land of Amida

---

<sup>1</sup> D. T. Suzuki, *Shin Buddhism* (New York: Harper & Row, 1970), p. 17.



Buddha is also called *anraku-koku* 安楽国 or *anraku-kokudo* 安楽国土 (“the Land of Happiness”) or *anraku-jôdo* 安楽浄土 (“the Pure Land of Happiness”). The Pure Land of Amida can also be rendered as *anyô-jôdo* 安養浄土 (“the Pure Land of Peace”).

Shinran, in his major work, *The True Teaching, Practice and Realization of the Pure Land Way*, explains the origins and characteristics of the Pure Land, and that we must first and foremost aspire to be born in the Pure Land in order to become enlightened:

“Immeasurable Life” is a name of the Tathagata of the Pure Land of happiness. Śâkyamuni Buddha, while residing at Râjagrha and Śrâvatî, taught the assembly about the virtues that adorn the Buddha of Immeasurable Life....<sup>2</sup> Thus, the person who aspires to be born in the Pure Land of happiness must unfailingly awaken the mind aspiring for supreme enlightenment....<sup>3</sup> The Pure Land of happiness is sustained by the power of Amida Tathagata’s Primal Vow, and that the enjoyment of bliss is without interruption....<sup>4</sup> At the beginning, Dharmâkara Bodhisattva, in the presence of Lokeśvararâja Buddha, realized insight into nonorigination. The stage attained at that time is termed “the seed-lineage of sages.” While abiding in this “nature,” he established the Forty-eight great Vows and gave rise to this land through performing practices. It is called the Pure Land of happiness....Great compassion is none other than the supramundane good. The Pure Land of happiness arises from this great compassion; therefore this great compassion is said to be the root of the Pure Land.<sup>5</sup>

In *Notes on Once-Calling and Many-Calling*, Shinran says we don’t have to understand the qualities of the Pure Land; indeed, we cannot understand them. We don’t even look for the Pure Land; but, giving ourselves up to the compassion of the Primal Vow, the qualities or virtues of the Pure Land will be bestowed on us:

Know, then, that although they neither seek nor know the indescribable, inexplicable, and inconceivable virtues of the Pure Land of happiness, those

---

<sup>2</sup> *The Collected Works of Shinran* (hereafter abbreviated CWS) 1, Shin Buddhism Translation series (Kyoto: Jôdo Shinshû Hongwanji-ha, 1997), p. 26.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 108 and p. 168.

<sup>4</sup> *Ibid.*, p. 168.

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 192.



who entrust themselves to the Primal Vow are made to acquire them.<sup>6</sup>

In *Notes on 'Essentials of Faith Alone,'* Shinran explains the Pure Land simply:

*The land of bliss* is that Pure Land of happiness, where there are always countless joys and never any suffering mingled with them. It is known as the land of peace.<sup>7</sup>

Shinran in *Hymns of the Pure Land Masters* further describes the Pure Land, and again urges us to take shelter in the Vow to end our suffering:

Śākyamuni's teachings are numerous,  
But Bodhisattava Vasubandhu compassionately urges us,  
Who are possessed of blind passions,  
To take refuge in Amida's universal Vow.

The adornments of the Pure Land of peace  
Are perceived only through the wisdom shared by Buddhas.  
That land is infinite, like space,  
Vast and without bound.<sup>8</sup>

In *Lamp for the Latter Ages*, Shinran assures us that our suffering of delusion will end as we are possessed of ignorance and blind passions:

And so, as Śākyamuni has taught, at the very moment that we, possessed of ignorance and blind passions, are born into the Pure Land of peace, we attain the supreme fruit of Buddhahood.<sup>9</sup>

The location of Pure Land is, after all, a means or metaphor. Those who see it in the west are actually seeing and experiencing it in the here and now. And those who see it here also see it around them. What matters is whether one is awakened or not, or, rather, it even doesn't matter if one is awakened or not in a conscious sense, for, as one fails to become enlightened by one's own practices and efforts—and we mostly do fail—one tries or desires to get to that state and thus allows Amida's compassion to take effect. Even though

---

<sup>6</sup> *Ibid.*, p. 477.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p. 460.

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. 364.

<sup>9</sup> *Ibid.*, p. 526.

one suffers as a result of attachments to what is impermanent, Amida's universal compassion is constantly working upon everyone. By trying to improve and better one's daily life with the realization of one's limited and self-centered mode of being, one permits the seed of enlightenment to blossom, which finally comes about through the spontaneous working of Amida. It is like a lotus flower blossoming, beautifully rising up through the mud.

### Pure Land as Stage

According to the teachings in early Buddhism or Theravâda, the four stages of sainthood or the four grades to Nirvana are expounded as: 1) *srotta-âpatti-phala* (*yoruka* 預流果) or the fruit of the stream-enterer, 2) *sakṛd-âgâmi-phala* (*ichiraika* 一來果) or the fruit of the once-returner, 3) *anâgâmi-phala* (*fugenka* 不還果) or the fruit of never-returner, and 4) *arhat-phala* (*arakanka* 阿羅漢果) or the fruit of the worthy.

*Srotta-âpatti-phala* is the stage of the one who has entered the stream in order to cross this birth-and-death realm to the other shore of Nirvana. *Sakṛd-âgâmi-phala* is the stage of the one who has reached a higher stage than the previous one, but will return to this course of cycles of birth-and-death or rebirth only once more. *Anâgâmi-phala* is the stage of the one who has passed the previous stages and will never return to the cycle of rebirth. *Arhat-phala* is the state in which one has reached the final goal of attaining emancipation from repeated cycles of birth-and-death.

The third stage of *anâgâmin* or never-returner can be said, in a way, to be a kind of archetype of Pure Land in Mahayana Buddhism. The Chinese versions of the *Larger Sutra* do not talk about these four stages, probably because they wanted to emphasize a bodisattva ideal. But, the closing section of *The Larger Sukhâvatî-vyûha, Description of Sukhâvatî, the Land of Bliss*, the Sanskrit version of the *Larger Sutra*, as translated by Max Müller in 1894, says:

45. And while this treatise of the Law was being delivered, twelve koṭis of niyutas of beings obtained the pure and spotless eye of the Law with regard to Laws. Twenty-four hundred thousand niyutas of koṭis of beings obtained the Anâgâmin reward. Eight hundred Bhikshus had their thoughts delivered from faults so as to cling no more to anything. Twenty-five koṭis of Bodhisattvas obtained resignation to things to come. And by forty



hundred thousand *niyutas* of *koṇis* of the human and divine race, thoughts such as had never risen before were turned toward the highest perfect knowledge, and their stocks of merit were made to grow toward their being born in the world *Sukhâvatî*, from a desire to see the Tathâgata, the blessed Amitâbha. And all of them having been born there, will in proper order be born in other worlds, as Tathâgatas, called *Mañgusvara* (sweet-voiced). And eighty *koṇis* of *niyutas* having acquired resignation under the Tathâgata *Dîpiṅkara*, never turning back again from the highest perfect knowledge, rendered perfect by the Tathâgata Amitâyus, practising the duties of former Bodhisattvas, will carry out, after they are born in the world *Sukhâvatî*, the duties enjoined in the former *Pranidhânas* (prayers).

46. At that time this universe (the three millions of worlds) trembled in six ways. And various miracles were seen. On earth everything was perfect, and human and divine instruments were played, and the shout of joy was heard as far as the world of the *Akanishthas*.

47. Thus spoke the Bhagavat enraptured, and the noble-minded Boshidattva Agita, and the blessed Ânanda, the whole Assembly, and the world, with gods, men, spirits, mighty birds, and fairies, applauded the speech of the Bhagavat.

The praise of the beauty of the excellences of *Sukhâvatî*, the country of the blessed Amitâbha, the Tathâgata, the entry of the Bodhisattva on the stage of 'never returning,' the story of Amitâbha, the *Mahâyânasûtra* of the Description of *Sukhâvatî* is finished.<sup>10</sup>

It is interesting and challenging to note here that the Pure Land of Amida connotes the stage of *anâgâmin*, the stage of 'never returning.' *Anâgâmin*, according to early Buddhism, is in the third stage as cited before, one stage before the fourth or final one of Arhat who has totally overcome all of his or her evil passions, attaining emancipation from

---

<sup>10</sup> E. B. Cowell, ed. *Buddhist Mahâyâna Texts* (New York: Dover Publications, Inc., 1968), Part II, pp. 71-2. While the Chinese translations of the *Larger Sutra* by Samghavarman and Bodhiruci have 48 vows, the Sanskrit version has 46. The two vows, the 18th and 21st, in the Chinese translations are missing in the Sanskrit text. The latter part of the 19th vow in the text is the latter part of the lost 18th vow according to the Chinese translations. The 18th vow, however, is the most important vow called the Primal Vow, according to Shinran. *Ibid.*, pp. 73.



repeated cycles of birth-and-death, and is worthy of offerings. Arhat, attaining the highest stage of *śrāvaka*, has thus gone into Nirvana. Once one is gone into Nirvana, one will never come back again to this *Sahâ* world of birth-and-death or this world of suffering or *duḥkha*—samsara. Having attained this stage, *Anâgâmin* will never repeat cycles in the realm of desire or *kâma-dhātu*, not being subject to its rebirth—therefore, ‘never returning’ in this sense.

*Anâgâmin* has not yet become free, however, from the bond of existence, this very existence itself; therefore, *Anâgâmin* has not become Arhat yet. This attachment to existence, though, seems to hold a clue in understanding the nature of beings and a bodhisattva ideal in Mahayana Buddhism in an ontological sense. *Anâgâmin* will then never return back to the realm of desire, but what is more important is that *Anâgâmin* will never get into Nirvana in the context of Mahayana Buddhism, if returning to this *Sahâ* world of *duḥkha* is not possible. *Anâgâmin* will never leave or enter into Nirvana. *Anâgâmin* still has more things to do in this world.

In the teachings of Mahayana Buddhism, a bodhisattva still remains in the world of birth-and-death or the world of suffering in order to help others. A bodhisattva makes vows to attain enlightenment for him/herself and to save suffering beings. The bodhisattva cannot and does not attain the final goal of enlightenment all for him/herself; rather, stays in the here and now with the rest of beings. The stage of *anâgâmin* or ‘never returning’ is the third stage in pursuing arhatship or *śrāvaka*; however, this stage or state of having left many things unachieved, as he or she does not become free from the bond of existence, in order to help others, is quite important and significant in understating a bodhisattva ideal and Shin Buddhism.

Once one becomes awakened, one becomes clearer as to one’s being embraced or assured by the working of Amida Buddha’s universal compassion, and one comes to see and realize more of sorrow and grief of other beings, so that one cannot leave them. The Pure Land can thus be likened, in a sense that one does not attain the final goal yet, to the stage of the *anâgâmin*, a stage where our suffering has ended and yet has not ended as long as we are still concerned with ending the suffering of other beings.

### Pure Land as State

The Pure Land is, literally speaking, adorned with purity, and adornment of purity is



itself the Pure Land. Shinran says, “Those born in the Pure Land of happiness have no impure form, no impure mind, and in the end they all acquire the uncreated dharma-body of purity and equality, for the pure nature of the land of happiness has been fulfilled.”<sup>11</sup> It is an ideal “state” where one is liberated from the cycle of birth-and-death or from the six realms of samsara. That is where one’s aspiration for perfect enlightenment is fulfilled and where that aspiration coincides with Amida’s Primal Vow.

We are all living yet in this mundane world of suffering and pain, and even if we are able to escape from this world of *duḥkha*, of samsara, it is only momentary. *Duḥkha* is inevitable to us all. Buddha-Dharma says the cause of *duḥkha* is our attachment (執着) or ignorance (無明). We are attached to what is impermanent, but nothing is permanent and everything is changing; therefore, *duḥkha* cannot be avoided. If we become existentially and totally unattached to things, this means that we are no longer living here in this world—Anâgâmin is still attached to the bond of existence.

We are also ignorant in terms of not being able to see things as they are. We are essentially self-centered and are fundamentally deluded and lost, in a deep sense. Delusion means one’s not being able to become aware of the state of one’s being deluded. It is like our right hand trying to grasp itself. We can know this as information, but it is extremely difficult to realize this state of our being deluded. Such is the nature of our ego. *Duḥkha* is thus inevitable and takes place at any time of one’s life. Buddha-Dharma then talks about the cessation of *duḥkha*, which is Nirvana, by our getting rid of the cause of *duḥkha*. The Eightfold Noble Path is the way which leads us to the goal.

In learning the fundamentals of Buddha-Dharma, we come to face a question, the question of whether or not we are really able to liberate ourselves from being attached or ignorant. Being born in the Pure Land then enables us to become free from the cause of *duḥkha* and to dwell in the state of happiness or peace. Through becoming aware of the Pure Land in the here and now, which is shinjin, we become free and liberated for the time being. In *Notes on the Inscriptions on Sacred Scrolls*, Shinran says:

This passage means that one transcends, becomes free of, and departs from transmigration in birth-and-death, cutting off and abandoning this Sahâ world; it means that one shall definitely attain birth in the Pure Land of

---

<sup>11</sup> CWS 1, p. 192.



peace. Peace expresses praise of Amida and indicates the Pure Land of happiness.<sup>12</sup>

This is religious experience in life. Religious experience does not last for a long time,<sup>13</sup> but it succors us in our despair and brings us out from its agony and misery. Shinjin sustains our life, though we always live in samsara, the repeating six realms of hell, hungry ghosts, animals, fighting spirits, human beings and heavenly beings. Attachment and ignorance are the cause of *duḥkha* and we suffer from it after all; yet, our being attached and ignorant is the very proof or reality that we are living and being lived. We will not get out from the six realms, but we live with them and in them;<sup>14</sup> and through realization of Amida's Primal Vow, we come to lead a life of gratitude. The nembutsu serves as an expression of gratitude.

To our disappointment, we still fall back to the agony of the six realms. We then feel as if we were fallen into hell; we become hungry; we are animals; we fight against each other in order to survive; we love and hate each other, and yet we sometimes feel as if we were up in heaven. Depending on the situations or conditions, the way we experience our life differs greatly. We are filled with evil passions such as greed, anger and folly.<sup>15</sup> As we live in the world of highly developed technology and science, we have destroyed many

---

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 496.

<sup>13</sup> William James in *Varieties of Religious Experience* says that there are four characteristics regarding religious experience, such as ineffability, noetic quality, transiency and passivity.

D.T. Suzuki in *Zen to nembutsu no shinrigaku-teki kiso* [*Principles of Psychology in Zen and Nembutsu*] points out eight features of religious experience, such as irrationality, intuitive insight, authoritativeness, affirmation, sense of the beyond, impersonal tone, feeling of exaltation and momentariness. *Suzuki Daisetsu zenshū* (hereafter abbreviated *SDZ*) 4 [*Zen Collection of Daisetsu Suzuki* 4] (Tokyo: Shunjūsha, 1975).

Hideo Kishimoto in *Shūkyō shinpi shugi: yōga no shisō to shinri* [*Religious Mysticism: Yogic Thought and Psychology*] says mystic (or religious) experience involves four special features, such as particular intuitiveness, sense of noumenon, feeling of ecstatic uplift and unexplainability. (Tokyo: Daimeidō, 1988), pp. 48-9. First publication, 1958.

<sup>14</sup> Shinran says in *Notes on Once-Calling and Many-Calling*, "Foolish beings: as expressed in the parable of the two rivers of water and fire, we are full of ignorance and blind passion. Our desires are countless, and anger, wrath, jealousy, and envy are overwhelming, arising without pause; to the very last moment of life they do not cease, or disappear, or exhaust themselves." *CWS* 1, p. 488.

<sup>15</sup> Shinran compares the Buddhas and bodhisattvas to great physicians calling them "true teachers" or *zenchishiki* and says, "The Buddhas and bodhisattvas are like this. They know all the sicknesses of foolish beings, which fall into three types: greed, anger, and folly. In the case of the sickness of greed, they make the person observe a skeleton. In the case of the sickness of anger, they make the person observe the features of compassion. In the case of the sickness of folly, they make the person observe the features of twelvefold causation. Because of this, the Buddhas and bodhisattvas are called true teachers." *CWS* 1, p. 237.



other species on the earth—we are leading a modern life of comfort and convenience at the sacrifice of those species. We have created and shaped our planet solely for the benefits of human beings. Among human beings, what's worse, we are fighting against and killing each other, as we see it on TV almost every day, under many different names or with various reasons such as “our god,” “our nation,” justice, killing for a deluded idea of happiness and ideology. As an individual is self-centered and ignorant, so are the family, the community, the race, the country and so on—a gene itself is selfish in the first place.

The way technology has recently developed is tremendously fast and dangerous—transplant operations, computers, cell-phones, cloning, weapons, etc.—and we are not certain about how we are able to control the progress of scientific technology. While science is indwelled in civilization and needed for the welfare of human beings, technology is like a knife, which can be useful or dangerous depending on how we use it. Living in such a highly developed technological era, we are seeking the meaning of religion and talking about life of gratitude, hoping that we will be able to find any solution. When we live in or try to live in the Pure Land as a state of being or consciousness, we understand the sufferings of the world, and work or make efforts to overcome them, not for our individual sakes but for the benefits of all beings.

### Pure Land in the World

Gratitude, which is one's appreciation and expression of being embraced by the compassion of Amida Buddha, is a “static or passive” aspect of shinjin, shinjin being religious experience. On the other hand, a “dynamic or active” aspect of shinjin is one's action in or working on the six realms in this Sahâ world of *duḥkha*, trying to do something for the sake of society or others. This outreaching action is not a forced one but does come in accord with one's appreciation or gratitude. It may seem that a deep sense of gratitude or realization comes about beyond or outside the six realms, or that it is the matter that takes place in the extraordinary realm. The seventh step the baby Buddha took at the time of his birth was not out of the six realms, but it was the next step within the previous six steps—the realm of awakening or realization in the world.

As D.T. Suzuki puts it, “Pure Land is this dirty earth itself.” Knowing this depends on a matter of one's awakening, enlightenment or realization, as the word *buddha* means in noun form an “awakened” one, an “enlightened” one or a “realized” one. We have



sorrow and joy in the six realms. When there is a war breaking up somewhere in the world, we sing a song of peace sharing that sorrow with others, even though there is not much else we can do. When we witness things like misery or death by starvation somewhere in the world, we often sigh and feel helpless and hopeless as if there is nothing we can do about it. An individual is so small or weak that we feel that there is nothing we can do about anything.

This realization, though one feels that one cannot do much, is maybe more valuable and precious than one's mere feeling of gratitude. In the middle of war, prejudice, hatred, devastation, calamity and so on, Pure Land does not reveal as Pure Land to us. It should be understood that the vows Dharmākara established in the *Larger Sutra* refer to the current occurrences of this world.<sup>16</sup>

Shinran says in *Notes on Essentials of Faith Alone* that the true and real shinjin is the aspiration to become a Buddha. He says, "This is the great thought of enlightenment of the Pure Land. This aspiration for Buddhahood is none other than the wish to save all beings." "The wish to save all beings" (*do shujō shin*) is "to carry all beings across the great ocean of birth-and-death. This shinjin is the aspiration to bring all beings to the attainment of supreme nirvana; it is the heart of great love and great compassion."<sup>17</sup> "The wish to save all beings" means to help others to attain enlightenment beyond the mundane value and also to help others with their secular needs.<sup>18</sup>

The attainment of enlightenment beyond the mundane value involves our realization of the compassion of Amida Buddha, indwelling or partaking in us as the true and real shinjin, which is our own awakening simultaneously coinciding with the working of the universal intent of Dharmākara's Primal Vow—shinjin as a static aspect of religious experience in the form of gratitude. On the other hand, helping others with their secular needs shares another aspect of shinjin, a dynamic aspect in terms of one's action in the six realms. One lives a life of returning whatever one has been given in life back to society or others, even in a very limited mode or even with a very small amount.

---

<sup>16</sup> The First and Second Vows of Dharmākara read:

"(1) If, when I attain Buddhahood, there should be in my land a hell, a realm of hungry spirits or a realm of animals, may I not attain perfect Enlightenment."

"(2) If, when I attain Buddhahood, humans and devas in my land should after death fall again into the three evil realms, may I not attain perfect Enlightenment."

Hisao Inagaki, *The Three Pure Land Sutras: A Study and Translation* (Kyoto: Nagata Bunshōdō, 1994), p. 241. The six realms of rebirth are our day-to-day experiences in our present world.

<sup>17</sup> CWS 1, p. 463.

<sup>18</sup> Hoyu Ishida "Salvation for Oneself and Others: 'The Wish to Save All Beings' in the Present" in *The Pure Land*, The Journal of the IASBS, New Series Nos. 13-14, December 1997.



In *Hymns of the Pure Land*, Shinran says:

Those who reach the Pure Land of happiness  
Return to this evil world of the five defilements,  
Where, like the Buddha Śâkyamuni,  
They benefit sentient beings without limit.<sup>19</sup>

Thus while we as individuals may have come to the Pure Land as a stage or as a state, we do not remain there, but return to this world of suffering. The amount an individual can do could be very limited, yet it seems that what matters is whether or not one is aware of that realized or awakened action of return or *kangen* 還元.

D.T. Suzuki says:

Attaining supreme enlightenment is an individual experience. The individual experience, however, must be then the experience for society. One should not be satisfied with one's individual experience; one's individual experience must be immediately transformed into social experience....If one only cares about individual experience without regard to social experience, then it can be said that one is still only partially enlightened.<sup>20</sup>

There must be as many ways of returning back to others or serving for society as there are ways in which we are engaged in any work or vocation in society.

### Concluding Perspectives

Living in the 21st century of highly developed technological science, we must face many problems in the world, environmental disruption, advanced secularization, and never-ending disputes and wars among races and countries, apart from natural calamities and disasters. We all seek for peace and happiness; yet, due to different ideologies and value judgments, we are not able to sit down together to try to solve the problems we have. Deep-rooted grudges and hatreds, individual and collective, unfortunately overshadow our hope and wish for the peace and happiness of all mankind. Even killing oneself has been sometimes chosen in order to satisfy one's desire of destroying others, and the scale of its devastation has been getting greater and graver. Witnessing this, we feel hopeless and helpless.

---

<sup>19</sup> CWS 1, p. 329.

<sup>20</sup> D.T. Suzuki, "Shûkyô-keiken to shite no zen" [Zen as Religious Experience] in *Zen towa nani ka* [What is Zen?]. SDZ 8, p. 33 [My translation]

The Pure Land of Amida is then something that we long for, an ideal place or utopia where there is no sorrow or grief. Understanding the Pure Land in such a way, however, does not bring about our real life of sorrow and joy. The Pure Land outside the realm of our Sahâ world of samsara may serve as a means of “escape” from reality of suffering and it may sometimes work well even in a religious sense,<sup>21</sup> but we cannot evade the reality of what we have—the six realms. The six realms is our real world and is the place where we need to live beyond and within simultaneously all the time. We cannot change the world; the world that has been changed or revolutionized cannot be a perfect one, since it is still the world of six realms. Revolution or change is a matter of personal experience and we cannot force it upon others.

*Anâgâmin* or the never-returner will never repeat cycles in the realm of desire or *kâma-dhâtu* and is not subject to its rebirth, but has not yet become free from the bond of existence, this very existence itself. If *anâgâmin* becomes Arhat and goes into Nirvana, then he or she will never and/or can never come back to this world of samsara to help others. This action of helping others or sharing one’s compassion, which is an immediate outcome from wisdom or *prajñâ*, is the source or foundation of a bodhisattva ideal in Mahayana Buddhism, that is, the Vow of Amida Buddha through the Pure Land. Shinran says, “the Pure Land of happiness is sustained by the power of Amida Tathagata’s Primal Vow.”<sup>22</sup> The Pure Land is not a place to which one goes, but one goes through, beyond and back from it; it is not a stage or state of the future, but it comes into being as one becomes aware of it in the six realms and as one lives out, acts out, practices its qualities and virtues in the here and now.

---

<sup>21</sup> Shinran toward the end of *Notes on ‘Essentials of Faith Alone’* says:

“If you cannot think on Amida

THIS is the teaching which urges the person guilty of the five grave offenses and ten transgressions and of engaging in defiled expositions of the dharma, ‘If you are tormented by suffering due to illness and cannot think on Amida, then simply say Namu-amida-butsu with your lips.’ This demonstrates that Amida made verbal utterance the essence of the Primal Vow. The expression *say the Name of the Buddha of immeasurable life* refers to this fact, and *say* instructs us to utter the Name.” CWS 1, pp. 467-8.

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. 168.



# ‘Karain’ と ‘The Lagoon’ の語りの構造 Narrative Structure of ‘Karain’ and ‘The Lagoon’

外狩 章夫  
Akio TOGARI

## はじめに

コンラッドの第一短編集『不安の物語』(*Tales of Unrest*, 1898) には5つの短篇小説が収録されている。そのうち「ラグーン (渦)」(‘The Lagoon’) と「カレイン——ある思い出」(‘Karain: A Memory’) の二作品は、ともに東南アジアを舞台にしたいわゆるマレーものであることから、しばしば一緒に論じられる。<sup>1</sup> それにしても、「カレイン」がこの短編集の巻頭に置かれており、「ラグーン」が巻末に置かれていること自体も興味深い。各短篇の配置から言うと、残りの三短篇がマレーものに挟まれていることになり、コンラッドにとっての世界の要所を、マレーもので包み込もうという彼の意図を読み取れるように思えるからだ。<sup>2</sup>

ところでコンラッドは、この短編集を刊行してから21年後(1919年)に「作者の覚書」(Author’s

---

<sup>1</sup> Baines もこの両作品を比較して論じているので、一例としてその見解を紹介しておこう。Baines は類似点として、両作品とも「裏切りと後悔の物語」をモチーフにした作品であること。どちらも凝りすぎたロマン主義が滲み出ており、気取った文体で書かれていること。それに、どちらも「人生は幻想 (夢)」というテーマをもつことを指摘している。一方、「カレイン」には「最後に、気のきいた、皮肉なひねりが加えられている」点を相違点として挙げている (Baines, *Joseph Conrad: A Critical Biography*, pp. 189-90)。

<sup>2</sup> 5短篇の執筆順序は以下のようにになっている (吉田『ジョウゼフ・コンラッドの世界』、Schwarz, *From Almayer’s Folly to Under Western Eyes*, p. 217 や Knowles, *A Conrad Chronology* 等を参照)。

(1 番目)「白痴」(‘The Idiots’) : 1896.5 執筆完了

(2 番目)「文明の前哨基地」(‘An Outpost of Progress’) : 1896.7 執筆完了

(3 番目)「ラグーン」(‘The Lagoon’) : 1896.8 執筆完了

(4 番目)「カレイン——ある思い出」(‘Karain: A Memory’) : 1897.4 執筆完了

(5 番目)「帰宅」(‘The Return’) : 1897.9 執筆完了

ところが短編集での収録順は、巻頭に「カレイン」(マレーもの)、2 番目には舞台をフランスのブルターニュ地方にとった「白痴」が続き、3 番目にアフリカのコンゴを舞台にした「文明の前哨基地」、4 番目にロンドンものの「帰宅」が続くと、巻末には「ラグーン」(マレーもの)が来ている。なお、1919 年に書いた「作者の覚書」でコンラッドは、一番早く書いたのは「ラグーン」であったと述べ、その後は「文明の前哨基地」→「白痴」→「カレイン」→「帰宅」の順であったとしているから注意が必要である。この順序については、彼の記憶力が衰えていた面もあるだろうが、むしろ彼が、正確な執筆順序よりも解説のしやすさ、あるいは読者にとっての理解のしやすさを優先した結果であろうと私は推測する。

Note) を寄せている。そこでは「カレイン」のことを「ラグーン」と比較して以下のように述べているのだが、ここからいくつかの疑問が浮かんでくる。

Reading it after many years “Karain” produced on me the effect of something seen through a pair of glasses from a rather advantageous position. In that story I had not gone back to the Archipelago, I had only turned for *another look* at it. I admit that I was absorbed by *the distant view*, so absorbed that I didn’t notice then that the motif of the story is almost identical with the motif of “The Lagoon.” However, the idea at the back is very different; . . . (p. vii, italics mine) <sup>3</sup>

コンラッド自身が認めているように、「ラグーン」も「カレイン」も、作品のモチーフはほぼ同じであるのに、「作者の覚書」を書くために「何年もたって読み返してみると」二つの作品の印象は違っていた。その違いを、「カレイン」のほうは「双眼鏡を通して有利な位置からものを見るような印象」であったというのだ。この印象はどのようなことに起因しているのか。また、このような言い方をするからには、少なくとも「ラグーン」のほうはそういう印象を与えなかったと言っているのだが、それはなぜなのか。また、基本的にこの二作品は東南アジアを舞台にしており、どちらもマレーものと分類されている。ところがコンラッドは、「カレイン」においては多島海 (the Archipelago) のことを「別の見方をしただけ」とも述べている。「ラグーン」とは異なる「別の見方」(another look) とはどのような「見方」のことなのか。さらに作者は、「カレイン」執筆当時は「遠方からの見方に没頭しすぎていたので」両作品の素材(モチーフ)がほとんど同じであることに気づけなかったと言いつつ、「しかしながら、背後にある発想はとても違うものだ」と述べている。コンラッドが没頭しすぎた「遠方からの見方」(the distant view) とはどのようなことなのか。また、その背後にどのような発想(idea)があったというのか。

以下拙論では、二つの作品の粗筋(プロット)や書き出しを提示しながら、必要に応じて空間構造(場所)や時間構造を確認し、両作品の語りの構造を比較検討してみたい。また、中心人物の性格づけの相違点についても取り上げて、上に提出している問題に一通り答えてみようと思う。最後に「カレイン」という作品の性格や特徴、およびこの作品がコンラッド作品の中に占める位置についても触れておこうと思う。

<sup>3</sup> 「作者の覚書」(‘Author’s Note’)、「カレイン」(‘Karain’)、「ラグーン」(‘The Lagoon’) のテキストには、Conrad, *Almayer’s Folly and Tales of Unrest* (Dent Collected Edition), J. M. Dent and Sons: 1947 を用いた。以下、引用の後の( )内にそのページ数を示すこととする。



## 1. 粗筋から語りの構造へ

まず、二作品の粗筋（プロット）を紹介しておこう。あわせてその粗筋に基づいて、それぞれの語りの構造とでも呼ぶべきものの特徴を考えてみようと思う。始めに提示するのは「ラグーン」（‘The Lagoon’）のほうのやや詳しい粗筋である。これは筆者（外狩）がまとめたもので、[ ]内は、語りの構造をはっきりさせるために加えた簡単な説明である。ここからどのような語りの構造が見えてくるであろうか。

### （1）‘The Lagoon’の粗筋

〔名前のない語り手による「外側の語り」で始まる〕

白人が東南アジアのある地方を5人のマレー人が操る舟で旅行をしていた。日が暮れたので、ラグーン〔潟〕のほとりにあるアルサット（Arsat）の小屋で夜を明かすことにする。アルサットには、幽霊を友として暮らしているといううわさがあった。

白人とアルサットとは数年来の友であった。アルサットは小屋から出てくると、病人のために薬をほしがった。それから白人を小屋に案内すると、意識のないまま横たわっている女ディアメレン（Diamelen）を見せた。アルサットは、5日間寝ずに女を看病してきたが、今や彼女は名前を呼んでも返事がない瀕死の状態である。

アルサットは蚊よけの焚き火を前にして、「……我々は、友の心の中でなければどこに苦悩の重みを降ろせるのか。……だから僕は、愛について話すよ。この夜中に。夜と愛とが消えてしまわないうちに話そう……」と述べて自分の物語（＝体験）を語り始める。白人はその夜を、以下のようなアルサットの体験談に耳を傾けながら過ごす。

〔ここからアルサットの語る「内側の物語」が始まる〕

——アルサットと彼の兄は名門の家柄に生まれ、王の太刀持ちを務めていた。アルサットが兄に、王妃の召使いのなかに心を寄せる女がいることを打ち明けると、兄は、「お前の心の中がその娘にわかるように心を打ち明けたらいい——あとは（チャンス）を待つんだ」と言ってくれた。

いよいよ女を連れて逃亡するチャンスがやってきた。王族たちが夜釣りを楽しんでいたとき、待ちあわせていたその女をカヌーに乗せると、二人の兄弟は闇夜にまぎれて国を抜け出した。王の追っ手が追いかけてくるのでできるだけ遠くまで逃げておく必要があった。兄弟は翌日になっても一心に、「光と暑さの中を」漕ぎ続けた。二人は、「一緒に、何度もカヌーレースで勝利した」仲であった。アルサットは兄を愛していた。

ある岬を越えた入り江の浜辺で、王の追っ手が追いついてきた。二人にはこの白人からもらった銃があったが、火薬が充分ではなかった。兄はアルサットに、女と一緒に先に逃げるように言った。「女と逃げろ。森の向こう側に漁師の小屋と——カヌーがある。俺はやつらを〔こ

の銃で] 食い止めておくから……弾を撃ち尽くしたら追いかけていく。俺は脚が速いんだ。…  
…できるだけ長く持ちこたえるから」

兄の言葉に従ってカヌーにたどり着くまでにアルサットは、最後の弾となる4発目の銃声を聞いた。女をカヌーに乗せて待っていると、兄が大勢の男に追いかけられ、倒れては起き上がるのが見えた。男たちが兄に近づいていた。それを見てアルサットはカヌーを出した。アルサットの名前を呼ぶ兄の声が二度聞こえた。追っ手が兄を取り囲むと、「殺してしまえ！ なぐれ！」と叫ぶ声が聞こえた。それから、アルサットの名前を呼ぶ兄の三度目の声が聞こえ——兄は殺されてしまった。

〔ここで「内側の物語」が終わり、「外側の語り」に戻る〕

アルサットが自分の物語を語り終えた明け方に、ディアメレンが小屋の中で息を引き取った。そのとき白人は、彼女の魂を象徴しているような白い鷺が飛び去るのを見た。

日が昇り、白人はアルサットのラグーンを去る。しかし、兄の死に悩むアルサットの心には、女が死んで、闇のみが残る。ラグーンは、人間の生の虚しさを映す鏡のように、そこに淀んでいた。

〔「外側の語り」が終わり、作品が終わる〕

このように粗筋に基づいた語りの構造を見るだけでも、「ラグーン」という短篇が、まず名前のない語り手が語る「外側の語り」(outer-narrative)に始まり、途中からアルサットの語る「内側の物語」(inner-tale)へと移り、最後に「外側の語り」に戻って終わる作品であることがよくわかる。つまり「ラグーン」という作品の語りは、「外側の語り」—「内側の物語」—「外側の語り」というふうに大きく繋がっており、「外側の語り」が1つの「内側の物語」を包み込むという単純な二層構造をもっているのである。それぞれの語りの内容を整理して示すと以下になるであろう。

- ①「外側の語り」——白人がラグーンを前にして、友人アルサットと最愛の女ディアメレンの死を共有する場面。
- ②「内側の物語」——アルサットと女の逃亡から、それを援助してくれた兄の死までを語るアルサットの物語。

ここで、もう一つ注意しておきたい点がある。それは、「外側の語り」が描写する場所(空間)が、最初から最後までアルサットの小屋とその周辺でありラグーンの前に限られているので、一貫性はあるが単純であるということだ。また、「内側の物語」であるアルサットの物語にしても、多島海の一地方を出ていないので、「カレイン」の場合と比較するとやはり狭く、単純である。

このような「ラグーン」の語りの構造に対して、「カレイン」のほうの語りはどのような構造をもつ



ているのであろうか。「カレイン」の場合はかなり長いが、同じように筆者がまとめた粗筋（プロット）を先ず提示しておくことにする。途中で差しはさんだ〔 〕内の記述は、先ほどと同様、語りの構造をはっきりさせるために加えた簡単な説明である。

## （2）‘Karain’の粗筋

〔語り手の「私」が思い出を「外枠の語り」として語り始める〕

〔第1章〕語り手は、新聞記事に触発されて、東洋の多島海を訪れていた昔の思い出を語ります。我々〔三人の白人〕は当時、銃・弾薬を現地人に売りつける密輸に携わっていた。スクーター船に乗って、ミンダナオ島の、外の世界からは隔絶した入り江を訪問したことがあるが、そこは、三つの村を治めているカレインの領地であった。カレインは村人から大いに崇められていたが、なぜか常に太刀持ちの老人を背後に従えていた。また、統治者としてのカレインの「芝居がかった身振り」は印象的であった。

〔「中間部の語り」が始まる〕

〔第2章〕カレインは夜になると我々のスクーター船を訪問し、お忍びで気楽に過ごすことにしていた。太刀持ちの老人も一緒であった。カレインは話し好きで、島々の政治、自分の旅行体験、戦争のこと、母親のこと等を語ってくれたが、過去を悔いる様子も見せた。彼は普段は村人たちに賞賛されていたが、それでも時折、不安な表情を見せて背後を振り返った。すると、老人が彼の耳元に何事か囁いた。カレインは「見えないところで起こることを神経質そうに恐れ」ていた。

〔第3章〕こうして短い間隔で二年間ほどカレインの領地を訪問するうちに、我々は彼を信頼するようになった。しかし、密輸が危うくなったためそこを離れることになった。我々〔＝ひげ面でのっぼのジャクソン、若いホリス、それに語り手の私の三人〕がこの地へ最後の訪問をすると、カレインの太刀持ちが死んだことと、それ以後カレインが姿をくらましていることを知らされる。その5日後、土砂降りの雨の中を、カレインが突然スクーター船上に姿を現す。彼は口に短刀をくわえ、船まで泳いできたのだった。

太刀持ちの老人が死んで以後、彼は毎晩ある男の声に苦しめられていたのだが、その男（の亡霊）は白人のスクーター船には近づかないことがわかっているので、こうして船まで逃げてきたのだと言う。さらに彼は、我々白人の国に自分を連れて行ってくれと懇願した。しかしその前に我々三人は、キャビンでカレインの物語に耳を傾けることにする。

〔カレインが自分の放浪物語を「内側の物語」として一人称で語り始める〕

〔第4章〕カレインの話は以下のようなものであった。――セレベス島南西部にオランダ勢力の影響が強まっていた頃のこと、私〔＝カレイン〕の兄が統治していた地方に、無二の親友

であったパタ・マタラ [=マタラ公]<sup>4</sup> という男がいた。ある日、マタラ公の治める領地にオランダ人商人がやってきて、マタラの許可を得て家を建てた。

時が過ぎ、パタ・マタラの妹が、結婚相手が決まっていたにもかかわらず、このオランダ人と駆け落ちをするという出来事が起こった。このことは、道義上の問題としてだけでなく、オランダを巻き込む国際問題・政治問題としてとらえられ、審議会さえ召集された。

このことで自らの名誉が汚されたとして、マタラは、オランダ人商人と妹を追跡し殺す計画を立て、親友の私 [=カレイン] とともに南方へ船出する——それが 15 年前のことであった。途中でジャワ島にたどり着いたが、駆け落ちした二人を苦勞しながら探すうちに、私は、とうとう「女の顔を見れば、どれもマタラの妹の顔に見える」という幻覚を覚えるようになった。それでも二人を見つけられなかった。マタラと私はジャワを立ち、さらに西へ東へと旅を続けた。

その間に私 [=カレイン] は、マタラの妹のイメージを夢にまで見るようになった。私はこの女のイメージに極度に魅了されてしまった。「夜には（彼女が）私の顔を覗き込む。それは悲しい顔だった。瞳は傷つきやすく、おびえていた。声は甘く訴えるようだった。一度、彼女にささやいた、『お前を死なせはしない』と。すると笑みを浮かべて……以後、微笑んでくれた！……彼女は疲労と苦痛とに耐える勇気をくれたんだ。苦難の時期だった。それを彼女が、慰めてくれた」

とうとうスマトラ島北部のデリーという町で二人を見つけ出すと、マタラは、妹のほうは自分が刺し殺すので、お前 [=カレイン] はオランダ人のほうを「確実に」撃ち殺してくれと言った。しかし、いざマタラが妹に跳びかかろうとするのを見ると、私はマタラのほうを「確実に」撃ち殺してしまった。「あの二人 [マタラの妹とオランダ人] は、まるで魅せられたように死んだ男を眺めていた。私 [=カレイン] は彼女に『生きるんだ。忘れるんじゃないぞ』と叫んだ。こうして私は、タマラの妹（とオランダ人）を救った。そのあとは星明りの下でとても広い道路を歩いた。すると、その恐ろしいまでの広さに頭がくらくらした。それで、道をそれて森に入った。

【ここでカレインの放浪物語が終わり、その後日談が「中間部の語り」として続く】

〔第5章〕私 [=カレイン] は森の中でしばらく平安に暮らしたが、ある晩焚き火のそばに腰を下ろしていると、パタ・マタラの亡霊が現れ、「君はわが友——確実に殺してくれ」と囁いた。私がいくら逃げても、この囁きとマタラの姿は付きまとい続けた。

それで、私 [=カレイン] は強い霊を意のままにできるという老妖術師に太刀持ちになって

<sup>4</sup> Cedric Watts の注によると、パタ (Pata) は 'Lord' (title of a high nobleman) の意である (Watts, ed., *Joseph Conrad: Heart of Darkness and Other Tales*, p. 194)。



もらい、これまで亡霊から身を守ってきたのだ。しかしこの太刀持ちの知恵者も〔第3章で述べられているように〕死んでしまった。——すると、カレインは姿をくらます。そして5日後、とつぜん我々三人の乗っているスクーター船まで泳いで来たのだ。そして、自分をヨーロッパに連れて行ってくれ、それができなければ、「……魔除けをくれ！」と我々に懇願する。

ジャクソン、ホリスそれに私 [=語り手] の三人は途方にくれるが、連れて行くことはできない。結局、魔除けを授けるしか選択肢はない。「我々 [白人] がどれくらい力を持っていると (カレインは) 思っているようだ」と見て取ったホリスは、自分の荷物の中から小さな革張りの箱を持ち出してくる。

〔第6章〕ホリスは笑みを浮かべて箱の中を覗いた。中には西洋人にとってのお守りがごたごた入っていた。ホリスはそのうちから、ヴィクトリア女王戴冠 50 周年記念の六ペンスコインを取り出してカレインに見せ、(彼の信心深さを逆手に取って) ヴィクトリア女王にはイギリス国民の霊を操る力があることを説く。そして、その記念コインを白の革布に縫いこみ、それに青い紐に付けると、彼の首にかけてやった。そのとき私 [=語り手] もカレインにたいして「忘れて安らかになれ！」と呪文を唱えてやった。すると彼には、もうマタラの亡霊は見えなくなった。カレインは叫んだ、「マタラの亡霊は再び立ち去った——永遠に！」と。我々三人は、これでカレインも亡霊に悩まされることなく自信をもって政治に打ち込めるものと確信する。船出する我々にカレインが浜辺から手を振って別れを告げるのが見えた。

〔ここで「中間部の語り」が終わり、最後の「外枠の語り」へと続く〕

——数年後のこと、私 [=語り手] はロンドンのストランドでのっぴのジャクソンと出会った。二人で銃砲店のウィンドウを覗いていると〔武器・弾薬を密輸していた昔を思い出して〕、ジャクソンが私に「カレインを覚えているか」と訊いてきた。二人はロンドンの雑踏の中で、カレインは親友マタラの亡霊を本当に捨てきれたのか、さらにはロンドンの雑踏とカレインの話とでは、どちらがリアルであるかを問題にした。するとジャクソンは、「こっち〔目の前の雑踏〕のほうがあっちの話よりもリアルだなんてことがあったまるものか」と答えた。

〔「外枠の語り」が終わり、作品が終わる〕

以上の粗筋からも「カレイン」の語りは、「ラグーン」の単純な語りに対して、かなり複雑であることがわかる。それは大きく三層構造をしているといえよう。その各層の語りの内容を、便宜上「外枠の語り」(frame-narrative)、「中間部の語り」(middle-narrative)、「内側の物語」(inner-tale) という呼び方を使って簡略に示すと以下のようなよう。

- ①「外枠の語り」——語り手がロンドンとおぼしき所で「思い出」に耽る書き出しの部分と、ロンドンでジャクソンと出会う最後のエピソード。

- ②「中間部の語り」——多島海における数年前のカレインとの付き合い、およびカレインの苦悩と奇妙な行動を語る部分。
- ③「内側の物語」——駆け落ちをしたマタラの妹（とオランダ人商人）を探す15年間の放浪の旅と、彼女のために親友のマタラを射殺してしまうカレインの体験（カレインが一人称で語る部分）。

ここで三層構造をまとめると、まず名前のない語り手が語る「外枠の語り」で始まり、それが同じ語り手が語る「中間部の語り」へと続き、さらに中心人物が一人称で語る「内側の物語」に至る。そのあとは再び名前のない語り手が語る「中間部の語り」に戻り、最後に「外枠の語り」で締めくくられていることになる。つまり「カレイン」という作品の語りは、「外枠の語り」—「中間部の語り」—「内側の物語」—「中間部の語り」—「外枠の語り」というふうに大きく繋がっており、「外枠の語り」が「中間部の語り」に続くと、「中間部の語り」がさらに「内側の物語」を包み込むという三層の入れ子構造のようなものになっているのである。

これを時間順にさかのぼって整理しておくと、《語り手がカレインとの付き合いを追想する時点》から数年前に、《密貿易に携わる語り手たちとカレインとの付き合い》があった。さらにその《付き合い》から15年前に、無二の親友を射殺してしまうという《カレインの体験》があったことになる。

筆者は拙論の始めで、「カレイン」という作品が「双眼鏡を通して有利な位置からものを見るような印象」をコンラッドに与えたことを紹介し、その当時彼が没頭していた「別の見方」や「遠方からの見方」というものがどのようなことをいうのか、と問題提起しておいた。ここでその問題に答えておこう。二作品の語りの構造の相違を念頭に置くと、そのような印象を与える「別の見方」や「遠方からの見方」というのは、①「カレイン」の語りの構造が「外枠の語り」—「中間部の語り」—「内側の物語」という三層構造をもっており、層を移動するごとに、②語りの空間（場所）がロンドンから東洋の多島海、さらにジャワ島へというように遠方へ遠方へと移り、また、③語りの時間がいったんは「数年前」の話であったのに、さらにそこから「15年前」というように過去へ過去へと遡るからだと考えられよう。だから、それだけ時間的にも空間的にも「遠方から」（つまり「有利な位置から」）「内側の物語」（カレインの物語）を眺めることになるのだ。また、「ラゲーン」のほうがそういう印象を与えなかったのは、「ラゲーン」の語りの構造が単純なことで、時間構造も単純で舞台の移動（空間移動）も少ないために、その分コンラッドは——そして読者も——「アルサットの物語」を、より直接的に、より間近に見ることになるからだと言えよう。



## 2. 作品の書き出し

### (1) ‘Karain’ の第1段落

この節では、語りが始まる場所と時間について確認をしておきたいので、最初に ‘Karain’ の第1段落を引用する。最初の数行で語り手は、新聞記事に触発されて、東洋の多島海を訪れていた昔の思い出を語りだしている。しかし、語り手が「多島海を訪れていた昔」というのはいつ頃のことなのか。また、語り手がどこで「新聞記事」を読み「昔の思い出」にふけるのか、ということもはっきりしない。実はこの場所と時間については、第1段落を見ても明示されていないのだ。

We knew him *in those unprotected days* when we were content to hold in our hands our lives and our property. None of us, I believe, has any property now, and I hear that many, negligently, have lost their lives; but I am sure that the few who survive are not yet so dim-eyed as to miss in the befogged respectability of their newspapers the intelligence of various native risings in the Eastern Archipelago. Sunshine gleams *between the lines of those short paragraphs*—sunshine and the glitter of the sea. A strange name wakes up memories; the printed words scent the smoky atmosphere of to-day faintly, with the subtle and penetrating perfume as of land breezes breathing through the starlight of bygone nights; a signal fire gleams like a jewel on the high brow of a sombre cliff; great trees, the advanced sentries of immense forests, stand watchful and still over sleeping stretches of open water; a line of white surf thunders on an empty beach, the shallow water foams on the reefs; and green islets scattered through the calm of noonday lie upon the level of a polished sea, like a handful of emeralds on a buckler of steel. (p. 3, italics mine)

時間に関しては、第1文に、「保護を受けていなかったあの時期」(*in those unprotected days when . . .*) とは書かれているが、‘when’ 以下が抽象的なため、これだけではその時期が不明瞭である。

しかし、作品の終わりのほうに、三人の白人がヨーロッパに帰るためにカレインに別れを告げた後、そのうちの二人——語り手の「私」とのっぼのジャクソン (Jackson) ——が偶然出会う場面が設定されている。その場面の書き出しは「数年後に私は [ロンドンの] ストランドでジャクソンと出会った」 (Some years afterwards I met Jackson, in the Strand. p. 53) という記述になっているが、これにより、語り手が「多島海を訪れていた昔」というのが「数年前」の過去であることがわかり、また、語り手が「新聞記事」を読み「昔の思い出」にふけていた場所として、固有名詞で特定されてはいないものの、ロンドンを想定しても不自然ではないことになろう。

これで語りが始まる場所と時間について一応の確認はできた。<sup>5</sup> すなわち最初の数行では、名前を持

<sup>5</sup> 第1段落においては、もう1点触れておきたいことがある。それは、第1文の「我々は、……保護を受けて

たない語り手がロンドンとおぼしき所で、新聞記事をきっかけにして、東洋の多島海にいた「数年前」の昔の体験を追想していたのだ。

この段落の後半は、追想される場所と新聞の行間とをオーバーラップさせて、「そういう短い段落の行間には、陽光が輝くのだ——陽光と海のきらめきがある」(Sunshine gleams between the lines of those short paragraphs—sunshine and the glitter of the sea.) というふうな、かなり幻想的な記述となっている。そして、記事の中の「聞きなれぬ名前」(a strange name) が「思い出」(memories) を呼び覚ますのだという。さらにその後で、「星明かりの夜にそよぐ陸風の香り」「浜辺にとどろく白波」「浅瀬の泡」「静かな真昼に散らばる緑の島々」などのある場所——東洋の「多島海」——のイメージが描かれ、読者は語り手と一緒にその土地の雰囲気味わう仕組みになっている。こうして読者は空間的にも時間的にも、語り手が体験した数年前の東洋の世界へと連れて行かれることになる。

## (2) ‘The Lagoon’ の書き出し

今度は、‘The Lagoon’ の書き出しの数行を見てみよう。

The white man, leaning with both arms over the roof of the little house in the stern of the boat, said to the steersman—

“We will pass the night in Arsat’s clearing. It is late.”

The Malay only grunted, and went on looking fixedly at the river. The white man rested his chin on his crossed arms and gazed at the wake of the boat. (p. 187)

ここではまず、名前のない語り手が、名前のない白人 (the white man) を導入していることを確認できる。そしてこの引用の続きは、語り手による、樹木の生い茂った熱帯の、ある静かな場所の描写になっている。そういう場所で、船が「曲がりくねった溝のような入り江」を通っていくと、その奥が、広がったラグーン (潟) になっていて、アルサットの小屋に行き着くという具合である。

ここで、この書き出しを「カレイン」の第1段落と比較してみると、「ラグーン」の場合、語り手が自分の体験を語るという層——第1節で述べた「外枠の語り」(frame-narrative) に相当する語り——がないことがわかる。語り手は、白人や船を操るマレー人たち (4人の漕ぎ手と1人の舵取)、それにアルサットや彼の小屋周辺の様子を紹介するだけである。彼は第1節で述べた「外側の語り」(outer-narrative) を語る役割を担っているだけで、作品の中で自ら活動することはない。両作品の書き出しを比較した場合、このような基本的な語りの相違点があるのだ。

---

いなかったあの時期に彼 (him) を知っていた」という書き方についてである。この「彼」(him) を語り手は以前から知っていたので、このように書いたのであろうが、しかしこれは巧妙な書き方なのだ。というのは、作品の第1文でこのように書くと、この「彼」は誰のことなのかという興味・疑問を読者に喚起する効果があるからだ。読者のほうはこのような語り手の策略にはまり、通常この「彼」は何者かと考え始めることになる。



### 3. 中心人物の性格づけ

この節では二作品の中心人物の描かれ方（性格づけ）の問題を取り上げてみたい。アルサットとカレインとで描かれ方や役割にどのような相違点があるのだろうか。また、その相違点からどのようなことがわかるのかを考えてみたい。便宜上、カレインの方から取り上げることにする。

#### (1) Karain の場合

中心人物カレインの性格についてはやや複雑なので注意が必要だ。ここでは彼の三つの性格を取り出すことにする。一つめは、卓越した演技力をもつ役者であるという面、二つめは、迷信や幻を信じやすいという側面、そして三つめは、殺人さえ犯しかねない精神錯乱に陥りやすい面である。次の引用文をもとにして、まず一つ目の性格から考えてみよう。

*It was the stage where, dressed splendidly for his part, he strutted, incomparably dignified, made important by the power he had to awaken an absurd expectation of something heroic going to take place—a burst of action or song—upon the vibrating tone of a wonderful sunshine. He was ornate and disturbing, for one could not imagine what depth of horrible void such an elaborate front could be worthy to hide. He was not masked—there was too much life in him, and a mask is only a lifeless thing; but he presented himself essentially as an actor, as a human being aggressively disguised. His smallest acts were prepared and unexpected, his speeches grave, his sentences ominous like hints and complicated like arabesques. (p. 6, italics mine)*

Day after day he appeared before us incomparably faithful to the illusions of the stage, and at sunset the night descended upon him quickly, like a falling curtain. (p. 9, italics mine)

抽象的にはあるが、語り手は「ステージ」(stage)、「役」(part)、「仮面」(mask)、「役者」(actor)、「仮装した」(disguised)「演技」(acts)、「幕」(curtain)といった演劇用語を散りばめて、執拗にカレインの演技を強調している。そこで考えてみたいのが、基本的に役者であるというカレインの性格、卓越した彼の演技の強調が、どのような意義をもつのかということである。カレインは、三つの村を治める政治家である。しかも村民から崇められている。彼へのそういう崇拜の念は演技力によってもたらされている。すなわち彼にとって演技は、政治のために必要なものであった、と考えられよう。つまりカレインは、演技力で政治をしているのだ。

次の、幻や迷信を信じやすい彼の性格については、粗筋からだけでもよくわかるであろう。カレインは自分の背後にいつも太刀持ちの老人を従えていたが、そもそもその老人は、マタラの霊から身を守るためにカレインがわざわざ雇った妖術師 (sorcerer) であった。老人は、カレインの「死んだ親友 [マタラ] のさまよう霊よりも強い霊を意のままにできた」からだ (p. 42)。しかし、この老太刀持ち

が死んでしまうと、カレインは極度の不安・恐怖にとりつかれ、ある晩、マタラの亡霊から逃れるために白人のスクーター船へと泳ぎ渡ってくる。そして、自分をヨーロッパに連れて行ってくれ、それができなければ「……魔除けをくれ!」と三人の白人に懇願する。このようなカレインの行動からも、彼が幻 (illusions) を信じる、幻に生きる人であることは明瞭である。

しかし、興味深い点はそれだけではない。三人の白人は、先の粗筋からもわかるように、最終的にはカレインをヨーロッパに連れて行かずに、多島海のこの地にとどまらせ彼の政治を継続させることに成功したことだ。そのために彼らが利用したのは、安っぽいヴィクトリア女王の戴冠 50 周年念コインであった。三人はコインの肖像をカレインに見せながら、一生懸命にヴィクトリア女王の威光を彼に信じさせ、結果として彼の人生に大きな影響を与えたのである。

三つめは、興奮が昂じると殺人をも犯しかねないとされるカレインの極端に激しい性格についてである。この性格を言うのに ‘amuck’ (「逆上して」) という言葉が使われているが、<sup>6</sup> これは彼のみに対して当てはまる性格ではなく、一般にマレー人に特有の性格であると信じられていたものである。その一般的な性格をコンラッドは、以下のようにカレインの性格を語るのに利用しているのだ。

“ . . . . The end of all this shall be,” he [Hollis] went on, looking up at us—“the end of this shall be, that some day he will run amuck amongst his faithful subjects and send *ad patres* ever so many of them before they make up their minds to the disloyalty of knocking him on the head.”

I nodded. I thought it more than probable that such would be the end of Karain. It was evident that he had been hunted by his thought along the very limit of human endurance, and very little more pressing was needed to make him swerve over into the form of madness peculiar to his race. (pp. 44-45, Conrad’s italics)

この場面は、ヨーロッパに連れて行ってもらえないし「魔除け」も与えられないとすると、カレインはどのような行動をとるかをホリスと語り手の私が想像した場面である。二人は、カレインが「逆上して (he will run amuck)、どれくらい多数の忠実な臣民たちを殺してしまうだろう」と確信している。このようにカレインには、激しやすく危険な——仲間の殺戮さえやりかねない人物としてのイメージが与えられているのだ。

これでカレインの場合は、少なくとも三つの主要な性格が明瞭に与えられていることがわかった。そのイメージをまとめてみると、彼は、表向きは天性の演技力によって民衆に尊敬される、威厳たっぷりの立派な政治家である。しかし、裏では亡霊にひどくおびえて、逃げ回って苦悩する、自信を喪

<sup>6</sup> 「カレイン」という作品ではこの言葉が二度使われている。もう一箇所はパタ・マタラのせりふの中で次のように動詞として、異なるスペリングで使われている——‘I [Matara] shall creep close and then *amok* . . . let her die by my hand. You take aim at the fat swine [the Dutchman] there. . . .’ (p. 37, italics mine)



失した弱い人間である。しかも、精神的支柱を失い信心の対象が得られない場合には、仲間の殺戮さえやりかねない危険人物として提示されている。読者としては、表と裏が極端にかけ離れ、大いに矛盾した、複雑で多面的な人間像を読み取ることになる。

## (2) ‘Lagoon’のArsat

「ラグーン」の中心人物アルサットは、どのような性格を与えられているのであろうか。彼の体験談(物語)を聞くと、恋人との逃避行のために協力してくれた兄を見殺しにするという、不運な状況に見舞われた人物として捉えられよう。彼の気持ちの中に兄の死に対する罪の意識を認めようとしても、それは曖昧で、むしろ人生は幻想であり、その虚しさを思い知らされた人物として読者の印象に残るように描かれているように思える。少なくともアルサットの罪の意識は、その後の彼の生活の中で十分に劇化されてはいない。彼は、カレインのように亡霊に悩まされることはないからだ。彼の小屋を訪れる白人にしても、ほとんどアルサットの物語の聞き役としてのみ機能している。彼はアルサットの友人であり、ディアメレンの死をアルサットと静かに共有する役割を与えられているだけのように見える。

このように考えると、「ラグーン」という作品では、中心人物の性格づけは希薄であるといわざるを得ない。少なくとも三つの明瞭な性格を与えられているカレインのほうが、ずっと複雑で多面的な人物として提示されている。つまりコンラッドは「カレイン」において、アルサットよりもずっと複雑で多面性をもつ人間像を提示する実験をしていたのではないかと筆者には思えるのだ。

また、「ラグーン」において語り手と白人は別人であり、アルサットに対してはどちらもたいした影響を与えていない点も見逃せない。他方「カレイン」では、語り手は三人の白人のうちの一人でもあり、直接カレインの人生に影響を与える役割を担っている。このようにこの二作品では、語り手の性格・役割が基本的に異なっている。コンラッドは「カレイン」において、中心人物に直接影響を与え深く関わることのできる語り手を実験的に描いているように思われる。

## まとめ

拙論では、まず第1節で作品の粗筋(プロット)を紹介し、それに基づいて語りの構造を調べてみた。その結果、「ラグーン」は「外側の語り」→「内側の物語」→「外側の語り」という単純な二層構造の語りをもっていることがわかった。また、層の移動に連れて動く空間(場所)の変化も小さく、時間の構造も単純な二層で構成されていた。これに対して「カレイン」のほうは、「外枠の語り」→「中間部の語り」→「内側の物語」→「中間部の語り」→「外枠の語り」という三層構造をもっていた。層を移動するたびに語りの空間(場所)が遠方に移動し、再び戻ってくる。語りの時間も過去へ過去へと遡ったあと、再び戻ってくるのであった。このような語りの構造の分析は、主に創作上の技法に

関わる問題であるが、以上のような結果を念頭において、小論の始めに提出しておいた問題に答えておくことにしよう。

二つの作品の印象の違いをコンラッドは、「カレイン」のほうは「双眼鏡を通して有利な位置からものを見るような印象」であったというのだが、この印象の起因するところは、「カレイン」のほうは時間的にも空間的にも遠いところから（有利な位置から）内側の物語（カレインの物語）を眺めているからであるといえよう。また、「ラグーン」のほうがそういう印象を与えなかったのは、「ラグーン」の語りの構造が時間的に見て単純で、空間的にも近接しているから、その分「アルサットの物語」を直接的に、間近に見ることになるからだと考えられる。

またコンラッドは、「カレイン」という作品では多島海（the Archipelago）のことを「別の見方をしただけ」であって、当時はその「遠方からの見方」に没頭していたとも述べている。この「別の見方」「遠方からの見方」というのも、基本的に創作技法上の問題であったように私には思われる。すなわち当時のコンラッドは、三層の語りの構造をもたせることによって、作品に時間的な奥行きと空間的な広がりを与え、その中で中心人物の複雑さをも提示しながら、より多面的な小説世界を創出する実験に熱中していたように見えるのだ。彼が、両作品の素材（モチーフ）がほとんど同じであるとしながらも、「……背後にある発想はとても違うものだ」と述べるとき、背後にもっていた「発想」というのは、このような、彼にとって新しい小説を展開するための技法上の可能性のことだったように思われる。このように考えると、「ラグーン」の趣向が、ある逸話の紹介という単純なものにとどまるのに対して、「カレイン」という作品が、内側の物語をより重層的に位置づけ、語り手までも巻き込んだ形で提示するという技法面での特徴をもっていることもうなずけよう。

最後に「カレイン」という作品の性格や特徴、およびこの作品がコンラッド作品の中に占める位置についても触れておこう。内容面から言えば、避けられない（極限）状況に身を置いた中心人物が、命・夢・恋などのためにとった自分の行動に悩むというテーマが認められ、これはのちに、例えば『ロード・ジム』の中で執拗に展開されるテーマであるといえよう。また、語りの技法という観点から見れば、「中間部の語り」と「内側の物語」を「大枠の語り」で包むような重層構造をもつ語りの初期の例という位置づけになろう。これが、やがて Marlow ものの語りへと発展していくことは言うまでもない。

## 参考文献

- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. Weidenfeld and Nicolson, 1960.
- Conrad, Joseph. *Almayer's Folly and Tales of Unrest* (Dent Collected Edition). J. M. Dent and Sons, 1947.
- Dryden, Linda. *Joseph Conrad and the Imperial Romance*. Macmillan, 2000.



- Gekoski, Rick. *Conrad: The Moral World of the Novelist*. London: Elek Books, 1978.
- Graver, Lawrence. *Conrad's Short Fiction*. University of California Press, 1969.
- Humphries, Reynolds. ‘Karain: A Memory. How to Spin a Yarn’, *L'Epoque Conradianne*, May 1983, pp. 9-21, reprinted in Keith Carabine ed., *Joseph Conrad: Critical Assessments*, Vol. II, East Sussex: Helm Information, 1992, pp. 155-62.
- Karl, Frederic R. and Davies, Laurence, eds. *The Collected Letters of Joseph Conrad*. Vols. I, II. Cambridge University Press, 1983, 1986.
- Knowles, Owen and Moore, Gene M. *Oxford Reader's Companion to Conrad*. Oxford U. P., 2000.
- Knowles, Owen. *A Conrad Chronology*. Macmillan, 1989.
- Schwarz, Daniel R. *From Almayer's Folly to Under Western Eyes*. London: Macmillan, 1980.
- Sherry, Norman, ed. *Conrad: The Critical Heritage*. Routledge and Kegan Paul, 1973.
- Watts, Cedric ed. *Joseph Conrad: Heart of Darkness and Other Tales* (Oxford World's Classics). Oxford U. P., 2002.
- Yoshida, Tetsuo 吉田徹夫、『ジョウゼフ・コンラッドの世界——翼の折れた鳥』、開文社、1980.

## Abstract

According to the ‘Author’s Note’ written in 1919 for his *Tales of Unrest* (1898), Joseph Conrad, expressed his impression on ‘Karain’ as compared with ‘The Lagoon’: ‘In that story I had not gone back to the [Eastern] Archipelago, I had only turned for another look at it. I admit that I was absorbed by the distant view, so absorbed that I didn’t notice then that the *motif* of the story is almost identical with the *motif* of The Lagoon. However, the idea at the back is very different . . . .’ (Conrad’s italics)

In this paper I have tried to make clear answers to why he got this kind of impression, and what he means by ‘another look,’ ‘the distant view,’ and the very different ‘idea at the back’ of writing the story. First I have shown a general summary of the plot for each story, and then examined their narrative structures. The result shows that ‘The Lagoon’ has a simple narrative structure, having only two layers of narrative; i.e. the story starts with the ‘outer-narrative’ told by an unnamed narrator, then switches over to the ‘inner-tale’ told by Arsat, the central character, and returns to the ‘outer-narrative’ before it finishes. The places referred in the story are always in an area somewhere ‘in the Eastern Archipelago.’ The time structure of the story is simple, having only two layers.

The narrative structure of ‘Karain,’ on the other hand, consists of three layers of

narrative: the 'frame-narrative,' the 'middle-narrative' and the 'inner-tale.' The story begins with the 'frame-narrative' told by an unnamed Englishman (the narrator), then moves to the 'middle-narrative' told by the same narrator, and comes to Karain's 'inner-tale' told by himself. When his 'inner-tale' finishes we return to the 'middle-narrative' and finally come to the 'frame-narrative' at the end of the story. As the narrative shifts, the space in the story moves away into distant places and the time goes back to distant past as well.

This kind of narrative structure in 'Karain' seems to be responsible for Conrad's impression mentioned above. What he was absorbed in at the time of writing is not 'the *motif*' of the story, but 'another look,' 'the distant view' for the 'inner-tale.' The very different 'idea at the back' is the narrative structure by which he could present many-sided central characters and the complexity of the story. This kind of narrative shift is essentially a matter of writing method and it seems to me that Conrad was so 'absorbed' in this kind of experiment when, in 1897, he tackled 'Karain: A Memory.'



## **Incidental Vocabulary Learning in a Quiz Game**

### **(Part I: Without Pre-Learning Activity)**

**Walter KLINGER**

We learn the greater part of our vocabulary as native language learners incidentally or implicitly, compared to a much smaller number of words learned, intentionally or explicitly, from studying word lists, and looking up words in the dictionary. Incidental learning takes place in more casual contexts such as everyday conversation, watching TV and movies, and reading, where one guesses the meaning of a word from the context. In EFL/ESL classes, activities such as games are often employed to encourage speaking, usually in a rather carefree atmosphere without the stresses of more academically oriented study, such as written translation exercises, and memorization of rules and lists. The purpose of this study was to find out what kinds of words might be likely to be learned incidentally while playing a quiz game.

While the results of academic work can be readily tested, and indeed students expect to be tested, games are not usually regarded as activities that are followed up by tests. In the present experiment, I told first year students in my university EFL classes to pay attention to new vocabulary before starting to play a quiz game, and that in the next class the following week I would be asking them about which new words they remembered.

The results of the test show that very few of some 220 vocabulary items, that were probably unknown before playing the game, were remembered. This result was not unexpected, as I told the students that the test would not count towards the final grade. The students were thus without that particular motivation. Of course, I am quite certain that if I had said that the test would count towards a grade, they would have studied the vocabulary harder and learned many more words. Other factors were involved in the low recall result. With 45 quiz cards, inevitably some cards were not played during the allotted 80 minutes of game time; so, some words were not seen at all. At least one group of players chose to play

mainly cards that involved names of countries; so, they didn't see most of the new words. The sheer number of words that were probably unknown, also surely inhibited learning; a smaller number would probably have been more noticed, and remembered. Any new, or unknown words appeared only once; or, occasionally, twice on the quiz cards, so the students had just a brief exposure to them.

The week after the game was played, I handed out sheets of paper with a list of keywords from the category titles. I asked the students to write down any words that they remembered that they didn't know before playing the game. I allowed the students to work in groups and consult each other; in part, to create a non-stressful atmosphere, and also because I wasn't trying to find out individual results. I walked around the classroom and talked with the groups. When I saw students writing words that I thought they surely knew, I asked them if those were really words they didn't know before the game; some students then erased or crossed out those words.

Students said the game had refreshed their memory of the spelling of some words, or refreshed their memory of words they had learned before but had half-forgotten, like *oxygen*. Some words are pronounced similarly in English and Japanese; but, some students said they had never seen the English spelling for words like *kangaroo* and *cheetah*. Some new words were words that students said they vaguely knew, like *Gone With the Wind*. Other "new" words were not unknown; but, were people or items that students didn't know belonged in that category; like, *Elton John* in *Top Selling Artists*. Many girls, especially, were somewhat familiar with the names of the planets since they appear as names of characters in the popular anime series, "Sailor Moon;" but, they told me they didn't know that they were English names of planets; or, that they hadn't seen the words written in English.

Some responses came close to learning the word, as *wave his tail* at least visually approximates *wag his tail*, and *ninjabumeran* seems a reasonable interpretation of *ninja stars* as *ninja boomerang*. I would guess that the Beatles song *She Loves You* was often remembered (even half-remembered as *She Loves Me* and *She Loves New York*), because it is a simple and vivid combination of words. The same principle applies for *Every Little Thing*, a Beatles song title that I think was genuinely new to everyone, including me. I'm not sure from what word *gorvious* and *sarvel* were learned; perhaps *glorious* and *marvellous*, though they do sound like legitimate English words.

One group struggled unsuccessfully to remember *ninja star* from the category *A*



*Weapons You Throw* --the word was on the tip of their tongues; but, it didn't quite come to mind. This last comment in particular points to the actual intent of the test: to find out what kinds of words were likely to be learned incidentally from playing the game. Would words that induced vivid visual or auditory imagery be remembered? Or, perhaps it would be words in certain categories. In the case of *ninja star*, the Japanese word *shuriken* (literally, hand-hidden-sword) was no doubt well known to these students, as were the words *ninja* and *star*. All these words carry a good deal of visual imagery and familiarity. While they were playing the quiz game, I noticed that many groups were very interested and excited at learning this new English word—even though it is derived from Japanese. Many groups of students in the following week did list *ninja star* as a word they had learned.

Students also learned new words in the categories of animals, planets, chemical elements, and song titles. *Pluto*, *dragonfly*, *hornet*, *silicon*, *nitrogen*, and *potassium* appear to be genuinely newly learned words for many students.

These results suggest that strong visual imagery, previously known words in new combinations, and words and concepts that are interesting to learn because of personal preferences, all contribute to making words memorable. No new words seemed to have been learned in the categories of *Words ending in -zy*, *Slang Words for Vomit*, or *Slang Words for Money*, which I thought might have some personal appeal to some people.

While a small number of new words seemed to have been learned in the game—at least for a week, the spelling of the words was usually not learned. The letters “l” and “r” were especially often confused, a typical problem for Japanese learners of English; for example, *siricon* for *silicon*, *prikan* for *pelican*, *sperial* for *Superior*. “R”s were also often either dropped or added, as in *Virnus* for *Venus*, *Nepturn* for *Neptune*, and *honet* for *hornet*. Compounding the difficulties is that English words often have particularly devious spelling in relation to pronunciation, and many need to be learned by rote, along with many rules. It is thus easy to sympathize with an EFL student who writes *oqqupation*.

Japanese students whose native language typically has a consonant-vowel-consonant-vowel pronunciation pattern also have difficulties with English consonants in pairs, producing errors like *hydorogen* for *hydrogen*, *doragon* for *dragon*, and *dorufin* for *dolphin*. The opposite phenomenon also occurs, an inadvertent dropping of vowels. Knowing that Japanese words always end with a vowel, except for words ending with *n*, and English words

seldom end with a vowel, and often are spelled with combinations of consonants, Japanese speakers often omit English vowels. I have frequently heard *Toronto* as *Toront*, *Orlando* as *Orland*, and *San Francisco* as *San Francisc* --and in this study, *Pluto* is spelled *prute* and *Proot*, *wallabee* becomes *wlabee*, and *cheetah*, *chter*.

To remember the spelling of words, learners need to look closely at them, and have repeated exposure to many words to start to understand how the English spelling system works. The “*Look, Cover, Write, Check*” or, even better, the “*Look, say, cover, write and check*” methods are commonly used for teaching spelling to native English speaking (NES) primary school children. Considering these difficulties, I told the students not to worry about the spelling during this test, so that they would not hesitate to write a word they might have learned in fear or embarrassment of misspelling it.

In foreign language learning, incidental learning is quite highly regarded. Maruyama (1995) polled 22 high school teachers in Japan, asking, “*Do you agree with the hypothesis that vocabulary is best acquired (incidentally and effortlessly) through reading?*” 95.5% of the respondents said *yes*, with the remaining saying that the most important factor in vocabulary growth is *television*. Strangely, considering that the visual information would surely help learners understand the meaning of much of the vocabulary and grammar, as many as 27% of those teachers thought reading comic books would not help enlarge one’s vocabulary, while 31.8% had no opinion and 41.0% thought that it would help. I assume this result reflects a cultural bias against comic books and manga as something only children and illiterate or frivolous adults should read, and a professional bias against learning as “fun,” if comics are thought of as lightweight entertainment compared to high-minded, non-illustrated literature.

Then again, there could be some validity in the notion that too much of a relaxed atmosphere works against remembering. Gnoinska (1998) found that words printed on blue or red cards were remembered the best, while those written on green, which was most students’ favorite color, had the worst results. Gnoinska suggests “Its relaxing qualities could have had a distracting influence on students.” Similarly, the students seemed to enjoy playing my game, in a relaxed atmosphere, but as the results indicate, little vocabulary learning seemed to have taken place.

In a previous article (Klinger 2000), I reported the similarly poor outcome of



incidental learning in a card game using pictures accompanying sentences; but, also discussed the strong influences of visual material on memory. Despite the apparent low return on the time spent on activities which seem more fun and frivolous than serious, there are many benefits from using speaking activities, which I discussed in Klinger (1999), such as increasing confidence and motivation, and, by the manipulation of words and grammar, helping learners make sense of what has been studied academically in textbooks. In Klinger (1996), I discussed the merits of using many and varied techniques that focus sometimes on form, such as learning the rules of language, and sometimes on meaning, such as in communicative activities, and using techniques that appeal to the whole brain, especially creative activities in interactive social situations that arouse interest and attention.

This study took place in 2002; in 2003, I did a second study, with new classes of freshmen, who I asked to go on the internet, to a site with a list I had prepared of what I thought might be unknown vocabulary, and to check any new words. Thus, the 2003 students thus had a little more exposure to the new words. I will report on the result of incidental learning from that study, comparing them to this 2002 study, and also discuss what words were unknown to different groups of students majoring in Engineering, Environmental Science, Human Cultures, and Nursing, in *Part II* in next year's journal.

The quiz game, which I developed referring to several sources of lists and categories (Ash 2000, Ash 2000b, Endless Games 1998, McWhirter 1999, and various internet sources), is included in this report. Also included are typed reproductions of the handwritten test papers submitted from two classes of Engineering majors.

Ash, Russell. (2000). *Factastic Book of 1001 Lists*. DK Publishing.

Ash, Russell. (2000b). *Top 10 of Everything*. DK Publishing.

Endless Games. (1998). *The Family Feud*. (board game)

Gnoinska, Anna. (1998). Teaching Vocabulary in Colour. *English Teaching Forum*, 36 (3).

<http://exchanges.state.gov/forum/vols/vol36/no3/p12.htm>

Klinger, Walter. (2000). Effects Of Pictures On Memory & Learning. *Academic Reports of The University Center for Intercultural Education, The University of Shiga Prefecture*, 5, 67-86.

<http://www2.ice.usp.ac.jp/wklinger/QA/articles/kiyou2000/kiyou2000.html>

Klinger, Walter. (1999). Unrehearsed Speaking Activities for Language Learning. *Academic Reports of The University Center for Intercultural Education, The University of Shiga Prefecture*, 4, 79-98.

<http://www2.ice.usp.ac.jp/wklinger/QA/articles/kiyou99/k99speak.html>

Klinger, Walter. (1996). Turning Language Studied Into Language Learned: Considering How The Brain Processes Information. *Academic Reports of The University Center for Intercultural Education, The University of Shiga Prefecture*, 1, 65-78. <http://www2.ice.usp.ac.jp/wklinger/QA/articles/kiyou96/k96turn.htm>

Maruyama, Fukuji. (1995). Expanding Vocabulary Through Reading. *English Teaching Forum*, 33 (4). <http://exchanges.state.gov/forum/vols/vol33/no4/p36.htm>

McWhirter, Norris. (1999). *Norris McWhirter's Book of Millennium Records*. London: Virgin.

Thanks also to Karen and Joe, Pat and Mike, Judy and Dave, for trying out the game with me and providing good answers to the categories.

The game included in this report is somewhat revised from the one the 2002 students played. *Did you finish your homework?* was removed from *Parents might say this to their children before they go to sleep*, after I was advised that bedtime would be much too late to ask that question. It turned out to be a memorable phrase for some students, nonetheless.

### School of Engineering Class #1 24 papers (+ 4 blank papers):

|                                                                                                          |                                                                                                                                                   |                                                                                                                    |                                                                                                         |                                                                                                                                             |                                                                                                                                 |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| oxygen<br>kangaroo<br><br>(crossed out:<br>cat, crazy, cool,<br>good-by)                                 | oxygen<br>nitrogen<br>hydrogen<br>cheater                                                                                                         | ninja star<br>bee<br>wolf<br>skank                                                                                 | security guard<br>silicon<br>mars jupiter<br>teata<br>Every little thing<br>she is woman.               | hand grenade<br>cheeter,<br>falcon                                                                                                          | Virnus<br>dragon fly                                                                                                            |
| dragonfly<br>wolf                                                                                        | Jupiter                                                                                                                                           | N2<br>Si                                                                                                           | Pluto honet<br>dragon fly                                                                               | every little things                                                                                                                         | Every little thing                                                                                                              |
| spiar oxygen<br>moon marcury<br>jupiter clazy<br>bark wave his tail<br>Beatles                           | spear Mercury<br>Mars Uranus<br>eagle dragon fly<br>No parking<br>check brow                                                                      | oxigen nitrogen<br>hydrogen carbon<br>microscope<br>marth Saturn<br>cheater kaspi                                  | hydrogen<br>silicon<br>kangaroo<br><br>Have you finished<br>homework?                                   | bow oxigen<br>nitrogen hidrogen<br>marth prute<br>Jupiter cheater<br>bee crazy<br>bit kaspi                                                 | ninja star<br>catapila honet<br>cobra wolf<br>skank<br>bowwerow                                                                 |
| security guard<br>Si jupiter<br>no smoking<br>crazy<br>~scope size<br>Every little thing<br>she is woman | spear oxident<br>carbon oxidents<br>moon marcury<br>mars eagle<br>dragon fly<br>shiba koge<br>lazy crazy<br>スヘリオル湖 エリ-湖<br>Beatles<br>Mraia Carry | Ninja star<br>Hydrogen<br>Nepturn<br>Dragon fly<br>kangaroo<br>ignore crazy<br>check<br><br>to say "Good-<br>bye". | dinamite<br>fireman<br>corbon marze<br>cow scank<br>kangaroo crazy<br>Every little thing<br>she is girl | gun thord<br>ninja star<br>policeman<br>saraliman<br>ox earth<br>sun bee<br>condor human<br>horse kangaroo<br>fine lazy 1\$<br>good-by kiss | spear<br>hand grenade<br>Proot Mars<br>dragon fly<br>No parking<br>thermometer<br>check<br><br>Did you finish<br>your homework? |

### School of Engineering Class #2 48 papers (blank papers: 0):

|                                                    |                                                                 |                               |                    |                                      |                            |
|----------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|-------------------------------|--------------------|--------------------------------------|----------------------------|
| I love you.<br>Every Little Thing<br>She Loves You | security policeman<br>Elton John<br>She love you<br>Maria Carry | oxygen Jupitar<br>Misigan ery | Every Little Thing | ninja star<br>dingo coala<br>Ontalio | ninja stars<br>doragon fly |
|                                                    |                                                                 |                               |                    |                                      |                            |



|                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |                                                                                                                                                                        |                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                            |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| boomelan<br>low Iron<br>Sutan<br>doragon fly<br>mink wlabee                                                                                                                                                                                                                                           | Ninja stars<br>Oxygen- Saturn<br>dragon fly<br>superior<br>She loves me                                                                                                | ningya star<br>oxin Mars<br>bills<br>Every Little thing<br>She loves you                                                                                                      | Ninja stars<br>oxygen hydrogen<br>Mars dragon fly<br>she loves you                                                                                                                                                               | hand grenade<br>hydrogen oxygen<br>carbon pigeon<br>dragonfly<br>cozy                                                                                                                       | nepturn<br>cheeter condol<br>don't parking<br>crazy                                                                                                                                                        |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |                                                                                                                                                                        |                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                            |
| Iron Mars<br>Jupiter Uranus<br>dragon fly<br>manumal<br>mink walabee                                                                                                                                                                                                                                  | boom meran<br>iron mercury<br>urnes prikan<br>tail wave bits<br>Elie sperial                                                                                           | axe garman<br>silicon vinus<br>gazel pijon<br>falcon bee<br>hyena fuzzy<br>fantastic patient                                                                                  | ninja star<br>security gard<br>carbon hydrogen<br>neon dragonfly<br>bee<br>tasmaniandevil<br>taxi                                                                                                                                | gardman Oxygen<br>Jupiter Neptune<br>fox<br>see you tomorrow.<br>I love you<br>Every little thing<br>she loves you                                                                          | gard man silicon<br>vinus gazel<br>bee wolf rat<br>bad boy<br>fuzzy fantastic<br>patient                                                                                                                   |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |                                                                                                                                                                        |                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                            |
| ninja star dart<br>spier<br>security gard<br>iron doragon fly<br>bee<br>tasmanian-devil<br>walabee<br>screem taxi                                                                                                                                                                                     | ninjya stars<br>spiar oxin<br>mars Marqury<br>doragon fly<br>bills patient<br>mask<br>Every Little thing<br>She loves you                                              | security guard<br>speed<br>I love you<br>V sign<br>cry<br>BEATLES<br>Every little Thing<br>She loves you                                                                      | siricon oxigene<br>Neptune Marculy<br>pision eager<br>wolf coara<br>100\$ patient<br>barcode<br>I love you.<br>Erie<br>the West side story                                                                                       | grenade Neon<br>silicon Neptune<br>eagle goat<br>wolf wallabe<br>broadcast<br>1,000 yen<br>patient price<br>she loves you<br>greatest hits                                                  | siricon chirter<br>Doragon Fly<br>cozy<br>sweet dream.<br>Elly Billy Joel<br>she loves you<br>Forest Gump<br>My girl                                                                                       |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |                                                                                                                                                                        |                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                            |
| sarvel oxygen<br>Hydrogen helium<br>Argon Satan<br>Mars Vinus<br>Condor noe<br>kangarue satellite<br>Don't stop<br>Be quiet<br>barometer<br>crazy dezy<br>Barcord size<br>good-bye<br>come on<br>catche the taxi<br>misigan huron<br>Elton John<br>Elvis Presly<br>Every little sing<br>she loves you | AX<br>NINJA star<br>dart spier<br>boomrun<br>security gard<br>forest watcher<br>Iron cheater<br>bat bee fly<br>traffic signal<br>map gun<br>crazy blood<br>dark scream | weapon<br>oqqupation<br>Gardman<br>Hydrogen<br>Helium Neion<br>silicon calcium<br>Mars Neptune<br>pesion Albartnoss<br>hyena hound<br>fuzzy cool<br>fantastic<br>Elie Sperial | oxygen<br>Hydrogen<br>Satan Mars<br>cheatar kanga<br>Don't walk<br>barometer<br>satellite<br>Barcord size<br>good-bye<br>come on<br>catch the taxi<br>Misigan Huron<br>Elton Jon<br>Elvis<br>Every little thing<br>she loves you | hydrogen<br>oxygen vinus<br>Jupitar Mars<br>cheater condol<br>kangoro quiet<br>satellite price<br>size come on!<br>Misigan Superior<br>Every little thing<br>she loves you.<br>My fair lady | low 弓<br>chemistry<br>oxygon<br>dragon flyt<br>dorufin<br>temperture<br>cash special<br>gorvious<br>cry greet<br>"Have you<br>finished the<br>homework?"<br>I will get up at<br>seven.<br>Speriork Micigon |

|                  |                    |                    |                  |                    |                  |
|------------------|--------------------|--------------------|------------------|--------------------|------------------|
| ninja star       | spiar              | ninja star         | grenade          | Mars Neptune       | ninjabumeran     |
| dart spier       | ninja star         | spioer AX          | siricon Neptune  | chiter farcon      | lanser           |
| ax boomerun      | boomrun            | boomeran           | cheter albatoros | condor             | Oxygen           |
| security gard    | security urdman    | security guard     | eagle gout       | doragon fly        | Hydrogen         |
| forest watcher   | forest watcher     | Forest watcher     | wolf cow         | fox warabe         | Mars chter       |
| carbon           | carbon             | carbon             | coara            | I love you.        | dragonfly        |
| hydrogen         | Hydrogen           | hydrogen           | barometer        | Do you finish      | bee ignore       |
| iron cheater     | Iron cheater       | Neon iron          | speedmeter       | homework?          | satellite clazy  |
| bee fly          | kangroo            | cheetar            | one dollor       | Elly Speriol       | umbranse         |
| tasmanian devil  | crzy blood         | bee fly            | patient bite     | Micigan            | Eri Misigan      |
| crazy scream     | sqream             | byson waruby       | くしやみする           | Ontario            | Speriol Oscar    |
| taxi             |                    | blood screaming    | I love you       |                    |                  |
|                  |                    |                    |                  |                    |                  |
| siricon          | security gardman   | secruty gard       | grenade siricon  | spare silicon      | allow ninja star |
| dragonfly cozy   | mars Jupiter       | Jupiter sparrow    | neputure eagle   | Mars cheter        | element carbon   |
| good sweet dream | pigen condol       | taco mater         | earaby kangare   | pelican dragon fly | condol           |
| Billy Joel       | Every little thing | Eary               | speed meter      | coyote bill        | cow family       |
| she loves you    | she loves New York | Every little thing | ordio            | country of origin  | baison beaber    |
|                  |                    | she loves you      |                  | fiber content      |                  |

### Lists (Guinness) Card Game: How to Play:

Form 2 teams. (One person on one team is ok.)

You have a deck of Lists Cards. Each team takes half of the cards.

Get a piece of paper to keep score.

Team A looks at a card and reads the question to Team B.

Team B get a point for each correct answer.

Team B takes a card and asks Team A the question.

Continue until all the cards have been played.

The team that scores the most points is the winner!



## You can do this at the beach

- \* barbeque
- \* build a sand castle 砂の城
- \* collect shells 貝殻を拾う
- \* dive \* fish
- \* jet ski \* parasail
- \* play catch  
キャッチボールをする
- \* play frisbee フリスビー
- \* play volleyball
- \* read \* scuba dive
- \* surf
- \* suntan 日焼け \* swim
- \* "blindfolded 目隠しされた  
watermelon breaking (splitting)  
game" すいかわり

## You can open this.

E.g., open a door  
or a window.

- \* book \* box \* bottle
- \* can \* curtain
- \* car trunk / hood ボンネット
- \* drawer 引き出し
- \* gift / present
- \* jar
- \* letter 手紙 / mail 郵便物
- \* purse ハンドバッグ
- \* refrigerator 冷蔵庫
- \* wallet 財布
- \* your mouth \* your mind
- \* your heart \* zipper

## THIS IS HARD TO EAT WITH CHOPSTICKS 箸

- \* breakfast cereal
- \* corn flakes
- \* corn
- \* chawan mushi
- \* curry rice
- \* custard / pudding
- \* egg \* green peas
- \* jelly / gelatin
- \* ice cream
- \* "Pocky" chocolate sticks
- \* soup \* toast
- \* tofu
- \* tomato \* yoghurt

## A reason to have a party.

- \* anniversary
- \* birthday
- \* baby shower 出産前の母親に  
ベビー用品を贈るパーティ
- \* celebrate an  
achievement 成就
- \* end of school
- \* engagement 婚約
- \* graduation 卒業
- \* holiday (Christmas,  
New Year, Valentine, etc.)
- \* job promotion 促進
- \* retirement 退職
- \* wedding 結婚式
- \* winning a contest

## food that is round in shape, like pizza (not ball shape)

- \* biscuit \* cake
- \* cookie \* crab カニ
- \* cracker \* donut
- \* fried egg
- \* hamburger
- \* mochi
- \* omelet \* pie
- \* pancake / hotcake /  
flapjack
- \* pita bread
- \* potato chips
- \* senbei
- \* sliced sushi / sliced  
hardboiled egg / (other  
sliced food)
- \* tart

## A NOISE YOU CAN HEAR IN A 幽霊のでる HAUNTED HOUSE.

- \* boo
- \* creak キーキーいう音
- \* doors closing
- \* footsteps 足音
- \* groan うなり
- \* howl ほえる
- \* laugh
- \* moan うめき声
- \* rattle ガタガタ
- \* scratch 引っ掻く
- \* scream / shriek 金切り声
- \* shout / yell 大声を上げる
- \* shutters 雨戸 banging
- \* wind whistling ビューと鳴る

**you wave your hand**

手を振る

**when you do this**

- \* saying hello
- \* saying goodbye
- \* saying "enough"
- \* saying "no"
- \* dancing (*hula, awa odori, etc.*)
- \* getting someone's attention
- \* catching (*hail, flag*)  
呼び止める  
a taxi (*a cab*)
- \* directing traffic  
交通整理をする
- \* shooing away  
シーッと追い払う  
an insect or a person

**THIS PLACE MIGHT  
HAVE A SPECIAL  
AREA FOR  
CHILDREN**

- \* amusement park 遊園地
- \* bookstore
- \* dental clinic
- \* department store
- \* shoe store
- \* clothing store
- \* (*other store*)
- \* drive-in theater  
ドライブイン映画劇場
- \* hospital
- \* library
- \* park 公園
- \* swimming pool
- \* zoo

**SOMETHING IN AN  
AMBULANCE** 救急車

- \* bandages ほうたい
- \* blood \* curtains
- \* defibrillator 心臓細動除去器
- \* gauze ガーゼ
- \* IV 静脈注射の bottle
- \* monitor
- \* oxygen 酸素
- \* paramedic 医療補助員
- \* patient 患者 / medicine
- \* sheets / blankets
- \* stethoscope 聴診器
- \* stretcher/gurney 担架

**A sign** 標識 **that people****often ignore** 無視する

- \* Do Not Enter
- \* Don't Walk
- \* Keep Off the Grass  
芝生に入るな
- \* No Eating in the Store
- \* No Parking
- \* No Smoking
- \* No Trespassing 立入禁止
- \* Quiet
- \* Slow / Reduce Speed
- \* Speed Limit
- \* Stop
- \* Turn Off After Use
- \* Yield ゆずれ, 譲れ

**A word ending with the letters**

"zy," e.g., "lazy" なまける.

- buzzy 酔っぱらっている
- cozy 居心地のよい
- crazy 気のくるった
- ditzy 狂った
- dizzy 目まいがして
- doozy 凄い物
- fizzy シューシュー泡立つ
- frenzy 狂乱
- fuzzy ぼやけた
- gauzy 薄く透き通る
- glazy 目がどんよりした
- hazy もやのかかった
- jazzy 活気のある
- ritzy 豪勢な
- sleazy だらしない
- tizzy 混乱状態
- woozy 頭がぼんやりして

**INFORMATION**
**ON THE TAG OF NEW  
CLOTHES. E.G., ON A  
SHIRT OR PANTS.**

- \* bar code バーコード
- \* brand name
- \* country of origin 製造
- \* fiber content 繊維含有率
- \* maker (manufacturer)
- \* price
- \* size
- \* washing instructions  
洗濯の注意



## an animal in the weasel family

(Mustelidae イタチ科).

- \* badger アナグマ
- \* ermine シロテン、オコジョ
- \* ferret シロイタチ
- \* fisher フィッシャー
- \* marten テン
- \* mink ミンク
- \* otter カワウソ、らっこ
- \* polecat ケナガイタチ
- \* sable クロテン
- \* skunk スカンク
- \* stoat シロテン
- \* wolverine クズリ

## A MAMMAL 哺乳類 STARTING WITH THE LETTER "C"

- \* camel ラクダ
- \* capuchin オマキザル
- \* capybara カピバラ
- \* caracal カラカル
- \* caribou カリブー
- \* cat
- \* chamois シャモア
- \* cheetah
- \* chimpanzee チンパンジー
- \* chinchilla チンチラ
- \* chipmunk シマリス
- \* civet ジャコウネコ
- \* coatimundi, coati ハナグマ
- \* cougar
- \* cow
- \* coyote コヨーテ

**a** 有袋類

## marsupial

- \* bandicoot / bilby バンディクート
- \* cuscus クスクス
- \* kangaroo
- \* koala コアラ
- \* opossum/possum オポッサム
- \* Sminthopsis スミンソプシス
- \* Tasmanian Devil フクロアナグマ
- \* Tasmanian Wolf フクロオオカミ
- \* wallaby ワラビー
- \* wombat ウォンバット

## An occupation 職業 that might be very lonely

- \* astronaut 宇宙飛行士
- \* astronomer 天文学者
- \* forest ranger 山林監視人
- \* judge 審査員
- \* late-shift 遅番 store clerk
- \* lighthouse keeper 灯台守
- \* mortician 葬儀屋
- \* night watchman 夜警員
- \* security guard 警備員
- \* truck driver



- \* bolo / bola 鉄の玉のついた投げなわ (獣の足に投げつけてからませる)
- \* boomerang ブーメラン
- \* dart 投げ矢
- \* hammer
- \* hand grenade 手りゅう弾
- \* harpoon 鉋
- \* knife
- \* lasso 投げ縄
- \* Molotov cocktail / fire bomb 火炎瓶
- \* net
- \* ninja stars 手裏剣
- \* rock / stone
- \* spear / lance / javelin 槍
- \* tomahawk 石斧

## A sign at the beach:

"No..."

what?!"

- \* No Alcohol
- \* No B-B-Q
- \* No Fireworks 花火
- \* No Fishing
- \* No Food
- \* No Glass Bottles
- \* No Nudity 裸禁止
- \* No Open Fires
- \* No Pets
- \* No Swimming

*In what countries  
are the largest  
sports stadiums?*

- \* Czech Republic (Strahov. Prague. Capacity 収容力: 240,000)
- \* Brazil (Maracana. Rio de Janeiro. 205,000)
- \* North Korea (Rungrado. Pyongyang. 150,000)
- \* Iran (National. Azadi. 128,000)
- \* Portugal (Luz. Lisbon. 120,000)
- \* Indonesia (Senayan. Jakarta. 120,000)
- \* India (Yuba Bharati. Calcutta. 120,000)

**THE COUNTRIES  
WITH THE HIGHEST  
PERCENTAGE OF  
PEOPLE  
WORKING AS  
FARMERS**

- \* Bhutan 93.9%
- \* Nepal 93.3%
- \* Burkina 92.4%
- \* Rwanda 91.2%
- \* Burundi 90.7%
- \* Niger 89.2%
- \* Mali 89.2%

**A ruler 定規 measures  
length 長さ. Name other  
measuring instruments.**

- \* altimeter 高度計 (altitude)
- \* anemometer 風速計 (wind)
- \* barometer 気圧計 (air pressure)
- \* calendar (days & months)
- \* clock (hours, minutes, seconds)
- \* compass 磁石 (directions)
- \* hygrometer 湿度計 (specific gravity)
- \* odometer 積算計
- \* pedometer 歩数計
- \* protractor 分度器 (angles)
- \* scales 秤 (weight)
- \* seismometer 震度計 (earthquakes)
- \* speedometer 速度計 (vehicle speed)
- \* thermometer 温度計 (temperature)
- \* voltmeter 電圧計 (electricity)

**a Beatles song  
starting with  
the letter "E"**

- \* Eight Days A Week
- \* Eleanor Rigby
- \* Every Little Thing
- \* Everybody's Got Something To Hide Except For Me And My Monkey
- \* Everybody's Trying To Be My Baby

**The Beatles have sold  
164 million albums in  
the USA. What are the  
other top selling artists?**

- \* LED ZEPPELIN 105 million
- \* GARTH BROOKS 105m
- \* ELVIS PRESLEY 103m
- \* EAGLES 86 m
- \* BILLY JOEL 77 m
- \* PINK FLOYD 73 m
- \* BARBRA STREISAND 70 m
- \* ELTON JOHN 67 m
- \* AEROSMITH 63 m
- \* ROLLING STONES 63 m

**WHAT SLANG**

**WORD 俗語**

**MEANS TO**

**VOMIT 吐き出す**

- \* barf
- \* blow beets/ blow chunks
- \* heave
- \* hurl
- \* puke
- \* ralph \* retch \* rolph
- \* spew
- \* throw up
- \* toss/blow/lose your cookies
- \* toss/blow/lose your breakfast/lunch
- \* upchuck \* woof



Countries that use  
nuclear power 原子力  
the most for electricity  
generation (as of 2002)

- \* Lithuania 80.1%
- \* France 78.0%
- \* Belgium 57.3%
- \* Slovakia 54.7%
- \* Bulgaria 47.3%
- \* Ukraine 45.7%
- \* Sweden 45.7%
- \* Slovenia 40.7%
- \* Armenia 40.5%
- \* Switzerland 39.5%
- \* Korea 38.6%
- \* Hungary 36.1%
- \* Japan 34.5%
- \* Germany 29.9%

In the USA, there are  
**805** televisions per  
1,000 population.  
Name the other top  
TV~owning countries.

- \* Monaco. 750 per 1,000 people.
- \* Malta. 749.
- \* Canada. 714.
- \* El Salvador. 689.
- \* Japan. 684.
- \* Oman. 657.
- \* France. 589.
- \* Denmark. 574.

**Cattle 畜牛 & oxen 雄牛**  
(cows & bulls) belong to the  
family Bovidae ウシ科.  
Name other members.

- \* antelope レイヨウ (bushbuck, rhebok, springbok, nyala, eland, oryx オリックス, wildebeest/gnu ヌー, nilgai, kudu, bongo, topi, duiker, chiru, chamois シャモア)
- \* banteng バンテン
- \* buffalo, bison 水牛、バッファロー
- \* gazelle ガゼル
- \* goat ヤギ
- \* ibex アイベックス
- \* impala インパラ
- \* muskox ジャコウウシ
- \* serow カモシカ
- \* sheep ヒツジ \* yak ヤク
- \* zebu コブウシ

SOMETHING  
BEAUTIFUL  
YOU CAN SEE  
IN THE SKY

- \* birds \* butterflies
- \* clouds \* kite 凧
- \* moon
- \* Northern Lights / aurora 北極光、オーロラ
- \* rainbow
- \* shooting star, meteor 流れ星 \* stars
- \* sunrise 日の出
- \* sunset 日暮れ

WHAT COUNTRY

STARTS WITH

THE LETTER

"F" ?

- \* Fiji
- \* Finland
- \* France

a dog does this  
to tell you his  
feelings.

- \* barks ほえる
- \* bites かむ
- \* cowers 縮こまる
- \* growls うなる
- \* jumps up on you
- \* licks your hand / face
- \* pants 息を弾ませる
- \* puts his paw 足 on you
- \* wags his tail 尾をふる
- \* whimpers クンクン鳴く
- \* whines めそめそ愚痴を言う

## countries with the highest recorded 記されている temperatures

- \* Mali (Arouane) 54.4C
- \* Iran (Abadan) 52.8C
- \* Australia (Cloncurry) 52.8C
- \* Sudan (Wadi Halfa) 52.8C
- \* Egypt (Aswan) 51.1C
- \* Algeria (Fort Flatters) 51.1C

## THE FASTEST ANIMALS IN THE SEA

- \* Sailfish バショウカジキ 110km/h
- \* Swordfish メカジキ 100km/h
- \* Marlin マカジキ 80km/h
- \* Tuna (Bluefin /Yellowfin)  
70-74 km/h
- \* Albacore ビンナガマグロ
- \* Bonito カツオ 65-70 km/h
- \* Wahoo (Acanthocybium solandri)  
65-70 km/h カマスサワラ

## COUNTRIES WITH THE HIGHEST RECORDED 記されている

## RAINFALL

- \* India (Cherrapunji) 10,797mm
- \* Columbia (Andagoya) 7,137mm
- \* Samoa (Pago Pago) 4,928mm
- \* Burma (Moulmein) 4,826mm
- \* Indonesia (Tabing) 4,445mm
- \* Liberia (Monrovia) 4,420mm

## the fastest birds

- \* Peregrine Falcon  
ハヤブサ diving=298 km/h
- \* Golden Eagle  
イヌワシ 240 km/h
- \* Spine-tailed Swift  
アマツバメ 171 km/h
- \* Racing Pigeon  
レース鳩 177 km/h
- \* Frigate bird 軍艦鳥 153 km/h
- \* Spur-winged Goose  
ツメバガン 142 km/h
- \* Red-breasted Merganser  
ウミアイサ 129 km/h

## THE FASTEST LAND ANIMALS

- \* cheetah 105km/h
- \* antelope (Pronghorn)  
レイヨウ 89 km/h
- \* gazelle ガゼル (Mongolian,  
Thomson's) 76-80km/h
- \* springbok  
スプリングボック 80km/h
- \* lion 80 km/h
- \* wildebeest / gnu  
ヌー 80 km/h

## MAMMALS ほ乳動物 WITH THE LONGEST TAILS

- \* elephant (Asian 150cm,  
African 130cm)
- \* leopard ヒョウ 140cm
- \* buffalo バッファロー  
(African) 110cm
- \* giraffe キリン 110cm
- \* kangaroo (Red) 110cm
- \* langur ハヌマンラングール  
110cm



# THE FASTEST INSECTS

- \* dragonfly トンボ 32 km/h
- \* hornet スズメバチ 21 km/h
- \* bee ミツバチ 18 km/h
- \* horsefly  
ウマバエ、アブ 14 km/h

## the birds with the largest wingspan 翼幅

- \* stork コウノトリ (Marabou) 4m
- \* albatross アホウドリ 3.7m
- \* swan ハクチョウ (Trumpeter, Mute, Whooper) 3.1-3.4m
- \* pelican ペリカン (Grey) 3.1m
- \* condor コンドル (California) 3.1m
- \* vulture ハゲタカ (Black) 3.1m
- \* bustard ノガン (Great, Kori)

# THE LONGEST SNAKES

- \* python ニシキヘビ (Reticulated) 10.7m
- \* anaconda アナコンダ 8.5m
- \* cobra コブラ (King) 5.8m
- \* boa constrictor 王ヘビ, ボアコンストリクター 4.9m
- \* bushmaster  
ブッシュマスター 3.7m

# THE PLANETS

惑星

- \* Mercury 水星
- \* Venus 金星
- \* Earth
- \* Mars 火星
- \* Jupiter 木星
- \* Saturn 土星
- \* Uranus 天王星
- \* Neptune 海王星
- \* Pluto 冥(めい)王星

## the most common elements 元素

in the universe 宇宙

- \* hydrogen 水素 74%
- \* helium ヘリウム 24%
- \* oxygen 酸素 1%
- \* carbon 炭素 0.5%
- \* neon ネオン 0.14%
- \* iron 鉄 0.12%
- \* nitrogen ちっ素 0.10%

## the basic elements

元素 of rocks

- \* oxygen 酸素 46.5%
- \* silicon ケイ素 28.9%
- \* aluminum アルミニウム 8.3%
- \* iron 鉄 4.8%
- \* calcium カルシウム 4.1%
- \* potassium カリウム 2.4%
- \* sodium ナトリウム 2.3%

## Things in a medicine chest

救急箱

- \* antacid 制酸薬
- \* anti-histamine 抗ヒスタミン剤
- \* aspirin /pain killer 鎮痛剤
- \* bandages
- \* cold remedy 風邪治療薬
- \* diarrhea 下痢 medicine
- \* disinfectant 消毒薬
- \* first aid cream
- \* laxative 下剤
- \* liniment 塗布薬
- \* scissors はさみ
- \* thermometer 温度計
- \* vitamins

## A FOUR-LEGGED ANIMAL THAT LIVES IN THE WATER.

- \* alligator アメリカワニ
- \* beaver ビーバー
- \* crocodile ワニ
- \* frog / toad ヒキガエル
- \* hippopotamus カバ
- \* otter カワウソ、らっこ
- \* platypus カモノハシ
- \* turtle 亀

Parents might say  
this to their children  
at bedtime.

- \* Good night.
- \* I love you.
- \* Sweet dreams.
- \* Pleasant dreams.
- \* Sleep tight.
- \* Sleep well.
- \* Did you set your alarm clock?
- \* Did you brush your teeth?
- \* I'll wake you up (at 7:00/ in the morning/ etc).
- \* Go to sleep!
- \* Stay in bed!

this is used to collect

## W E A T H E R I N F O R M A T I O N

- \* anemometer 風速計
- \* balloon
- \* barometer 気圧計
- \* radar
- \* rain gauge \*géid<sub>5</sub> 雨量計
- \* satellite 衛星
- \* thermometer 温度計
- \* weather vane 風向計
- \* wind sock 円錐状吹き流し

## Where are things in alphabetical order ABC 順 ?

- \* address book
- \* atlas 地図帳 index 索引
- \* book index
- \* cookbook index
- \* dictionary
- \* encyclopedia 百科事典
- \* library
- \* office directory
- \* stock market 株式市場 list
- \* student list
- \* telephone book

## When you go swimming, this might wash off

洗い落とす

- \* anti-perspirant 制汗剤
- \* bandage/bandaïd 包帯
- \* deodorant デオドラント、脱臭剤
- \* dirt / sand
- \* makeup /cosmetics 化粧品
- \* perfume 香水
- \* suntan lotion / sun-tan oil / sunblock 日焼け(止め)ローション
- \* insect repellent 虫よけ
- \* removable tattoo 入れ墨



When you **do** this, you  
**cover** part of your face  
with your hand.

- \* **blow** your nose 鼻をかむ
- \* **brush** your teeth
- \* **burp** げっぷをする
- \* **cough** せきをする
- \* **pick** ほじる your nose
- \* **pick** ほじる your teeth
- \* **pluck** your eyebrows まゆを抜く
- \* **put in** contact lenses
- \* **put on** / take off makeup
- \* **shade** your eyes from the sun
- \* **shave** ひげそり
- \* **smell** a bad smell
- \* **sneeze** くしゃみをする
- \* **take** an eye test 視力検査を受ける
- \* **think** \* **throw** a kiss 投げキスをする
- \* **wash** / wipe your face
- \* **whisper** ひそひそ話す
- \* **yawn** あくびをする

A **word** that means  
about the same as  
"wonderful" or  
"excellent" or "great"

- \* amazing おどろくべき
- \* awesome 畏敬させる
- \* brilliant
- \* extraordinary 非凡な
- \* fabulous すばらしい
- \* fantastic 空想的な
- \* marvellous
- \* outstanding 抜群の
- \* stupendous とてつもない
- \* superb 豪華な
- \* superlative
- \* [slang 俗語] ace / cool / dynamite / far out / groovy / out of sight / super / sweet

**SOMETHING**  
**YOU CAN**  
**HEAR THAT IS**  
**FAR AWAY**

- \* airplane
- \* bird
- \* explosion
- \* foghorn 濃霧号笛
- \* frog
- \* gun / gunshot
- \* motorcycle gang 暴走族
- \* siren サイレン
- \* sonic boom 衝撃波音
- \* thunder 雷
- \* train
- \* waterfall

**WHEN YOU SAY**  
**GOODBYE TO**  
**SOMEONE, YOU**  
**MIGHT DO THIS.**

- \* **bow** おじぎをする
- \* **cry**
- \* **high five**  
ハイファイブをして喜び合う
- \* **hug** だきしめる
- \* **kiss**
- \* **shake hands**
- \* **slap on back** 背中を叩く
- \* **smile**
- \* **wave** 振る

**T H E**  
**G R E A T**  
**L A K E S**

五大湖

米国のカナダ国境にある五つの湖水

\* 【暗記法】頭文字を取って **HOMES**

- \* Huron
- \* Ontario
- \* Michigan
- \* Erie
- \* Superior

**Name a**  
**country**  
**beginning**  
**with the**  
**letter "V"**

- \* Vanuatu バヌアツ
- \* Vatican バチカン市国
- \* Venezuela ベネズエラ
- \* Vietnam ベトナム

When you want to take  
their picture, children  
**might do this.**

- \* cry
- \* giggle クスクス笑う
- \* hide their face 顔をそむ
- \* look away
- \* make faces 面白い顔をする
- \* make the peace sign / "V" sign
- \* move around / fidget そわそわする
- \* run away / hide
- \* smile
- \* stick out their tongue 舌を出す

**What's slang** 俗語  
**for "money"?**

- \* beans \* bills
- \* bread \* bucks
- \* cabbage \* coin
- \* dinero \* dough
- \* green \* greenback
- \* jack \* lettuce
- \* moolah
- \* simoleons
- \* buck (= \$1 bill 札)
- \* fin (= \$5 bill)
- \* ten-spot (= \$10 bill)
- \* G-note (= \$100 bill)
- \* C-note (= \$1,000 bill)
- \* plastic (= credit card)

this is on a car  
dashboard and it  
has numbers on it.

- \* clock
- \* gear indicator  
指針 (some cars)
- \* heater-air conditioner
- \* odometer 走行距離計
- \* radio / CD player
- \* speedometer 速度計
- \* tachometer  
回転速度計, タコメーター

WIND, RAIN, &  
CLOUDS USUALLY  
COME WITH A  
SUMMER STORM.  
WHAT ELSE  
MIGHT COME ?

- \* downburst 下降気流
- \* frogs
- \* hail 雹の粒
- \* humidity 湿気
- \* hurricane / typhoon
- \* lightning 電光
- \* mildew かび \* mist 霞
- \* ozone オゾン /  
negative ions 陰イオン
- \* rainbow 虹
- \* thunder 雷鳴
- \* tornado 竜巻
- \* water spout 水の上の竜巻

**teenagers might**  
**complain about this.**

- \* acne, pimples にきび
- \* chores 家庭の雑用
- \* curfew 門限
- \* everything
- \* money/allowance  
小遣い、あてがい扶持
- \* parents / adults
- \* privacy プライバシー
- \* rules
- \* school
- \* teachers
- \* homework
- \* siblings 兄弟姉妹たち

**"HORSE" BEGINS**  
**WITH THE LETTER**  
**"H". WHAT OTHER**  
**ANIMALS**  
**BEGIN WITH "H" ?**

- \* hamster ハムスター
- \* hare 野ウサギ
- \* hedgehog ハリネズミ
- \* hippopotamus カバ
- \* hog ブタ
- \* hound 猟犬
- \* human 人間
- \* hyena ハイエナ
- \* hyrax イワダヌキ



*Mozart* wrote 202

hours of music. Name

other prolific 多作の

classical composers 作曲家.

- \* Haydn ハイドン 340 hours
- \* Handel ヘンデル 303 hours
- \* Bach バッハ 175 hours
- \* Schubert  
シューベルト 134 hours
- \* Beethoven  
ベートーベン 120 hours
- \* Purcell パーセル 116 hours
- \* Verdi ベルディ 87 hours

IN WHAT  
COUNTRIES ARE  
THE WORLD'S  
LARGEST

UNIVERSITIES?

- \* France (Univ of Paris 310,000 students)
- \* India (Univ of Calcutta 300,000 & Univ of Bombay 260,000 students)
- \* Mexico (Univ of Mexico City 260,000 & Univ of Guadalajara 214,000)
- \* Argentina (Univ of Buenos Aires 206,000)
- \* Italy (U of Rome 180,000 students)

**Michael Jackson's**

**"Thriller" sold 47 million copies worldwide.**

**Name the other top selling albums.**

- \* Greatest Hits Eagles. 40m
- \* The Bodyguard  
Soundtrack. 36m.
- \* Sgt. Pepper The Beatles. 32m
- \* Come On Over  
Shania Twain. 32m
- \* Dark Side of the Moon  
Pink Floyd. 30 million.
- \* Led Zeppelin IV  
Led Zeppelin 30m
- \* Saturday Night Fever  
Soundtrack. 30 million.
- \* Music Box Mariah Carey.  
23 million.

The USA produces 550 kg of waste per person per year.

What are the other biggest garbage-producing

countries?

- \* Australia 695 kg/person
- \* New Zealand 662
- \* France 662
- \* Canada 612
- \* Norway 480
- \* Netherlands 430
- \* Denmark 430
- \* Finland 430

WHAT ANIMALS  
BELONG TO THE DOG  
(CANIDAE) FAMILY?

- \* coyote コヨーテ
- \* dingo デインゴ
- \* fox キツネ
- \* jackal ジャッカル
- \* raccoon dog たぬき
- \* wolf オオカミ

If you lived in Afghanistan, you might only live to age 42.

What other countries have low life expectancy

平均余命?

- \* Sierra Leone 41 years
- \* Guinea-Bissau 42
- \* Guinea 43
- \* Gambia 43
- \* Mali 44
- \* Ethiopia 44
- \* Angola 45
- \* Niger 45

***Titanic* won 11  
Oscar film awards  
in 1997. What other  
movies won many  
Oscars オスカー賞?**

- \* Ben-Hur ベン・ハー 1959. 11.
- \* West Side Story 1961. 10.
- \* Gigi 恋の手ほどき 1958. 9.
- \* The Last Emperor 1987. 9.
- \* The English Patient 1996
- \* Gone with the Wind  
風と共に去りぬ 1939. 8 Oscars.
- \* From Here to Eternity  
地上より永遠に 1953. 8.
- \* On the Waterfront 波止場  
1954. 8.
- \* My Fair Lady 1964. 8.

**Americans go to see a  
movie about 4 times  
a year per person.  
Name the other top  
movie-going  
countries.**

- \* Lebanon.  
35 visits per person per year.
- \* China. 12.
- \* Republic of Georgia.  
グルジア共和国 6.
- \* India. 5.
- \* Iceland. 5.
- \* Australia. 4.
- \* New Zealand. 4.
- \* Monaco. 4.

**THE CITIES WITH  
THE LARGEST  
INDOOR  
THEATERS**

- \* Beijing, China. National  
People's Congress Building Theatre.  
1959. 10,000.
- \* Perth, Australia. Perth  
Entertainment Centre. Opened 1976.  
8,003 seats.
- \* Havana, Cuba. Chaplin  
(Blanquilla). Opened 1949. 6,500 .
- \* New York, USA.  
Radio City Music Hall. Opened 1932.  
6,200+ seats.

**Greenland is the world's  
largest island, with  
2,175,597  
square kilometers.  
What are the other  
largest islands?**

- \* New Guinea 820,033 sq.km.
- \* Borneo 743,107
- \* Madagascar 587,042
- \* Baffin Island (\*in  
northern Canada) 476,068
- \* Sumatra 473,605
- \* Honshu 230,316
- \* Great Britain 229,883

**a Beatles song  
with the word  
“she”  
in the title**

- \* Ain't She Sweet
- \* I Want You (She's So  
Heavy)
- \* She Came In Through  
The Bathroom Window
- \* She Said She Said
- \* She Loves You
- \* She's A Woman
- \* She's Leaving Home

**London - New York**

is one of the busiest air routes 航空  
路 in the world, with 2.6 million  
passengers per year flying between the  
cities. What are the other busiest  
international air routes (as of 1999)?

- \* Hong Kong - Taipei 4.1m
- \* London - Paris 3.5m
- \* London - Dublin 2.5m
- \* Singapore - Kuala Lumpur  
2.3m
- \* Tokyo - Honolulu 2.3m
- \* Tokyo - Seoul 2.2m
- \* London - Amsterdam 2.2m
- \* Hong Kong - Bangkok 1.9m



## 効果的なリスニング指導法：学習者の視点

### Instructional Factors Contributing to Effective L2 Listening: The Learner's Perspective

小栗裕子

Yuko OGURI

#### 1. はじめに

コミュニケーション能力が重視される昨今、大学におけるリスニング教材も数多く出版されるようになってきた。多くの教師は、日々それらの教材を使用しながら、学習者に有効だと思われる様々な指導法を試みていると考えられる。リチャーズ & ロックハート (2000:55) は、言語の指導は教師の視点から議論されることが多く、教師がもっている信条、目標、態度、そして決心が指導方法に影響するが、それと同様に、学習者にも信条や目標、態度そして決心をもって学習に臨み、それが学習結果に影響すると述べている。

それでは、教師が日頃効果があると思いつけているリスニング(Listening Comprehension)指導法を、学習者はどのように感じているのであろうか。そして、1年間でリスニング力が伸長した者とそうでない者、また習熟度の異なる者は、特定の指導法に対する見方にどのような違いがあるのであろうか。本研究は、こうした点を学習者の視点から考察し、それらがリスニング教授法に与える示唆について論じる。

#### 2. 本研究

##### 2.1 目的

武井ら(2002)は、リスニングの学習と指導を、「音声の聞き取りに関する研究」、「内容理解に関する研究」、そして「その他」のCAI・CALL等に関する研究という3つの分野に分類している。しかし、その中で事前情報のようなプリリスニング活動の研究については述べているが、ポストリスニング活動に関しての指導法には何の言及もしていない。また、小栗(1998)は、リスニング向上に効果のある要素として、教室内でのいくつかの指導法を提案しているが、この中でプリ・ポストリスニング指導についての調査報告はしていない。

そこで、本稿は、このプリ・ポストリスニングを中心とする指導法を学習者がどのように評価しているのかを、以下の3点から調査分析する。

(1) 学習者にとって効果的な指導法とは何か。

(2) どのレベルの学習者にはどのような指導法が効果的か。

(3) 1年間で平均点以上の伸長が見られた学習者にはどの指導法が有効か。

そして、その示唆するところをリスニング指導法という観点から検討する。

## 2.2 方法

### 1) 被験者及び教材

被験者は、大学で英語を必修として学んでいる 2000/2001 年度理系 1 年生の 3 クラス 99 名からなる。この学生達のクラスは、種目別や習熟度別でなく、単に学籍簿順に割り当てられたものである。

授業は週 1 回 90 分で、毎回 40 分程、市販教材と教師手作りのポピュラーソングの穴埋めを交代で用いてリスニング指導を行い、残りの 50 分は異文化理解中心の読解用テキストを使用した。リスニングのテキストは、3 クラス共 Cubic Listening, Check In, Check Out (Kiggell & Bellars, 1999)を用いた。この教材は、その解説によれば pre-intermediate (TOEIC 300-450) レベルで、日常会話的な題材や海外旅行をした時に役立つトピックが多く、設問には絵が多用されている。この絵が学生の内容理解につながると考えた。さらに、録音されたテープは、自然な速度で場面により適度に周囲の騒音も入っており、現実に近いものになっている。これらの点がこのテキストを選択した理由である。

ポピュラーソングの穴埋めは、リスニング力伸長という点からすると十分な効果は期待できないかもしれない。しかし、学習者の英語に対する意欲を考慮した場合、興味が増すと思われ、市販教材と交代で用いた(詳細は小栗 1996、1998 参照)。

### 2) 調査方法

#### i. 聴解力テスト

リスニング力を測定するため、4 月の第 2 回目の授業中に事前テストとして JACET Basic Form A を、そして 12 月の 2 週目に事後テストとして同テストの Form B を実施した。このテストは、日本人学生を対象に作成されたもので 40 問から構成されており、所要時間は約 30 分程、テストの信頼係数は  $\alpha = 0.88$  である。結果は開拓社から送られた標準点をそのまま使用した。全体の事前テストの平均点は 47.03 点、事後テストのそれは 51.93 点で、ピアソンの相関は 0.63 であった。事後テストの結果からリスニング力の伸びた学生 51 名と伸びなかった学生 47 名の 2 つのグループに分けた。これらのグループは、分散



分析の結果、事前テストでは有意差はみられなかったが、事後テストでは有意差 ( $F_{(1, 97)} = 29.78, p < 0.001$ ) が認められた。ここで定義した伸びた学習者とは、事後テストの点 51.93 から事前テストの点 47.03 を引いた差 4.90 を指し、四捨五入して 5 点以上上昇した学生のことをいう (表 1 左側)。

さらに、習熟度別にどのような違いがあるのか比較するため、これらのグループとは別に能力別に上位群（平均点の 47 点以上）と下位群（平均点の 47 点以下）に分け、そのグループの中でも 1 年間で伸びた学習者（5 点以上）と、そうでない学習者に分けて比較分析した（表 1 右側）。各群共、4 月の段階では郡内に有意な差は見られず、それらは同じ能力のグループとみなされるが、12 月には上位群（ $F_{(1, 45)} = 28.54, p < 0.001$ ）でも、下位群（ $F_{(1, 50)} = 36.10, p < 0.001$ ）でも郡内に有意差が認められ、それらは異なったグループとみることができる。

表 1 JACET 得点

|      |      |                                   |                | 上位群<br>N=47                       |                | 下位群<br>N=52                       |                |
|------|------|-----------------------------------|----------------|-----------------------------------|----------------|-----------------------------------|----------------|
|      |      | 伸びた<br>N=51                       | 伸びなかった<br>N=48 | 伸びた<br>N=22                       | 伸びなかった<br>N=25 | 伸びた<br>N=29                       | 伸びなかった<br>N=23 |
| 4 月  | mean | 46.12                             | 48.00          | 52.59                             | 53.44          | 41.21                             | 42.09          |
|      | SD   | 7.08                              | 6.88           | 5.12                              | 3.89           | 3.53                              | 3.90           |
| 12 月 | mean | 55.71                             | 47.92          | 61.23                             | 52.28          | 51.52                             | 43.17          |
|      | SD   | 7.19                              | 6.84           | 5.48                              | 5.71           | 5.24                              | 4.37           |
| 分散分析 |      | 12 月<br>F (1, 97)=29.78 $p<0.001$ |                | 12 月<br>F (1, 45)=28.54 $p<0.001$ |                | 12 月<br>F (1, 50)=36.10 $p<0.001$ |                |

## ii. 指導法に関するアンケート項目の実施

次に、教師が日頃効果があると考えて、意識的に行っているリスニング指導法 14 項目に関する 5 段階評価による記名式アンケートを、1 年最後の授業中に実施した。以下に指導内容（学生の視点から述べたもの）とその根拠（教師の考え）を括弧内に示す。尚、アンケートの 5 段階評価とは

1 2 3 4 5

全く効果がなかった      あまりなかった      どちらともいえない      かなり効果があった      非常にあった

の基準によるものである。

1. 毎回 30～40 分リスニングがあった。  
(週に 1 度でも毎回すれば、ある程度効果があるのではと考えた)
2. リスニングの教科書と歌の穴埋めがだいたい交代であった。  
(2.2 教材の章を参照)
3. 聴く前に教科書の各問題について、どんなことをするのか説明を受けた。

(設問はすべて英語で書かれているので、クラスの中には何をやってよいのかわからない学生がいることを発見し、1度は英語の設問をそのまま読み、時には容易な単語に置き換えたり、わからないところがありそうな場合は、さらにどんなことをするのか日本語でも説明するようにした)

4. 教科書の難しいと思われる問題は、まず鉛筆を置いて聴いた。

(最初からすぐに問題に入るのではなく、全体の内容を把握した後でもう1度聴けば、より理解が深まると考えた)

5. 教科書の中の難しい問題は、2、3回聴いた。

(何度も聴くことにより、このレベルの内容はある程度理解できると思われた。この場合、簡単な内容の問いに対しては1回のみとしたが、その時は前もってこの問題は何回聴くということを英語で説明した。そうすれば、学習者は難問に遭遇した場合でも安心して、1度聞き逃しても次に聞き取れるのではないかと考えた。また、こうすることにより、少しでも緊張が軽減できるというねらいもある)

6. 教科書の中の難しい単語の説明を受けた。

(全体の問題の中で、難しそうな単語については事前に説明をしたり、わかっている学生に尋ねたりした。さらに、頻度の高いイディオムなどはその場で各自辞書を引いて、これから聴く内容についての予備知識を与えた)

7. リスニングの後、すぐ答え合わせをした。

(すぐ答え合わせをすることにより、自分がどれ程できたのか、またはできなかったかをその時に把握することができるし、記憶の新しいうちに解答をするのは必要だと考えた)

8. 間違えの多かった(難しい)問題については、答え合わせの後でもう一度聴き、説明を受けた。

(教師は学生を指名しながら答え合わせをする中で、彼らの間違えた問題を知ることができるので、なぜその間違えに至ったかを再度テープを聴きながら解説することにより、リスニングのプロセス段階で間違えを回避できるのではないかと考えた)

9. 4月と12月にテストをして、自分がどれだけ伸びたのかを知れた。

(学習者が4月の時点でどれ程の習熟度か知ることができれば、各自それぞれのレベルに合った目標が立てられるし、JACET 聴解力テストには得点別に S/A/B/C/D の評価がついており、それがどのような意味を持つのか説明をし、12月には今より1つ上の評価を目指すように励ました)

10. 良く知っている歌が多かった。

(できるだけ学習者に馴染みのある歌を選ぶことにより、歌詞の内容にも興味を持てる



し、教室以外で聴く機会も増えるのではと考えた)

11. 歌のリスニングの時お互い相談できた。

(お互い穴埋めの答えを話し合うことにより、リスニングにはある程度推測も必要であり、話し合いを通して文法力や文脈から答えを予測する一種のストラテジーの交換ができると考えた)

12. 歌の穴埋めが難しい時、ヒントがあった。

(単語の穴埋めをするとき、再度聴いてどうしても聞き取りにくい単語については、学生の様子を見て最初の文字のみヒントを与えたり、何文字の単語になるのか教えたりした。これにより、文脈からある程度単語を推測することができると思った。これらの指示はすべて英語で行った)

13. リスニングの教科書は、実際の役に立ちそうな場面が多かった。

(2.2 の教材の章参照)

14. 教科書の内容について、それに関係のある異文化の身近な事柄について説明を受けた。

(例えば、レストランで注文する場面でのリスニングの後、実際に英語のメニューを準備し、それを読みながら日本での注文の仕方との違い等を解説したり、話し合ったりした。それにより少しでも学生の興味を引き、海外旅行の時に役立つのではないかと考えた)

### 3. アンケート結果の分析と考察

#### 3.1 各指導法の平均値

各項目ごとに平均値を算出し、標準偏差と共に表2にまとめた。この表から全体的に「あまり効果がなかった」指導法はなく、教師が意図して行っている指導法を学習者はそれなりに評価していることが窺える。その中で特に効果があると答えた指導法は、「難しい単語の説明」、「本文を数回聴くこと」、「リスニングの後、すぐ答え合わせをすること」と「再度聴き、どうして間違えたのかの確認をすること」である。また、ポピュラーソングの穴埋めの指導法では、「ヒントが役立ったこと」もあげられる。

一方、伸びた学習者と伸びなかった学習者とを比較すると、伸びた学習者は、どちらかと言えばポストリスニング指導法を高く評価しているのに対して、伸びなかった学習者は、プリリスニングの事前情報が効果的だったと感じている。

表 2 指導法の得点

|         | N=99            |                 | 上位群<br>N=47     |                   | 下位群<br>N=52     |                 |
|---------|-----------------|-----------------|-----------------|-------------------|-----------------|-----------------|
|         | 伸びた<br>N=51     | 伸びなかった<br>N=48  | 伸びた<br>N=22     | 伸びなかった<br>N=25    | 伸びた<br>N=29     | 伸びなかった<br>N=23  |
| 1 授業回数  | 3.82<br>0.71    | 3.77<br>0.68    | 3.86<br>0.69    | 3.80<br>0.57      | 3.79<br>0.71    | 3.74<br>0.74    |
| 2 作業交代  | 3.55<br>0.87    | 3.71<br>0.82    | 3.32<br>0.76    | 3.72<br>0.72      | 3.72<br>0.91    | 3.70<br>0.91    |
| 3 作業説明  | 3.84<br>0.92    | 3.85<br>0.91    | 3.86<br>0.87    | 3.60 *<br>0.94    | 3.83<br>0.95    | 4.13 *<br>0.80  |
| 4 事前聴取  | 3.55<br>1.07    | 3.71<br>1.00    | 3.50<br>1.20    | 3.68<br>1.09      | 3.59<br>0.97    | 3.74<br>0.90    |
| 5 数回聴取  | 4.24<br>0.85    | 4.46<br>0.64    | 4.27<br>0.81    | 4.40<br>0.69      | 4.21<br>0.89    | 4.52<br>0.58    |
| 6 単語説明  | 3.90<br>0.89    | 3.96<br>0.89    | 3.86<br>1.06    | 4.00<br>0.75      | 3.93<br>0.74    | 3.91<br>1.02    |
| 7 事後解答  | 4.16<br>0.80    | 3.94<br>0.97    | 4.32 *<br>0.70  | 3.72 *<br>1.08    | 4.03<br>0.85    | 4.17<br>0.76    |
| 8 再度聴取  | 4.51<br>0.61    | 4.40<br>0.60    | 4.59<br>0.65    | 4.40<br>0.63      | 4.45<br>0.56    | 4.39<br>0.57    |
| 9 試験期間  | 3.82 **<br>0.79 | 3.19 **<br>0.95 | 4.00 **<br>0.74 | 3.16 **<br>0.83 * | 3.69<br>0.79 *  | 3.22 **<br>1.06 |
| 10 歌の特徴 | 3.71<br>0.87    | 3.71<br>0.86    | 3.55<br>0.78    | 3.84<br>0.88      | 3.83<br>0.91    | 3.57<br>0.82    |
| 11 相互相談 | 3.92<br>0.90    | 3.88<br>0.97    | 3.64<br>0.93    | 3.92<br>1.02      | 4.14<br>0.82    | 3.83<br>0.92    |
| 12 ヒント  | 4.00<br>0.77    | 4.02<br>0.78    | 3.95<br>0.71    | 3.96<br>0.82      | 4.03<br>0.81    | 4.09<br>0.72    |
| 13 有用場面 | 3.90 **<br>0.91 | 3.38 **<br>0.83 | 3.91 **<br>1.00 | 3.20 **<br>0.75   | 3.90 **<br>0.84 | 3.57<br>0.88    |
| 14 文化説明 | 3.75<br>0.95    | 3.73<br>0.95    | 3.73<br>0.96    | 3.60<br>0.98      | 3.76<br>0.93    | 3.87<br>0.90    |

p&lt;0.05 \*

p&lt;0.01 \*\*

### 3.2 分析結果

分散分析の結果 14 項目の中でグループ間で有意差が認められた指導法は、伸びた・伸びなかったの群において、9「4月と12月にテストをして、自分がどれだけ伸びたか知れた」( $F_{(1, 97)} = 12.98, p < 0.01$ )と13「リスニングの教材は実際の役に立ちそうな場面が多かった」( $F_{(1, 97)} = 8.79, p < 0.01$ )の2つであった。

一方、上位と下位に分けた中での伸びた学生と伸びなかった学生に関しては、4項目で統計的有意差が見られた。まず、3「どんなことをするのか説明を受けた」が、下位群の伸びなかった学習者と上位群の伸びなかった学習者の間に有意差 ( $F_{(3, 95)} = 1.35, p < 0.05$ )が見られた。次に、7「すぐ答え合わせをした」は、上位群の伸びた学習者と伸びなかった学習者の間に有意差 ( $F_{(3, 95)} = 1.99, p < 0.05$ )が認められた。そして、9「4月と12月にテストをして伸びたか知れた」の項目において、上位群の伸びた学習者が、上位群の伸びなかった学習者及び下位群の伸びなかった学習者より有意 ( $F_{(3, 95)} = 4.85, p < 0.01$ )に



高かった。また、同じ項目に関して、下位群の伸びた学習者が、上位群の伸びなかった学習者より有意 ( $p < 0.05$ ) に高く評価していた。さらに、13「リスニングの教材は実際の役に立ちそうな場面が多かった」でも、上位群の伸びた学習者及び下位群の伸びた学習者と上位群の伸びなかった学習者の間に有意差 ( $F_{(3, 95)} = 3.61, p < 0.01$ ) が認められた。

### 3.3 考察

指導法に関するアンケート結果の分析が、リスニング指導法に与える示唆について考察する。全体的にみて学習者に最も支持されたリスニング指導法は、事後指導の「間違えの多かった（難しい）問題については、答え合わせの後でもう一度聴き、説明を受けた」である。Field (1998:111)は、このような指導法に関して“Process vs. Product”の項で、従来学習者がリスニングの過程でどこを間違えたのかにあまり注意を払わなかったが、それでは次回も同じような間違いを犯すとし、正しい答えより間違ったところに焦点を当て指導すべきだと指摘している。そして教師の役割は、学習者がどこで間違えたかを発見し、彼らの弱点を矯正することだと述べている。

また、ストラテジー研究における Wenden (1998) や Vandergrift (1999, 2003)の総括によると、熟練した学習者は、メタ認知ストラテジー(Metacognitive strategy)を適宜使用しているということである。このストラテジーは、学習者が言語学習の過程を概観、調整し、さらには評価することを指すが、リスニングにおいてのそれは、「学習者が聴いた後どこで間違えたのかを認識し、次回からはこのような語や表現には注意して聴こうとすること」だと言えることができる。

この分析結果は、従来のプリリスニング重視の指導法からすると、予想外だといえる。しかしながら、Field (1998)と同様、岡(1996)も述べているように、リスニング指導は、答え合わせをしてそれで終わりではなく、聴く過程でどのように間違えたのかをしっかりと捉え、その誤りを次回に生かすことである。事実、今回の結果は、学習者がこの指導法を一番効果があると認識していることを示している。そうすることにより、彼らは一種のメタ認知ストラテジーを習得していくと考えてよいであろう。そのためにリスニング指導ではこの時間を充分確保する必要がある。この点について Field (1998:112)は、動機づけのための短いプリリスニングの導入、内容を数回聞くリスニング、そして答え合わせの後、聞き手が間違えた箇所の修正をするマイクロ指導法を奨励している。

次に、熟達度別に注目すると、3「聴く前に教科書の各問題について、どんなことをするのか説明を受けた」において、下位群の伸びなかった学習者の方が、上位群の伸びなかった学習者より有意に効果的だと評価している。これらの学習者は、習熟度別のクラスではないので、4月の時点で上位群と下位群では JACET 基礎聴解力テストで平均点に 10 点

程の差があり、下位群の学習者にとっては、このような語彙の説明は役に立つと感じたのであろう。また、このレベルの学習者は、プリリスニングをかなり高く評価しているが、これは教材が彼らのレベルより高いため、どのような情報でも有効だと考えているからだと思われる。しかし、同じ下位群でも伸びた学習者との間には、この指導法に対して有意な差は見られなかったことから推測すると、これらの学習者は予めテキストの未習得単語等の予習をして授業に臨んだのかもしれない。

そして、7「リスニングの後、すぐ答え合わせをした」と 13「リスニングの教科書は実際の役に立ちそうな場面が多かった」の項目において、上位群の伸びた学習者が同レベルの伸びなかった学習者より有意に高く評価している。この2つの項目は関連していて、内容に興味を持てたので、リスニングを行った後すぐに自分の解答が正しいのかどうか知りたいと考えたのだと思われる。また、7の項目は、ストラテジーとも関係している。Vandergrift (2003) は、メタ認知ストラテジーを 1) Planning 2) Monitoring 3) Evaluation 4) Problem identification の4つに分類しているが、この項は 3) Evaluation に相当し、自分の解答をすぐに確認しようとする大切な方略だともいえる。一方、13の項目は、教材選びの重要性を表しており、指導する側は、学習者のニーズを充分把握した上で、テキストを選択する必要がある。この場合、リスニング用のテープは、Rost (2002)が述べているように自然な速度と自然な発話、頻度の高い単語が多く使用されている、できるだけ“authentic”なものを選ぶべきであろう。それにより、学習者は、自分達が聞いている英語が実際に英語圏で使用されているものと変わらないと感ずることができる。

さらに、9「4月と12月にテストをして、自分がどれだけ伸びたかを知れた」は、上位群の伸びた学習者が、上位群と下位群の伸びなかった学習者と比較して、有意に高い評価をしている。言語学習ストラテジーの先駆者である Oxford (1990) は、Metacognitive Strategy を 1) Centering your learning 2) Arranging and planning your learning 3) Evaluating your learning の3つに分け、2) の中に Setting goals and objectives を入れている。これは、学習に対する短期と長期の目標を学習者が持つことを意味しているが、伸びた学生は、4月の段階で自分の目標をある程度定めたと考えられる。

最後に、習熟度に拘わらず平均点以上の伸長が見られた学習者は、そうでなかった学習者と比べて、9「4月と12月にテストをして、自分がどれだけ伸びたかを知れた」と、13「リスニングの教科書は実際の役に立ちそうな場面が多かった」の項目を有意に高く評価している。これは、上述したが、どのようなレベルでも目標を持つことの意義を示していると言える。そして、13の項目は能力に関係なく教材選びの大切さを表している。



#### 4. おわりに

リスニング指導法に関して、学習者の視点から分析を試みた。教師の効果があると考えて行っている指導法が必ずしもそのまま学習者に有意義だとは映らなかったが、ある程度の一致をみた。この結果は、ポストリスニング指導の重要性を表し、学習者がある一定の目標を持つ意義、さらには教材選びの大切さを示している。指導する側は、答え合わせをしてそれで終わりではなく、どのような過程で間違えに至ったのかを学習者に認識させるための十分な時間を確保する必要があるだろう。そして、学習者にできるだけ明確な指針を与えることも重要である。それと同時にこの分析結果は、指導する側があまり意識してストラテジーの指導を行っていないにも拘わらず、受講する側は、それなりに効果的なリスニングのこつのようなものを身につけていることを示していると思われるが、この点に関しては未だ検討の余地が残されている。

最後に、リスニング指導とリーディング指導との関係について、若干の所見を述べたい。Vandergrift (2003)の熟達している学習者は、リスニングの際、熟達していない学習者と比べてあまり母語に訳していないということである。日本の英語教育は、読解の際、多くの場合訳読を中心に指導が行われているので、これがリスニングにも影響していると推測される。つまり、英語を読む場合、絶えず訳していれば、リスニングの時も自ずとその習慣がでてくるであろう。この点に関して、武井ら(2002: 104)も Takeuchi et al. の研究を取り上げ、「analytic なストラテジーはリスニングの得点と負の関係があり、被験者が聞き取りの際分析的になろうとすると得点が下がる傾向が示された」と述べている。

本稿では、このようなリーディングとリスニングとの指導法の関連性まで究明できなかった。今後の課題としたい。

本稿は、平成13年9月に開催された大学英語教育学会第40回全国大会で筆者が発表した「効果的なリスニング指導法：学習者の視点」に加筆修正したものである。

#### 参考文献

- Field, J. (1998). Skills and strategies: towards a new methodology for listening. *ELT Journal*, 52, 2, 110–118.
- Kiggel, T. & Bellars, P. (1999). *Cubic Listening, Check In, Check Out*. Tokyo: Macmillan LanguageHouse.
- 小栗裕子. (1996). 「ポピュラーソングの空所補充練習はリスニング向上に有効か」『英語教育研究』19号, 122–127.
- 小栗裕子. (1998). 「リスニング向上に効果のあるいくつかの要素 1—著しい伸びを示した

- 学生とそのクラスにみる特質と指導法」『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』1号, 79-93.
- 岡秀夫. (1996). 「ヒヤリングの難しさ」『月刊言語』25, 2, 52-59.
- Oxford, R. (1990). *Language Learning Strategies*. New York: Newbury House Publishers.
- リチャーズ, J. & ロックハート, C. (2002). 『英語教育のアクション・リサーチ』研究社出版.
- Rost, M. (2002). *Teaching and Researching Listening*. London: Longman.
- 武井昭江 (編). (2002). 『英語リスニング論』河源社.
- Vandergrift, L. (1999). Facilitating second language listening comprehension: acquiring successful strategies. *ELT Journal*, 53, 3, 168-176.
- Vandergrift, L. (2003). Orchestrating strategy use: toward a model of the skilled second language listener. *Language Learning*, 53, 3, 463-496.
- Wenden, A. (1998). Metacognitive knowledge and language learning. *Applied Linguistics*, 19, 4, 515-537.

## Abstract

This study examined what different listening activities or instructions were considered by students to be effective for proficiency. Ninety-nine first year students participated. The JACET Basic Listening Comprehension Test was given at the beginning of April and the middle of December to assess the learners' listening ability. These students were divided into two groups according to the result (47 high-intermediate and 52 low-intermediate). Then these two groups were divided into two subgroups according to their post-test scores; those who gained a higher-than-average score and those who gained a less-than-average score. A five-point-scale questionnaire was given consisting of 14 items regarding activities or instructions the author intentionally used during teaching. An analysis of variance (ANOVA) was used to compare instructional differences with listening abilities.

Among the 14 activities or instructions, three were found significantly effective for high-intermediate score-gain students and high-intermediate no-score-gain students. They are :1) Immediately after listening, comprehension questions were examined and corrected ( $p < 0.05$ ). 2) The JACET pre- and post-



listening tests ( $p < 0.01$ ). 3) Quality of the textbook used in the class ( $p < 0.01$ ). Among other activities, low-intermediate no-score-gain students considered pre-teaching of new vocabulary more useful than did high-intermediate no-score-gain students ( $p < 0.05$ ).

Both groups of high- and low-intermediate score-gain students felt post-listening activities were more effective than did no-score-gain students, although there was no statistical difference. Implications of this result show that instructors should focus on post-listening sessions explaining to the students what may have gone wrong in the process of listening.

**“Listening is a Great Art”**  
**—A Voice beyond the Gale—**

**Kaoru YAMAMOTO**

**INTRODUCTION**

The similarity between Razumov and Conrad has often been pointed out, mainly from the biographical point of view. But, in this paper, I shall reconsider the similarity between the character and his creator in terms of their act of listening. There are references to the act of listening in *Under Western Eyes*. Moreover, if we take the case of Marlow in *Heart of Darkness* and *Lord Jim*, Conrad's narrators are more like listeners than mere storytellers. In *Typhoon*, then, Conrad himself also listens to a voice of judgment beyond the gale while he is narrating; thus, the act of listening functions as a metaphor for Conrad's own artistic activities. From this perspective, I shall also suggest one of the reasons why Razumov loses his hearing instead of his sight in *Under Western Eyes*, a work which seems to be more obsessed with optical imagery. The reason of Razumov's deafness at the end of the story will shed some light on the transformation of the nature of Conrad's art.

<I>

As the title and textual evidence invite us to pay more attention to the visual phenomena, we are prone to overlook that the sense of hearing is accentuated as well in *Under Western Eyes*. Note the way the English language teacher addresses his audience: “this is a Russian story to Western ears...not attuned to certain tones of cynicism and cruelty, of moral negation, and even of moral distress already silenced at our end of Europe.”<sup>1</sup> Marlow's “ears” must be “attuned to certain tones of moral distress” after he returned from the journey into the Dark Continent. As he still hears Kurtz's whispered cry,

---

<sup>1</sup> Joseph Conrad, *Under Western Eyes* (Harmonsworth: Penguin, 1996) 117, all subsequent



“The horror! The horror!” at home, he does not deceive himself that moral distress is “already silenced” at his end of Europe. The English teacher of languages is as deaf to the “certain tones” of non-Western political disturbance as are the complacent British statesmen in *The Secret Agent*, who harbour potential subversive elements like anarchists and revolutionists without looking into things too deeply. On the contrary, Razumov has a “fine ear” and an “acute sense of hearing” (UWE 206). Razumov’s reserved attitude of “an inscrutable listener, a listener of the kind that hears you out” (UWE 6) gains him the confidence of the revolutionary students and, fatally, that of Haldin. Although Razumov felt fairly disturbed by Haldin’s intrusion on the day he committed the assassination, the very day when Razumov made up his mind to write a prize essay, he could not kick him out instantly. He was “vexed with himself for attaching so much importance to what Haldin said” (UWE 43). Although his rational mind abhors their idea, he always listens to the revolutionary activists he encounters, as he thought to himself, “Apparently I’ve got only to sit still and listen” (UWE 156). Considering Marlow is more like a listener than a narrator in *Heart of Darkness* and *Lord Jim* in particular,<sup>2</sup> Razumov is another version of the line of Conrad’s protagonists.

Not surprisingly, Conrad is also a listener. The passage below from *Typhoon* gives us a glimpse of Conrad the listener and suggests what he is listening to:

Again Jukes heard that voice, forced and ringing feebly, but with a penetrating effect of quietness in the enormous discord of noises, as if sent out from some remote spot of peace beyond the black waters of the gale; again he heard a man’s voice – the frail and indomitable sound that can be made to carry an infinity of thought, resolution and purpose, that shall be pronouncing confident words on the last day, when heavens fall, and justice is done – again he heard it, and it was crying to him, as if from very, very far – “All right.”

He thought he had not managed to make himself understood. “Our boats – I

---

references will be to this edition, cited in the text as UWE.

<sup>2</sup> See Marlow’s comment, for example, in *Heart of Darkness*. “I made strange discovery that I had never imagined Kurtz as doing, you know, but as discoursing. I didn’t say to myself, “Now I’ll never see him,” or “Now I’ll never shake him by the hand,” but, “Now I’ll never hear him.” The man presented himself as a voice.....” Joseph Conrad, *Youth/Heart of Darkness/ The End of the Tether* (Harmonsworth: Penguin, 1995) 106.



say boats – the boats, sir! Two gone!"

The same voice, within a foot of him and yet so remote, yelled sensibly, "Can't be helped."

Captain MacWhirr had never turned his face, but Jukes caught some more words on the wind.

"What can – expect – when hammering through – such – Bound to leave – something behind – stands to reason."

Watchfully Jukes listened for more. No more came. This was all Captain MacWhirr had to say; and Jukes could picture to himself rather than see the broad squat back before him. An impenetrable obscurity pressed down upon the ghostly glimmers of the sea. A dull conviction seized upon Jukes that there was nothing to be done.<sup>3</sup>

We notice how often the Captain's "voice" "in the enormous discord of noises" is repeated in the first paragraph of the extract. The repetition conveys to us how strong the gale is, and serves to emphasise how courageously the sailors persevere through such a strong gale under the leadership of the Captain. As Leavis points out, the Captain's matter-of-fact attitudes in the face of danger give him a magnificent stature.<sup>4</sup> His analysis sets the tone of later mainstream criticism of *Typhoon* and its hero. Confronted with the approaching typhoon, MacWhirr is indeed the "captain courageous" in his fearless indifference: "Jukes was uncritically glad to have his captain at hand. It relieved him as though that man had, by simply coming on deck, taken most of the gale's weight upon his shoulders" (*TOS* 39).

However, as the recent criticism gradually draws attention to it, there is something puzzling about the presentation of the Captain,<sup>5</sup> and therefore the interpretation of his character as mentioned above is hardly relevant in understanding the embellishment attached to his "voice" like: "as if sent out from some remote spot of peace beyond the black waters of the gale"; "that can be made to carry an infinity of thought, resolution and

---

<sup>3</sup> Joseph Conrad, *Typhoon and Other Stories* (Oxford: Oxford University Press, 1986) 44-5. All subsequent references will be to this edition. Henceforward cited as *TOS*.

<sup>4</sup> F.R. Leavis, *The Great Tradition* (1948; Harmondsworth: Penguin, 1986) 213.

<sup>5</sup> I discuss this problem in "Typhoon—Characterization of Captain MacWhirr—," *Academic Report of The University Centre for Intercultural Education, The University of Shiga Prefecture*, No. 7 (2002) 85-98.



purpose"; "that shall be pronouncing confident words on the last day, when heavens fall, and justice is done." To Jukes, does MacWhirr's "voice" really sound densely loaded with such a serious meaning as might be implied in those clauses above?

Note the latter half of the passage above. The Captain's unperturbed air only aggravated rather than appease Jukes's anxiety, and "a dull conviction seized upon Jukes that there was nothing to be done." Or taking Wegelin's expression we can suppose that the Captain's "voice" might generally symbolise "the Human Voice"<sup>6</sup> rather than representing particular personal voice to someone in desperate need of guidance. Still, when the narrator's comment has the biblical resonance (that is, the Judgement Day), it is arguable whether Wegelin's "Human" can be universalised.

Both Christian and adventure tradition inform the most important aspects of Conrad's narrative, but they suppress rather than stress a certain aspect of Conrad's narrative. As most critics agree, Jukes's perspective is very close to that of the narrator and in some cases they do overlap. Jukes, indeed, is characterised as an oversensitive person like Jim, but lacks such depth and dimension as might enable him to make a serious statement in the passage above. Here, heavily-loaded sentences defining the Captain's "voice" implies that it seems to be the omniscient authorial narrator rather than Jukes who is straining his ear to hear the voice of judgment, desperately longing for some form of peace, rescue or redemption.<sup>7</sup>

## <II>

Once we acknowledge the association of "strong gale" with "judgment" in Conrad, it is interesting to see typhoons again in his later political works that are set on land. The storms in his later novels do not have such verisimilitude as in *Typhoon*, functioning more as a metaphor. Like "judgment," storms attack Conrad's heroes at the time of their confession or disclosure of the hidden truths, though it has long been overlooked.<sup>8</sup> What is more important is that Razumov's deafness to the sound of the

---

<sup>6</sup> Christof Wegelin, "MacWhirr and the Testimony of the Human Voice," *Conradiana* 7 (1975): 47.

<sup>7</sup> To Marlow, Kurtz's last statement, "The horror! The horror!" was "a judgment upon the adventures of his soul on this earth" and he decided to be loyal to Kurtz forever just because he had "summed up—he had judged." Conrad, *Heart of Darkness*, 137-8.

<sup>8</sup> As for the analysis of the water metaphors in *Nostromo*, see William W. Bonney, *Thorns & Arabesques: Contexts for Conrad's Fiction* (Baltimore & London: Johns Hopkins University Press,

thunderstorm is emphasised in *UWE*. The water metaphors in these two works prepare us for the coming gale at the climax.

In *The Secret Agent*, the darkness in London is "as vast as sea."<sup>9</sup> The life of the Verlocs is compared to a voyage upon the sea in Winnie's reminiscence. Winnie looks back on the past romance with the butcher boy in her neighbourhood, right after she finds that her husband killed her brother Stevie:

Affectionate and jolly, he was a fascinating companion for a voyage down the sparkling stream of life; only his boat was very small. There was room in it for a girl-partner at the oar, but no accommodation for passengers. He was allowed to drift away from the threshold of the Belgravian mansion while Winnie averted her tearful eyes. He was not a lodger. The lodger was Mr Verloc, indolent, and keeping late hours, sleepily jocular of a morning from under his bed-clothes, but with gleams of infatuation in his heavy lidded eyes, and always with some money in his pockets. There was no sparkle of any kind on the lazy stream of his life. It flowed through secret places. But his barque seemed a roomy craft, and his taciturn magnanimity accepted as a matter of course the presence of passengers. (SA 220)

To provide for her retarded brother and crippled mother, Winnie sacrifices her own happiness in choosing Verloc's "roomy craft." However, her mother, one of the "passengers," confines herself into an institution and thus jumps off the craft like "rats leaving a doomed ship" (SA 173) to borrow Verloc's expression when he is at a loss how to carry out Vladimir's plan to blow up the Greenwich Observatory. It is Winnie's mother's own decision to leave the ship, whereas Stevie is forcefully thrown out of it, "screaming for the last time," like "a drowning man as his doomed head bobs up" (SA 107) in the mind of Inspector Heat.

Verloc's barque is gradually taking water after the bomb explosion as innocent Winnie worries about her husband "getting wet" on his way home (SA 182). Disillusioned

---

1980)) 195-222.

<sup>9</sup> Joseph Conrad, *The Secret Agent* (Harmonsworth: Penguin, 1990) 118, all subsequent references will be to this edition, cited in the text as SA



to know that her husband killed her brother, she stabs him to death. When the truth of the attempted Greenwich Bomb Outrage was revealed to her, Winnie Verloc felt “the undulatory and swinging movements of the parlour, which for some time behaved as though it were at sea in a tempest” (SA, 235). The blood drips from Verloc’s breast “as if the trickle had been the first sign of a destroying flood” (SA 236). Suddenly seized with fear she runs to the door, but the street frightens her: “this entrance into the open air has a foretaste of drowning” (SA 239).

To the drowning woman catching at a straw, the young anarchist Ossipon, parasitic on girls with money, looks like “a radiant messenger of life” (SA 242). In the chance meeting with her, overconfidence in his own appeal to women prevents him realising that she accepts him “with all the fierceness the instinct of self-preservation imparts to the grip of a drowning person” (SA 242). Yet soon after that, finding out what actually happened at Verloc’s home, he decides to abandon her, after taking the money Verloc left to her.

In his secret fear of the murderous woman, Ossipon speaks well of her beloved dead, Stevie. Hearing his flattering words, she sways forward as if on the ship upon the stormy sea, “with a flicker of light in her sombre eyes, like a ray of sunshine heralding a tempest of rain” (SA 259). Finally, she actually drowns herself in the Channel jumping from a steamer. With each metaphor we come to imagine that the Verloc family as a ship sinks into the bottom of the stormy ocean.

In the same way as Winnie is left alone in London as a vast sea, Razumov, without any relative, is also described “as lonely in the world as a man swimming in the deep sea” (UWE 10). Among talkative Russians, Razumov’s reserved personality earns him a reputation as a trustworthy man, but he keeps a certain distance from them. He always vainly seeks to be understood properly. He is often taken by “the choking fumes of falsehood” and feels as if “condemned to struggle on and on in the tainted atmosphere without the hope of ever renewing his strength by a breath of fresh air” (UWE 191). Ziemianitch’s suicide guarantees Razumov future security among the revolutionists by covering the fact that he betrayed Haldin to the authorities. Thinking that “there seemed to be no air in falsehood” (UWE 253), however, he decides to make confessions both to the Haldin’s bereaved family and to the revolutionary group.

The shopkeeper of Razumov’s lodging house tells Natalia and the narrator who



inquire after Razumov that he went out "because he needed air," but soon "the storm shall drive him in" (*UWE* 235). Then, as if to materialise his words there comes "a very distant, deep rumbling noise" (*UWE* 235). As the time of his confession is approaching, we are always reminded of the desolate western townscape overhung by the thunder-cloud, and the distant rolling of thunder coming nearer. After Razumov confessed to Haldin's mother and sister, "a heavy shower passed over him" (*UWE* 250). And then, at the stroke of midnight, like a puppet of his past, Razumov jumps up and runs out of his lodging house in order to confess to the revolutionary group. "A single clap of thunder" roared "like a gun fired for a warning of his escape from the prison of lies" (*UWE* 254). By the time Razumov found himself ringing at the street door of Laspara house, "the thunderstorm had attacked in earnest. The steep incline of the street ran with water, the thick fall of rain enveloped him like a luminous veil in the play of lightning" (*UWE* 255).

After his second confession, Nikita burst Razumov's eardrums to make him harmless as a spy. Then he was flung out into the stormy street. Significantly, in the following passage the emphasis seems to be placed on his deafness particularly to the sound of the thunderstorm:

He fell forward, and at once rolled over and over helplessly, going down the short slope together with the rush of running rain water. He came to rest in the roadway of the street at the bottom, lying on his back, with a great flash of lightning over his face--a vivid, silent flash of lightning which blinded him utterly. He picked himself up, and put his arm over his eyes to recover his sight. Not a sound reached him from anywhere, and he began to walk, staggering, down a long, empty street. The lightning waved and darted round him its silent flames, the water of the deluge fell, ran, leaped, drove--noiseless like the drift of mist. In this unearthly stillness his footsteps fell silent on the pavement, while a dumb wind drove him on and on, like a lost mortal in a phantom world ravaged by a soundless thunderstorm. (*UWE* 259)

This passage amply demonstrates that Razumov is at the mercy of winds and water like Conrad's sailors upon the stormy sea. The reiterations in the sentences such as "he rolled *over and over* helplessly," "a dumb wind drove him *on and on*" [my italics] underscore



Razumov's powerlessness. The relentlessness of "the water of the deluge" is intensified by a series of verbs "fell, ran, leaped, drove." However, the wind is neither "dumb" nor "soundless" in Conrad. A gale of wind is "the thing of mighty sound" for Conrad, even though it is inarticulate.<sup>10</sup> Specifically, "the water of the deluge," which has obviously a biblical connotation, cannot be "noiseless" for Conrad, who seems to listen to the voice of judgment beyond the gale in the passage from *Typhoon* cited above.

### <III>

The way Conrad characterises things Eastern and Western in *SA* and *UWE* corresponds well with that of the winds in "Rulers of East and West" in *MS*. He calls the conflict of winds "ruling" the aspects of the sky and the action of the sea as "the polity of winds" (*MS* 81).

As an "interloper" or an "intruder," the East Wind is in most cases linked to the "wiles" or "guile" with "something uncanny in its nature." Note the traits Conrad ascribes to the East and the West here, which remind us of the characterisation of the East and the West in *SA* and *UWE*:

As a ruler, the East Wind has a remarkable stability; as an invader of the high latitudes lying under the tumultuous sway of his great brother, the Wind of the West, he is extremely difficult to dislodge, by the reason of his cold craftiness and profound duplicity. (*MS* 80)

The attempted bomb outrage can be redefined as plotted by "the invader," against the peace and liberal ideas in the West; because it is originated in some foreign Embassy which we can easily guess belongs to the East. Haldin intrudes himself into Razumov's room after the assassination, shattering Razumov's future dream. It is as if Haldin, the Russian revolutionary spirit personified, forces his way into the Western rational mind embodied in Razumov.

On the other hand, the West Wind, as a ruler "without guile" (*MS* 92) is "no calculator plotting deep schemes in a sombre heart" (*MS* 82) like the East Wind. However,

---

<sup>10</sup> Joseph Conrad, *The Mirror of the Sea & A Personal Record* (Oxford: Oxford University



this is far from glorifying the West. The West Wind is no less an "arbitrary ruler" (MS 81) than the East Wind, cruelly indifferent even to its loyal subjects:

The Westerly Wind asserting his sway from the south-west quarter is often like a monarch gone mad, driving forth with wild imprecations the most faithful of his courtiers to shipwreck, disaster, and death. (MS 82)

In SA, it gradually dawns upon us that what drives the Verlocs to annihilation might be the political system of the British government: they are actually inefficient in protecting its citizens but instead extend their "regard for the individual liberty" to the potential destructive elements in the society (SA 64).

Apparently, here Conrad seems to refer simply to the meteorology. However, there are also the North and the South Winds upon the sea, as Conrad himself acknowledges. They are "of no importance" to him (MS 81) and "in the polity of winds," "the real struggle" especially lies between East and West. Conrad goes on to explain that "the regions ruled by the Trade Winds are serene" and "the passage through their dominions is characterised by a relaxation of strain and vigilance on the part of the seamen" (MS 80). Yet, "the struggle between East and West" in particular, surely mirrors his own political view shaped by his peculiar Eastern experiences as Najder points out.<sup>11</sup>

The betrayers in SA and UWE are torn between the East and the West. The stories develop around the discord between the Western and the Eastern countries with totally different political systems. The discord, however, is not presented as a simple binary opposition. As we shall see below, the East and the West in Conrad's stories are closely connected and inextricably intertwined with each other to the extent that we cannot easily disentangle one from the other. To be more precise, the stories do not actually develop but circle around the core from the beginning to the end as if to reflect some patterns of Conrad's thought.<sup>12</sup>

---

Press, 1988) 78, hereafter cited as MS.

<sup>11</sup> Najder sees Conrad's anti-Russian attitude in the images of the "rulers" of East and West. Zdzisław Najder, Introduction, *The Mirror of the Sea & A Personal Record*, By Joseph Conrad, p.x.

<sup>12</sup> According to GoGwilt, SA and UWE charts a course for Conrad's political evolution that parallels the formation of a reactionary idea of the West which was consolidated following and in reaction to the Russian revolution of 1917. Christopher GoGwilt, *The Invention of the West: Joseph Conrad and the Double-Mapping of Europe and Empire* (California: Stanford University Press, 1995)



Verloc, the double agent, is the epitome of the complicated interaction between the East and the West. As an informer of Scotland Yard, he spies on the exiled anarchists and revolutionists in London. He is at the same time an Embassy spy and is ordered to blow up the Greenwich Observatory to awaken the British government to take stricter measures against the revolutionists.

The foreign Embassy belongs to some Eastern country as we can safely guess from Vladimir's "guttural Central Asian tones" (SA 69) and "somewhat Oriental phraseology" (SA 208). As the First Secretary of the Embassy Vladimir observes, the British government "with its sentimental regard for individual liberty" extends its protection over anarchists and revolutionists at the security risk and thus, "the imbecile bourgeoisie of this country make themselves the accomplices of the very people whose aim is to drive them out of their houses to starve in ditches" (SA 64).

Once he found his informer's involvement with the Greenwich case, Chief Inspector Heat of the Special Crimes Department decided to incriminate the ex-convict Michaelis, instead of prosecuting the case in a direction that would reveal his informer. However, the Assistant Commissioner has to protect the ex-convict because the lady patroness of Michaelis is one of the most influential and distinguished connections of the Assistant Commissioner himself and his wife. Therefore, the Assistant Commissioner, instead of instructing Heat to carry on with this case, starts to investigate the case on his own to prove Michaelis's innocence.

After he brings the discovery to the Secretary of State, he joins his wife at the house of the lady patroness of Michaelis, where he is introduced to Vladimir and thus finally the head of the Special Crimes Department comes face to face with the instigator of the explosion. However, he just lets Vladimir go and the truth of the case will remain a mystery forever. Innocent Stevie is killed in vain and the double betrayal of Verloc the spy is revealed.

Razumov, a rational man, always tries to deal with the typically "Russian" situations following his "superior reason" (UWE 27). However, as Decoud's refined, western rational mind does not help him find a clear and definite way out of the chaotic political situation in Costaguana in *Nostromo*, Razumov's reason does not allow him to be



"superior" to the things Russian. On the contrary, his "English" cool reason involves him deeper and deeper into the things Russian, misleading him into the tragedy. The more desperately does he struggle to keep away from the Russian revolution and revolt, the more strongly is he drawn toward them. The dilemma between the East and the West both inside and outside Razumov, forming a sort of spiral movement, leads him to the confessions.

Living in a period of political unrest, Razumov responds to the tension of his time in an indefinite way, not wholly committing himself to the revolutionary idea. Razumov's main concern is with his work, studies and his future and he keeps an instinctive hold on normal, practical, everyday life. Still, his manner to his young compatriots appears very amiable, inspiring confidence. Among a lot of energetic talkers, Razumov's taciturn personality is naturally credited with reserve power and he is looked upon as a trustworthy man.

His "English" reserved attitude attracts the revolutionary people, even Haldin, in a way that puts an end to all future hopes of Razumov's. Haldin sought harbour in Razumov's room after he assassinated the autocratic statesman, involving Razumov in the most despicable crime. Hoping only to drive Haldin out of his room, Razumov goes to Ziemianich to prepare for the sledge for Haldin, thus assisting the assassin in his flight.

Intending to "cut himself entirely from one's kind" (*UWE* 70), he has to be faced with Ziemianich, "a true Russian" (*UWE* 23) embodying the Russian misery. As he finds that the drunken Ziemianich is totally helpless, Razumov finally decides to give Haldin up to the authorities. This, however, is to deliver Razumov neither from Russian revolt nor Russian autocracy. Assigned by the authorities to spy on the exiled revolutionists in Europe, Razumov is sent to Geneva. Not knowing Razumov's betrayal of Haldin to the police, the revolutionary activists in Geneva admire Razumov for his alleged complicity in the assassination of Mr de P--. Haldin's sister is also deceived by his brother's words of praise on Razumov. What with all the misunderstanding around him, what with Haldin's mother's profound sorrow over his death, Razumov becomes almost suffocated till he makes confession to them all.

As we have seen above, the complicated interaction between the East and the West leads up to the revelation of our heroes' betrayal. What the author brings into focus is the situation caused by interdependence between the East and the West, rather than the



all too clear antagonism between them. At first glance, the East and the West appear to be inimical and stand in clear opposition to each other, but what actually brings about Stevie's death is not their opposition but their collusion. This conspiratorial nature of the relationship between the East and the West is then internalised in Razumov himself. He always unsuccessfully struggles to be superior to the things Russian. He has an aversion to the excessive outpouring of emotion, such as Ziemianich's sorrow over his lost love and Haldin's mother's lament over the loss of her son. However, the fact that he also cannot control his own emotion like other stereotype Russians in *UWE* is implied in his sudden, violent flogging of Ziemianich. In this sense, we gradually become unsure about whether Razumov with his "superior reason" is actually avoiding the things Russian or gradually attracted towards them from sympathy hidden deep inside him unknown even to himself.

Verloc swiftly goes home to work out his treacherous scheme, "as if borne from west to east on the wings of a great wind" (SA 70); and Razumov rushes to confess his betrayal to the revolutionary group, "swept by a fitful gust of wind" (*UWE* 254). The winds "struggle" between East and West, like the stories themselves, culminating in bringing storms upon the protagonists at the time of their confessions.

#### <IV>

The image of the author listening to the voice of "judgment" beyond the gale is well in accordance with the moralistic nature of Conrad's art. There are allusions which tempt us to draw an analogy between "listening" and "art" in *UWE*. Let us remember the narrator's disclaimers concerning his "art." He sometimes claims his "artlessness" in his digressions: "this is not a work of imagination; I have no talent; my excuse for this undertaking lies not in its art, but in its artlessness" (*UWE* 73); which suggests he does not have an "art" when the storyteller is a poor listener. On the other hand, as we have seen, Razumov is a keen listener and he is also an "artist" in the sense that he is the author of his diary. Thus the English teacher of languages is the reverse image of Razumov both as a listener and an artist.

As is shown in his criticism against Rousseau's self-justifying *Confessions*,<sup>13</sup> Conrad seems to deny the artistic nature of "self-revealing record" (*UWE* 6) like

---

<sup>13</sup> Conrad, *A Personal Record*, 95.

Razumov's diary. Yet, if we can say that Razumov's diary is an emblem of Conrad's autobiographical writings, his criticism might be a cautious guard on the side of Conrad, suggesting he is acutely conscious of the self-revealing aspect of his art. If he listens to the voice of judgment, it leads to revealing himself like Razumov. Meanwhile, if he faces merely towards "the Western readers" turning a deaf ear to the voice of judgment like the English language teacher, his narrative, he might have felt, would be totally "artless." *UWE* stands as a work of art unstably balanced between these ideas of "art," marking the last stage of Conrad's art which has been evolved around the stern moral judgment.

When Mikulin summoned Razumov into his office in order to question about what he conversed with Haldin, Razumov refutes him saying, "He talked and I listened. That was not a conversation." To which Mikulin significantly replied, "Listening is a great art" (*UWE* 67). Of course, by "art" Mikulin here simply means "skill" or "ability." Furthermore, it is a Russian, neither the narrator nor Conrad himself who dares to associate "listening" with "art." Thus we are doubly displaced from the association. Conrad calls it as "a great art" only jokingly under the guise of his repulsive fictional character, Councillor Mikulin.

Compare this sort of detachment in Conrad's later works and the sense of expectation with which the author listens to the voice beyond the gale in *Typhoon*. In *SA* and *UWE*, Conrad distances himself as far from "listening" to the voice of judgment as his moralistic "art". His "art" was no longer a means of confronting "the struggle between East and West" inside himself. It is becoming more and more as a means of winning a position in the society at this stage of his writing career, though it does not necessarily mean the voice of judgment ceases resounding in Conrad's heart. Yet, his vicarious self loses his hearing, and survives it to "talk well" (*UWE* 266). His reincarnation as a narrator registers a fresh departure in Conrad's art.



### Works Cited

- Bonney, William W. *Thorns & Arabesques: Contexts for Conrad's Fiction*. Baltimore & London: Johns Hopkins University Press, 1980.
- Carabine, Keith. *The Life and the Art: A Study of Conrad's "Under Western Eyes."* Amsterdam-Atlanta, GA: Rodopi, 1996.
- Conrad, Joseph. *Youth/Heart of Darkness/ The End of the Tether*. Harmondsworth: Penguin, 1995.
- , *Typhoon and Other Stories*. Oxford: Oxford University Press, 1986.
- , *The Secret Agent*. Harmondsworth: Penguin, 1990.
- , *Under Western Eyes*. Harmondsworth: Penguin, 1996.
- , *The Mirror of the Sea & A Personal Record*. Oxford: Oxford University Press, 1988.
- GoGwilt, Christopher. *The Invention of the West: Joseph Conrad and the Double-Mapping of Europe and Empire*. California: Stanford University Press, 1995.
- Leavis, F.R. *The Great Tradition*. 1948; Harmondsworth: Penguin, 1986.
- Najder, Zdzisław. Introduction. *The Mirror of the Sea & A Personal Record*, By Joseph Conrad. Oxford: Oxford University Press, 1988. vii-xxi.
- Wegelin, Christof. "MacWhirr and the Testimony of the Human Voice." *Conradiana* 7 (1975): 45-50.
- Yamamoto, Kaoru. *Academic Report of The University Centre for Intercultural Education, The University of Shiga Prefecture*. No. 7 (2002) 85-98.

# テオドール・シュトルムの短篇小説『告白』における 夢幻モチーフについて

## The Motif of the Dream-Vision in Theodor Storm's Novella "Ein Bekenntnis"

深見 茂  
Shigeru Fukami

以下の小論は、テオドール・シュトルム Theodor Storm (1817-1888) 最晩年の短篇小説『告白』 *Ein Bekenntnis* (1887) の冒頭部分に現われる夢の中の幻想の分析と解釈とを通じ、この作品理解に資そうとするものである。

### 1. 梗概

1856年6月末、三十歳代終り頃の年令の語り手である「私」ハンス Hans は、保養地ライヒェンハルで学生時代の親友フランツ・イエーベ Franz Jebe に十数年ぶりで逢う。同郷であったが、「私」が法科の学生であったのに対し、彼は医学部に属し、若くして優秀な産婦人科医と認められるようになっていたことは知っていた。しかるに今みる彼の姿は、もう五十歳位かと思まごうほどに老け込んでいたのである。(ここまでがこの小説の「枠」部分となる。)

それから、フランツの寓居に案内された「私」は、そこで彼の、妻に対する安楽死目的の薬殺行為という「告白」を聞く。(これが、本作品の「枠内」部分をなし、全篇のほぼ90%を占めるとともに、この短篇小説の表題が指し示す内容に他ならない。)

すなわち、フランツは開業するや、たちまち町でも有数の名医として知られるにいたるが、やがて友人の弁護士夫妻宅で紹介されたスイス出身の少女エルゼ・フュースリ Else Füllli と結婚する。フランツが彼女に魅せられたのには特別な理由があった。それは彼女こそ、かつてフランツがギムナジウム卒業を数ヵ月後にひかえての10月のある夜、夢の中で見た幻想の少女に他ならなかったからである。事実、エルゼもある時、自分がまだ半分子供だった頃、夢の中であなたに逢った、と主張するが、フランツは懼れのためにこの質問をはぐらかしている。(そもそもこのモチーフは幻想文学や運命劇などで好まれるもので、ドイツ文学では、たとえばクライスト Heinrich von Kleist のドイツ・ロマン派を代表する幻想的騎士劇『ケートヒェン・フォン・ハイルブロン』 *Das Käthchen von Heilbronn* (1808) の筋書きを支える中心的モチーフをなしている。)

さて、まるでフケーの幻想小説『ウンディーネ』 *Undine* (1811) の主人公のごとき (フランツ自身、この有名なドイツ・ロマン派文学の妖精を示唆している) 少女エルゼ (またはエルジ。フランツ自身は、



常にこのエルジという愛称を用いている)との幸福な結婚生活は、四年目の5月、エルゼが子宮癌に侵されていることが判明して破局を迎える。すなわち、肉体的苦痛を最も恐れていた妻が、まさに日夜激痛に苛まれ、ついに夫に対し、彼が所持する秘薬(液体状のものと描写されているが、モルヒネ系統の劇薬と推察される)で、自分の生命を絶ち、この地獄の苦しみから解放してくれるよう懇願する。夫フランツは悩むが結局、妻の意に従う。この事件は、同じ年の秋のこととなっている。町に小児を襲う疫病が流行しはじめたため、あれ以来、心痛のあまり日々を無為に過ごし、久しく助手に任せっきりであった開業医の業務になんとか復帰すべく、フランツは妻の発病以来、放置していた最新の学術雑誌の症例報告を読むうち、自分の恩師が子宮癌の手術に成功したことを述べている論文に逢着する。あわてて日付を見ると、それは妻の発病した頃、つまり妻を殺すにいたるより遥かに以前の発行ナンバーであった。ここでフランツは、自分の行為が単に妻のため死を少し早めてやった、といったようなものではなく、紛れもない殺人者のそれであることを悟る。

皮肉なことにその直後、すなわちハンスとライヒェンハルで出会う三ヶ月ほど前、フランツは一人の中年女性の子宮癌の手術をまさに恩師の方法で成功させ、その患者の娘との結婚話まで出るにいたるが、これを拒否してここライヒェンハルに逃避してきたのであった。

この「告白」を聞いた「私」ハンスは、再会を約して翌朝、再びフランツ・イエーベの宿を訪れるが、彼は既に旅立ったあとであった。残された手紙には、この国を去って遠くへ行く旨、書かれていた。

年月は流れて1884年の秋、東アフリカから二通の手紙が「私」ハンスのもとに届く。一通は、原住民の治療に献身してきたフランツの死を告げる彼地の宣教師の書簡、いま一通は、ハンスに別れを告げる医師フランツ・イエーベ自身の遺書であった。

## II. 安楽死小説として

さて以上述べきたった梗概中に現れたエルゼ(またはエルジ)の幻影の持つ意味については、一体この短篇小説のテーマは何か、という問題と常にかかわって論ぜられてきた。すなわち、この作品のテーマは「安楽死」問題であるとの見解は、著者シュトルム自身の意識をも含め、発表当初より今日にいたるまで根強く主張されてきた。たしかにこの説には我々現代の読者をも、ある程度納得させるものがある。そしてそれは作品成立次第を先行研究(SW., S.1029ff.)に拠りつつ略記すれば、更に説得力あるものとなる。

というのも、シュトルムの言うところを信じるとすれば、彼は発表二年前の1885年秋、既に独自にこのテーマを思いついていたという。しかし、誠に奇異な偶然と論者には思えるのだが、次の日、友人パウル・ハイゼ Paul Heyse から受け取った手紙で、ハイゼが全く同じテーマを『生死を賭して』*Auf Tod und Leben* (擲筆、出版、ともに1885年)<sup>1</sup>なる新作で扱っていることを知り、一旦着想を引っ込める(Vgl.SW., S.1029)。

1885年11月末、シュトルムはこのハイゼの「安楽死」小説『生死を賭して』を通読し、ハイゼにあって手紙(1885年12月4日付)を書いている。この書簡はシュトルムが自分の構想する作品のテーマをどのように考えていたかを窺うのに重要と思われるので引用する。

私は「僕は妻を殺してしまったのだ」という言葉を読んだとき、一人でくすりと笑ってしまいました。というのも、私自身、今年の秋ハンプルクに滞在した折、全く同じテーマを頭にメモしていたからです。ただ重心はいささかずれています。私の場合、夫は医師なのです。状況についてはあなたの小説と同じです。しかし、愛妻の死後、夫が妻の病氣中、目を通すことなく捨ておいた医学雑誌の一冊をひもどいて、ある医学の権威の論文を見付けるのですが、それによれば、なんと妻の病氣の治療法は既に発見されていた、というわけです。さて、これをどのように料理していくかは、未だ考えてはおりませんでした。(Vgl.SW., S.1029)

ここには明らかに安楽死テーマからはみ出してしまうモチーフが提示されている。つまり、そこには近代医学の本質、及びそれを扱う医師である夫の姿勢、という別個の問題が顔を出しているからである。この件は後で触れることとなるので、ここではとにかく示唆するに止めておく。

かくて、自分の着想した素材をハイゼのモチーフの「ふたご」(Zwillingsbruder) とまで呼んでいたシュトルムだが、1886年、一旦それは脇へ置き、『桶屋バッシュ』*Bötjer Basch* と、『分身』*Ein Doppelgänger* の完成に力を注ぐ。しかし1887年、重病の床(胃癌であり、これが結局1888年、彼の生命を奪うこととなる)にありながら、自らの病因におもいをいたしたことも働いてか、3月中旬、安楽死に再び取り組み、5月7日には完成。同21日『告白』との表題名(それ迄は、たとえば、“Die Erzählung des Arztes” とか、“Novella medici”、つまり『医師物語』という仮表題が考えられていた(Vgl.SW., S.1030)。これも我々の論点からは重要と思われるので、ここに記しておく)を含めて出版社に報告、出版社は同23日に原稿を受け取っている。

ところが、シュトルム自身の意識にもかかわらず、この作品をはたして純粋な安楽死小説と定義し得るか、については、実は当初から疑問があった。なによりも、自分の作品のパロディーを書かれた、との先入観をおそらく抱いていたハイゼが、その点でとりわけ厳しかったのである。たしかにハイゼ自身の作品『生死を賭して』は、単純な通俗小説ながら、安楽死テーマに関するかぎり完備している。本論考とは本質的に関わりがあるわけではないが、そこで扱われている問題提起などには、現代の安楽死論議の中に飛び出して来てもおかしくない論述もあるので、あるいは本論の読者にはそちらの方が興味深いかとも考え、註2にその梗概等を記して参考にする。

さて、その彼がシュトルムに対し、安楽死小説としての致命的欠点として指摘したのが、以下二つの点であった。その第一は、先にも触れた、殺さなくても救うことができた、という設定の問題である。以下ハイゼの言葉は、本論分の趣旨に直接かかわってくる内容のものであるので、やや長文ながら引用する。

というのも、不治の病に侵されたものに対し死ぬ手助けをすることは許されるか、という極めて単純な問題の中に、君はその症状が実は絶望的なものではなかったかも知れないという、異質な要素を持ち込んでしまったのだ。だって、そのような可能性は世の常だろう。しかし、もしその点を無視してはならないというのなら、一切の救済行為は許されないこととなるだろう。常に良心のとがめを恐れて、我々は皆、臆病になってしまう。だが、それが君の物語が示そうとしている教訓というわけではまさかあるまい。たとい個々のケースにおいて我々が道義的に許される、



いや、不可避だ、と思ってしたことが、後世、より高度な認識によって実は誤りであることが判明したとしても、我々はやっぱり我々のその時々、の誠実な認識に従って行動することが許されるべきである。エルジは死の苦しみから解放する手助けを夫に要求してよい。そして、はや生命を救うことは不可避と考えている限り、夫は彼女の願いを聞き入れても、正しいわけである。新しい治療法を未だ知らなかったことを夫は良心に恥じる必要はない。どの医師だって正しい方法が発見されない限り、不十分な方法を用いるよりないだろう。知るのが遅すぎたということが彼の生涯の苦しみとなったことは当然かもしれぬ。しかし、彼は自分の生涯を破壊する必要はなかったのだ。自分が、もし類似の立場に置かれても(つまり、不治と考えられている何か他の病気に接しても、という意味である)、やっぱり全く同じ行為に出るだろう、と言明すべきであったのだ。さもなければ、純粋な人間愛に鼓舞されて行なった英雄的な義務の遂行として描かれるべきことが、まるで欠陥行為であったことになってしまうじゃないか。この印象を強めているのが、医師よりもむしろ詩人にこそふさわしい、幾分軟弱な叙情的描写だ。(「甘い(süß)」という言葉が医師の口にのぼるのは奇異に響く。)(Vgl.SW., S.1037f.)

ここからすぐ続けてハイゼは、これと密接にかかわる第二の致命的欠点として、あの幻想モチーフを槍玉にあげるのである。

更に、あの幻想的要素も、むしろ詩人向きだと思うね。あれは、明晰な洞察力を持った自然科学者には異質のものだし、第一、話の筋に何の本質的関わりもないじゃないか。あの部分は単行本で出す時にはなんとしても抹消したほうがいいよ。あれは、いたずらな期待を読者の心に引き起こすだけだ。というのも、センシティブな若い婦人の性格描写のためにも、不可欠なものではないし、医師の人物像には、邪魔になるだけのものだから。(Vgl.SW., S.1038)

後にも触れるように、ハイゼは更に他にも問題点を指摘しているのだが、それは措くとして、以上から、要するにハイゼは、シュトルムのこの作品を安楽死小説としては失敗作であると断じた、と我々は考えて差し支えないのではなかろうか。事実、彼はシュトルムの死後の 1888 年 12 月 29 日、ゴットフリート・ケラー Gottfried Keller に宛てて、自分の作品があるにもかかわらずシュトルムが厚かましくも同じテーマの作品、それも失敗作を、なぜ書こうなどと思いついたのか、理解できない、という意味の言葉を述べてのち、

彼[シュトルム]はしかし、この刃こぼれを誠実に研ぎ直して、あの立派な『白馬の騎手』を書き上げ、今は平安のうちに憩うております。(Vgl.SW., S.1041)

と締めくくっているからである。なお、ハイゼが、いかなる洞察からか、その攻撃の根拠である第一の治療法の発見のモチーフと、第二の幻想モチーフとを、医師の資質描写の不整合性という点で有機的に結びつけて叙述している点に、我々はここで注目しておきたいと思う。

さて、ではやはり、この作品は安楽死小説としては失敗作であったのだろうか。これを判断するに

当たって注目すべき論文が近年、日本で書かれている。それは、田淵昌太著「病苦と生命の尊厳と——『告白』(シュトルム)変奏曲としての『高瀬舟』——」<sup>3</sup>である。この論文は、『告白』と森鷗外の『高瀬舟』を対比させて安楽死問題を論じた、一種の比較文学論であるが、田淵は十九世紀末ドイツにおける安楽死是非論議と鷗外との関係から説き起こしつつ、そもそも現代における安楽死の条件とは何とされているか、を五項目に要約し、それらに照らした場合、『告白』においてはとりわけ、①不治の病ではなかった、②密室で行なわれた、の二点において、安楽死の条件を満たしていない、と断じ、「安楽死問題という側面から読むかぎり、こうした不満が『告白』に付き纏っていることは否めない」<sup>4</sup>としている。つまり、現代的視点からも、この小説はやはり安楽死小説失敗作であるらしい。<sup>5</sup>

それゆえ、『告白』研究者も、本来もっと早く安楽死問題の呪縛を脱し、新しい作品解釈の道を模索することに努めねばならなかったと思われる。事実、シュトルム自身、ハイゼに対し、こう言っているのだから。

不治の病に侵された者を死へ送り込む手助けをすることは許されるか、というのが君の問題だが、それは私の問題ではない。私が描きたかったのは、「いかにして人は最愛の者を殺すにいたるのか」と、「それを犯してしまったのち、人はどのようになって行くか」ということなのだ。  
(Vgl. SW., S.1039)

そこで人々は、作品中に一度現われる、主人公の言葉「生命の尊厳」(Heiligkeit des Lebens) (SW., S.629) に飛び付いた。すなわちこの段階で、プロットにおいても心理描写においても、あれほどまでに緻密に積み上げられてきた主人公の安楽死決行の道筋が、一気に無視され、安楽死こそは、主人公が犯した許すべからざる人命への犯罪とされる言葉が主人公の口から述べられるにいたるからである。

「この新しい手術法によって多分エルジの生命を救うことができたかも知れないのに彼女を殺してしまった、ということはもはや僕の重荷ではない。僕が背負っているものはもっと重いもので、余りに苦しいので、できることなら大地の果てまで担いで走り、宇宙空間へ投捨ててしまいたいほどだ。聞いてくれ、ハンス。ほとんどの医師が気付いていないことがある。生れながらの医師だと君たちが考えてくれている僕も知らなかった。そのために犯罪者となるまでは。」  
(SW., S.629)

つまり、ここでシュトルムの安楽死小説着想の最初から存在した治療法の調べ忘れに起因する苦悩というモチーフの意味も捨象されてしまう。そして「生命の尊厳」の賛美となってゆくのである。

彼は息をついた。「それは生命の尊厳だ」と彼は言った。「一切の上に輝き、その中で世界が興亡する炎、それこそが生命なのだ。この神秘の世界に対しては、いかなる人間も、いかなる科学者も、死の為にするかぎり、手を触れるべきではない。なぜなら、その手は、殺人者の手と同様、汚れたものとなるからだ。」(SW., S.629)



また、「私」ハンスが、フランツの親友である弁護士のレンテ夫妻 die Lenthes が素朴な少女との再婚による精神的治癒を願った話に触れると、

「ペッ、ペッ、あんな気高い子を、治癒の道具に貶めるなんて、更に新しい犯罪を犯すことに他ならないよ」(SW., S.629f.)

と、ちょっとハイゼの作品の結末を風刺したかのごとき言葉を主人公に吐かせて、作者シュトルムはこの長大な告白を結ばせている。その後フランツは、既に梗概で述べたように、自らは無神論者ながら、アフリカにおける原住民への医療奉仕に残る半生を捧げる。生命の尊厳を讃え、人類愛を説くリアリズム小説と化した『告白』を前にしては、もはや幻想モチーフの入りこむ余地はない。

二十世紀中葉、シュトゥッケルト Stuckert によって書かれた代表的シュトルム評伝<sup>6</sup>における『告白』論評の言葉が、幻想モチーフを完全に断罪しているのも当然かも知れない。彼は、生命の尊厳に対する罪は、まさにその生命への生涯にわたる奉仕と犠牲とによって贖われるべきものであることをシュトルムは示した、とし、従って幻想によって結ばれたフランツとエルジのモチーフについては、

[……] このような、そのかみの物語[幻想モチーフを指す]は、「厳格な基本構想」にとって欠点であるのみならず、この箇所から小説の中へ、ある異質な精神が流入し、明晰で厳しい基調を感傷的な霧の中に溶解しかねなくしてしまっている。<sup>7</sup>

と述べているからである。

こうして我々は、『告白』安楽死小説説の否定は納得させられたとして、しかし同時に、治療法見落しのモチーフも幻想モチーフも、全く無意味な存在、否それどころか、作品の純粋性を混濁せしめる余計な邪魔ものと化してしまったという結論にも直面させられることとなるのである。つまり、このことは極論すれば、『告白』という作品はシュトゥッケルトも認めざるを得ないように、「シュトルムの真のリアリズム芸術」が晩年にいたっても、「様式にそぐわぬ形式諸要素」<sup>8</sup>の異常繁殖によって覆われてしまう一典型、つまり失敗作である、ということであろう。

### III. 母性世界と父性世界の葛藤小説として

果たして幻想モチーフは、そんなに作品様式をいちじるしく傷つける無用の長物であろうか。このモチーフにシュトルムが(賢明にも)最後まで固執したいきさつを略記する前に、問題の場面のエッセンスのみを引用しておこう。

学生時代に「私」も訪れたことのある、フランツの生家の裏庭には、何十年来、荒廃したまま放置されている工場跡の建物と、それに隣接する倉庫群にかこまれて養鶏場があった。このあたりのシュトルムの描写はまさに迷宮的で、何度読んでも正確に読者の脳裏にイメージとして再現できないほどである。いずれにせよ、この養鶏場を見下ろすことのできるほど高い所に開いているたった一つの窓

を持つ泥炭置場用の建物が、幻想の舞台なのである。ただし、その窓から養鶏場を見下ろすには、古い箱をいくつも積重ねなければならなかったという。またその頃、町では猩紅熱が大流行しておおぜいの子供たち、とりわけ男の子が死亡していたとのことで、フランツによれば、彼の夢幻はその影響もあったという。季節は晩秋の頃である。

「十月の夜のことだ」と彼〔フランツ〕はまた語り始めた、「僕は長いあいだ眠れずにベッドの中で寝返りをうっていた。[……]僕は〔夢のなかで〕あの泥炭置場の小屋で、箱を積重ねた上に立ち、暗い窓から誰もいない養鶏場の中庭を見下ろしていたのだ。起きている生き物など、未だ一つとして居ない冷たい早朝であった。空も静かで、中庭は広漠たるものであった。一体どこから現われたのか、突如、僕の正面の、中庭の中央に何かを見たのだ。大地から立ち昇るように見えた霧の中に——いつか、蒸し暑い真夏の晩、墓地の新ぼとけの墓丘の上に同じようなものを見たことがあるような気がした——互いに寄り添うようにして、一群の少年たちが立っていたのだ。腕を垂れ、頭は力なく肩に斜めに傾げて乗せた姿で、眼は全く見えなかった。しかし、僕の眼差しは彼らに注がれてはいなかった。少年たちの中央に、彼らより少し背が高く、十三歳くらいの一人の少女の姿が立っていたからである。何の飾りもないねずみ色のワンピースが首もとにまでのびており、そこで紐で締められていた。きれいな子というわけでは必ずしもなかった。やや淡いブロンドの髪が少しもつれて小さな頭のにっていた。しかし、彼女の顔の上品で、はっきりとした表情の中から、一對の淡灰色の眼が、黒いまつげの下から、じっと僕の眼をみつめていたのである。けっして忘れさせまいとでもするかのように、脇目もふらず、憧れの思いをこめて。その眼は筆舌に尽くしがたい同情をこめて僕をみつめていた。身も心も焼きつくような歓喜に襲われた僕は、この眼差しのもとで死にたいと思うほどだった。『君はだれ。どうしたいというの。今まで見たこともないほどやさしい人！』だがそれは僕の心の中の叫びに過ぎなかった。言葉は考えだけに留まった。僕はこの神秘的な少女の姿を見失うのがこわかったし、実際、しゃべることなど出来はしなかったろう。

その時、彼女の顔が次第にはやけてゆくように思えた。ただ彼女の眼差しの光だけは一層強く、そして、僕にはそう思えたのだが、一層不安げに僕に迫ってきた。だがすでに一切ははやけて行った。そこで僕は気力をふりしぼり、まるで自分の生命が奪われようとでもしているかのように叫んだのだ。『行かないで、ああ、行かないで、いったい君は誰なのか言っておくれ、ああ、言って、言って！』

なお暫らく待っていたが、消えゆく霧の中から一つの吐息が僕のところに戻ってきたような気がしたのち、一切は静寂と無に帰してしまった。混乱した叫びが聞こえたように思ったが、それはすぐ判ったように、実は僕自身が発した叫びだった。そして目が醒めた。[……]」

(SW., S.587f.)

長くなるので以下は省略するが、実にこの場面（ドイツ・ロマン派に頻出し、十九世紀末以降となればごく一般的に用いられる意識下世界叙述の手法なのだが）が、当時は発表直後からシュトルムを苦しめることとなってしまった。友人の誰一人として、これを評価してくれる者はいなかったからであ



る。すでに第Ⅱ章においても触れたように、ハイゼがその急先鋒であった。シュトルムは「この夢幻的な前置きの物語はたしかに余りに強烈で、これによって読者にさらなる展開を期待させてしまう」<sup>9</sup>ことを認め、「いずれ少し和らげるように努力する」<sup>10</sup>と弁解するのだが、ハイゼは追求の手をゆるめず、「この夢幻的な前置きなど必要ない、と自分で認めているのなら、なぜ残しておくのだ。そんなものを削ぎ落とすことなどわけないじゃないか。その手術では一滴の血も流れない。そして単に余計者であるだけでなく、障害物でさえあるような非芸術的枝葉を切取することで、作品の構成を身軽なものにできるわけじゃないか」<sup>11</sup>とまで言う。そしてシュトルムは遂に、エーリヒ・シュミット Erich Schmidt に対し、これを「失敗」(Fehler)である、と認めてしまう。「『告白』[……]には失敗があります。どうも寄る年波の所為らしい[……]」<sup>12</sup>そして、シュトルムは、自分としては、「エルジの性格に実によくマッチした場面だと思った」<sup>13</sup>と弁解しつつも結局、ハイゼの批判を是とし、「しかし、それ[この幻想場面]は読者の心に、実現しない期待をひきおこしてしまっています。これは失敗です」<sup>14</sup>と全面降伏している。

ところが他方、シュトルムは頑として最後まで、この場面を削除しなかった。どうしてであろう。実際問題としてこのモチーフは、作品の最終場面にいたるまでさまざまな伏線や暗示によって有機的に継続されており、そう簡単に最初の場面だけ削除すれば済む、といった性質のものでないことも事実なのだが、シュトルムがここまでやり込められ、自らも非を認めながら尚且つ絶対譲らなかったことの中に、単にそうした技術的面倒さのみではない、作品の本質的テーマに根ざした理由が、このモチーフにはなにかひそんでいるのではないか、ということに本来すべての研究者たちは、まず思いいたるべきではなかったか、ということが考えられよう。

そこで、その方向からこの作品を一貫して解釈しようとした最初の仕事が、本章で何度か引用を借用してきた、ヤン・U.テルプストラ Jan U.Terpstra の『無意識世界の原型的表現としての、シュトルムの小説「告白」における幻想性と民族童話性のモチーフ機能』*Die Motivik des Visionären und Märchenhaften in Storms Novelle "Ein Bekenntnis" als archetypischer Ausdruck des Unbewussten*<sup>15</sup>であろう。ユング心理学の学説上に立論されたこの論文でテルプストラは、『告白』を「ウンディーネ・モチーフ」を体現したものとの仮説を論証しようとする。そのために女主人公エルゼ・フュースリの大伯父に当たる画家ハインリヒ・フュースリ Heinrich Füßli が描いた絵画『夢魔』*Die Nachtmahr* (1781) や、『ウンディーネ、漁夫夫妻のもとにきたる』*Undine kommt zu dem Fischerpaar* (1822)、さらには主人公フランツが傾倒していたロマン派の神秘的哲学・心理学者ペルティ Joseph Anton Maximilian Perty やダウマー Georg Friedrich Daumer、またシュトルムが親しんでいたオーケン Lorentz Oken やカールス Carl Gustav Carus までもが援用される。登場する猫や蝶ら、小道具の象徴的意味も見逃さず拾われてゆく。論旨は、要するに女主人公エルゼが、異界より人間界に入り、主人公と結ばれたのち、再び異界へと去ってゆく民族童話的筋書きが『告白』の真の主要構成要素である、とでも纏め得よう。なお、ここで女主人公の出自とされる異界とは、ユングをふまえて解釈されるから、冥界であると同時に原母 Urmutter の国でもある。つまり新プラトン主義的に考えれば全存在とでもなろうから、虚無の世界であり死の世界であると同時に、一切の母体であり、生殖の源ともなろう。すべての個別存在の出自であると同時に、帰り行く国でもあるわけである。従って、そこより来たり、そこへ帰りゆくウンディーネ・エルゼは、「自然」であり、「母」であり、「女」であり、ポスト構造主義理論の用

語を使えば、「カオス世界」であり、「セミオティック世界」とも呼ばれ得る存在であろう。なおテルプストラはユング派らしく、あくまでも主人公の人格的自立に焦点を合わせつつ論を展開してゆき、最後も、女主人公の死後、主人公は冥界の呪縛から解き放たれるけれども、結局、死を前にして再びウンディーネ・エルジに迎えられて「自由への門」へと永眠してゆく点に、少年時代の夢幻と、老人の幻想との間に、人格的独立を導く妖精出現の発端と結末の継続性を認め、この小説における夢幻モチーフの構成上の一貫性を主張しているのである。方法論的に徹底してユング学説を遵守していると思われるため、いささか追隨しがたいところもあるけれども、テルプストラによって切りひらかれた道筋、すなわち『告白』分析を「夢幻モチーフ」を中心テーマとして行なおうとの方向の提示に力を得、我々も我々なりの考えかたで、「母性」と「女性」世界の代表とされる女主人公エルジを中心に据えつつ、この道筋を更に追ってみたいと思うのである。

するとまず、この夢幻場面にすぐ引続いて明瞭にこのモチーフが作品を支える中心テーマであることを暗示するエピソードが用意されていることに気付くのである。すなわちそれは、この夢幻体験が紛いもなく思春期にある少年の女性的なるものに対する性的初体験として描かれていることである。しかもそれは明確に主人公フランツの「男性世界」と敵対し、これを崩壊させようと忍びよる力としてである。すなわち、校長の寵児的存在であることに象徴されるように、成績最優秀のギムナジウム生徒であったフランツが「夢幻体験」以降、にわかに注意散漫な問題児になってしまう。あの日、未だ夢心地で登校したフランツは、

僕たちのクラスである最上級生の教室へ通じる階段の踊場まできたとき、思わず立ち止まり、なにか支えはないかと手摺りをつかんだのだ。夜の少女の眼差しが再び僕を見つめていた。女というものの秘密が突然判ったような気がしたのだ。下から誰かが昇ってくるような足音が聞こえた。校長の足音だと判っていた。彼の厳しい目が僕にむけられたのを感じた。[……] (SW., S.589)

という有様となるが、辛うじて卒業し、大学に入る。少女のイメージは彼の心をひとときも離れることはなかったけれども、ここで彼は医学という科学の世界、つまり文明社会、それゆえ、「男性」世界、「父性」世界、「象徴秩序」、「サンボリック」世界に踏み止まる。事実、主人公フランツ・イエーベは、

学生時代からすでに同僚たちから権威とみなされていた数少ない連中の一人であり、そのことは彼の場合、特に内科学に関しては大方の教授たちからもある程度まで認められていた。最後の年などは、婦人科臨床の助手として、もう匙を投げられていた手術を見事に成功させたこともあった。(SW., S.581)

また、世間の評判は、優秀ではあるが、「傲慢」 hochmütig (SW., S.582) とされ、同僚たちには敬遠され嫌悪すらされていた。つまり、まさに出世街道を驕進する、「父性」社会、「男性」社会の旗手だったのである。

その彼が、「夜の幽霊 [エルジ] と結婚して」 (SW., S.594) 以来、「女性」世界が再び主人公の世



界に介入し、その支配力は舞踏会の夜に頂点に達したのち、再び「男性」世界との葛藤を経て、排除されてゆく。そしてその葛藤と排除は、「苦痛」と「流産」と「子宮癌」という形をとる。

すなわちまず、医師や弁護士という、当時の「男性社会」を代表する者たちは、「すぐに頭を使わねばならぬので、同情心など無くなってしまう」(SW., S.596) 存在であることが提示され、「苦痛」に対して鈍感化する原理が主張されるのに対し、「苦痛」を最も忌み嫌うエルジが、男性と同じ感覚を身につけるべく末期癌状況にある老女の看病に当たろうとして自滅するエピソードにより、エルジが男性社会に同化し得ぬ存在であることが暗示され、次に、エルジに「結婚一年目に流産があり、その衰弱はあとをひいた」(SW., S.607) ことが暗示されて、エルジが更に母性として男性社会の期待に対応し得ぬ存在であることが示唆され、そして最後、遂に「子宮癌」罹病が判明することにより、ここに決定的に「苦痛」に耐え得ず、「生殖」に耐え得ず、「生存」に耐え得ぬ存在として、主人公により、冥界へと送り返されるのである。特にこの最後の「子宮癌」判明の場面は、主人公フランツが、エルジに代表される「母性世界」、「女性世界」の呪縛から脱し、これを支配制圧、ついに再び「男性世界」、「父性世界」の秩序の自律原理へと復帰することを象徴する重要な場面であるので、是非ここでつぶさにテキストに沿って触れておかねばならないであろう。

ところが残念なことに、ここにもハイゼの介入があつて単行本として出版された際、改訂が行なわれ、現在流布しているテキストも、このシュトルムの最終意志を尊重しているため、はなはだ曖昧な形になっている。すなわち、

「少し痛むわ」と彼女は言った「でもまだ怖くなんかない。」

しかし、僕はその答には満足しなかった。「いいかい、エルジ」と僕は言った「その痛みがどこから来るのか診させておくれ。痛みがひどくなる前に押さえておこなくっちゃ。」——おお、ハンス、僕が彼女の体に手をのばした時、神に祈るような気持ちだったと思うよ。彼女は答えず、ただ小さく首肯いただけだった。突然、——こんなことは、僕は自分の仕事上はじめてのことだった——僕の手が震えはじめたのだ。エルジは驚いたように目を見開きさっと僕の目に見入った。「癌だ」と僕は心で思った。この思いに僕は戦慄した。どうしてこんな恐ろしいことがよりによって自分のまだこんなに若い妻の身に起こらねばならないのだ。当時、この病気は専門の世界では絶対不治とされていた。[……] (SW., S.608)

しかし、1887年10月、『ヴェスターマン月刊誌』に載った最初の印刷本等では、上記引用文二行目半ばの、»「いいかい、エルジ」とぼくは言った«以降から、»突然«までの間のテキストは次のようになっていた。

[……] そこで再び僕の診察の手が——その手は夫のそれではなく、医師のそれであつたが——この美しく若い女体の上を滑って行った。突然 [……] (Vgl. SW., S.1046、圈点論者)

つまり、この「夫としての手」ではなく「医師としての手」が女体をまさぐるという、まさに我々が期待した通りの描写に、ハイゼは著しく気分を害したのである。

「夫としての手ではなく、医師としての手が」、という箇所だ。私にはこの箇所が私以外の他の読者にもきわめて不快感を与えなかったとは思えない。夫であり医師である男が自分の重病の妻の裸体を診察する場合に、これは欲情に満ちた愛撫なんかではございません、などということをおぼろげに断る必要などあるかね。この箇所で、官能性を問題にすることなど、そもそも許されることか。(Vgl.SW., S.1039)

と述べたのち、その上そもそも内診も行なわない、こんな外部診察の仕方ですら子宮癌の診断なんぞできるものではない、とか、こういう婦人病の診察の詳細の描写には慎重を要する、とか、いろいろ非難や忠告を並べてから、さらにもう一度、上記の問題に立ち返って次のように論難している。

まるでこの医師が欲情にかられ、余計なところへ手を延ばして己れの妻の秘密の魅力の箇所をまさぐったのではないか、という疑いを、はっきりと晴らしておいてやらねば、などと君が考えたことで、君は自分が描いている医師の像をひどく貶めてしまった。この箇所に関するかぎり、どういうわけか、君と私との感覚は全く乖離してしまっているね。(Vgl.SW., S.1040)

しかし、「母性世界」に支配されていた「父性世界」が、今やその呪縛を脱し、「母性世界」を制圧抹殺し去って、独立専行しようとする意味をこの場面から読み取ろうとする我々の立場から見れば、まさに「夫[＝女性世界に隷属した存在]としての手ではなく」、「医師[＝文明と男性世界を代表する専横者]としての手によって」、フランツがウンディーネ・エルジにいま触れようとしていることが明示されているこの言葉こそ、ここに物語全体の最重要な転換点が訪れたことを示唆するものに他ならないのであるから、旧版のテキストこそがテーマに本当に忠実な描写であった、と言わねばなるまい。それゆえ、我々の解釈の立場からすれば、ハイゼに対し、彼の言葉をそのままそっくり熨斗を付けて返上し、「この箇所に関するかぎり、どういうわけか、君と私との感覚は全く乖離してしまっているね」と宣言し、雑誌記載の原テキストの復活をここに要求せざるを得ないのである。<sup>16</sup>

もちろん、シュトルムがハイゼの難詰にあっさりと応じてしまったことから判る通り、以上の「苦痛」、「流産」、「子宮癌」のプロセスは、主人公の意識においても、作者シュトルムの意識においても明確化されたものではなかった。これが、この作品を理解困難にしているのである。そのあたりを説明するために、たとえば、マリアンネ・ヴュンシュ Marianne Wunsch は 1992 年、『リアリズムの境界線上でのシュトルムの諸実験。「沈黙」と「告白」における様々の新現実』 *Experimente Storms an den Grenzen des Realismus: neue Realitäten in "Schweigen" und "Ein Bekenntnis"*<sup>17</sup> なる論文のなかで、この『告白』という作品はシュトルムがリアリズムに関して著述した一種のポエトロジー、つまり詩論ないし文学論文である、と主張する。すなわちシュトルムは、リアリズム主義世界の現実に忠誠を誓いながらも、やがて来たるべき心理小説ないし意識下世界を描く文学の時代到来を予感し、その要素をあの「夢幻モチーフ」として作品劈頭に据えたのち、主人公フランツをして、女主人公エルジの「フランツ、私たち、以前に逢ったことがあるでしょう」との言葉で始まるオカルト世界の呼び出しを封殺させ、旧リアリズム世界の「道徳的自律性」 *moralische Autonomie*<sup>18</sup> を回復させて結ん



でいる、とヴンシュは考えるのである。そして本論第Ⅱ章でも触れた、ハイゼに対するシュトルムの、自分は、人はどうして最愛の者を殺すにいたるのか、を書きたかったのだ、との言葉を引き合いに出し、シュトルムが、危険な新現実の世界を提示しておきながら、結局は旧リアリズム世界の道徳的自律性に忠誠を誓い、新現実という最愛のものを否定してバランスを保ったのは、『インメン湖』の場合同様、エロスの世界に足を掬われなくなかったからだ、と結論する。つまり一言で纏めれば、オカルトな世界を提示しておきながらそれを否定し、その世界の代表たるエルジを抹殺することによってエロスの世界の呪縛を脱し、以て旧道徳的自律性の世界を回復して、シュトルムはこの小説を結んだ、というわけである。

彼女のこの論文のミソと、同時に問題点は、『告白』を一種のポエトロギー、つまり詩作することを通じて、自らが詩作することの意味を思索する、そういう作品である、という設定に逃避することによって、我々が今まで難渋してきたこの作品内在の諸矛盾や諸々の不整合性を正面切って分析解釈する作業からうまく離脱してしまった点にあらう。多くの言説分析手法の論文共通の特徴である。しかしながらヴンシュが、エルジを抹殺することによって主人公フランツは「母性」ないし「女性」世界の呪縛を脱したと主張する点ではテルプストラとも、また我々とも同じ見解であることには違いない。要するに『告白』は、作品内在解釈に徹するかぎり、はなはだ不統一に見えながら、ある種の作品外在要素を尺度として導入すると、きわめて高度な現代小説的相貌を現わす作品のようである。

その視点から見ると、シュトルムがハイゼの『生死を賭して』に比しての、自分の小説の独自性として強調した、子宮癌手術開発のモチーフは、にわかに重要な意味を持ち始める。すなわち、すでに第Ⅰ章の梗概の項で述べたように、主人公フランツはエルジの発病への対応にかまけて、エルジを殺す二週間も前に到着していたにもかかわらず通読を怠っていた医学専門誌の中に、自分の恩師にあたる斯界の権威が、手術による子宮癌治療をすでに開発していたことを知り愕然とする、という、おそらくシュトルム自身にとっては、主人公が医師であるとの設定と並ぶ、今一つの最も重要なモチーフのことである。その論文には書かれていた。

「今日まで [……] , この病気は絶対に致命的と考えられてきた。しかし、私は以下に一つの処置を報告することができる。それによって、私は五人の女性のうち三人に生命を取り返させて家族の手に返すことが可能となったのである。」 (SW., S.619)

ただし、「病巣を持った器官 [子宮] はメスにより完全に切除されなければならなかった」 (SW., S.624) のである。そして事実フランツはのちに他の女性患者にこの手術を実行し、成功する。これは近代医学の勝利であるが、我々の論旨のコンテクストでこれを表現し換えるならば、文明、すなわち「表象秩序」の世界、「サンボリック」世界による支配に他ならない。エルジを抹殺することによって、今や完全に「女性」世界の呪縛を脱し、「父性」ないし「男性」世界の英雄として復帰してきたフランツは、今、子宮摘出にとりかかることによって、改めて「母性」世界の制圧に、勝利の雄叫びをあげながら本格的に乗り出したのだ、とでもなろうか。なぜならば、

子宮摘出は、今世紀 [二十世紀] にはじまったことではない。これらは基本的に、女性に対する

刑罰の一種であり、女性の行動を管理する道具であり、女性という性に対する男性の恐怖を祓い清める儀式であり、女性を支配しようとするものである。<sup>19</sup>

との見方もできるからである。事実フランツの父性世界は、いよいよその本領を発揮して、ついにヨーロッパ帝国主義の走狗と化してしまう。すなわち、贖罪と称して自ら東アフリカの植民地に乗り込み、医療行為という方法によって原住民を支配し、キリスト教布教を口実に同じく原住民支配に加担している宣教師と結託して、ドイツ植民地政策の円滑な実施に多大の貢献を果たすため、その生涯を捧げたからである。我々はここで、図らずも二十世紀にいたって、自分たちが収奪し植民地化したアフリカの住民たちを、自分たちよりも一段劣った兄弟として扱いながら、「生への畏敬」(Ehrfurcht vor dem Leben)を標榜し、医療行為に従事した、一人の著名な人物を想起せざるを得ない。フランツの姿はその予見的造形であったのだろうか。

それはともかくとして、「母性世界」の呪縛を解かれ、「母性世界」を圧殺し、ついに暴走を始めた「父性世界」の末路である二十一世紀社会の劈頭に立つ我々は今、小説『告白』をこのように分析解釈する時、シュトルムの洞察力に驚嘆するのであるが、先に紹介したヴェンシュは、その論を次のような言葉で締め括っている。

シュトルムは、同時代の人々や作家仲間の人々と同様、自分のなした行為の意味をほとんど意識してはいなかった。しかし、彼はそれをなしたのである。その点にこそ、この両テキスト〔『沈黙』と『告白』を指す〕の業績が存する。(強調原著者)<sup>20</sup>

さて、最後に、あの作品の劈頭の夢幻場面に戻ろう。少女エルジは理解できたとして、彼女を囲む哀れな少年たちは何を意味するものであったろうか。フランツ自身は当時流行していた猩紅熱で死んで行った町の少年たちの幻想と考えていたようであるが、ここまで作品解釈をしてきた我々の視点からすれば、それ以上に、彼らこそは、エルジが生むべくして生み得なかった少年たち、または、自分の子供ではないけれども、エルジが我が子とすることのできた少年たちをも意味してはいないであろうか。なぜならば、さきにその解説を引用した書物の編纂者、ダラ・コスタも次のように述べているからである。

最後に、私の場合、半生を子供を持てずに泣いて過ごしたとすれば、今は何千という子供が世界にいたと言わなければなりません。肉体的な母親だけでなく、精神的な母親もあることを知りました。<sup>21</sup>

今日、ハイゼの『生死を賭して』を読む者など誰もいない。すでに第Ⅱ章でも見たように、日独の安楽死小説に関する比較文学研究者でさえ、どういうわけか触れようともしない。否、そもそも1910年度ノーベル文学賞受賞者パウル・フォン・ハイゼの作品など、もはやドイツ文学史上からさえ消えようとしている。しかし、そのハイゼが失敗作と口を極めて難詰し、された御本人も毫碌による失敗作と認めたはずの、シュトルムの『告白』は今日もなおその魅力を失わない。つまり、『告白』は、



まさにその構成上の破綻ゆえに未来に向って開かれた視点を保持し、今日の読者を魅了する現代性と古典性とを獲得した作品ということとなろう。

テキスト：Theodor Storm, *Sämtliche Werke in vier Bänden*. Hrsg. von Karl Laage und Dieter Lohmeier. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main; Band 3: *Novellen 1881-1888*. Hrsg. von Karl Ernst Laage, 1988; S.580-633. (Zit. als SW.)

## 註

<sup>1</sup> Paul Heyse, *Auf Tod und Leben* (1886). In: P.H., *Gesammelte Werke*. Olms, Hildesheim usw. Reihe 4, Bd.1: *Novellen und Erzählungen 1850-1886*, S.[457]-[513]. Nachdruck der Ausgabe Berlin 1850 und Stuttgart 1904-1910. 1995.

<sup>2</sup> 時代はこの小説が書かれた時と同時代の設定と思われる。季節は夏、舞台は東スイスの村クロースタース。この保養地の二つのホテルの一方に住むリュディガー大尉は、今一方のホテルに住むリュシル・フォン・ベルニンゲン嬢とその父親である老男爵の父娘と親しくなり、毎日のように三人そろってスケッチや遠足に出掛けているうち、当然のごとく、リュディガーと娘リュシルは恋におちいる。母親亡きあと、子供のような父の面倒を見て今日まで独身で過ごしてきたとのリュシルの告白を受けたリュディガーは、しかし、彼女にあて、自分もリュシルを愛していること、七年前に妻を亡くし、一人遣された娘は学校の寄宿舎に入れてあること、自分もリュシルと再婚して彼女を幸福にする自信のあること、にもかかわらず、ある口外できぬ理由から求婚はできないので、ここを去る、との手紙を残して、ダヴォスに向け出発する。しかるにある手違いから早めにその手紙を読んでしまったリュシルから、お別れの前に最後の散歩を今までのように三人でいたしましうと迫られ、ついに、ダヴォスへの道を途中までリュシル父娘と一緒に歩くこととなる。途中、父親のほうに泥に足をとられ、二人を置いて先に下山してしまう。かくて二人きりになったところでリュシルに、あの手紙の中の口外できぬこととは何か、と迫られ、リュディガーは告白する。

すなわち、戦傷を癒すため、知人宅で療養中、その家の娘マリーアを知り染め結婚、一人の娘をもうけたが、自分が再び出征している何ヶ月かの間に、妻は村の妊婦の出産の手伝いに嵐の中を駆け付けたことが原因でリュウマチ熱を発し、心臓疾患を患い重態となっていた。窒息の発作に絶えず苦しめられ、この病気の不治なることをある名医の診察の際の態度から察知した妻は、その苦痛から逃れるため、夫に殺してほしいと懇願する。リュディガーは三日間ためらったのち、願いを叶えてやる。方法はモルヒネであった。村の医師は、痙攣発作による神経性ショック死と診断。以来、リュディガーは退役し、学問に没頭するうち、罪人としてではあるが生きること慣れてしまって現在にいたった、という次第。

この告白に対し、リュシルは、あなたの奥様は幸せ者である。なぜならば、あなたと「生死を賭して」（なお、この表題となったモットーは作品中、計三回現われる）結ばれた仲だから、と夫婦

を讃えたのち、安楽死肯定論を一席ぶつ。現代読者にも、ここだけは十九世紀安楽死論として、いささか興味深いと思われるので、以下に引用しておく。

打ち明けて申せば、今まで医師たちが、おのれの手の下で無惨にのたうちまわっている、もう助かる見込みもない生命を、ありとあらゆる技術と努力を費やして、さらに一週間でも、一日でも、いや一時間でも生かして苦痛を引き伸ばすのを自分の義務だと思い込んでいるのを見ますと、訝しく思わないではおれませんでした。だって、それはもはや生命の価値をすべて失った、哀れな存在をいたずらに生き長らえさせるだけなのですもの。それはまるで、もう息の絶えようとしている死刑囚の生命をなんとしても引き伸ばそうとする努力が誇示されているようなものでしょう。これこそ、私たち人間社会に巣食う最も残酷で無思慮な偏見の一つではございませんか。動物が苦しんでいるのを見れば、すぐさまその苦しみの時を縮めてやろうとします。蝶が哀れにも蠟燭の灯で身を半ば焼いてしまったりしたら、私たちはすぐさま不具な生命から解放してやるでしょう。それなのに、私たちにとって一番愛しく近しい人たちが、断末魔の苦しみにのたうち回っているのを、何もできずに傍観していなければならぬどころか、絶望の瞬間、自から苦しみを終らせることができそうな一切を、彼らの手近に置かぬようにさえします。普段はほんのちょっとした痛みでも治してやろうとするものでしょう。皮膚に刺さったトゲなら慎重に抜いてやりますのに、耐えがたい最大の痛み、つまり、本人はもう死にたいのに死ぬことができないでいる痛みに対しては、一切同情を示せないのです。たしかに医師は自己判断で生命を絶つ権利があると思ひ上がることは許されないでしょう。そんなことをしたら、次々と乱用されて大変なことになるでしょうから。でも、たとえば友人にしろ夫にしろ、そのような奉仕を引き受ける責任を負う勇気を持てるはずの者が背を向け、卑怯な利己心から無為の同情心の淵に沈んでしまうなんて。私は何度もこの問題についてあれこれ考えたあげく、次のように思って心慰めるよりなかったのです。つまり、いつの時か、来たるべき時代が、ちょうど他の迷信の場合と同様、この呪わしい迷信を一掃してくれるだろうと。でも今の時代に既にその問題で自分の愛と良心にのみ従う勇気を持った人が現われたら、どうしてあなたがおっしゃったみたいに、その人を憎み嫌うことがあり得ましょう。むしろ、感嘆し、そのようなかたを我が友と呼ぶことができることを幸せと思うべきです。(S.[492f.])

さて、しかしリュディガーは、迫る女に対し、自分の運命に巻き込むことはできない、と拒否、二人で下山にかかる。このあたりから、女の策略により物語は喜劇の様相を呈してくる。すなわち、下山途中、リュシルは足を挫く（挫いたふりをしてみせる）。そのため二人はその夜、山腹にある農作業用の丸太小屋に、階を隔てて同宿することとなる。そしてこの珍事により女性としての評判に傷がつくことを心配して、リュシルのホテルに舞い戻ってきたリュディガーの求婚により、二人は結ばれることとなる。すなわち結末は次のようなものである。足を挫いたことが嘘であったこと、山小屋の同宿への期待、それでもなびかねば同宿による世間の悪評への期待、と二段、三段に設けられたリュディガー誘惑の試みをリュシルが告白。すると、それほどまでに自分を好いてい



てくれたか、と男が大感激にて女をかき抱いて熱い接吻を交わしているところへ、父親も入ってきて二人を祝福、めでたしめでたし、という次第である。

<sup>3</sup> 日本独文学会中国四国支部 『ドイツ文学論集』 第35号(2002年10月) 84-93頁。

<sup>4</sup> 同書 87頁。

<sup>5</sup> なお、田淵論文の結論は、鴎外の『高瀬舟』の「影には、鴎外自身の体験と、『流入の話』と、そしてもうひとつ、シュトルムの『告白』とが存在しているのである」(92頁)となっている。この論文の問題点は、鴎外が『告白』を知っていたとの論拠は何か、という点と、なぜ『告白』よりもハイゼの『生死を賭して』と鴎外との関係の可能性(そのほうが蓋然性は高い、と論者は推測するのだが)に触れなかったのか、という点である。

<sup>6</sup> Franz Stuckert, *Theodor Storm. Sein Leben und seine Welt*. Carl Schönemann, Bremen o. J. (Copyright 1955).

<sup>7</sup> *Ebenda*, S.397.

<sup>8</sup> *Ebenda*.

<sup>9</sup> Vgl. Jan U. Terpstra, *Die Motivik des Visionären und Märchenhaften in Storms Novelle "Ein Bekenntnis" als archetypischer Ausdruck des Unbewussten*. In: *Amsterdamer Beiträge zur neueren Germanistik*. Bd.17/1983, S.132.

<sup>10</sup> Vgl. *ebenda*.

<sup>11</sup> Vgl. *ebenda*.

<sup>12</sup> Vgl. *ebenda*, S.133.

<sup>13</sup> Vgl. *ebenda*.

<sup>14</sup> Vgl. *ebenda*.

<sup>15</sup> Siehe Anmerkung 9.

<sup>16</sup> ただ一言、ハイゼの名誉のために、彼の功績としてここで触れておかねばならぬのは、シュトルムをしてエルゼの病気の名前を、「子宮癌」と確定させ、明確に作品のテーマを安楽死問題から男性医師世界の問題へとシフトさせる決定的要因を与えた人物が他ならぬハイゼであったことである。すなわち、当初の原稿では、校正刷の段階にいたっても未だエルゼの病名は、「激痛をとまなう、ほとんどの場合、致命的な宿痼」(Vgl.SW., S.1032)というはなはだ漠然とした描写であった。ハイゼは1887年6月25日付の書簡でこれを攻撃したのである。

もっと問題だと私に思えるのは、病気自身が無名で漠然としていることだ。尤も、漠然とした形で新治療法を導入しようとした君の立場からすれば、その方が目的に叶っていると思えたのだろう。もし医師がこの小説を読んだら、きっとひどく頭を横に振ると思うよ。我々作家はこういう事柄に関しては、絶対確実な学問的背景を備えるように努めなければならぬ。そういう病気——たぶん下腹部の癌なのだろうが——の病巣について入念な診察をしてもよく判らぬまま、あちこち触診していて初めて偶然、確信を得るにいたるような医者なんぞ、同業者たちには甚だ怪しげなヤブとしか思えないだろう。(Vgl.SW., S.1031)

そこでシュトルムは、婚姻関係によって自分の甥となった、キールの産婦人科医ルートヴィヒ・グレーヴェッケ Ludwig Glaevecke (1855-1905) の助言を仰いで検討したのち、明確に「子宮癌」 Carcinoma uteriこそ自分の作品に最適唯一の病名である旨、ハイゼに回答したのである(Vgl.SW., S.1032)。ただし、ハイゼ本人はもちろん、忠言を受けて修正したシュトルム自身も、我々が今論じている母性世界と父性世界の葛藤という作品の根本テーマに触れての改訂などとは、意識世界では全く自覚してもいなかったであろうが。なお、子宮癌摘出手術の成功年は正確には、この作品中の描写よりもかなり後、すなわち 1878 年初めの由である (Vgl.SW., S.1035)。

<sup>17</sup> Marianne Wunsch, *Experimente Storms an den Grenzen des Realismus: neue Realitäten in "Schweigen" und "Ein Bekenntnis"*. In: *Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft*, Bd.41/1992, S.13-23.

<sup>18</sup> *Ebenda*, S.21.

<sup>19</sup> マリアローザ・ダラ・コスタ 編著 勝田由美・金丸美南子 訳 医学の暴力にさらされる女たち。イタリアにおける子宮摘出 インパクト出版会 東京 2002 年 11 月 30 日。「解説とあとがき」 223 頁。

<sup>20</sup> Wunsch, *aaO.*, S.22

<sup>21</sup> ダラ・コスタ 前掲書 155 頁。

## Abstract

The dream-figure of a girl of about 13 years old wearing a smooth gray-colored garment, surrounded by a group of wan young lads, unremittingly, longingly staring: the writer of this essay proposes to interpret this motif, much-debated in academic research, of the Visionary in Storm's otherwise largely realistic novella "*Ein Bekenntnis*"(1887), which allegedly takes euthanasia as its main theme, more positively, and to demonstrate that the conflict between the eternally child-bearing, female-maternal world of woman and the womb-hostile, masculine-paternal world of the gynaecologist is the real main theme running subliminally throughout the entire novella.



## Le Désir d'évasion chez les personnages d'*Un Mauvais rêve*

Ritsuko NAGASHIMA

### Introduction

Parmi les études portant sur *Un Mauvais rêve*, beaucoup traitent le problème de l'écriture ou de l'écrivain; le problème de la fiction et de la réalité ou celui de l'auteur et des personnages.<sup>1</sup> En effet, avec sa genèse qui attire l'attention par sa particularité<sup>2</sup>, le problème de l'écriture forme un sujet d'étude très important concernant cette œuvre. Et il est certain que le thème est bien présent dans ce roman. Dans cette étude, cependant, nous allons envisager un autre thème partout présent lui aussi : celui de l'évasion, qui n'a été jusqu'ici traité qu'épisodiquement, mais qui, à notre avis, est au moins aussi important que celui de l'écriture et qui en fin de compte rejoint ce sujet.

Si l'on entend par « désir d'évasion » l'envie d'aller ailleurs, ou de s'enfuir — soit physiquement soit psychologiquement — on en trouve nombre de mentions tout au long du roman, et chez tous les protagonistes, exception faite du curé qui apparaît vers la fin. Bien que ce désir soit perceptible chez certains des personnages des autres œuvres, *Un Mauvais rêve* a ceci de particulier que les mentions y sont si fréquentes que tous les habitants de cet univers romanesque semblent hantés par cette envie. La façon de s'évader

---

<sup>1</sup> Voir par exemple; Paul d'Hollander : *Les personnages écrivains dans l'œuvre de Bernanos* in *Etudes bernanosiennes*, 17, 1982, pp. 95-125, Eric Gans : « *Madame Dargent* » : de la différence formelle à la différence morale in *Etudes bernanosiennes*, 17, 1982, pp.127-144, Paul Renard : *Un Mauvais rêve de Georges BERNANOS, étude critique*, les cahiers du roman 20.50, 1990.

<sup>2</sup> Voir par exemple, William Bush : *Genèse et structures d'Un Mauvais rêve, Bernanos et le cercle enchanté*, Letres Modernes, 1982 ; Paul Renard : *Opus cit.*.

varie : fugue, drogue, suicide et comme nous verrons après, crime et mensonge pourraient être dans un certain sens considérés comme des tentations d'évasions.

Dans cette étude nous envisagerons chacune des formes de l'évasion aperçues dans ce roman, et ensuite nous tenterons d'élucider ce que signifie ce désir pour les personnages, et aussi pour l'univers romanesque de Bernanos.

### Suicide

Les critiques ont déjà fait remarquer qu'il y a énormément de suicides dans les romans de Bernanos. Dans ce roman se trouve aussi un suicide, celui de Philippe, le jeune secrétaire dit « neveu » de Ganse, mais selon ce que raconte l'écrivain à son médecin, (Chapitre IV) il est le fils de l'ancienne maîtresse de Ganse et d'un vieux noble pauvre. C'est le premier acte décisif commis par un des protagonistes de ce roman qui puisse être considéré comme une évasion.

Le suicide de Philippe est décrit dans le chapitre VII. Il se met une balle dans la tête devant Olivier qui est aussi secrétaire de Ganse et qu'on a envoyé appeler après qu'il a « raté » son premier coup. Ce qui fait croire que Philippe avait besoin de son « collègue » qui appartient à la même génération que lui comme spectateur. Tous les deux orphelins, sans qu'on puisse parler de sympathie entre eux, ils partageaient le même mal de vivre voire le même désespoir. Philippe disait à Olivier :

« Au fond, nous sommes exactement pareils, vous et moi terriblement, vous êtes du moins l'homme que je serais si je n'étais celui-ci — l'homme que je deviendrai peut-être demain, qui sait ? » (884-885<sup>3</sup>)

Et toujours après leurs disputes, Olivier inspirait à Philippe « son ennemi familial », « une espèce d'amitié obscure mêlée de rancune, avec on ne sait quoi de fraternel » (889). En effet, Philippe avait déjà fait allusion au suicide auparavant en présence d'Olivier :

« J'ai pensé à une troisième solution, mon cher collègue. Fiche le camp.

— Depuis des semaines...

— Oui, depuis des semaines je répète ça aussi. Mais vous l'entendez pour la dernière fois, car vous ne me reverrez plus. Le destin aujourd'hui change

---

<sup>3</sup> Les chiffres après les citations renvoient à la page correspondante de CÉR I.



de chevaux, comme dit Goethe.

— Et où vont-ils vous mener, vos chevaux ?

— La question se pose, je n'ai pas de projets. Entièrement disponible, mon cher... Qu'est-ce que vous diriez, par exemple, d'un suicide, d'un gentil suicide, bien propre, bien tranquille ? » (894)

En ce qui concerne la raison de son suicide, Olivier dira à Simone après la mort de Philippe : « Philippe et moi — deux cabotins voilà ce que nous étions. Avec nos airs d'être revenus de tout, nous n'étions pas encore partis. Nous ne sommes jamais allés nulle part. » (967) En fréquentant les communistes, il choisit le faubourg pour mourir. Pourtant il ne croit pas vraiment à la révolution, il se sent « vieux », avoir « l'âge de [sa] classe [bourgeoise] », « une préférence involontaire pour une cruauté plutôt gratuite, abstraite » de ceux qui sont nés « en pleine guerre » (888). Il se laisse dévorer par l'ennui et par la lassitude qui dominent l'époque qui suit la Première Guerre Mondiale. Juste avant de se tirer une balle une bonne fois pour toutes, il dit à Olivier :

« Je ne suis probablement pas lâche, mais je viens de constater avec stupeur que je ne serai jamais fixé là-dessus. J'ignorerai toujours si, en d'autres temps, j'eusse été un héros ou un saint. Je déclare simplement que celui où j'ai la disgrâce de vivre ne me fournit pas la moindre occasion de tenter l'expérience avec la plus petite chance de succès. Reste donc à parier pour ou contre. C'est ce que je vais faire. » (954)

L'auteur constate :

Comme Olivier, Simone, le vieux Ganse, ou le hideux Lipote, il était au bout de son rouleau, lui aussi... (955)

Pour Philippe, le suicide est bien une façon de « fiché le camp » ainsi que la fugue, comme nous le verrons ci-dessous, en est une pour Olivier.

### **Fugue**

La fugue est la conséquence la plus simple et peut-être la plus enfantine de l'envie d'évasion. Curieusement, tous les personnages de ce roman, bien que de générations, de

positions et de caractères différents, sont obsédés par cette idée de « ficher le camp » de leur existence présente.

Olivier Mainville tout d'abord. Il parle de son désir secret à sa maîtresse Simone, la première secrétaire et inspiratrice de l'écrivain. :

« Je ficherai le camp, dit-il d'une voix sans timbre.

—— Et où donc ?

—— N'importe. Droit devant moi. Au diable. » (960)

Avant de choisir le suicide, Philippe confiait aussi son désir à Olivier :

« J'ai pensé à une troisième solution, mon cher collègue. Ficher le camp. » (894)

et le vieil écrivain Ganse à son médecin psychiatre Lipotte, qui, à son tour ne cache pas son envie d'aller ailleurs :

« Ça ne va pas, Ganse ?...

—— Non, ça ne va pas, dit le malheureux. Envie de foutre le camp... n'importe où !

—— Bah ! Tout le monde... les grands départs, quoi ? Dites donc, mon cher, je viens de la vente Dorgenne — une merveille ! la chambre à coucher en galuchat de Leleu — quinze mille francs. Oui, quinze malheureux billets, vous vous rendez compte ! Alors, pas moyen de résister à la tentation, j'ai fait signe à Lair-Dubreuil... » (934)

Comme le remarque Lipotte, toutes les personnes dans la maison de Ganse sauf Simone y songent. Et même à propos d'elle, Philippe rapporte dans sa conversation avec Olivier que Ganse soupçonne une « fuite à deux » avec Olivier, « vers des paradis baudelairiens » (887), comparable à celle de Liszt et de Mme d'Agoult, bien qu'en réalité Simone n' imagine pas de faire une fuite à caractère romantique. Seulement, elle qui « étai[t] jadis ce que [Olivier] es[t] aujourd'hui », et qui « [lui] ressemblai[t] trop » (965) se souvient de sa « fuite » dans le passé :



« Tu n'imagines pas, cette fuite à travers le monde, ces matins et ces soirs, ces soleils, ces palais qui trempent dans l'eau bleue, et ces odeurs... [...] Ils ne comprennent rien à cette découverte flamboyante, projetée d'océan en océan. » (965)

Mais enfin, malgré l'atmosphère générale de désir d'évasion, il n'y a qu'Olivier qui passe à l'acte, et il le fait seul, dans la solitude, comme nous le lisons dans le chapitre IX, à la fin de la première partie. Cela est dû, selon Lipotte, à sa nature qu'il interprète comme suit pour Ganse :

« Je ne soigne pas Mainville, je puis vous parler franchement. Joli type d'hérédé, névropathe, anxieux, et — probablement — fugeur. » (943)

En effet, dans la scène de fugue après la séparation d'avec Simone, l'auteur nous fait savoir qu'Olivier a fait une fugue deux fois dans son enfance, et qu'il se souvient qu'après la fugue « il l'entendit [son oncle] discuter à voix basse avec le médecin, et un mot, entre eux, revenait sans cesse, un mot qui lui avait semblé merveilleux — celui de fugue », que celui-ci lui dit : « Ton père était un nerveux, un grand nerveux. A ton âge, cet accident-là n'a pas d'importance : il suffit de te mettre en garde. Tout s'arrangera vers quinze ans. D'ici là, résiste à la tentation. Lorsqu'elle vient, tâche de penser à autre chose » (978). Il a donc une forte tendance à la fugue.

Mais sa nature n'est pas la seule explication de son acte. Il est à remarquer qu'à la scène de fugue est toujours liée l'image de la « route ». Elle abonde bien entendu dans le chapitre IX qui décrit Olivier prenant la fuite. D'abord dans la description de la fugue présente :

Il se retrouva sur le trottoir, dans la brume délicate d'un soir d'hiver. [...] La rue elle-même semblait vide. En dépit du ronflement des moteurs, de l'éclair des carrosseries, la chaussée noire entre les devantures éblouissantes était devant ses yeux ainsi qu'un paysage de feuillage et d'eau courante, l'attirait comme un fleuve. Où courait-elle ainsi, la longue route luisante, vers quel horizon fabuleux ? Il la prolongeait par la pensée bien au-delà, plus loin, beaucoup plus loin, jusqu'à ces minces routes blondes, de colline en colline, toutes frémissantes sous la lune douce. Il voyait cette blancheur monter vers le

ciel, s'y perdre, redescendre, dix fois roulée et déroulée pour s'évanouir encore et tout à coup s'échapper, courir au-devant de l'aube. (973)

et un peu plus loin, dans une hallucination sous l'effet de la drogue, il voit encore cette route :

La longue rue droite, dont il ne savait d'ailleurs pas le nom, l'appelait encore, de toute sa profondeur vertigineuse. (974)

L'image de la route s'intensifie par la suite :

Il n'avait suivi aucune route, évitant seulement d'instinct les rues tournantes, les carrefours, tenté par ces grandes lignes droites qui semblent ne devoir s'arrêter jamais. [...] Parfois, le souvenir de récits lus jadis, de voyageurs égarés qui tournent en rond réveillait sa méfiance et il s'étonnait de voir encore, à sa droite et à sa gauche, de monotones cubes de pierre ruisselants d'eau, ces trottoirs, ces chaussées désertes où danse parfois une lueur venue on ne sait d'où. Il se souvint d'avoir débouché inopinément sur une route, une vraie route, bordée d'arbres nains, malingres, malsains, d'où coulait goutte à goutte une eau noire. (976)

Elle se superpose à celle qui était dans le souvenir qui lui revient au cours de sa fuite, le souvenir de son enfance :

Deux fois il s'était échappé du collège et le souvenir lui revenait encore quelquefois, comme par bouffées, de la grande route pleine de soleil qu'il avait suivie des lieues et des lieues. (977)

Il faudrait remarquer que la route dans son imagination est une *route droite* (opposée à celle qui tourne) ou une route qui mène loin, vers le ciel.

Comme le dit Pierre Gille, « cercle et spirale évoquent également, d'une manière schématique, le malaise des univers clos. C'est le cercle magique, symbole des enchantements de Satan, mais aussi des impasses où il accule l'homme, des prisons où il



l'enferme<sup>4</sup>», tandis que la droite est le refus de cette prison. Il cite d'ailleurs l'exemple de la route qui apparaît dans l'imagination de Mouchette de *Sous le soleil du Satan*. Elle aussi préfère au chemin de tout le monde « une autre route [...], droite, inflexible, qui s'écarte toujours, et dont nul ne revient » (70). Nous pourrions ajouter la « Route » de Steeny de *Monsieur Ouine*.

Non pas celle-ci, non pas l'une de ces routes pâles, mais la sienne, sa Route, qu'il a tant de fois vue en rêve, la route ouverte, infinie, gueule béante... (1375)

Et sa « Route » est aussi à comparer avec « la mince route blonde, enroulée sur elle-même comme une vipère, et qui ne mène nulle part » (1356) qu'il voit de sa maison natale où il se sent enfermé.

Ce que signifie la présence de la route qui débouche quelque part au loin dans l'imagination d'Olivier symbolise, comme celle de la rêverie des deux adolescents, son aspiration à passer ailleurs, dans l'au-delà. Il ne s'agit pas de fuir quelque chose de précis, mais c'est une fugue causée par le malaise de vivre, d'être dans le monde. Elle est le même malaise que celui qui a poussé Philippe au suicide.

Olivier semblait inspiré par la « solution » de ce premier. Au cours de leur conversation après le premier coup de Philippe, Olivier a une vision :

Il [Olivier] l'avoua d'ailleurs lui-même au psychiatre : « Tandis que nous poursuivions cette conversation, je croyais voir distinctement, par-dessus l'épaule de Philippe, une longue route toute droite, éclatante, infinie, entre deux rangées d'arbres énormes, d'un vert pâle aux reflets d'argent, dont j'entendais frémir les cimes. » (951)

L'image de sa route favorite, la route droite et infinie est associée ici au suicide. Et l'illusion fait croire à l'issue heureuse de la vie, qu'il s'est aperçu ne pas aimer. La nuit où il a assisté à la mort de Philippe, il montre son embarras :

« J'en ai assez, bégaya-t-il, assez de tout, assez de toi. Je me tuerai. [...] »

---

<sup>4</sup> Cf. p.179 de l'article de Pierre GILLE, *Note sur la dimension verticale dans l'imagination romanesque de Bernanos* in *Etudes bernanosiennes*, 10, 1970, pp.175-187.

Je ne m'aime plus. Je ne peux pas vivre sans m'aimer. » (966)

« Ah ! si j'avais le courage de me tuer ! » (967)

La haine de la vie est la conséquence même de la haine de soi, qui est chez Bernanos caractéristique de celui qui a perdu tout lien avec Dieu, qui se renferme en lui-même vivant dans la solitude. Dès le moment où il a vu Philippe se tuer, Olivier commence à être attiré par cette solution. Pourtant il suit sa tendance « fugueuse » :

Et bien que les paroles de Simone vinssent jusqu'à ses oreilles et évoquassent un autre départ, une autre fuite, l'obsession était la plus forte de cette seule issue possible, immédiate. Derrière lui, Philippe, avec sa pauvre tête encore tout entière, vivante, son regard, son pauvre appel — et devant lui le salut, l'oubli, au bout de cette longue route ! Ah ! fuir ! entendre grincer ses semelles sur ce sol ferme, luisant et doucement bombé, comme le sentier d'une marche sans but et sans fin, sans limite, était dans ses reins, dans ses jambes — et il se balançait imperceptiblement, d'une hanche à l'autre, avec un regard traqué...(970-971)

Pour Olivier là fugue a donc la même valeur que le suicide dans le sens où tous les deux sont une issue à la vie à laquelle il ne trouve pas de sens.

A propos de l'image de la route qui l'obsède, nous constatons aussi le fait qu'elle est chez Bernanos un signe caractéristique des adolescents qui, à la sortie de l'enfance, ressentent le dégoût de la petitesse de leur monde, s'y sentent étouffés et qui rêvent quoique vaguement d'un autre monde, d'un monde parfait où la liberté n'aurait pas de limite. Olivier, n'étant plus un adolescent, il est décrit en tant qu'un être qui garde cette part de l'enfance :

Ne sortirait-il [Olivier] jamais de l'enfance ? [...] Et ses plaisirs, à vingt ans, restaient ceux de sa délicate adolescence. (897)

Cela expliquerait le fait qu'il est le seul personnage de ce roman à s'aventurer dans la fugue, et qu'il l'ait fait avec un pressentiment du bonheur et de la liberté, pressentiment sans fondement pourtant, puisqu'en réalité cela n'a abouti qu'au désespoir.



## Drogue et mensonge

L'auteur fait mentionner à Philippe « un paradis baudelairien » à propos de la fugue à deux, mais bien entendu, la drogue en est un autre : un paradis artificiel. De même qu'ils étaient tous attirés par la fugue, de même les protagonistes (sauf Ganse cette fois) ont l'habitude de prendre quelque drogue. Philippe parle d'héroïne et même d'« affaires », que refuse Olivier. (886) On découvre pourtant par la suite que celui-ci est toxicomane. En effet, Simone le lui reproche : « Vous avez tort de vous droguer tellement, mon pauvre gentil. L'héroïne ne vous vaut rien. » (956) Il lui demande de l'héroïne dans le désarroi causé par le suicide du Philippe. (967)

Lipotte le psychiatre analyse dans sa conversation avec Ganse le cas d'Olivier en ces termes :

« Hé bien ! mon cher, je crois que l'imagination humaine va rentrer dans une période glaciaire après avoir connu, elle aussi, ces végétations hideuses, ces forêts inextricables, inexplorables, hantées par des bêtes mystérieuses — ces forêts qui s'appellent les Mystiques et les Religions. Seulement, la température est encore trop élevée pour des Mainville, pauvres diables ! Alors, ils demandent à des saletés, à la cocaïne, à la morphine, de les mettre au degré de chaleur qu'il faut. » (941-942)

Selon lui donc, la drogue est un substitut facile pour l'esprit humain qui aspire quelque chose de mystique. Mais Lipotte lui-même ne fait pas exception comme nous le lisons dans la conversation qu'il a avec Ganse :

« Vous ne crachez pas sur la drogue, dit-il grossièrement.

— Pourquoi pas ? répliqua le brillant chroniqueur du *Mémorial* pris de court ; cela ne regarde que moi. » (942)

Quant à Simone, elle a recours à sa drogue habituelle sur le chemin de Souville, le lieu de son crime :

Certes, le remède à son angoisse, à toute angoisse était là, dans l'étroite poche doublée de peau, le sachet enfoui dans son corsage, un peu au-dessus de la ceinture. Depuis la veille au soir, l'aiguille de platine, dispensatrice de béatitude,

se cachait à demeure dans un repli de sa peau : elle n'aurait qu'à y ajuster sa seringue pour sentir sourdre d'abord goutte à goutte, puis couler en elle la nappe d'oubli... Mais elle s'était promis de n'user cette fois qu'avec ménagement de ce premier accès d'euphorie qui réveille au fond de l'être on ne sait quelle petite bête sournoise, capricieuse, experte à toutes les trahisons. (988)

Dans sa note sur *La Joie* (1803), Michel Estève nous renvoie à la mention de Bernanos sur la drogue. Nous la rapportons en complétant le texte :

Car le machinisme n'est peut-être pas seulement une erreur économique et sociale. Il est peut-être aussi un vice de l'homme comparable à celui de l'héroïne ou de la morphine, comme si tous deux ou tous trois ne faisaient que trahir la même déchéance nerveuse, une double tare de l'imagination et de la volonté. Ce qui est véritablement anormal chez le toxicomane, ce n'est pas qu'il use d'un poison : c'est qu'il ait éprouvé le besoin d'en user, de pratiquer cette forme perverse d'évasion, de fuir sa propre personnalité, comme un voleur s'échappe de l'appartement qu'il vient de cambrioler. Aucune cure de désintoxication ne saurait guérir ce malheureux de son mensonge, le réconcilier avec lui-même.<sup>5</sup>

Il est évident que pour Bernanos la drogue n'est que le moyen d'une évasion malsaine, momentanée, de la réalité, qui dirige les êtres qui en usent vers l'oubli, voire la mort spirituelle.

Pour le mensonge, nous pouvons constater qu'il a chez Simone un effet identique à celui de la drogue. Au café près de la gare où elle descend pour aller à Souville, elle entame une conversation avec la patronne. Elle prend plaisir à lui raconter une histoire en se mettant dans la peau d'une femme fictive qu'elle a inventée à l'improviste, une commissionnaire d'une société de lainages :

Car, bien avant la drogue, le mensonge avait été pour elle une autre merveilleuse évasion, la détente toujours efficace, le repos, l'oubli. Mensonge d'une espèce si particulière, on pourrait dire d'une qualité si rare, qu'il passait

---

<sup>5</sup> *La liberté pour quoi faire ?* in EC II, p.1325.



souvent inaperçu, même de ses proches, [...]. Mais elle était de celles, moins rares qu'on ne pense, qui aiment le mensonge pour lui-même, en usent avec une prudence et une clairvoyance profondes, et d'ailleurs ne l'apprécient que lorsque le vrai et le faux s'y mêlent si étroitement qu'ils ne font qu'un, vivent de leur vie propre, font dans la vie une autre vie. (988-989)

Il serait intéressant de remarquer que le mensonge tel que Simone l'aime a quelque chose de commun avec la création littéraire. Elle disait à Ganse à propos de ses créatures romanesques :

« Ne le niez pas : elles vous soulagent tout de même un peu. Il n'est d'ailleurs que de vous observer les jours qui suivent la publication d'un livre. Mécontent, déçu, soit, mais délivré. » (921)

Le mensonge, comme la création romanesque, est bien chez certains êtres une façon de fuir leur personnalité, d'oublier la réalité. C'est là la question qui est posée et reposée sans cesse chez l'écrivain Bernanos.

## **Crime**

Les deux derniers chapitres qui constituent la deuxième partie sont consacrés à la description du crime commis par Simone. Ce crime qui est en apparence conçu pour faire obtenir à son amant Olivier les biens de la victime, sa tante, a un autre motif en profondeur. C'est la haine de soi (1017) et la haine de la vie qui la poussent au crime :

Ce qu'elle appelait désormais sa vie méritait-il encore ce nom ? Pouvait-elle même se flatter d'avoir jamais vécu ? Que les autres crussent en elle, qu'importe ! Elle n'y croyait plus. Et voilà qu'elle s'avisait brusquement que l'idée du crime — on n'oserait dire la tentation — lui était venue au moment précis où elle s'était vue elle-même jouant ses rôles, avait cessé d'être dupe — si peu que ce fût — de ses propres grimaces. [...] De tous les moyens qu'elle avait imaginés pour sa délivrance, le crime restait le dernier à sa portée, à la mesure de sa révolte impuissante. (1021)

Cette haine de soi relève du malaise fondamental d'exister dans le monde, tout en se

sentant étranger au monde, comme le dit Simone à son ami :

« Ecoute, dit-elle, nous sommes des malheureux, toi et moi. Nous sommes hors de ce monde. Je ne te demande pas de m'aimer. Mais ce qui me lie à toi est encore bien plus fort que l'amour. [...] Ne plus se sentir vivre, c'est la seule chose qui m'accable ! Et c'est sans remède, car je ne suis pas de celles qui se tuent ! » (964)

Ce que Simone appelle « ce monde » est l'existence d'ici-bas, où la liberté des êtres est nécessairement limitée par toutes sortes de contraintes, dont bien entendu la loi. Elle disait à Ganse à propos d'Évangéline, un personnage fictif de Ganse dont elle se croyait le modèle :

« Elle tuera comme elle a tué jadis, par besoin de se confirmer dans l'idée qu'elle s'est faite d'elle-même. Elle tue pour se mettre d'un coup hors la loi. Et s'il y a une raison à ce crime — la passion, par exemple — eh bien ! je pense que la passion ne sera qu'un prétexte, le presque rien qui fait pencher l'un des plateaux de la balance. » (925)

Ces paroles sont confirmées après le meurtre.

Même sanglant, le vol restait le vol. Au lieu qu'un meurtre prémédité, longuement mûri, froidement exécuté, assumé sans remords, consomme au plus juste prix cette rupture totale, définitive, avec la société des hommes, son ordre détesté. (1021)

Remarquons les mots « loi » et « ordre » employés ici. Dans ses essais, Bernanos manifeste maintes fois sa répugnance à l'égard de l'Ordre. Il le considère comme ennemi de la liberté, et la loi la servante de l'Ordre. Car, pour lui l'ordre est établi par les « réalistes » qui veulent garder l'autorité d'une puissance terrestre, qui ne croient pas à l'existence du monde spirituel.<sup>6</sup>

Au fond, le crime de Simone est une révolte, la révolte contre les institutions de la

---

<sup>6</sup> Voir notre étude *Bernanos et Histoire*, Septentrion, 2000, pp.33-42, p.183 et pp.237-245.



société comme de la religion.

Mais ils [les prêtres médiocres rencontrés dans son enfance] ne lui dispensaient que la théologie du catéchisme, à laquelle elle s'est fermée une fois pour toutes, car elle la confond avec celle du manuel civique, et toute loi lui a fait horreur bien avant qu'elle en comprît le sens. Et c'est justement parce que son instinct l'a déjà convaincue qu'elle est née hors la loi, hors de toutes les lois, qu'elle souhaitait confusément rester dans ce monde mystérieux où il n'est d'autre règle que le bon vouloir de Dieu, ses préférences mystérieuses, l'adorable iniquité d'une toute-puissance qui se fait miséricorde, pardon, pauvreté. (1010)

Elle souhaite donc, en commettant un crime, s'évader du monde auquel elle se sent ne pas réellement appartenir, du monde où dominant les lois, le moralisme des casuistes. Elle l'aurait quitté pour l'autre monde où règne seule la bonté infinie de Dieu, car elle était dès son enfance attirée par le mysticisme, mais en réalité c'est dans un crime qu'elle se jette.

Chez Bernanos nous apercevons souvent l'idée que les grands révoltés auraient pu être des saints, leurs destins ne se séparant que par la mystérieuse économie divine. Ainsi, fait-il dire à Ganse:

« Il y a autant d'espèces de crimes que de démons, je suppose. J'aime assez l'idée du vieux Wilde là-dessus, vous connaissez ? Il prétend qu'il existe quelque part des diables que la malédiction n'a qu'effleurés en passant, dont le tonnerre de Dieu n'a fait que roussir les plumes. Jolie image, hein ? Vous les voyez d'ici qui sautillent dans le crépuscule, avec leurs ailes rongées, leurs yeux tristes, sans désespoir, nostalgiques ? » (927)

## **Conclusion**

En parcourant les différentes formes du désir d'évasion aperçues dans ce roman, nous pouvons constater que la drogue mis à part, qui est un moyen facile à la portée de tous, ses modalités se varient selon la personnalité de l'être — fugue chez Olivier qui n'est pas tout à fait sorti de l'adolescence, suicide chez Philippe le désabusé et le solitaire, et crime et mensonge chez Simone qui a la volonté la plus ferme et aussi quelque chose d'un écrivain. Mais tous ces moyens sont bien partis de la même impulsion.

Bien entendu, il est permis de penser que l'omniprésence du désir d'évasion trahit celui de Bernanos lui-même qui était « au bout de son rouleau » comme les personnages du roman : il avait eu un grave accident de motocyclette en 1933, dont il était sorti infirme et qui l'avait également mis en difficulté financièrement. Mais, au fond de ces actes des personnages se cache une question qui concerne tous les êtres humains, la question de savoir si la vie d'ici-bas mérite d'être vécue. Les personnages souffrent tous de cette vie, à cause de sa petitesse, de son injustice, de son imperfection, enfin de son caractère limité et relatif. Consciemment ou inconsciemment ils ont soif d'absolu, de perfection, d'infini, autant de qualités qui ne peuvent s'incarner dans les créatures. C'est là le motif fondamental de leur désir d'aller « ailleurs ».

La tendance est si générale dans ce roman qu'on croirait que l'auteur la considère comme inhérente à la condition humaine, qu'il reconnaît que le dualisme d'« ici-bas » et d'« au-delà » est insurmontable. Pourtant une exception apparaît tout à la fin, le cas du curé que rencontre Simone quand elle se rend à Souville et avec qui elle tient une conversation pendant un moment lorsqu'il font le chemin ensemble, et qui à la fin du roman resurgit du noir pour la surprendre sur le chemin de sa fuite. Ce « jeune prêtre à l'expression encore enfantine et pourtant marquée d'une tristesse indéfinissable » (1006) évoque par de nombreux traits le curé d'Ambricourt du *Journal d'un curé de campagne*. D'ailleurs selon Michel Estève<sup>7</sup>, les périodes de composition d'*Un Mauvais rêve* et du *Journal* se superposent. Le premier est achevé en août 1935, et le second, commencé en décembre 1934, est terminé en janvier 1936.

Ce prêtre est en train de rejoindre son nouveau poste, à la paroisse qui lui a été confiée, ce dont il parle à Simone avec tant de joie. Est-ce un hasard s'il est en train d'« arriver » à sa demeure alors que tous les autres essaient de « partir » ? Qu'il vienne rester au milieu des hommes, tout en connaissant les peines du ministère paroissiale et la solitude du prêtre nous semble assez symbolique. Nous sommes tentée de croire que Bernanos a essayé de répondre à la question qui est posée dans *Un Mauvais rêve*, à travers le *Journal d'un curé de campagne* dans lequel le héros retrouve la vie terrestre empreinte de la grâce divine.

### Abréviations

CER I : BERNANOS, Georges : Œuvres Romanesques, Gallimard, N.R.F. (La Pléiade), 1984

---

<sup>7</sup> Voir la Note in CER, p.1833 et p.1877-8.



EC I : BERNANOS, Georges : Essais et écrits de combat I, Gallimard, N.R.F.(La Pléiade), 1971

EC II : BERNANOS, Georges : Essais et écrits de combat II, Gallimard, N.R.F.(La Pléiade), 1995

### **Abstract**

The theme of desire to escape is one of the important themes of the Bernanos' novel *Un Mauvais rêve*, although it has not been sufficiently treated in the literature. This desire is noticed in most of the characters in this novel, and takes different forms. Not only suicide, runaway, and drugs, but also crime and lies can be considered as its forms. In this study, we examine each form of the desire to escape. At bottom, we can find a common point: they all suffer from the imperfection, littleness, or injustice, that is to say the limited character of the earthly world, and consciously or unconsciously, long for the absolute. We could conclude that this desire is caused by the dualism of "ici-bas" (this earthly world) and "au-delà" (the other side), and that the author brings up this problem of dualism in this novel to develop and resolve it in his next novel *Journal d'un curé de campagne*.

## 名詞の値域距離と「的」

### On the Relationship between the Value Distance of Nouns and "de"

呉 凌非

WU Lingfei

#### Abstract

In this paper, the author introduces the concept of value distance of nouns. Through modulating the value distance of noun, the reference set of the noun which is modified can be controlled into various ranges. Also the author finds out that the main function of the Chinese word "de" in the phrases such as "- de noun" is dividing the reference set of nouns, and when it is omitted, that means the range of the reference set of the modifier or the range of the reference set of the modified noun reduces to 1, and eventually the reference target of the modified noun is elected.

#### 1 はじめに

名詞に関しては、2つの側面で「距離」という概念が用いられてきた。1つは荻野（1988）で取り上げたように、名詞の表す意味あるいは知識は構造的な関係を成しており、シソーラスの形で表現することが可能である。そのシソーラスという意味マップの上では、名詞と名詞との間に意味的なさまざまなつながりが見られる。名詞同士のこのような意味的なつながりを「距離」で測り、その「距離」を名詞の意味距離という。一方、金内等（2000）が取り上げたような名詞に関する「距離」も見られる。すなわち、文において修飾関係にある名詞同士の間に語数がいくつあるかによって、その係り受けの複雑さが異なってくる。名詞同士の間の語数が名詞の轄域（スコープ）を形成し、その轄域もまた「距離」で測ることができる。その轄域の長さを表す「距離」は名詞のシンタックス距離である。本論では、ほとんどの名詞が現実世界において、複数の指示対象を持ち、その複数の指示対象から特定の指示対象を取り出す際に、ある種の「距離」が関係していることを明確にし、さらに中国語の「的」にかかわるいくつかの言語現象について、その「距離」の視点から考察を加える。

#### 2 名詞の値域距離

まず、値域とは何かについて説明しておきたい。



例えば、 $f(x) = 1/x$  という関数があるとする。変数  $x$  の定義域を  $[x > 1]$  とすれば、 $f(x)$  の値は  $[0 < f(x) < 1]$  の範囲に投影される。あらゆる値が投影される領域である  $[0 < f(x) < 1]$  が関数  $f(x)$  の値域となる。このように、関数の定義域が決まれば、関数の制限により、その値域が決まってくる。すなわち、関数は定義域と値域の間の写像関係を表しているものであると言える。同様に名詞に関しても定義域と値域のような関係が成り立つと考えられる。

名詞の特徴については、Chao (1968) は次のように述べている。

“Nouns form an open class which occupies the major portion of the lexicon of the language” (p505)

一般的には、オープンクラス(open class)は名詞の語彙的生産性を指すと理解されている。しかし、個々の名詞を見た場合、名詞によっては、1つの指示対象しか持たない名詞もあれば、数え切れないほどの指示対象を持つ名詞も見られる。すなわち多くの名詞自体もまたオープンクラスの性格を持っていることになる。例えば、「琵琶湖」は固有名詞であるため、その指示対象は1つしかない。しかし日本の都道府県の「県」となると、その指示対象は「44」にのぼる。さらに、「人」となると、その指示対象自体は生産性を持っているため、無限にあると言えよう。このように、固有名詞以外の場合、ほとんどの名詞とその指示対象とは一対多の関係にあることがわかる。本稿では、名詞の持つ指示対象の全体をその名詞の値域だと考える。関数の場合は定義域が決まらなければ値域を決めることが不可能であるが、ことばの場合も同じように、名詞の定義域の指定が必要になってくる。名詞の定義域はその名詞の意味を規定するもので、ソシュールのいわゆるラング (de Saussure 1916) に当たる。ただし、関数とは違って、名詞の定義域はデジタル的に定義されておらず、アナログ的に定義されているということを付け加えておきたい(呉 2000)

名詞の持つ値域が1より大きい場合、その指示対象が複数になり、名詞から値域への写像も複数になる。すなわち、実際の文に現れる名詞に対応する値域が1より大きい場合、その名詞が呼び起こす名詞の指示対象も複数になる。その名詞に対応する値域が大きければ大きいほど、実際にその名詞の指している指示対象と異なる指示対象を呼び起こす可能性も増えてくる。例えば、「太郎の弟が結婚した」という文の中の「太郎」に3人の「弟」がいるとする。すると、文中の「弟」の指示対象は「3」となる。すなわち、名詞「弟」に対して何も制限を加えない場合、実際の指示対象が値域から選ばれる可能性は3分の1になる。値域が大きければ、大きいほど実際の指示対象が選ばれる確率は低くなる。つまり、名詞の値域が大きければ、写像の範囲が大きくなり、実際の指示対象が逆に遠ざかっていく。その遠ざかる度合いを本論では名詞の値域距離という概念を使って表現することが可能であると考ええる。

## 2. 1 名詞の最小値域距離と最大値域距離

前述のように、名詞の指示対象の集合が大きければ大きいほど、実際に選ばれる指示対象が遠のき、その値域距離は大きくなる。逆に名詞の指示対象の集合が小さければ小さいほど、実際に選ばれる指示対象が絞られ、その値域距離は小さくなる。その値域距離をわかりやすくするために、次の式を使えば、上記のような値域距離を  $[1, 0]$  の間に投影させることが可能である。

$$Vd = 1 - (1/Rs)$$

(式1 名詞の値域距離)

式1では、Vd (value distance) は名詞の値域距離を指しており、Rs (reference set) は名詞の指示対象の集合を指している。式1は、パラメータのRs、すなわち名詞の指示対象の集合が「1」に近づけば近づくほど、値域距離を表す数値が「0」に近づき、逆に、大きければ大きいほど「1」に近づく、ということの意味している。具体的に言うと、例えば、地名、太陽、月のような固有名詞の場合は、その対応する指示対象の集合Rsが「1」であるため、その値域距離Vdは「0」となる。このような名詞とその指示対象が一对一の関係にある場合、Vdが「0」で、その値域距離をゼロ距離と呼ぶことにする。ゼロ距離もまた最小距離を意味している。それに対し、「人」、「本」というような名詞の場合、その指示対象自体が生産性を持ち、ほぼ無限大と言ってよい。すなわちパラメータRsが限りなく大きな数値となる。式1に代入すれば、Vdも限りなく「1」に近い数値となる。このようなVdが「1」に限りなく近い地域距離を最大距離と呼ぶ。

また、式1は名詞の指示対象であるRsの大きさが変われば、名詞の値域距離Vdの数値が変化することをも意味している。実際、語用的には名詞に対応する指示対象を異なる範囲で選択する必要があるため、それに応じて名詞の値域距離を変える操作も必要になってくる。

## 2. 2 距離の調節

実際の言語使用上、名詞の指示対象の集合からさまざまな範囲で指示対象を選択するケースが見られる。例えば、「車」に対して、「赤い」というような形容詞で「赤い車」のように限定したり、「走る」というような動詞で「走る車」のように限定したり、あるいは「太郎」という名詞で「太郎の車」のように限定したりすることが見られる。その結果、指示対象の集合Rsはさまざま大きさに分割されることになり、その分、値域距離が短くなる。例えば、「A」による「B」への限定を考えた場合、限定成分である「A」の指示対象の集合を「ARs」とし、被限定成分「B」の指示対象の集合を「BRs」とすれば、その分割後の値域距離は式2のように変わる。式2では、[ARs ∩ BRs]sは「A」と「B」の共通項の集合で、すなわち「A」と「B」の積集合である。

$$Vd = 1 - (1/[ARs \cap BRs]s)$$

(式2 限定後の名詞の値域距離)

上記で触れているように、形容詞と動詞は「形容詞・名詞」あるいは「動詞・名詞」のように名詞を限定することが可能である。しかし実際の言語使用上、「形容詞1+形容詞2+・・・+形容詞n・名詞」ある



いは「動詞1+動詞2+・・・+動詞n・名詞」のような形は見られない。それに対して、名詞の場合、中国語に関して言えば、助詞「的」を使えば、「名詞1的+名詞2的+・・・+名詞n・名詞」の形が見られる。すなわち、形容詞あるいは動詞は名詞の指示対象の集合を多重に分割することができないのに対して、名詞の場合は多重に分割することが可能である。名詞が多重分割の文法機能を持っていることによって、指示対象の集合を自由に分割することができ、その結果名詞の値域距離を自由に調節することも可能となる。多重分割の場合の名詞の値域距離を式で表現すると次になる。

$$Vd = 1 - (1 / [N1Rs \cap N2Rs \cap \dots \cap NnRs \cap NRs])$$

(式3 値域距離の調節)

式3では、N は名詞を意味し、数字は分割の回数を意味している。分割の回数が多ければ多いほど、その結果指示対象の集合が小さくなり、値域距離が減り、最終的に話者の意味する名詞の指示対象が選定される。ただし、このような名詞の指示対象の分割は助詞「的」に大きくかかわっており、「的」は値域距離の調節という機能を果たしていると考えられる。次に助詞「的」の文法機能についてより具体的に見てみることにする。

### 3 「的」の問題点

現代中国語においては、「語1+的+語2」のような「語1」による「語2」の修飾関係を表す助詞「的」が見られる。この「的」については、「最も徹底的に研究されている」助詞であると言われている。(陸丙甫 2003) しかし、一連の研究はいずれも次のような問題点に答えるものであると思われる。

- I 「的」は「的1」、「的2」そして「的3」のように3つに分けられるか。
- II 「的」は描写性と区別性のよう二分することができるか。
- III 「的」の省略は何を意味しているのか

I に関しては、代表的な研究として朱德熙(1961)が挙げられる。それによると、副詞付加成分としての「的」を「的1」とし、形容詞付加成分の「的」を「的2」とし、そして名詞付加成分の「的」を「的3」としている。すなわち「的」をそれぞれ異なる文法機能を持つものとして区別すべきだと主張している。この見方については、黄国営(1982)は「的」を語の文法機能を変える「的」と変えない「的」の2通りに分ける可能性を示し、陸丙甫(1992)はこの意見に賛同している。実際のところ、現代中国語では、副詞付加成分としての「的」を使わずに「地」を使うことが主流になっており、「的」を3通りに分ける現実性が薄れていると言える。IIに関しては、陸丙甫(2003)は「的」を描写性の「的」と区別性の「的」の2通りに区別すべきだと主張している。しかし、本人も認めているように、「「的」を描写性と区別性に分ける捉え方の問題点は両者を分ける境界線をはっきりしないこと」という疑問が残る。この疑問が解けない限り、当然IIIの問題点にも波及する。IIIに関しては、杉村(1997)は多くの「的」の省略の例を集め、それについての比較と説明をしている。しかし、個々の例の説明が見られても全体的なより統一した見解

は見られない。しかし、「的」を値域距離の視点から捉えれば、これまでばらばらとされてきた「的」の文法機能に整合性が見られるのではないかと考える。

#### 4 考察

問題点Ⅰは問題点Ⅱに引き継がれているため、本節では、主に問題点Ⅱと問題点Ⅲについて考えていく。まずは問題点Ⅱについて考えてみることにする。

「的」を描写性と区別性の二つに分ける場合、第一、その可能性、第二、その必然性を考える必要がある。まずその可能性については、陸丙甫（2003）はさまざまな点から分析しているが、その主な観点は次の3つのようである。

1 形容詞と結ぶ「的」と名詞と結ぶ「的」があつて、形容詞は描写性が強く、名詞は区別性が強く、したがって「的」を描写性の「的」と区別性の「的」2つに分けられる。

2 シンタクスのには、描写性の「的」は区別性の「的」よりも修飾される名詞に近い位置に来るという特徴が見られる。

3 「的」は描写性が強く、区別性が弱い。その理由として、描写性の場合の「的」が省略できず、区別性の場合、省略が可能であるという点を挙げている。

しかし、「的」を2つに分ける必然性を見た場合、上記の3つの見方は必ずしも的を得ているとは思えない。

1に関しては、語形「語1+的+語2」は、「矮小的楼房（低いビル）」のように、「語1」が形容詞である場合と、「公司的楼房（会社のビル）」のように名詞である場合と、「倒塌的楼房（倒れたビル）」のように動詞である場合の3通りが見られる。分けるなら、2通りではなく3通りに分けるべきである。また、この分け方は「的」の区別を述べているというよりも形容詞と名詞の違いを述べているように思えてならない。

2に関しては、確かに「一条白白胖胖的狗（一匹の白くて太っている犬）」のような例はよく見られるが、この語順は絶対的ではない。「高高的一座山（高い山）」、「小小的一块地（小さい土地）」のような逆の語順の例もよくある。

3に関しても、最近の映画タイトル「漂亮妈妈（美しい母）」のように、形容詞「漂亮」の後の「的」が省略可能な事例が見られ、必ずしも「的」の省略でその描写性の強弱を判断することはできない。また、区別性の場合の「的」の省略については、数量詞の例を挙げているが、そのメカニズムはほかの理由によるものと認めざるを得ない。この点については次節で説明する。

問題点Ⅱをまとめて言うと、「的」を描写性と区別性に分ける必然性がまったく見当たらないということが言える。「的」の根本的な機能は名詞の指示対象の集合の分割、すなわち名詞の値域距離の調節にあり、この視点から出発すれば、形容詞であれ、動詞であれ、名詞であれ、「的」と組んで限定成分になる以上、名詞の指示対象の集合を分割するという共通の機能を持つことになる。ただし分割の度合いはそれぞれの品詞の内容によって異なってくる。

次に問題点Ⅲについて見てみることにする。



言語使用上、ことばの省力の原理が働いて、ことばが短くなることはごく普通な現象である。例えば、日本語では、「行政改革」が「行革」に短縮されたり、中国語では、「奥林匹克运动会（オリンピック運動会）」が「奥运会」に短縮されたりすることはよくある。しかし、「的」の省略は上記のことばの短縮と異なり、ほとんどの場合、意味の変化に伴い、しかも省略可能な場合と省略できない場合とさまざまな複雑な様相を呈している。これまでの「的」の省略の研究手法はほとんどケースバイケースの分析方法で、さまざまなケースについて一貫した分析はみられない。本論では、値域距離の視点から捉えれば、あらゆるケースが解釈可能ではないかと考える。

まず、次の3つの例を比較されたい。

- (1) 他上了大学。(彼は大学に入りました。)
- (2) 他上了北京的大学。(彼は北京の大学に入りました。)
- (3) 他上了北京大学。(彼は北京大学に入りました。)

(1) は、「大学」が修飾成分を持たず、その指示対象の集合が分割されていない状態であるため、どのどの大学を指しているかはわからない。(2) では、「北京」という修飾成分により、「大学」の指示対象の集合が分割され、考えられる「大学」の数もかなり制限されてくる。それに対し、(3) では、「的」を省略することで、「大学」の指示対象が一気に1つ絞られる。値域距離でいうと、(3) の場合は、「大学」の値域距離がゼロ距離になる。すなわち、名詞とその指示対象との間に一対一の関係が成立することを意味する。多くの言語データを分析した結果、「的」の省略は共通して、ゼロ距離を成立させるかあるいはゼロ距離に近い距離の短縮を成立させていることを示している。次に「的」の省略とゼロ距離の関係をより具体的に見てみることにする。

#### 4. 1 ゼロ距離の成立条件と「的」の省略

式2によれば、「ARs」と「BRs」のいずれかが1になる場合、 $V_d$  がゼロになり、ゼロ距離は成立する。すなわち、ゼロ距離の成立条件は「ARs」と「BRs」のいずれかが1になることである。次に「ARs」と「BRs」が1になるケースと「的」の省略との関係を探ってみよう。

##### 4. 1. 1 修飾語が数量詞

現代中国語では、「个（個）、根（本）、张（枚）」のように、ほとんどの名詞の前に数量を表す数量詞が来ることが可能である。数量詞はさらに上記にあげているような単位を1とする数量詞と長さ、重さ、容積など単位を1としない数量詞とがある。単位を1とする数量詞の場合はゼロ距離の条件を満たしているため、「一个人（一人の人）、一根筷子（1本の箸）、一张纸（1枚の紙）」のように「的」が省略される。いや、むしろ「的」の挿入が排斥される様相を呈している。それに対し、長さ、重さ、容積などの数量詞の場合は単位を1としないため、修飾語の指示対象と中心名詞の指示対象との間に一対一の関係が解除され、「的」の使用に対する制限も緩くなってくる。その結果、「三米布（3メートルの布）」と「三米的布」はいずれも成立する。しかし、修飾語の指示対象の集合をより曖昧にすることで、「三米长布」のような表現は成立しなくなり、「三米长的布」のように「的」を挿入しなければならない。

#### 4. 1. 2 修飾語が人称代名詞

修飾語が人称代名詞である例として、「他们家（彼らの家）」、「我们学校（私たちの学校）」などが見られる。しかし、このような例について、杉村は次のように述べている

「“家”“班”“学校”といったさまざまなレベルの共同体や組織が“小林家”“你们班”“他们学校”のように構成員を示す呼称や人称代名詞の修飾を受けるときも通常“的”は使用されない。この現象に対しては構成員とその所属先の関係が不可分なものであること、換言すれば、共同体や組織の親族に準じる意味的性格の反映であるとする説明が妥当なものとして受け入れられてきたように思う。」

以上の説明から、「的」の省略の原因は人称代名詞ではなく、共同体や組織を現す中心名詞にあると受け止められる。しかし、これには説明できない例がある。例えば、構成員である「学生」とその所属する「学校」との間に上記のような関係が成立するはずであるが、「学生学校」のように言えない。つまり、原因は修飾語の人称代名詞にあると見たほうが妥当ではないかと考える。人称代名詞は文字通り人を表す名詞の代わりのことばである。したがって、人称代名詞が使われた場合は、文脈において、その指示対象が一度は触れられているはずである。指示対象が確定されている場合は、その指示対象の集合、すなわち  $R_s$  が 1 になる。このように、人称代名詞を使うことで、ゼロ距離を成立させることができ、中心名詞の指示対象の集合からより指向性の強い選択対象を選び出すことができるわけである。

#### 4. 1. 3 修飾語が固有名詞

言語学大辞典では、固有名詞について、次のような記述が見られる。

「どの言語の名詞にも、固有名詞と呼ばれる一群の名詞がある。たとえば、織田信長とか東京などがそれである。・・・かくて固有名詞のさすものは一個のものである。」(p588)

この説明から、固有名詞の指示対象の集合、すなわち  $R_s$  が 1 であることははっきりわかる。指示対象の集合が 1 であるため、ゼロ距離が成立し、前述の「北京大学」のように、「的」の省略が可能なのである。ただし、固有名詞であっても、人名の場合、同じ名前を持つ人が存在することがありうるため、人名の場合の「的」の省略は条件付となる。これについては 4.1.5 節で改めて言及する。

#### 4. 1. 4 中心名詞が方位詞

中国語では、場所、方向を表す方位詞を修飾する場合、「的」を省略することが多い。その理由については、杉村は次のように述べている。

「・・・方位関係のこのような意味上の特徴は自らと自らを規定する他者とを結びつける上で積極的に機能し、“他哥哥”や“院子里头”のような先行名詞が“的”を伴うことなく後続名詞を



修飾する表現の成立を支えていると考えられてきた。」(杉村 p280)

確かに、方位詞は他律性の特徴を示しているが、すべての方位詞に対して「的」を省略することができるとは限らない。例えば、「他的上空」は見られるが、「他上空」は見られない。さらに一般的にみた場合、「前边、前方、东方」の順に、方位詞が表す空間が広ければ広いほど、「的」の省略がしにくくなる。この現象をどう説明するのかこれまでの研究ではまったく触れられていない。しかし、ゼロ距離の視点から見れば、その理由はわかってくる。

空間の狭い方位詞の場合、修飾語と修飾される方位詞との空間関係がはっきりしており、視覚的にもその一対一の対応関係は確認できる。すなわち、この場合の方位詞のゼロ距離の関係が成立する条件が整えている。しかし、空間が広くになるにつれ、修飾語と方位詞との空間関係の明確性が失い、その一対一の関係も曖昧になり、ゼロ距離の関係が成立する条件が崩れてしまう。したがって「的」の省略もしにくくなる。

#### 4. 1. 5 中心名詞がスペシフィック化

一般的には、文において名詞はノンスペシフィックとスペシフィックに分けられる。例えば、「ある人」がノンスペシフィックであるに対して、「その人」はスペシフィックである。両者の違いは、文脈において、前者が指示対象未定であるのに対し、後者は指示対象が確定している点にある。例えば(4)において、「宋宝琦」が初めて登場するときに、「宋宝琦的母亲」のほうが自然である。文脈に表れれば、その名詞がノンスペシフィックからスペシフィックに変わり、ゼロ距離の条件が整う。したがって、二回目以降はむしろ「宋宝琦母亲」のように、「的」を省略したほうが自然である。

(4) 宋宝琦的母亲是个售货员,这天正为搬家倒休,忙不迭地拾掇着屋子。见张老师来了,她有些宽慰,又有点羞愧,忙把宋宝琦从屋里喊出来,让他给老师敬礼,又让他去倒茶。我们且不管随张老师的眼光去打量宋宝琦,先随张老师坐下来同宋宝琦母亲谈谈,了解一下这个家庭的大概。(刘心武:班主任)

### 5 おわりに

本論では、名詞の値域距離の概念を定義し、そして言語使用によりその値域距離の調節が可能であると述べた。具体的に言語事例を見た場合、値域距離の調節に「的」が使われていることに気づく。「的」に関しては、複数の「的」に分ける意見が見られるが、複数に分けても、「的」の値域距離の調整機能がなにもかわらない。そのために、「的」を複数に分ける必要がないと本論は考える。また、値域距離の調節の結果、理論上最大距離と最小距離が存在するはずである。最大距離については具体的にどのような言語現象に反映するかは今回取り上げなかったが、最小距離すなわちゼロ距離について「的」の省略との関連性を説明してきた。まとめて言うと、「的」を省略するには条件があり、修飾語の指示対象の集合を1に限定するか、修飾される語すなわち中心名詞の指示対象の集合を1に限定するかである。ゼロ距離を成立させることによって、ターゲットとしての指示対象を特定する効果を得ることができる。

## 6 参考文献

- |                 |      |                                                         |
|-----------------|------|---------------------------------------------------------|
| 荻野綱男            | 1988 | 「現代日本語の名詞シソーラスの作成」 『言語情報処理の高度化の問題』<br>(言語情報処理の高度化研究報告7) |
| 金内哲也・宮崎正弘       | 2000 | 「規則/用例融合型の日本語名詞句構造解析法」 『言語処理学会第6回年<br>次大会発表論文集』         |
| Chao Yuen Ren   | 1968 | 『中国話的文法』 ゆまに書房                                          |
| de Saussure, F. | 1916 | 『一般言語学講義』 小林英夫訳 岩波書店                                    |
| 呉凌非             | 2000 | 「言語の量子論的側面と自然言語処理」 『滋賀県立大学国際教育センタ<br>ー研究紀要』 第6号         |
| 陸丙甫             | 1992 | 「从“跳舞”、“必然”的词性到“忽然”、“突然”的区别」 『语言研<br>究』 第1期             |
| 陸丙甫             | 2003 | 「“的”的基本功能和派生功能」 『世界汉语教学』 第1期                            |
| 朱德熙             | 1961 | 「说“的”」 『中国语文』 第1期                                       |
| 黄国营             | 1982 | 「“的”字的句法、语义功能」 『语言研究』 第1期                               |
| 杉村博文            | 1997 | 「名詞性連体修飾語と構造助詞“的”」 『中国語論文集』 東方書店                        |
| 亀井等             | 1996 | 『言語学大辞典』 三省堂                                            |



# 情報化社会における個人情報の保護 Protection of Personal Information in the Information Society

亀田 彰 喜  
Akiyoshi KAMEDA

## Abstract

The network of information spread quickly with the fast development of information technology at the end of the 20th century, greatly affecting today's society. Although the spread of the Internet in recent years makes life convenient, many problems are also created. It is the light side and the dark side of the so-called network society. Especially the spread of the Internet is bringing great changes to life style, government, and business. Recently, many legal issues have been arising due to the rapid expansion of the information network. Trespassing, improper use of personal information, etc., have been occurring with the progress of the network society; thus, social control has come to be called for. There needs to be management by ethical regulation and legal restrictions to these problems.

Personal information collected in large quantities is accumulated as a database in many cases without consent, generating many social troubles. Fraudulent practices and illegal business practices which abuse Internet trading also occur. Legislation is called for so that personal information may not be misused in such Internet trading.

## 1 はじめに

近年、インターネットの普及によって、各個人の間で情報の発信や受信が国境を越えて可能となった。このことは利便性が増すと共に、多くの問題も発生してきている。いわゆる、ネットワーク社会における光と影である。従来、さまざまな情報の提供はマスメディア、すなわち、放送や新聞および出版などが担ってきた。しかし、現在のネットワーク社会では、従来のようなマスメディアの情報提供とともに、インターネットがその社会的地位を高めてきている。特に、インターネットの普及は、個人の生活様式を大きく変えつつあるとともに、政治や行政のあり方も大きく変えつつある。今般の住民基本台帳ネットワークの導入もその一環と言えよう。

情報ネットワークが単なるファイル転送であった時代から、インターネットに発展し、それが各個人のコミュニケーションの手段として利用されてきたが、現在では更に発展し、現代社会や生活文化

に、更に行政および政治にも大きな変革をもたらそうとしている。しかし、このような情報ネットワークの急速な進展に対し、最近では特にインターネットをめぐって、多くの法的問題が噴出してきている。インターネット上での表現内容に関するもので、誹謗中傷や名誉毀損などの問題やインターネットを利用した詐欺的行為などの問題である。

ネットワーク社会の進展に伴って、最近では不法侵入や個人情報に対する諸問題が社会的に問題視され、社会的規制が求められるようになってきた。これらの問題に対し、倫理的規制と法的規制での対処が考えられる。情報技術が益々進歩するのにもともなって、ネットワークの不正も高度化し巧妙化してきている。これらに対し、社会的規制が強く求められるようになるとともに、個人情報の保護の問題が重要視されるようになってきた。

## 2 個人情報保護の諸問題

情報ネットワークは、20 世紀の末に急速なグローバルなネットワークが構築されたことによって、その情報のもつコンテンツを社会的にも経済的にも高めてきた。そして、私達は居ながらにして世界中から、政治や経済そして交通や旅行および娯楽などのあらゆる情報を手に入れることが可能になった。しかし、私達が知らないところで、個人情報がコンピュータ間のネットワークによって、行政においても民間企業においてもデータ・ベース化されている。そしてこの個人情報がさらに私達の予知しないところで情報ネットワークによって転送され、様々の目的のために利用されたり、加工されたりしている。問題なのは、このようにして集積された私達の個人情報がどのように使用されるかである<sup>1)</sup>。

最近では、情報ネットワークが普及するとともに、商取引などで蓄積されたデータ・ベースにおける個人情報の管理の問題が、個人情報の保護に関して深刻な問題を提起してきている。商取引で集められた顧客の信用情報や顧客の資産情報および取引内容などがデータ・ベース化された情報は、それ自身で高価な商品価値を持っており、それは営業活動に利用可能であることから、商品として売買の対象となっている<sup>2)</sup>。

情報ネットワークによって、大量の個人情報が転送され、本人が認知しないところで集積された個人情報は、日頃、我々が無意識に記入している各種団体の入会用紙や申込用紙、クレジットカード等のような媒体に起因することが多い<sup>3)</sup>。そして、具体的には個人情報には氏名、性別、年齢、住所、電話番号などの基本的な情報の他に、職種や行政機関で管理する年金番号や運転免許証番号などがある。他に、個人情報としては政治思想関係や宗教および、各種所属団体など個人の社会活動の関係する個人情報などもある<sup>4)</sup>。

教育関係においては、教育現場で安易に作成してインターネットのホームページ上に掲載された生徒の氏名や住所および電話番号が利用されて、何らかの犯罪に利用される危険性もある。そしてまた、医療現場において医師によって作成されるカルテは病歴の個人情報そのものであるが、最近では情報ネットワークによって、病院間でデジタル情報として転送されることもあったと同時に、カルテの開示請求は情報公開の意味合いを持っており、更にカルテの開示は医師の医療行為における適正判断の資料になることもあり得る<sup>5)</sup>。



一般に情報は、ネットワークによって個々のコンピュータが通信回線で接続されることによって情報としての価値は一段と高まる。そして、集積された個々の情報は連携することによってその価値を更に高めていく。それは個人の情報においても同様なことであって、それが情報ネットワークによって瞬時に遠隔地間でも利用可能である。このことは過疎化の進んだ遠隔地での利用にも有用であることから、遠隔医療や福祉の面においても利用が期待できる。しかし、もし医療や福祉関係で蓄積された個人情報が、当事者の意思とは無関係に売買され利用され、悪用された場合、個人の名誉や人権の侵害になることもある。このようなことから、個人情報の保有者や管理者および利用者に対して法的な保護制度が求められる<sup>6)</sup>。

### 3 個人情報保護の立法化の経緯

社会的にプライバシーの問題が取り上げられるようになったのは、昭和36年、三島由紀夫の小説「宴のあと」についての民事訴訟からである。これは、有田八郎（元外務大臣）が、三島由紀夫と新潮社をプライバシーの侵害に対して、民事訴訟として提起したものである。結果として我が国で初めて、昭和39年に東京地方裁判所でプライバシー権を認めた判決が出された。その後、これを契機にマスコミにおけるプライバシーの侵害が意識されるとともに、議論されるようになってきた<sup>7)</sup>。特に、昭和40年以降、コンピュータの急速な普及によって、情報ネットワークが進展するに従って、データ・ベースに蓄積されている個人情報の取扱いに関心がもたれるようになってきた。

この時期、世界的に各国が個人情報保護法に関心を持ち始めたことから、我が国においても、昭和49年6月に保利行政管理長官が「行政機関等における電子計算機利用に伴うプライバシー保護に関する制度の在り方いかん」について、行政管理委員会に諮問を要請し、10ヶ月にわたる同委員会の諮問の調査および審議の結果、昭和50年4月、「行政機関等における電子計算機利用に伴うプライバシー保護に関する制度の在り方についての中間報告」をまとめ、まだ現段階では結論を出すのは困難であるとして、引き続き検討する必要があると報告している。この行政管理委員会の中間報告に基いて、政府はコンピュータのデータ処理において、データの漏えい、焼失および毀損などを防ぐために各省庁に対する大綱として昭和51年1月に「電子計算機処理データ保管管理準則」を策定した。

そして、昭和55年9月に「プライバシー保護と個人データの国際流通についてのガイドラインに関する理事会勧告」がOECDで採択されたことから、我が国においても個人情報の保護に関心が高まり、昭和56年1月に、加藤一郎東大教授を座長とした学識経験者を中心としたプライバシー保護研究会を設置した。この研究会は、翌昭和57年7月に個人情報のコンピュータ処理に伴う保護に対する新たな制度による対応が必要であると結論付けた。

また、行政改革の一環として、昭和56年3月に行政制度及び行政運営の改善に関する基本的事項を調査し、審議する臨時行政調査会が発足した。この臨時行政調査会は行政改革を進めるにあたって、事務処理などの簡素化と効率化、各部署との総合性、時代の変化への対応を挙げるとともに、行政への信頼性の確保も挙げており、信頼性の確保のための方策として行政における個人情報の保護に対する対策についての検討の必要性を挙げている。昭和58年3月に臨時行政調査会は最終答申をまとめるが、その答申の中で、先に、プライバシー保護研究会で示された意見を参考にし、「行政情報システム

の進展、国民意識の動向を踏まえつつ、諸外国の実態等を十分把握の上、法的措置を含め個人データ保護に係る制度的方策についても積極的に対応する。保護対策の推進に当たっては、関係省庁において緊密に調整協議を行う。」と個人情報の保護の推進を提言している。

政府は臨時行政調査会のこの答申を踏まえ、昭和 58 年 6 月に行政情報システムを検討するために各省庁の官房長官による「行政情報システム各省庁連絡会議」を発足させ、個人情報保護に関しては、昭和 59 年 4 月に関係省庁の職員による「データ・プライバシー保護専門部会」を設置した。このデータ・プライバシー保護専門部会では昭和 62 年 11 月までに 36 回にわたり、個人情報保護の制度化にあたっての範囲、制度化に際しての課題、法的措置等に関して検討を繰り返した。このデータ・プライバシー保護専門部会の検討結果は、個人情報保護法案の作成に際して大いに参考にされた。

また、総務庁においても昭和 59 年 12 月の閣議で「行政機関の保有する個人データの保護については、政府としての方針を取りまとめるよう努めるものとする。」とされたため、昭和 60 年 7 月に学識経験者と行政経験者による「行政機関における個人情報の保護に関する研究会」設置し、行政機関における個人情報の保護の在り方や方策、法的措置の制度的方策などについて検討を始めた。この行政機関における個人情報の保護に関する研究会では個人情報の保護対策の内容や規制対象の範囲などについて 30 回にわたり、検討がなされた。そして、検討結果は昭和 61 年 12 月に「行政機関における個人情報の保護対策の在り方について」としてまとめられ、公表された。

その内容は、コンピュータのデータ処理による個人情報の保護に対する対策は、現行の法制度にはないため、「行政機関等における電子計算機処理に係る個人情報の保護対策の基本的事項を定めた新規立法によることが適当である」としており、この新規立法が対象とする範囲は行政機関が保有する電子計算機全般としている。その後、昭和 61 年 12 月の閣議決定で「行政機関の保有する電子計算機処理に係る個人情報の保護の制度的方策については、法的措置を講ずる方向で、そのための具体的検討を行う。」とされた。そして、この法律案は、昭和 63 年 4 月 28 日の通常国会にも提出されたが、会期末日の 5 月 25 日には継続審査となってしまった<sup>8)</sup>。

一方、米国やその他の諸外国においては個人情報保護法の制定がされるとともに、OECD 理事会からの勧告などもあったことから、個人情報保護の法制化を検討する方向にむかった。その前に、総理府は昭和 56 年 2 月と昭和 60 年 7 月の 2 回にわたって、個人情報保護に対する世論調査を行っている<sup>9)</sup>。

個人情報保護法の制定の直接的なきっかけとなったのは、平成 11 年 8 月 12 日成立の住民基本台帳法の成立であった。これは住民基本台帳ネットワークシステム（住基ネット）を構築するためのものであり、行政事務の効率化と住民に対する行政サービスの向上の下に、全ての国民に 11 桁の番号を割り当てて全国どこでも住民票の写しが取得可能であり、転居の手続きも容易になるとのことであった。しかし、反面、国民の個人情報が一元化され、集中管理されることから、何らかの形で個人情報が漏えいした場合、その被害は甚大なものになるとの心配があった。

事実、平成 11 年に国会で住民基本台帳の改正が国会で審議されている時に、平成 11 年 5 月に NTT 職員による個人情報の流出事件が発生した。これは、データ・ベースにアクセス権を持つ NTT 職員が電話帳案内データベースから電話帳に掲載されていない個人情報を抜き出して販売した。現行の



刑法では、形のある有体物を窃盗罪の対象としているため、無形の個人情報は対象とはならず、結局、このNTT職員はNTT法の収賄罪で起訴された。

さらに、同年5月にも京都府宇治市の住民基本台帳の個人情報が大量に引き出され、それをインターネット上で販売されていたという事件も起きた。その後も、DDIやNTTドコモなどの電気通信事業者の下での個人情報の漏えい事件が次々に発生した。このようなことから、一般社会からも個人情報の保護を求める声が出てきた。平成11年6月4日に改正住民基本台帳の成立と共に、3年以内に個人情報に関する法案の制定を予定した<sup>10)</sup>。

初めての規制の法といえる「個人情報の保護に関する法律」が平成13年3月27日に国会で閣議決定された。当初、この法案はメディア業界では表現の自由及び報道の規制につながるのではないかと懸念が持たれた<sup>11)</sup>。では、この「個人情報の保護に関する法律」がどのようなものであるのかをしてみる。

#### 4 個人情報保護法案

この法案は平成13年6月5日に内閣が受領したものであるが、下記のように7章から構成されている。この法案の第1章総則においては、個人情報の保護に対する目的と定義を明確にしている。第2章の基本原則においては、個人情報は個人の人格に基いて慎重に取り扱われるべきであるという理念の下に、個人情報の利用の制限および取得の適正化、そして個人情報の漏えいなどに対する安全性等について明記している。第3章は、個人情報に対する国及び地方公共団体の行政側の責務を、第4章では国及び地方公共団体が個人情報に対して講ずる施策について規定している。第5章は、個人情報を取り扱う事業者に対する規定であって、個人情報の利用目的や本人の同意等について規定している。第6章の雑則については、この法案の適用除外について挙げており、最後の第7章罰則については、この法案に違反した場合の罰則について規定している。以下は、個人情報保護法案の目次である。

##### 個人情報の保護に関する法律<sup>12)</sup>

###### 目次

###### 第1章 総則（第1条・第2条）

###### 第2章 基本原則（第3条 - 第8条）

###### 第3章 国及び地方公共団体責務等（第9条 - 第11条）

###### 第4章 個人情報の保護に関する施策等

###### 第1節 個人の保護に関する基本方針（第12条）

###### 第2節 国の施策（第13条 - 第15条）

###### 第3節 地方公共団体の施策（第16条 - 第18条）

###### 第4節 国及び地方公共団体の協力（第19条）

###### 第5章 個人情報取扱事業者の義務等

###### 第1節 個人情報取扱事業者の義務（第20条 - 第41条）

###### 第2節 民間団体による個人情報の保護の推進（第42条 - 第54条）

## 第6章 雑則（第55条 - 第60条）

## 第7章 罰則（第61条 - 第64条）

以上であるが、この個人情報保護法案策定の動きの中で、「住民基本台帳ネットワークシステム」による住民基本台帳法の改正をめぐって、国会で激しい論戦が展開されていた頃、上述のように京都府で大量の個人情報を引き出し、インターネット上で売買されるという事件が発生し、一般社会での個人情報の取扱いに関しての規制が急がれるようになった。この法案は、このような社会状況のもとで内閣に提出されたものであるが、個人情報保護法案を策定するにあたって、まず、法案の目的と個人情報がどのようなものであるかの定義が必要である<sup>13)</sup>。そこでこの法案は、第1章総則において個人情報の保護に対する目的と定義を以下のように定めている。

## 第1章 総則

## （目的）

第1条 この法律は、高度情報通信社会の進展に伴い個人情報の利用が著しく拡大していることにかんがみ、個人情報の適正な取扱いに関し、基本原則及び政府による基本方針の作成その他の個人情報利用が著しく拡大していることにかんがみ、個人情報の適正な取扱いに関し、基本原則及び政府による基本方針の作成その他の個人情報に関する施策の基本となる事項を定め、国及び地方公共団体の責務等を明らかにするとともに、個人情報を取り扱う事業者の遵守すべき義務等を定めることにより、個人情報の有用性に配慮しつつ、個人の権利利益を保護することを目的とする。

## （定義）

第2条 この法律において「個人情報」とは、生存する個人に関する情報であつて、当該情報に含まれる氏名、生年月日その他の記述等により特定の個人を識別することができるもの（他の情報と容易に照合することができ、それにより特定の個人を識別することができることとなるものを含む。）をいう。

すなわち、この法案は特定の個人を識別可能な情報については全て保護しようというものである。更に、人権にも係る個人情報を取り扱うにあたっての基本原則についても下記のように規定している。

## 第2章 基本原則

第3条 個人情報が個人の人格尊重の理念の下に慎重に取り扱われるべきものであることにかんがみ、個人情報を取り扱う者は、次条から第8条までに規定する基本原則にのっとり、個人情報の適正な取扱いに努めなければならない。

## （利用目的による制限）

第4条 個人情報は、その利用の目的が明確にされるとともに、当該目的の達成に必要な範囲内で取り扱われなければならない。

## （適正な取得）



第5条 個人情報は、適法かつ適正な方法で取得されなければならない。

（正確性の確保）

第6条 個人情報は、その利用の目的の達成に必要な範囲内で正確かつ最新の内容に保たれなければならない。

（安全性の確保）

第7条 個人情報の取扱いに当たっては、漏えい、滅失又はき損の防止その他の安全管理のために必要かつ適切な措置が講じられるよう配慮されなければならない。

（透明性の確保）

第8条 個人情報の取扱いに当たっては、本人が適切に関与し得るよう配慮されなければならない。

以上のように、個人情報に対する取扱いの基本原則は、個人情報が個人の人格尊重の下で慎重に取り扱われるべきであるとして、個人情報の利用目的による制限、適正な取得、正確性の確保、安全性の確保、透明性の確保の5つの原則に則して機関、法人、団体および個人において個人情報保護のために、適正な取扱いをすべきであることを規定している<sup>14)</sup>。

現在では、行政においても個人情報の保護に関する環境整備は重大な課題である。行政機関は個人情報保護のためには、個人情報のファイルの保有に関しては掌握事務の遂行に必要な場合に限り、その目的に必要な範囲で業務を遂行し、個人情報の漏えいなどがないように安全確保の措置をとる必要がある。また、国民に置いては自己の情報の開示請求権が認められており、開示請求の場合には手数料が必要である<sup>15)</sup>。

20世紀の末から今世紀にかけて、インターネットが急速に普及し、情報技術の発展によって多くの情報の入手を可能にした。そのことは我々の生活の利便性を高めてくれた。また同時に、詳細な個人情報の収集も可能にした。このようにして集積された個人情報は、本人の同意のないままに利用されていることもある。本来これらの個人情報は、情報主体に帰属するものである。しかし、現実にはこのように情報主体に認知しないところで利用されている以上、この現状を認識した上で、個人情報の利用と個人情報の漏えいをも含めた保護の問題について、今後とも考えていく必要がある<sup>16)</sup>。

## 5 おわりに

20世紀の末に情報技術の飛躍的な発展に伴って、情報ネットワークが急速に普及した。特にインターネットの世界的な普及は、今日の21世紀の社会に多大な影響をもたらそうとしている。そして、世界的な情報ネットワーク網は、多種の情報の入手を可能にした。反面、大量の個人情報の収集を容易にしている。大量に収集された個人情報は、本人の知らないうちにデータ・ベースとして蓄積されている場合が多い。収集されたこれらの個人情報は、本来は情報主体の本人に帰属しているものである。本人の同意もなく、これらの個人情報が利用されることは、多くの社会的なトラブルを噴出させることになる。これからは従来のような店舗販売や訪問販売から、インターネット取引の形態が発展していくと思われるが、反面、この取引形態を悪用した詐欺行為や悪徳商法も発生している。このようなインターネット取引においても、個人情報が悪用されないように法制化が求められる。

更に、インターネットの普及は、従来の法制度にも大きな変革を求めようとしている。インターネットは、従来のメディアが情報の発信者と受信者に分離していた形態とは大きく異なり、情報の受発信が同一者である。すなわち、このことからインターネットへの個人の参加が容易であることから、今まで以上に、情報に対する厳しい認識が求められる。すなわち、これからのインターネット社会では情報に対し、新たな認識に基いた法制度を構築しなければならなくなった。

このようなことから、今後とも、情報ネットワークにおける個人情報の利用における現況を的確に把握し、個人情報の利用および保護について注視するとともに、法制度の面においても検討していく必要がある。

## 引用・参考文献

- 1) 梅本吉彦編, 情報社会と情報倫理, 丸善株式会社, 2002, 65-69.
- 2) 夏井高人, ネットワーク社会の文化と法, 日本評論社, 1997, 184-189.
- 3) 岡村久道, 新保史生, 電子ネットワークと個人情報保護, 経済産業調査会, 2002, 12-14.
- 4) 藤井俊夫, 情報社会と法, 成文堂, 2003, 113-114.
- 5) 藤井俊夫, 前掲書, 129-130.
- 6) 石村善治・堀部政男編, 情報法入門, 法律文化社, 1999, 76-78.
- 7) 堀部政雄編, インターネット社会と法, 新世社, 2003, 74-76.
- 8) 総務庁行政管理局, 個人情報保護法, 1991, 22-28.
- 9) 総務庁行政管理局, 前掲書, 18-19.
- 10) 臺 宏士, 個人情報保護の狙い, 緑風出版, 2001, 43-45.
- 11) 臺 宏士, 前掲書, 12-14.
- 12) 岡村久道, 新保史生, 電子ネットワークと個人情報保護, 経済産業調査会, 2002, 511.
- 13) 臺 宏士, 個人情報保護の狙い, 緑風出版, 2001, 70-71.
- 14) 岡村久道, 新保史生, 電子ネットワークと個人情報保護, 経済産業調査会, 2002, 511-513.
- 15) 和田英夫・原田三郎・日笠完治・鳥居壮行, 情報の法と倫理, 北樹出版, 1999, 118-120.
- 16) 岡村久道, 新保史生, 電子ネットワークと個人情報保護, 経済産業調査会, 2002, 491-493.



# 狭帯域長相関モデルを用いたテクスチャ画像のスペクトルピーク位置の 推定

## Estimation of Spectral Peak Location of Texture Images by Using a Long-Correlation Model

宮城 茂幸

Shigeyuki MIYAGI

This paper presents an estimation technique of spectral peak locations of some texture images by using a narrow band long-correlation (NBLC) model and the some estimated results are reported. Texture images with multiple spectral peaks cannot be modeled by the original LC model. An extended LC model, “narrow band LC model”, proposed in[1] is used for the model estimation of such images. However, in the conventional NBLC model, it is assumed that the spectral contour at the peak location is elliptical. This assumption does not hold in any cases. Hence the NBLC model is further extended to describe images with double peak spectrum in which each spectral peak has elliptical contour.

### 1 はじめに

テクスチャ画像のモデルとしては、1次元自己回帰（AR）モデルの拡張である2次元ARモデルがよく知られているが、いくつかの欠点が存在する。一方1次元ARモデルを含むより広義のモデルとして有理差分を用いた長相関（LC）モデルが研究されてきた[2]。1次元ARモデルの欠点を克服するために、[2]の結果がKashyapにより2次元信号（画像信号）に対して拡張された[3]。2次元LCモデルの一般形は[4]において定式化され、さらに画像信号処理に特化した等方型、非等方型2次元LCモデルがEomにより提案された[5]。

著者の以前の研究では狭帯域スペクトルをもつ画像を記述できるよう等方型2次元LCモデルを拡張し、そのモデルパラメータの復元問題を扱った[1]。このモデルでは、それぞれのスペクトルピークが円形の等高線をもつと仮定したが、これは一般の画像信号では必ずしも成立しない。そこで、本論文ではそれぞれのスペクトルピークが楕円型の等高線を持つと仮定し、このようなスペクトルを記述できるようモデルのさらなる拡張を行なう。本モデルの有効性を確認するため、モデルから合成されたテクスチャ画像だけでなく実テクスチャ画像へも適用し、モデルパラメータの推定を行なう。

## 2 狭帯域 LC モデル

$s \triangleq [s_1, s_2]^T$  で表される格子点上の画素の濃淡値を  $y(s)$  と書くことにする。格子点  $s = (s_1, s_2)$  は  $\Omega = \{(s_1, s_2) \in \mathbb{Z} \times \mathbb{Z} | 0 \leq s_1, s_2 \leq N-1\}$  なる集合に含まれている。ここで  $N$  は与えられた画像サイズに対応する。すなわち  $N \times N$  の画像サイズを仮定している。また議論を簡単にするために  $y(s)$  は平均値 0 のランダム確率場であると仮定する。この仮定は以下の議論の一般性を損なうものではない。

[5] において提案された等方型 LC モデルは

$$y(s) = A^{-d}(B)\sqrt{\rho} w(s) \quad (1)$$

で定義される。ここで  $w(s)$  は平均 0 分散 1 の 2 次元ガウス確率場である。  $\rho$  はガウス確率場の分散に対応する。  $d$  は有理数であり、  $A^{-d}(B)$  の有理差分は、時系列解析の因果性 LC モデルの場合 [2] と同様に定義される。演算子  $A(B)$  は

$$A(B) \triangleq a - \frac{1}{2} (B_1 + B_1^{-1} + B_2 + B_2^{-1}) - \frac{1}{4} (B_1 B_2 + B_1^{-1} B_2 + B_1 B_2^{-1} + B_1^{-1} B_2^{-1}) \quad (2)$$

と定義される。ここで  $B \triangleq [B_1, B_2]^T$  であり、  $B_1$  および  $B_2$  は  $s_1$  および  $s_2$  の方向に対応した単位遅延演算子である。モデルの安定性を保つために  $a > 3$  が仮定される。

離散フーリエ (DFT) を (1) に適用すると以下の周波数領域表現が得られる。

$$Y(u) = A^{-d}(U)\sqrt{\rho} W(u)$$

ここで  $W(u)$  は  $w(s)$  の DFT を表す。  $u = [u_1, u_2]^T$  は離散周波数のインデックスを表し、離散周波数  $\omega_d$  は  $u$  を用いて  $\omega_d \triangleq [\omega_{d1}, \omega_{d2}]^T \triangleq [\frac{2\pi u_1}{N}, \frac{2\pi u_2}{N}]^T$  と書ける。また離散周波数  $\omega_d$  を用い  $U \triangleq [e^{i\omega_{d1}}, e^{i\omega_{d2}}]^T$  と定義される。上式より  $y(s)$  のスペクトル密度  $S_y(\omega)$  と  $w(s)$  のスペクトル密度  $S_w(\omega)$  の関係は

$$S_y(\omega) = |A(U')|^{-2d} \rho S_w(\omega)$$

で与えられる。ただし  $\omega \triangleq [\omega_1, \omega_2]^T$  は  $s$  に対応する連続空間周波数を表し、  $U' \triangleq [e^{i\omega_1}, e^{i\omega_2}]^T$  と定義される。

狭帯域 LC モデルは (1) を以下のように拡張することにより得られる。

$$\begin{aligned} y(s) &= \tilde{A}(B)\sqrt{\rho} w(s) \\ \tilde{A}(B) &\triangleq \frac{1}{2} \{A^{-d}(HB) + A^{-d}(H^*B)\} \end{aligned} \quad (3)$$

ここで  $H$  は以下のように定義される行列である。

$$H = \begin{bmatrix} e^{i\lambda_1} & 0 \\ 0 & e^{i\lambda_2} \end{bmatrix}$$

\* は複素共役を表す。  $\lambda \triangleq [\lambda_1, \lambda_2]^T$  は後述のスペクトル密度からわかるようにスペクトルピーク位置を表す量に対応している。



DFT を (3) に適用すると,  $y(s)$  の周波数領域表現が得られる.

$$Y(u) = \tilde{A}(U) \sqrt{\rho} W(u) \quad (4)$$

なお (2) より  $A(HB)$ ,  $A(H^*B)$  は具体的に

$$\begin{aligned} A(HB) &= a - \left\{ \cos\left(\frac{2\pi u_1}{N} + \lambda_1\right) + \cos\left(\frac{2\pi u_2}{N} + \lambda_2\right) \right\} - \cos\left(\frac{2\pi u_1}{N} + \lambda_1\right) \cos\left(\frac{2\pi u_2}{N} + \lambda_2\right) \\ A(H^*B) &= a - \left\{ \cos\left(\frac{2\pi u_1}{N} - \lambda_1\right) + \cos\left(\frac{2\pi u_2}{N} - \lambda_2\right) \right\} - \cos\left(\frac{2\pi u_1}{N} - \lambda_1\right) \cos\left(\frac{2\pi u_2}{N} - \lambda_2\right) \end{aligned}$$

と書ける.

(3) のパワースペクトル密度は

$$S_y(\omega) = \frac{1}{4} \left\{ |A(HU')|^{-2d} + |A(H^*U')|^{-2d} \right\} \rho S_w(\omega) \quad (5)$$

となる. (5) よりスペクトル密度  $S_y(\omega)$  は  $\{ \}$  内の 2 つの項から成ることがわかる. それぞれの項はスペクトルピークの形状に対応しており, それぞれのピーク位置は  $\lambda$  と  $-\lambda$  である.

### 3 狭帯域 LC モデルの拡張

前節で扱った (4) は円形の等高線をもつ双峰型スペクトルの画像モデルを記述することができる. しかし, 実際にはスペクトルピークの等高線は円形であるとは限らず, 楕円形を仮定することが一般的である. もし, ピーク位置が同じであると仮定しても, ピーク位置の等高線の形状が異なる画像では, 画像に現れるパターンも異なる. そこで, DFT 領域において幾何変換を施すことにより (4) を楕円型スペクトルピークを表現できるモデルに拡張する. 拡張されたモデルは以下のように書ける.

$$\begin{aligned} y(s) &= \tilde{A}(B) \sqrt{\rho} w(s) \\ \tilde{A}(B) &= \frac{1}{2} \{ A^{-d}(GHB) + A^{-d}(GH^*B) \} \end{aligned} \quad (6)$$

ここで  $G$  は幾何変換を表す行列であり,  $y$  軸に対する  $x$  軸方向への圧縮伸長の比率を表すパラメータ  $\alpha$  と回転角を表す  $\theta$  を用いて

$$G = \begin{bmatrix} \alpha \cos \theta & \sin \theta \\ -\alpha \sin \theta & \cos \theta \end{bmatrix}$$

と定義される.

DFT を適用すると (6)

$$\begin{aligned} Y(u) &= \tilde{A}(u) \sqrt{\rho'} W(u) \\ \rho' &= \rho / \alpha^2 \\ \tilde{A}(u) &= \frac{1}{2} \{ A^{-d}(\Lambda^{(+)}) + A^{-d}(\Lambda^{(-)}) \} \end{aligned} \quad (7)$$

$$\begin{aligned}\Lambda^{(+)} &\triangleq \begin{bmatrix} e^{i\nu_1^{(+)}} \\ e^{i\nu_2^{(+)}} \end{bmatrix}, \quad \Lambda^{(-)} \triangleq \begin{bmatrix} e^{i\nu_1^{(-)}} \\ e^{i\nu_2^{(-)}} \end{bmatrix} \\ \nu^{(+)} &\triangleq \begin{bmatrix} \nu_1^{(+)} \\ \nu_2^{(+)} \end{bmatrix} \triangleq G^{-1}(\omega_d + \lambda) \\ \nu^{(-)} &\triangleq \begin{bmatrix} \nu_1^{(-)} \\ \nu_2^{(-)} \end{bmatrix} \triangleq G^{-1}(\omega_d + \lambda)\end{aligned}$$

(7) に対するスペクトル密度は連続周波数  $\omega$  を用いて,

$$\begin{aligned}S_y(\omega) &= \frac{1}{4} \left\{ \left| A(\Phi^{(+)}) \right|^{-2d} + \left| A(\Phi^{(-)}) \right|^{-2d} \right\} \rho' S_w(\omega) \\ \Phi^{(+)} &\triangleq \begin{bmatrix} e^{i\mu_1^{(+)}} \\ e^{i\mu_2^{(+)}} \end{bmatrix}, \quad \Phi^{(-)} \triangleq \begin{bmatrix} e^{i\mu_1^{(-)}} \\ e^{i\mu_2^{(-)}} \end{bmatrix} \\ \mu^{(+)} &\triangleq \begin{bmatrix} \mu_1^{(+)} \\ \mu_2^{(+)} \end{bmatrix} \triangleq G^{-1}(\omega + \lambda) \\ \mu^{(-)} &\triangleq \begin{bmatrix} \mu_1^{(-)} \\ \mu_2^{(-)} \end{bmatrix} \triangleq G^{-1}(\omega + \lambda)\end{aligned} \tag{8}$$

## 4 パラメータ推定

固定した定数  $a > 3$  のもとで、もでるパラメータ  $d, \lambda, \alpha$  および  $\theta$  の推定方法について検討する. LC モデル (3) は従来の AR モデルとは異なるので、線形モデル推定法 [6] を直接用いることはできない. その代わりに、観測画像の標本相関関数を用いて定義された評価関数を最小化する方法を使用する.

ここで用いる評価関数は以下のように定義される [7, 4].

$$J(d, \lambda) = \frac{1}{R_z^2(0)} \sum_{r \in \Omega'} R_z^2(r) \tag{9}$$

ここで  $\Omega'$  は  $\Omega$  から原点を除いた領域、すなわち  $\Omega' = \Omega - (0, 0)$  を表す. また  $\hat{R}_z(r)$  は  $z(s) = \sqrt{\rho}w(s)$  の相関関数であり、以下の式で定義される.

$$\hat{R}_z(r) = \frac{1}{N^2} \sum_{s \in \Omega} z(s)z(s+r) \quad r \in \Omega.$$

$Z(u)$  を  $z(s)$  の DFT であるとする、 $\hat{R}_z(r)$  は

$$\hat{R}_z(r) = \frac{1}{N^2} \text{IDFT} [Z(u)Z^*(u)] \tag{10}$$

と表される. ここで IDFT は逆離散フーリエ変換を意味する.

(7) より  $Z(u)$  は  $\tilde{A}^{-1}(u)Y(u)$  と書けるので、 $\hat{R}_z(r)$  は

$$\hat{R}_z(r) = \frac{1}{N^2} \text{IDFT} \left[ \left| \tilde{A}(u)^{-1} \right|^2 |Y(u)|^2 \right]$$



と書き直せる。上式にはパラメータとして  $d, \lambda, \alpha$  および  $\theta$  が含まれていることに注意する。

もし観測画像が完全に (7) に従うならば、 $\hat{R}_z(\mathbf{r})$  は

$$\delta(\mathbf{r}) = \begin{cases} \rho & \mathbf{r} = \mathbf{0} \\ 0 & \text{otherwise.} \end{cases}$$

に近付くので、(9) は 0 に近付く。

逆にパラメータ  $d, \lambda, \alpha$  および  $\theta$  に関して (9) を最小化することによりこれらのパラメータを推定することができ。

(9) を最小化するためには非線形最適化法を用いなければならない。これらの手法では、目的関数の未知パラメータに関する勾配が必要となる。そこで便宜のため (9) の勾配を計算しておく。

$$\frac{\partial J(d, \lambda)}{\partial q} = -2\hat{R}_z^{-3}(\mathbf{0}) \frac{\partial \hat{R}_z(\mathbf{0})}{\partial q} \sum_{\mathbf{r} \in \Omega'} \hat{R}_z^2(\mathbf{r}) + 2\hat{R}_z(\mathbf{0})^{-2} \sum_{\mathbf{r} \in \Omega'} \hat{R}_z(\mathbf{r}) \frac{\partial \hat{R}_z(\mathbf{r})}{\partial q}$$

ここで  $q$  はパラメータ  $d, \lambda_1, \lambda_2, \alpha, \theta$  のいずれかを表す。各パラメータに関する  $\hat{R}(\mathbf{r})$  の導関数は

$$\begin{aligned} \frac{\partial \hat{R}_z(\mathbf{r})}{\partial d} &= \frac{1}{N^2} \text{IDFT} \left[ \tilde{A}^{-3}(\mathbf{u}) \left\{ A^{-d}(\Lambda^{(+)}) \log A(\Lambda^{(+)}) + A^{-d}(\Lambda^{(-)}) \log A(\Lambda^{(-)}) \right\} |Y(\mathbf{u})|^2 \right] \\ \frac{\partial \hat{R}_z(\mathbf{r})}{\partial \lambda_1} &= \frac{d}{N^2} \text{IDFT} \left[ \tilde{A}^{-3}(\mathbf{u}) \left\{ -A(\Lambda^{(-)})^{-d-1} \left( \frac{1}{\alpha} \cos \theta \sin \nu_1^{(-)} (1 + \cos \nu_2^{(-)}) + \sin \theta \sin \nu_2^{(-)} (1 + \cos \nu_1^{(-)}) \right) \right. \right. \\ &\quad \left. \left. + A(\Lambda^{(+)})^{-d-1} \left( \frac{1}{\alpha} \cos \theta \sin \nu_1^{(+)} (1 + \cos \nu_2^{(+)} + \sin \theta \sin \nu_2^{(+)} (1 + \cos \nu_1^{(+)})) \right) \right\} |Y(\mathbf{u})|^2 \right] \\ \frac{\partial \hat{R}_z(\mathbf{r})}{\partial \lambda_2} &= \frac{d}{N^2} \text{IDFT} \left[ \tilde{A}^{-3}(\mathbf{u}) \left\{ A(\Lambda^{(-)})^{-d-1} \left( \frac{1}{\alpha} \sin \theta \sin \nu_1^{(-)} (1 + \cos \nu_2^{(-)}) - \cos \theta \sin \nu_2^{(-)} (1 + \cos \nu_1^{(-)}) \right) \right. \right. \\ &\quad \left. \left. + A(\Lambda^{(+)})^{-d-1} \left( -\frac{1}{\alpha} \sin \theta \sin \nu_1^{(+)} (1 + \cos \nu_2^{(+)} + \cos \theta \sin \nu_2^{(+)} (1 + \cos \nu_1^{(+)})) \right) \right\} |Y(\mathbf{u})|^2 \right] \\ \frac{\partial \hat{R}_z(\mathbf{r})}{\partial \alpha} &= \frac{d}{N^2} \text{IDFT} \left[ \tilde{A}^{-3}(\mathbf{u}) \left\{ A(\Lambda^{(-)})^{-d-1} \left( -\frac{1}{\alpha} \sin \nu_1^{(-)} (1 + \cos \nu_2^{(-)}) \nu_1^{(-)} \right) \right. \right. \\ &\quad \left. \left. + A(\Lambda^{(+)})^{-d-1} \left( -\frac{1}{\alpha} \sin \nu_1^{(+)} (1 + \cos \nu_2^{(+)} ) \nu_1^{(+)} \right) \right\} |Y(\mathbf{u})|^2 \right] \\ \frac{\partial \hat{R}_z(\mathbf{r})}{\partial \theta} &= \frac{d}{N^2} \text{IDFT} \left[ \tilde{A}^{-3}(\mathbf{u}) \left\{ A(\Lambda^{(-)})^{-d-1} \left( -\frac{1}{\alpha} \sin \nu_1^{(-)} (1 + \cos \nu_2^{(-)}) \nu_2^{(-)} + \sin \nu_2^{(-)} (1 + \cos \nu_1^{(-)}) \alpha \nu_1^{(-)} \right) \right. \right. \\ &\quad \left. \left. + A(\Lambda^{(+)})^{-d-1} \left( -\frac{1}{\alpha} \sin \nu_1^{(+)} (1 + \cos \nu_2^{(+)} ) \nu_2^{(+)} + \sin \nu_2^{(+)} (1 + \cos \nu_1^{(+)} ) \alpha \nu_1^{(+)} \right) \right\} |Y(\mathbf{u})|^2 \right] \end{aligned}$$

と書ける。

もしスペクトルピークの等高線が円形であるとあらかじめわかっている場合は、 $\alpha$  と  $\theta$  はそれぞれ 1 と 0 に固定できる。そのような条件下では (4) より  $\hat{R}_z(\mathbf{r})$  は

$$\hat{R}_z(\mathbf{r}) = \frac{1}{N^2} \text{IDFT} [|\tilde{A}^{-1}(\mathbf{u})|^2 |Y(\mathbf{u})|^2]$$

と簡略化される。

数値最適化法ではパラメータ  $d, \lambda, \alpha$  および  $\theta$  を同時に推定することができる。しかし、評価関数が複雑であるので最適解への収束速度が遅くなる可能性がある。そこで、パラメタ推定の手順を2段階に分割する方法が考えられる。最初にある固定された  $d, \alpha$  および  $\theta$  に対してピーク位置  $\lambda$  を推定する。その後得られたピーク位置  $\lambda$  を固定し、残りのパラメータ  $d, \alpha$  および  $\theta$  を推定する。

5 パラメータ推定例

前節で述べたパラメータ推定法を、モデル (7) あるいは従来の AR モデルにより合成されたテクスチャ画像に適用する。その後実画像への適用例を示す。

推定例 1

表 1 に画像生成に用いたパラメータおよび推定したパラメータを示す。生成されたテクスチャ画像を図 1(a) に、画像生成に用いたパラメータから計算した理論スペクトルを図 1(b) に、推定したパラメータから計算した推定スペクトルを図 1(c) にそれぞれ示す。

理論スペクトルから原画像のスペクトルピーク位置は  $(\pi/4, \pi/4)$  および  $(-\pi/4, -\pi/4)$  にあり、それぞれのスペクトルの等高線の長軸は水平軸と並行であることがわかる。図 1(c) より推定スペクトルのピーク位置およびスペクトル形状が理論スペクトルと一致することがわかる

|             | 理論値    | 推定値     |
|-------------|--------|---------|
| $d$         | 2.0    | 2.0207  |
| $\lambda_1$ | 0.7854 | 0.7263  |
| $\lambda_2$ | 0.7854 | 0.7995  |
| $\alpha$    | 2.0    | 2.0252  |
| $\theta$    | 0.0    | -0.0103 |
| $\rho$      | 1.0    | 1.0205  |

表 1: 推定例 1 における画像生成に用いたパラメータおよび推定パラメータ

推定例 2

この例ではスペクトルの回転パラメータを導入したモデルを扱う。ここではそれぞれのスペクトルピークにおける等高線を周波数領域で  $\pi/4$  右周りに回転させた例を取り上げる。

表 2 のパラメータを用いて生成した画像を図 2(a) に、また理論スペクトルを (b) に示す。理論スペクトルよりピーク位置における楕円型等高線の長軸が傾いていることがわかる。この画像をもとに、推定した



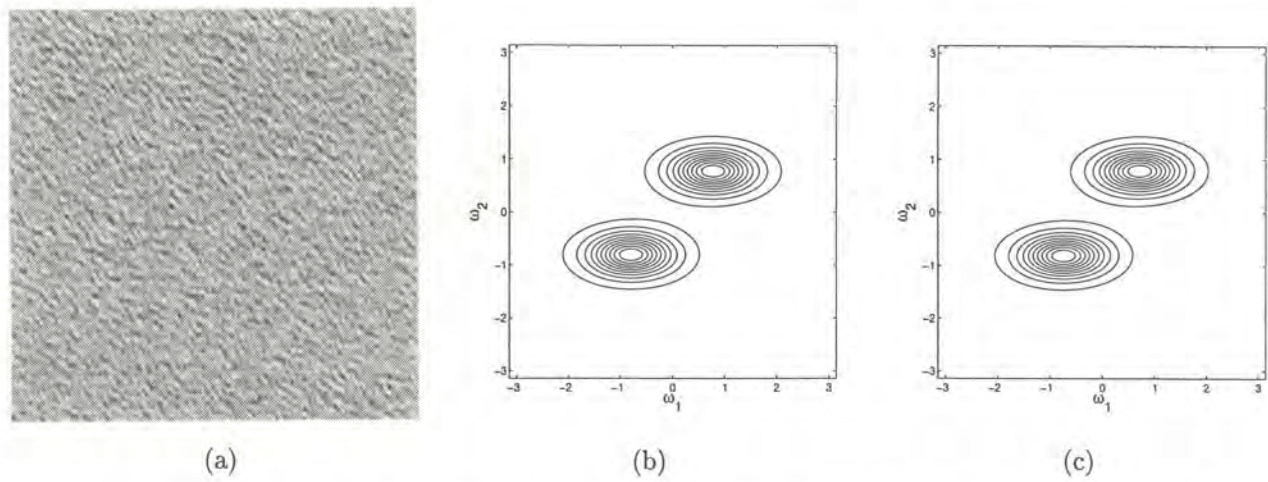


図 1: 表 1 のパラメータを用いて生成したテクスチャ画像に対するパラメタ推定例. (a) 原画像, (b) 画像生成に用いたパラメータから計算された理論スペクトルの等高線, (c) 推定されたパラメータから計算されたスペクトルの等高線.

パラメータを表 2 の右列に, 推定スペクトルを図 2(c) に示す. これらの結果よりほぼ元のスペクトルが再現できていることがわかる.

|             | 理論値    | 推定値    |
|-------------|--------|--------|
| $d$         | 2.0    | 1.9839 |
| $\lambda_1$ | 0.7854 | 0.7553 |
| $\lambda_2$ | 0.7854 | 0.6840 |
| $\alpha$    | 4.0    | 3.7042 |
| $\theta$    | 1.047  | 1.0504 |
| $\rho$      | 1.0    | 1.1579 |

表 2: 推定例 2 における画像生成に用いたパラメータおよび推定パラメータ

推定例 3

ここでは, 非因果性 AR モデルにより生成された画像に対して狭帯域 LC モデルを適用する. 上述の例とは異なり, 画像生成に使用したモデルと, パラメータ推定に当てはめるモデルが異なるので, より実際的な場合に近い設定である.

以下の式

$$S(\omega) = \frac{1}{2}(S_0(\omega - \lambda) + S_0(\omega + \lambda))\rho S_w(\omega) \tag{11}$$

で表される双峰型スペクトルを持つ非因果性 AR モデルにより画像が生成された. ただし

$$S_0(\omega) = \frac{1}{|1 - 2a \cos \omega_1 - 2b \cos \omega_2 + 4c \sin \omega_1 \sin \omega_2|^2}$$

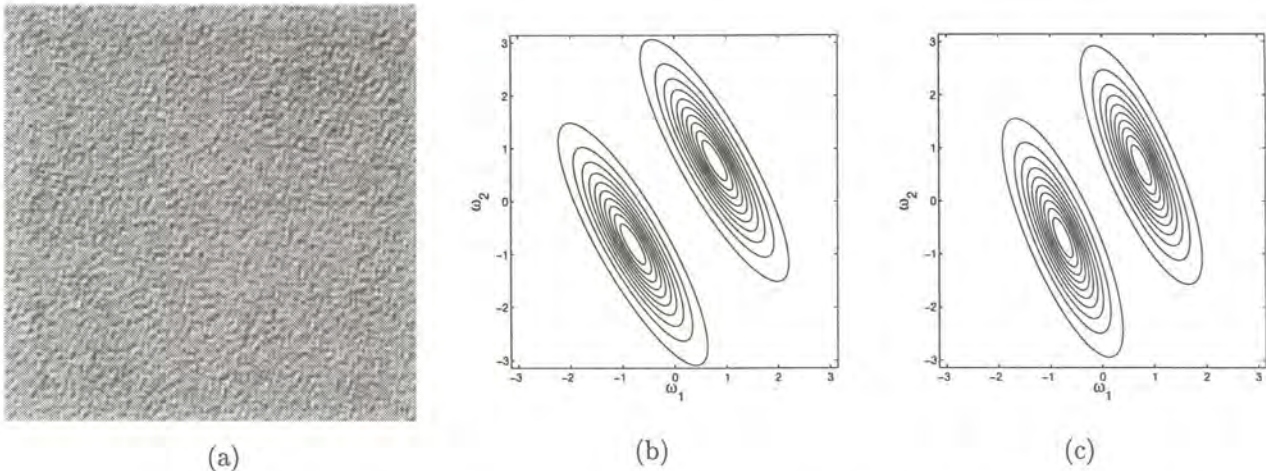


図 2: 表 2 のパラメータを用いて生成したテクスチャ画像に対するパラメタ推定例。(a) 原画像, (b) 画像生成に用いたパラメータから計算された理論スペクトルの等高線, (c) 推定されたパラメータから計算されたスペクトルの等高線.

である. それぞれのパラメータ  $a, b$ , および  $c$  は 0.3095, 0.1865, および 0.1054 と設定した. また白色雑音の分散  $\rho$  は 1.0 とした. 生成した画像と理論スペクトルの等高線を表 3(a)(b) に示す. 理論スペクトルのピーク位置は  $\lambda = (\pi/3, \pi/4)$  である. 生成した画像に対し LC モデルを適用したときのパラメータ  $d, \lambda, \alpha$  および  $\theta$  の推定結果はそれぞれ (1.0822, 0.67582), 1.012 および  $3.509 \times 10^{-2}$  であった. 推定されたパラメータより計算した推定スペクトルを図 3(c) に示すピーク位置はほぼ理論スペクトルのそれと一致する. スペクトル等高線の形状は楕円型であるが, その広がりについては若干の差異がある.

推定例 4 – 実テクスチャ画像 –

実テクスチャ画像にたいし LC モデルを適用する. よく知られた Brodatz のテクスチャ集 [8] より cheesecloth と名付けられたテクスチャを  $256 \times 256$  のサイズで取り出した. その画像を図 4(a) に示す. 水平方向に強い周期性があることがわかる. 原画像から, 直観的にこの周期がほぼ 4 ピクセル毎に起こっていると推定できる. このことはスペクトルピークの位置が  $\omega_1$  軸上のほぼ  $\pi/2$  にあると予想できる.

LC パラメータの推定結果を表 3 に, 推定パラメータから計算された推定スペクトルの等高線と再生画像を Fig. 4(b)(c) に示す. 推定されたピーク位置は直観的に推定された位置とほぼ同じである. またスペクトルピークは水平軸方向に沿って広がっている. これは空間領域では垂直方向に強い相関があることを意味しており, 原画像の性質に対応している. 図 4(b) には原画像と同様なパターンが現れている.

|             |                        |          |                        |
|-------------|------------------------|----------|------------------------|
| $d$         | 2.027                  | $\alpha$ | 7.630                  |
| $\lambda_1$ | 1.724                  | $\theta$ | $6.277 \times 10^{-2}$ |
| $\lambda_2$ | $3.385 \times 10^{-2}$ | $\rho$   | 2.475                  |

表 3: 実テクスチャ画像に対するパラメータ推定結果



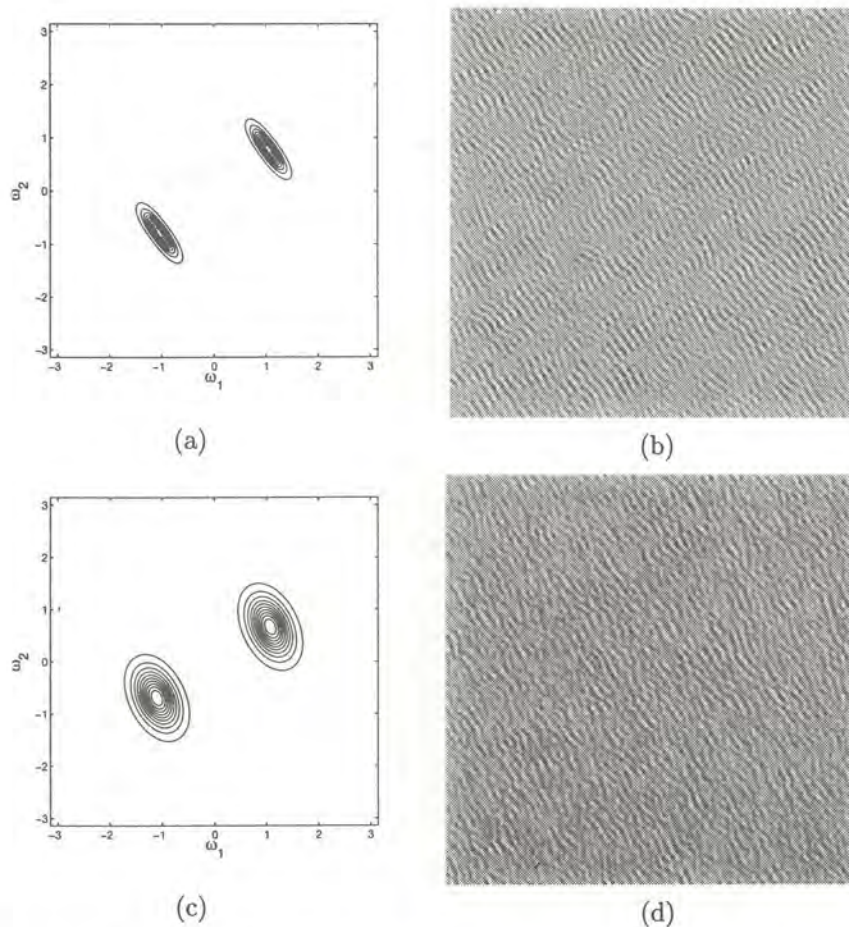


図 3: 非因果性 AR モデルにより生成された画像に対し, LC モデルを用いたスペクトル推定例. (a) (11) により記述されるスペクトル密度の等高線. (b) 非因果性 AR モデルにより生成された画像. (c) 狭帯域 LC モデルにより推定されたスペクトル密度の等高線. (d) 狭帯域 LC モデルにより生成された画像.

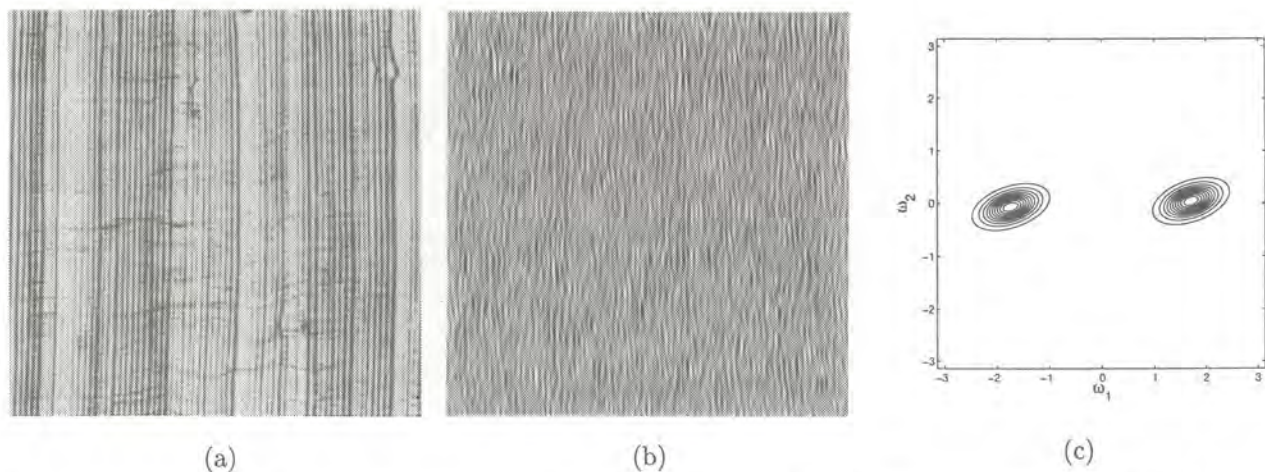


図 4: 実テクスチャ画像を用いたスペクトル推定. (a) 原画像 (b) 推定したパラメータを用いて狭帯域 LC モデルにより生成された画像. (c) 推定スペクトルの等高線.

## 6 結論

楕円型等高線を持つ双峰型スペクトルのテクスチャ画像を記述する拡張 LC モデルの提案を行なった。このモデルを用いたすべてのパラメータ推定シミュレーションにおいて、スペクトルピーク位置を正しく推定することができた。ただし AR モデルにより生成されたテクスチャ画像に対してのスペクトル形状推定においては、スペクトルの広がりをも十分に再現できないこともわかった。より正確なスペクトル形状を推定するための方法について検討を続けている。

## 参考文献

- [1] S. Miyagi, "Random image syntheses by using a narrow band long-correlation model," Proc. of ICASSP2002, Orlando, Florida, May 2002.
- [2] J. R. M. Hosking, "Fractional differencing," Biometrika, Vol. 68, No. 1 pp. 165-176, 1981.
- [3] R. L. Kashyap and P. M. Lapsa, "Synthesis and estimation of random fields using long-correlation models," IEEE Trans. Pattern Analysis and Machine Intelligence, Vol. PAMI-6, No. 6, pp.800-809, Nov. 1984.
- [4] J. Bennett and A. Khotanzad, "Modeling textured images using generalized long correlation models," IEEE Trans. Pattern Analysis and Machine Intelligence, Vol. 20, No. 12, pp. 1365-1370, Dec. 1998.
- [5] K. B. Eom, "Long-correlation image models for textures with circular and elliptical correlation structures," IEEE Trans. Image Processing, Vol. 10, No. 7, pp. 1047-1055, July 2001.
- [6] J. S. Lim, Two-Dimensional Signal and Image Processing, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, NJ, 1990.
- [7] S. Miyagi, H. Ogura and N. Takahashi, "Estimation of noncausal stochastic model by means of whiteness," Electronics and Communications in Japan, Part III: Fundamental Electronic Science, Vol. 76, No. 11, pp. 101-111, Nov. 1993.
- [8] P. Brodatz, Textures: a photographic album for artists and designers, Dover Publications, Inc., New York 1966.



## 加速度計からみた高年者の身体活動量

### Physical Activity in the Elderly Using the Accelerometer

岡本 進

Susumu OKAMOTO

#### Abstract

The purpose of this study is to clarify daily physical activity and its related factors. The subjects are 58 males aged  $66.2 \pm 11.9$  years and 53 females,  $64.1 \pm 3.1$  age of years, who are among the subjects of senior college in Shiga prefecture. Daily physical activity is measured objectively using accelerometers (daily step counts, energy expenditure of daily physical activity and total energy expenditure) for a 1-wk period.

Their step rates average  $9,450 \pm 3,736$  steps/day ( $3,375$ - $20,622$  steps/day) in males and those of females are  $9,518 \pm 2,859$  steps/day ( $3,949$ - $17,948$  steps/day). Average energy expenditure of daily physical activity per day of male subjects are  $286 \pm 131$  kcal,  $4.68 \pm 2.20$  kcal/kg ( $81$ - $762$  kcal,  $1.52$ - $11.76$  kcal/kg), while those of female ones  $245 \pm 92$  kcal,  $4.65 \pm 1.65$  kcal/kg ( $70$ - $485$  kcal,  $1.87$ - $10.04$  kcal/kg). Average total energy expenditure per day of male subjects are  $1,931 \pm 211$  kcal,  $31.6 \pm 3.2$  kcal/kg ( $1,485$ - $2,448$  kcal,  $24.9$ - $42.6$  kcal/kg), while those of female ones  $1,656 \pm 165$  kcal,  $31.7 \pm 2.8$  kcal/kg ( $1,345$ - $2,095$  kcal,  $26.3$ - $37.8$  kcal/kg).

#### 1 緒 言

日常生活における身体活動が健康の維持・増進および体力の向上に及ぼす効果については、多くの疫学研究や生理学的研究などにより明らかにされつつある。最近ではスポーツなどによる特別な運動ばかりでなく、日常的な身体活動によって、エネルギー消費を増やすことが肥満をはじめとする生活習慣病を予防し、高年者のADLの向上、メンタルヘルスに対しても大きな改善効果を持つことが明らかになっている。とくに、高年者の場合、加齢とともに身体活動量が減少し、活動強度も低くなると推測されるが、健康寿命を延伸するためにも意図的に活動量を増やすことが求められる。そのためにも、日常生活における身体活

動量を把握することが重要となる。

日常生活における身体活動量を評価する方法としては、これまで心拍数を用いる方法（心拍数法）、行動記録よりRMRを用いてエネルギー消費量を求める方法（行動記録法）がよく用いられている。近年、簡便にエネルギー消費量を把握できる方法として加速度計を組み込んだ消費カロリー測定器（カロリーカウンター）が開発され、日常生活活動に支障なく長時間の測定が可能となったことから、加速度計法による身体活動量測定およびエネルギー消費量推定が急増している。

そこで本研究では、カロリーカウンターを用いて、高年者を対象に日常生活における身体活動量の実態を把握するとともに、身体活動量に及ぼす

要因および身体活動量を反映する指標について検討することを目的とした。

## 2 方法

### 2.1 対象者

対象者は、滋賀県レイカディア大学、第17～22期生におけるスポーツ・レクリエーション学科の学生である。滋賀県レイカディア大学は、高齢者に新しい知識と教養を身につけるための学習の機会を提供し、地域における老人福祉推進のリーダーを養成する目的で、滋賀県が昭和53年から設置し、レイカディア振興財団によって運営されている老人大学である。学舎は草津と米原の2カ所に設置されていて、修業年数は2年間である。スポーツ・レクリエーション学科はスポーツ・レクリエーション活動を通じて、健康で明るい生活を送るための身体活動の理論と技術を養う目的で、他の選択講座（園芸・陶芸・生活・文芸）より遅れてスタートしている。スポーツ・レクリエーション学科の授業日は年間にして、22日（1日4時間）となっているが、各講座共通の必修講座が30日設けられている。これらのことから、今回の対象者は学習意欲に富んだ活動的な集団とみることができる。

測定には男性65名、女性70名、合計135名が参加したが、すべての対象者には事前に本研究の目的、方法、具体的な測定内容などを十分に説明し、同意を得た上で実施した。今回は、5日以上データが揃っている男性58名、女性53名、合計111名について分析をすすめた。年齢は60～74歳の範囲にあり、平均年齢と標準偏差は、男性 $66.2 \pm 11.9$ 歳、女性 $64.1 \pm 3.1$ 歳であった。

### 2.2 日常身体活動量の測定

身体活動量は消費カロリー測定器（カロリーカウンター、select2、スズケン社製）を用いて測定した。この装置は、性、年齢、身長、体重を入力すると基礎代謝量が算出され、内蔵された加速度計によって活動量レベルをとらえて活動量に変換し、両者を加えることによってエネルギー消費量を算出するとともに歩数計としても機能す

る構造となっている。測定の時期は、秋期（10月の入学時期から11月にかけて）に、1週間にわたって歩数、運動量および総消費量を連続的に測定した。測定にあたっては、起床時から就寝時まで、腰部に装着するように指示した。なお、カロリーカウンターでは微少運動と運動量の合計が活動時代謝量に相当する。デスクワーク、電車・バスの乗車、車の運転、ソファに座ってテレビをみるなどの身体活動で生じる微少な動きを除いた身体活動を運動量と定義している。以上の測定により求めた1日あたりの平均歩数（以下、歩数）、活動による1日あたりのエネルギー消費量（以下、運動量）、1日のエネルギー消費量（以下、総消費量）を身体活動量の指標とした。

### 2.3 統計処理

結果は平均値±標準偏差で示した。統計学的評価は男女2群間比較ではt検定を、年齢階層別3群間の比較では一元配置による分散分析を用いた。平日と週末との平均値の差異は対応のあるt-検定を基に行った。身体活動量の各変数間の対応関係はピアソンの積率相関係数（r）で検討した。統計処理はSPSS統計パッケージ（11.0 for Windows）を用い、有意水準は危険率5%未満とした。

## 3 成績

表1に対象者の身体的特徴と基礎代謝量について、男女別、年齢階層別に示している。男性の身長、体重および基礎代謝量は有意（ $p < 0.001$ ）に女性より大きく、性差が認められたが、BMIには性差が認められなかった。年齢階層別にみた男性の基礎代謝量には3群間で有意（ $p < 0.05$ ）な差が認められ、加齢に伴って減少している傾向がみられた。

歩数は男性では3,375～20,622歩/日の範囲にあり、その平均値と標準偏差は $9,450 \pm 3,736$ 歩/日であった。女性では3,949～17,948歩/日の範囲にあり、その平均値と標準偏差は $9,518 \pm 2,859$ 歩/日であった。女性の歩数はわずかに男性より大きい値を示したが、有意差は認められなかった。



表 1. 対象者の身体的特徴と基礎代謝量

|        |               | 身長<br>(cm)  | 体重<br>(kg) | BMI<br>(kg/m <sup>2</sup> ) | 基礎代謝量<br>(kcal/day) |
|--------|---------------|-------------|------------|-----------------------------|---------------------|
| 男<br>性 | 60～64歳 (n=18) | 165.8 ± 4.5 | 63.0 ± 7.7 | 22.9 ± 2.6                  | 1,333 ± 87          |
|        | 65～69歳 (n=27) | 163.8 ± 5.9 | 61.6 ± 9.0 | 22.9 ± 2.4                  | 1,317 ± 109         |
|        | 70～74歳 (n=13) | 164.5 ± 3.7 | 59.6 ± 7.5 | 22.0 ± 2.4                  | 1,246 ± 81          |
|        | 全 体 (n=58)    | 164.6 ± 5.0 | 61.6 ± 8.3 | 22.7 ± 2.4                  | 1,306 ± 101*        |
| 女<br>性 | 60～64歳 (n=34) | 151.7 ± 4.8 | 52.7 ± 8.8 | 22.9 ± 3.4                  | 1,098 ± 91          |
|        | 65～69歳 (n=15) | 151.4 ± 5.6 | 53.2 ± 7.0 | 23.2 ± 2.8                  | 1,098 ± 74          |
|        | 70～74歳 (n= 4) | 152.8 ± 7.5 | 51.8 ± 3.4 | 22.2 ± 1.7                  | 1,083 ± 83          |
|        | 全 体 (n=53)    | 151.7 ± 5.2 | 52.7 ± 7.9 | 22.9 ± 3.1                  | 1,179 ± 144         |

\*:p<0.05

図 1 には歩数の分布状況が2,000歩ごとに示されている。男女とも8,001～10,000歩/日が最頻度階級となっていて、男子では3名が20,000歩/日を超えている。10,000歩/日以上以上の割合は男性では62.1%，女性では62.3%であった。

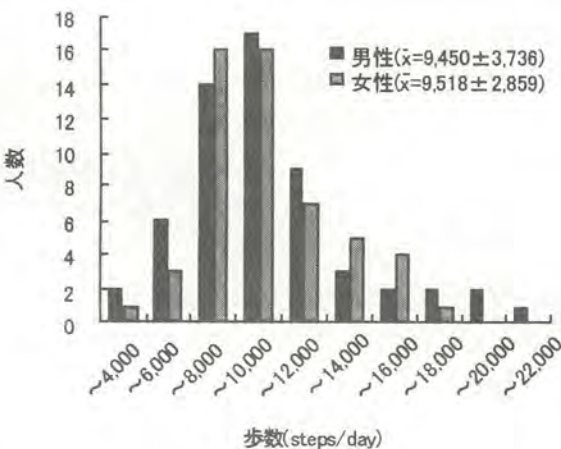


図 1. 歩数の分布状況

図 2 には月曜日から日曜日にかけての歩数の週内変動について、男女別に示している。男性では週末にわずかなではあるが増加する傾向が認められるが、女性ではあまり変動がみられない。

図 3 には平日と週末の歩数について、男女別に示している。男性の週末の平均歩数は、10,143歩/日であり、平日の9,216歩/日より有意(p<0.05)に大きい値である。女性では、週末の平均歩数は9,687歩/日となっていて、平日の9,423歩/日よりわずかに大きい値であるが有意な差ではない。

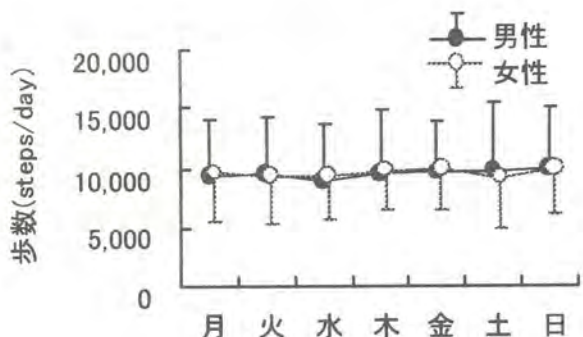


図 2. 歩数の週内変化

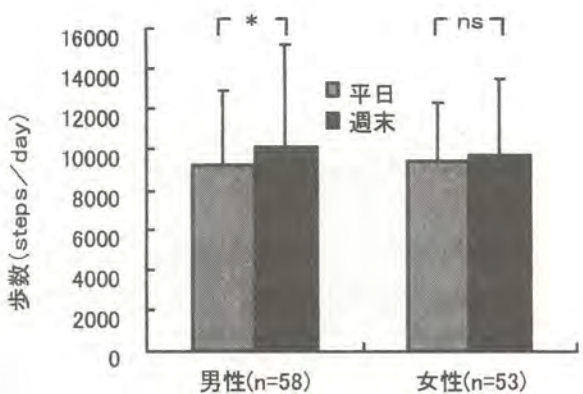


図 3. 歩数における平日と週末の比較

図 4 には運動量の階級別の度数分布を示している。1日あたりの運動量は、男性では81～762kcal (1.52～11.76kcal/kg) の範囲にあり、その平均値と標準偏差は286±131kcal (4.68±2.20kcal/kg) であった。女性では70～485kcal (1.87～10.04kcal/kg) の範囲にあり、その平均値と標準偏差は245±92kcal (4.65±1.65kcal/kg) であった。絶対値におけるピーク値は、男性では

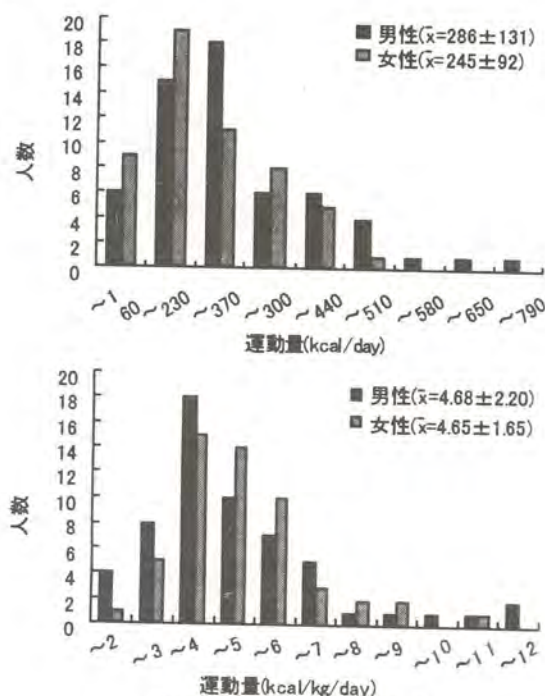


図4. 運動量の度数分布

301~370kcal の階級であり、女性では231~300kcal の階級となっていて、男性では女性より右にシフトした正規分布のパターンを示しているが、体重で補正した相対値でみると、分布には性差がみられない。

図5には総消費量の分布状況を示している。1日あたりの総消費量は、男性では1,485~2,448kcal (24.9~42.6kcal/kg) の範囲にあり、その平均値と標準偏差は1,931 $\pm$ 211kcal (31.6 $\pm$ 3.2kcal/kg) であった。女性では1,345~2,095kcal (26.3~37.8kcal/kg) の範囲にあり、その平均値と標準偏差は1,656 $\pm$ 165kcal (31.7 $\pm$ 2.8kcal/kg) であった。絶対値におけるピーク

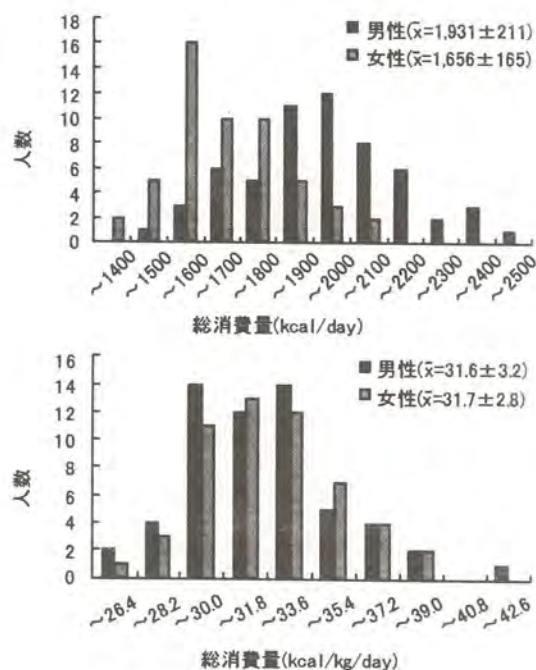


図5. 総消費量の分布状況

値は、男性では1,901~2,000kcalであり、女性では1,501~1,600kcalとなっていて、男性の分布は女性より右にシフトしたパターンを示している。体重で補正した相対値でみると、男女の分布はほぼ重なり合い、性差はみられない。

表2には身体活動量と体力特性との各項目間の相関行列を示している。歩数と年齢との間には、男性では  $r=-0.233$ , 女性では  $r=-0.147$  の相関係数が得られているが、有意な関係が導かれるまでには至っていない。歩数は他の体格に関する各項目指標との間にはあまり関連性がみられない。運動量についてみると、男女とも年齢とは負の関係

表2. 身体特性と身体活動量との相関行列

|    |     | 歩数          | 運動量        |               | 総消費量       |               |
|----|-----|-------------|------------|---------------|------------|---------------|
|    |     | (steps/day) | (kcal/day) | (kcal/kg/day) | (kcal/day) | (kcal/kg/day) |
| 男性 | 年齢  | -0.233      | -0.342 **  | -0.272 *      | -0.493 *** | -0.220        |
|    | 身長  | -0.240      | -0.076     | -0.240        | 0.439 **   | -0.354 **     |
|    | 体重  | -0.125      | 0.141      | -0.118        | 0.670 ***  | -0.586 ***    |
|    | BMI | -0.003      | 0.231      | -0.001        | 0.593 ***  | -0.528 ***    |
| 女性 | 年齢  | -0.147      | -0.171     | -0.148        | -0.179     | -0.044        |
|    | 身長  | -0.139      | 0.018      | -0.161        | 0.449 **   | -0.184        |
|    | 体重  | 0.017       | 0.363 **   | -0.022        | 0.824 ***  | -0.758 ***    |
|    | BMI | 0.081       | 0.385 **   | 0.051         | 0.682 ***  | -0.746 ***    |

\*:  $p<0.05$ , \*\*:  $p<0.01$ , \*\*\*:  $p<0.001$



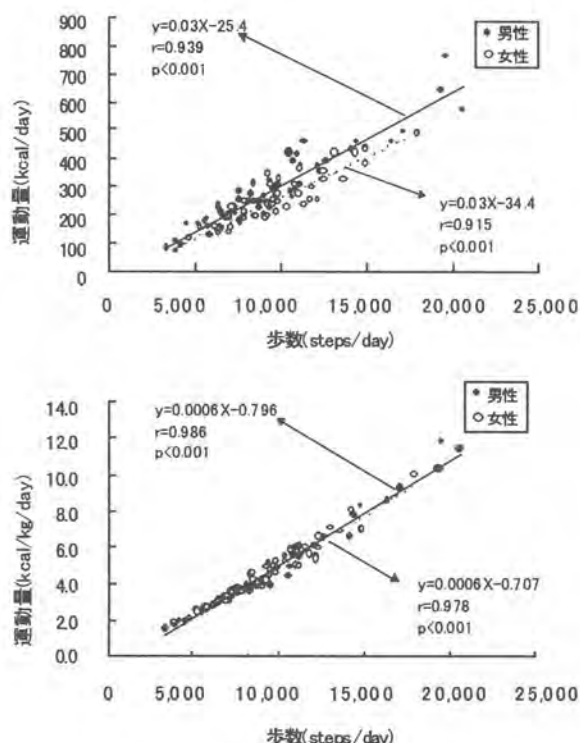


図6. 歩数と運動量との関係

がみられ、男性では有意 ( $p<0.01$ ) な関係が認められている。女性では体重、BMIおよび体脂肪率との間に有意な関係がみられているが、体重で補正した相対値では有意な関係はみられない。総消費量に対する年齢、身長、体重、BMIおよび体脂肪率との相関係数についてみると、男性では絶対値においてすべての項目に対して正の有意な相関関係を示している。女性においても、男性とほぼ類似した傾向を示している。体重補正による相対値では、男女とも多くの体格指標と有意な負の相関関係がみられる。

図6には歩数と運動量との関係を示している。歩数と運動量は男女ともきわめて高い直線性を示しているが、運動量は体重で除されることによって異なる男女の回帰ラインがほぼ重なり合っている。

図7には歩数と総消費量との関係を示している。歩数と総消費量の関係は運動量に比べて関連性は低い。運動量と同様に体重で除した値は異なる男女の回帰ラインがほぼ重なり合っている。

## 4 考察

加速度センサーを内蔵した消費カロリー測定

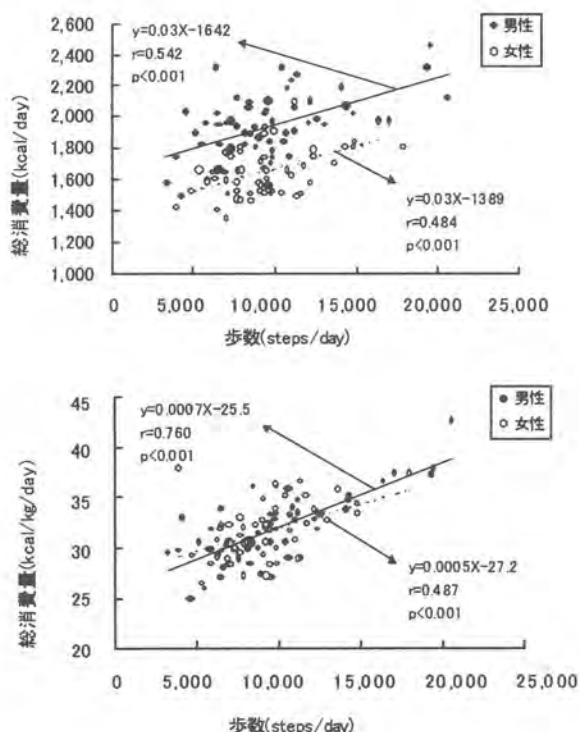


図7. 歩数と総消費量との関係

器が開発され、歩数だけでなく運動強度の要素を取り入れた評価が可能となった。加速度計法によって得られたエネルギー消費量は、生活活動調査法に比べて有意に低い値を示すとする報告<sup>12)</sup>や、トレッドミルによる呼気ガス分析法との比較では走速度が速くなると加速度計が追従しなくなり、過小に評価する傾向がある<sup>11)</sup>といった問題点が指摘されている。加速度変化をとまなわない身体活動では必ずしも妥当な評価が行えない場合があるが、歩行を中心とした日常生活の評価としては妥当性が高い<sup>2)</sup>。

国民栄養調査では性別、年齢階級別の1日の平均歩数を発表しており、その結果は全国値と見なすことができる。平成13年国民栄養調査報告<sup>4)</sup>によると、1日の総歩数は60～69歳において男性では7,529歩、女性では7,168歩であり、70歳以上においては男性では4,916歩、女性では4,260歩と加齢とともに減少することが報告されている。本研究で得られた歩数(男性:9,450歩/日、女性:9,518歩/日)と比較すると、全国値を顕著に上回っており、男性では約1,900歩(25%)、女性では2,350歩(33%)も多い。小林ら<sup>6)</sup>が健康指導教室に参加した60歳以上の男女を対象とした調



査によると、1日の平均歩数が10,000歩以上歩いている者の割合は、男性では30%、女性では25%となっている。本研究の対象者（男性：62.1%、女性：62.3%）はこれを大きく上回っていた。歩数を類型別にみると、男女比較においては本研究と同様、女性の方が多いとする報告と男性が多いとする報告が混在し、一定の傾向は認められない。加齢に伴う歩数の減少については、国民栄養調査<sup>4)</sup>の横断的データにより明らかになっているが、北畠ら<sup>5)</sup>が60歳以上の高齢者を対象とした縦断的研究においても3年間に632歩低下したとして、加齢変化を支持する報告を行っている。本研究では男性にその傾向が見られたが統計的には有意でなかった。週末（土日）と平日の比較については、宮口ら<sup>7)</sup>が農村地域に居住する活動的な高齢者グループの21日間のデータから、週末の歩数は男女ともに平日より少なかったと報告している。本研究では男性の週末の値は平日に比べて有意に大きく、宮口らと異なる結果が得られた。週末に開催される社会行事への積極的参加が伺われた。

これまでに加速度計法によって測定された高年者の歩数、運動量および総消費量を表3に示した。運動量は4秒ごとの運動強度から算出した運動係数に体重を乗じたものを24時間積算して求められているため、当然体重の重い男性の方が女性より大きい値を示すため、ここでは相対値と比較している。本研究の対象者の平均年齢は他の報告よりわずかに若い、歩数、運動量および総消費

量のすべての項目で大きい値を示した。厚生労働省が策定した第6次改定日本人の栄養所要量<sup>3)</sup>における生活活動強度別エネルギー所要量に当てはめると、本研究の対象者は生活活動強度が「Ⅱ（やや低い）」と判定される。この強度に該当する者は、日常生活活動の内容を変えるかまたは運動を付加することによって、生活活動強度「Ⅲ（適度）」に相当するエネルギー量を消費することが望ましいとされている。柳堀ら<sup>1)</sup>や山田ら<sup>2)</sup>が指摘するように、カロリーカウンターによる消費エネルギーの過小評価の傾向をもつ特質を考慮しておく必要がある。総消費量は歩数と有意な関係（図7）がみられたものの、身体活動量を直接反映する指標とはなりにくい。総消費量を身体活動量の指標として用いる場合、基礎代謝量を考慮する必要がある。基礎代謝量は性、年齢別の基礎代謝基準値より推定されており、総エネルギー消費量のうち基礎代謝量の占める割合は男性では67.6%、女性では71.2%となり、基礎代謝量の影響力を大きく受けていた。

ところで、「健康日本21」では身体活動・運動の分野で日常生活における歩数の目標値が示されている。成人の場合、男性9,200歩/日以上、女性8,300歩/日以上、高齢者の場合、男性6,700歩/日以上、女性5,900歩/日以上となっている。我が国では、健康維持のため従来から1日10,000歩が推奨されてきたが、これはエネルギー消費量にするとおよそ300kcalに相当する。カロリーカウンターには目標運動量が表示される仕組みになっ

表3. これまでに報告された加速度計法による高年者の歩数、運動量および総消費量

| 著 者                 | 性別 | 人数 | 年齢       | 歩数          | 運動量           | 総消費量       |               | 備 考    |
|---------------------|----|----|----------|-------------|---------------|------------|---------------|--------|
|                     |    |    | (歳)      | (steps/day) | (kcal/kg/day) | (kcal/day) | (kcal/kg/day) |        |
| 本研究                 | 男性 | 58 | 66.2±3.4 | 9,450±3,736 | 4.68±2.20     | 1,931±211  | 31.6±3.2      | 老人大学生  |
|                     | 女性 | 53 | 64.1±3.1 | 9,518±2,859 | 4.65±1.65     | 1,656±165  | 31.7±2.8      |        |
| 樋口ら <sup>1)</sup>   | 男性 | 33 | 70.9±0.3 | 5,753±2,335 | 2.32±1.08     | 1,707±190  | 29.4±3.1      | 一般健常者  |
|                     | 女性 | 21 |          | 6,570±3,354 | 2.84±1.74     | 1,476±100  | 29.7±3.6      |        |
| ムハモトら <sup>8)</sup> | 男性 | 17 | 69.9±6.0 | 6,912±4,349 | —             | 1,751±218  | —             | 市内団地住民 |
|                     | 女性 | 27 | 68.8±5.2 | 6,081±2,358 | —             | 1,496±136  | —             |        |
| 上地ら <sup>10)</sup>  | 男性 | 16 | 70.6±6.2 | 6,566±2,789 | 2.92±1.38     | 1,746±214  | 29.5±2.5      | 沖縄都市在住 |
|                     | 女性 | 18 | 68.5±4.5 | 6,932±2,749 | 3.06±1.45     | 1,526±189  | 29.1±2.6      |        |

値は、平均値±標準偏差である。



ているが、体重に5kcalを乗じた値が一応の目安として設定されている。体重60kgであればこの300kcalに相当する。体重あたりの運動量と歩数の関係で導き出された回帰式(図6)に基づいて10,000歩における運動量を求めると、男性では5.20kcal/kg、女性では5.29 kcal/kgとなり、男女ともおよそ5kcal/kgの値が得られた。この値は、健康づくりのための身体活動と運動を推進する保健指導の立場からは、個人差を考慮した有用な目標値となろう。この目標運動量に対する達成率を求めると、その平均値は男性では93.6%、女性では93.1%であり、目標運動量を達成していたのは男性で18名(31.0%)、女性で18名(34.0%)であった。

加速度計の開発によって身体活動量は量的評価に加えて強度を加味した質的評価を可能にした。同じ歩数であっても歩き方によって消費カロリーは異なる(図6)ことから、運動強度や活動内容についての情報が得られる。新実ら<sup>9)</sup>は運動習慣の有無別に検討を行っているが、歩数あたりの運動量(相対値)は運動習慣のあるグループでは高いことを明らかにしている。このように、身体活動量を評価するには、単に歩数だけでなく、運動強度を加味した消費カロリーについて総合的に捉える必要がある。今回、高年者の日常生活における身体活動量の実態が明らかになったが、いかなる指標が健康関連体力の水準に影響を及ぼしているかについての横断的、縦断的な検討が今後の課題といえよう。

## 5 総括

高年者の日常生活における身体活動量を把握するために、滋賀県レイカディア大学スポーツ・レクリエーション学科学生(男性58名、女性53名)を対象に、加速度計(カロリーカウンター)を用いて1週間にわたって歩数、運動量および総消費量を計測した。得られた成績を要約すると、以下のとおりである。

- (1) 1日当たりの歩数は、男性では9,450±3,736歩であり、女性では9,518±2,859歩であった。女性の歩数はわずかに男性より大きい値を示したが、有意差は認められなかった。週末の平均歩数は、平日より大きい値を示した

が、男性では有意差が認められた。

- (2) 1日あたりの運動量は、男性では286±131kcal(4.68±2.20kcal/kg)であり、女性では245±92kcal(4.65±1.65kcal/kg)であった。体重で補正した相対値でみると、分布には性差がみられなかった。
- (3) 1日当たりの総消費量は、男性では1,931±211kcal(31.6±3.2kcal/kg)であり、女性では1,656±165kcal(31.7±2.8kcal/kg)であった。相対値でみると、男女の分布には性差はみられなかった。
- (4) 歩数は年齢および体格関連項目との間にはあまり関連性がみられなかったが、運動量および総消費量では年齢との間に負の関係がみられ、男性では有意な関係が認められた。
- (5) 体重補正による総消費量は男女とも多くの体格指標と有意な負の相関関係が認められた。

## 文 献

- 1) 樋口博之, 綾部誠也, 進藤宗洋, 吉武 裕, 田中宏暁: 加速度センサーを内蔵した歩数計による高齢者の日常身体活動量の比較, 体力科学, 52, 111-118, 2003.
- 2) 井上 茂, 下光輝一, 小田切優子, 涌井佐和子, 大谷由美子: 歩数計を健康教育, 疫学研究に应用するための研究—バイアスの少ない評価方法の検討—, 第18回「健康医科学」研究助成論文集, 平成13年度, 10-17, 2003.
- 3) 健康・栄養情報研究会編集: 第六次改定日本人の栄養所要量 食事摂取基準の活用, 第一出版, 東京, 2000.
- 4) 健康・栄養情報研究会: 国民栄養の状況 平成13年度厚生労働省国民栄養調査結果, 第一出版, 東京, 2003.
- 5) 北畠義典, 種田行男, 神野宏司, 江川賢一, 永松俊哉, 西嶋洋子, 荒尾 孝: 生活体力の高齢変化と日常生活の身体活動量との関係—3年間の縦断的研究から—, 体力研究, 96, 26-33, 1999.
- 6) 小林寛道, 近藤孝晴: 高齢者の運動と体力, 朝倉書店, 東京, 1986.
- 7) 宮口明義, 藤原勝夫: 高齢者の万歩計を用いた身体活動量, 金沢経済大学人間科学研究

- 所 telos, (12), 7-14, 1994.
- 8) モハモド モニルル イスラム, 岡由暁宜, マイケル ロジャース, 竹島伸生: 高齢者における日常生活活動量と健康関連体力および機能的体力との関連性, 第17回「健康医科学」研究助成論文集, 114-123, 2002.
- 9) 新実光朗, 長谷川真美: 運動療法の指標と効果判定, カロリーカウンターを中心として, SUZUKEN MEDICAL64, 72-79, 1992.
- 10) 上地 勝, 金城幸盛, 平良一彦, 田神一美, 細川淳一: 地域在宅高齢者の身体活動量に関連する要因－沖縄の都市と農村地域における比較より－, 民族衛生, 63(1), 6-13, 1997.
- 11) 山田誠二, 馬場快彦: 加速度計を利用したカロリーカウンターによる身体活動エネルギー量測定法の有用性, 産業医学, 32, 253-257, 1990.
- 12) 柳堀朗子, 青木和夫, 鈴木洋児, 郡司篤晃: 一日の日常生活活動量測定方法の検討, 日本公衛誌, 38, 483-491, 1991.



## 高温環境下運動時における熱中症の発生とその予防

### The Prevention of Heat Casualty during Exercise in a Hot Environment

寄本 明

Akira YORIMOTO

#### Abstract

Climatic changes associated with global warming will have a serious impact on human beings. Among the potential direct risk that global warming presents to human health is the increase of heat-related deaths during intermittent hot weather. The body thermoregulatory mechanisms are primarily geared to protect against overheating. This is important during exercise in hot weather, when an inherent competition exists between mechanisms that maintain a large muscle blood flow and those that provide adequate thermoregulation. As ambient temperature increases, the effectiveness of heat loss decreases by radiation, conduction, and convection. In such environments, sweat evaporation and small convection to cooling provided by the vaporization of water from the respiratory tract is the only means of heat dissipation. A few hours of exercise in a hot environment can cause water loss to reach a significant level. This fluid deficit or dehydration occurs from both the intracellular and extracellular compartments and can rapidly reach levels that impede heat dissipation, reduce heat tolerance, and severely compromise cardiovascular function and exercise capacity. The primary aim of fluid replacement is to maintain plasma volume so that circulation and sweating progress at optimal levels. Body fluid replacement by drinking is suggested as advantageous for body temperature regulation and prevention of heat casualty during exercise in a hot environment.

#### はじめに

地球温暖化は、世界的な規模での問題となり、多くの知見を集積し気候変動に関する取り組み

みが世界的におこなわれている。地球温暖化を引き起こす最大の要因は、社会経済活動、直接的には石炭、石油燃料の消費による二酸化炭素の増加が原因である。二酸化炭素は将来にわたり蓄積し、

温室効果により地球温暖化は更に進むと考えられている。実際、100年前にと比べると気温は日本全国各地の平均で1℃以上、都市部では都市化によるヒートアイランド現象の影響もあり3℃前後上昇している<sup>3)</sup>。温暖化による気候変化は地球全般で平均的に進行するのではなく、地域ごとに異なる変化をすると予測されている。特に健康や生態系への影響の著しい夏季の気温に関しては、世界各地において既に異常高温の発生の増加が報告されている。その結果、各国より健康被害の多発が報告され、特に高齢者の熱中症発生が相次いでおり、多数の死亡事例がみられる。このように夏季の高温による健康への悪影響が予測され、地球温暖化に伴う夏季熱ストレスの健康へ及ぼす影響は、今後の重要課題の一つと位置づけられる<sup>1)</sup>。

同様に地球温暖化がすすむに従い、夏季運動時の脱水や体温上昇による熱中症の発生は近年、中高年者に多くなっている。一般に、暑熱環境下の運動時には体温上昇を抑えるため、主として発汗による熱放散を行う。発汗が多量になると体内の水分量の減少、すなわち血漿量の減少となり高体温や心拍数の増加をもたらし、運動能力の低下や熱中症発生の危険性が増加する。そのためこれらの予防には飲水が重要であり、飲水による脱水の回復は運動能力を低下さすことなく運動を遂行し、熱中症の危険性を減らすことになる。

そこで、夏季の運動時における熱中症予防および運動能力維持といった点から、実際のスポーツ現場のデータに基づき高温環境下運動時における熱中症の発生と予防について検討する。

### 運動時の熱中症発生とその危険性

熱中症とは暑熱環境で生じる障害の総称で、皮膚血管の拡張による血圧低下や脳血流減少によりめまいや失神が起こる「熱失神」、脱水で脱力感、倦怠感、めまい、頭痛、吐き気などが起き

る「熱疲労」、大量の発汗により血液中の塩分濃度が低下し、足、腕、腹部の筋肉が痛みを伴ってけいれんする「熱けいれん」、体温上昇で中枢機能に異常をきたし意識障害を起こす「熱射病」のことを言う<sup>2)</sup>。

人口動態統計によるとわが国の熱中症死亡は労働現場で多く発生するといわれてきたが、近年はスポーツ活動中や日常生活でも多く発生している。特に気温の高かった年に多く発生しており、近年の温暖化によると思われる気温の上昇とともに熱中症も増加傾向にある。1994年では大阪の最高気温が39.1度まで上昇し、その年の熱中症の死亡数は589件にもなった<sup>7)</sup>。また、高温の指標となる真夏日および熱帯夜の多い年は熱中症の死亡数が多いという報告もある<sup>8)</sup>。

一方、年齢別の熱中症死亡数は、35歳以降で多くなっている。この年齢では労働場面やスポーツ場面で発生し、65歳以上では日常生活でも発生が見られる。このように中高年者の熱中症死亡は多い。また、発生時期は7月と8月で90%以上を占め、特に7月の下旬から8月上旬にかけて多く発生している。発生時刻では午前10時から午後4時の間に多く見られるが、午前10時から12時にかけて最も発生率が高い<sup>2)</sup>。一方、中高年者が多く参加する長距離ウォーキングなどは、7、8月の夏季でも実施され、そのスタート時間は午前中が多い。さらにマーチ等のイベント実施時には長時間のウォーキングとなり、数日続くこともあり熱中症の危険性はより高くなる。

### 高温環境下運動時の生体応答

暑熱環境を総合的に評価するため気温、湿度、気流および輻射を組み合わせた湿球黒球温度(WBGT: Wet Bulb Globe Temperature)<sup>10)</sup>が国際的に統一された基準となり、運動時にも応用されてきている。なお、WBGTは自然気流に暴露した湿球温度(NWB)、乾球温度(NDB)、



黒球温度(GT)から、屋外では  $WBGT = 0.7NWB + 0.2GT + 0.1NDB$  の式で算出される。日本の夏季に体験する4種類のWBGT条件下で、ウォーキングの運動強度で20分間の運動を5分の休憩をはさみ3回実施し、その際の生体応答を観察した<sup>11)</sup>。図1の上段には心拍数の変動を、下段には体内温(食道温)の変動をそれぞれ示した。

心拍数の経時変動(図1上段)は、WBGT22および26℃の運動中の心拍数は各運動時にほぼ定常状態に達しているが、30、32.5℃では各運動期間中上昇を続けた。運動終了時の心拍数はWBGT22℃に比べ、30および32.5℃ではそれぞれ20拍/分以上の上昇が認められた。このように高温環境下では同一運動を実施していても心拍数は著しく増加する。心拍数は高温環境下における身体活動の許容範囲を決定するためのよい指標となる<sup>10)</sup>とされており、高温下での心拍数の増加は皮膚血管拡張による皮膚血流量の増加および発汗による脱水により、体内の血液分布が変化し、心臓へ帰還する血液量が減少するためであり<sup>5)</sup>、循環血液量の減少に起因した1回拍出量の低下を示唆している。

食道温の経時変動(図1下段)は、WBGT22と26℃で各運動時に定常状態を示しているが、WBGT30と32.5℃では運動中上昇し、定常状態になることはなかった。運動終了時の食道温はWBGT22℃での37.7℃に対し、WBGT30℃で38.5℃、WBGT32.5℃で39.1℃と高くなっていた。また、安静時からの体温上昇度ではWBGT22℃では0.7℃であったが、WBGT30と32.5℃では1.2と1.7℃上昇していた。運動時の体温(直腸温)の上昇は気温5~30℃の範囲内で環境温に左右されず運動強度に比例する<sup>8)</sup>とされているが、環境温度がある範囲を超えれば運動強度だけでなく環境温の影響を受けると考えられる。今回実施した1時間の運動ではWBGTを基準にした場合、26~30℃の範囲以上で体内温の上昇が起

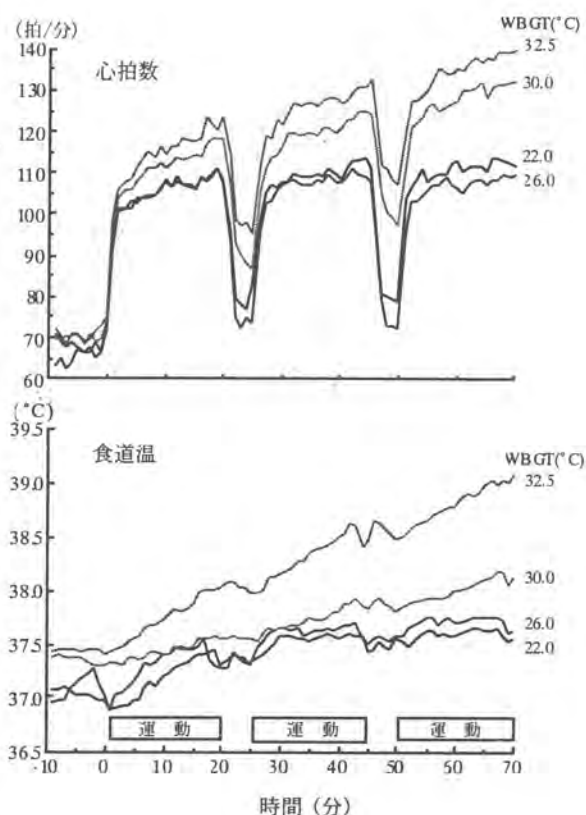


図1 4種類の暑熱環境下運動時における心拍数および体内温(食道温)の変動  
上段が心拍数、下段が食道温

こり熱放散能力の不全による蓄熱が起こり始め、暑熱障害発生の危険性があると考えられる。さらに暑熱順化していない人、高齢者や子供については、1~2℃低い温度からその危険性を考える必要がある<sup>11)</sup>。

夏季ウォーキング時の1時間当たりの脱水量と脱水率を図2示した。炎天下で実施したウォーキングの脱水量は680gで、脱水率は1.22%であった。これらの値から比較的脱水がすすんでいることが分かる。日常習慣的に行っている早朝あるいは夜間のウォーキングでは脱水量が380gであり、脱水率は0.65%であった。日中の炎天下に比べてその値は少ないが、強い日差しを避けたにも関わらず脱水はすすんでいた。一般に、運動能力や体温調節能力は体重の3%の水分を失うと低下する。そこで、2%を超えないよう水分

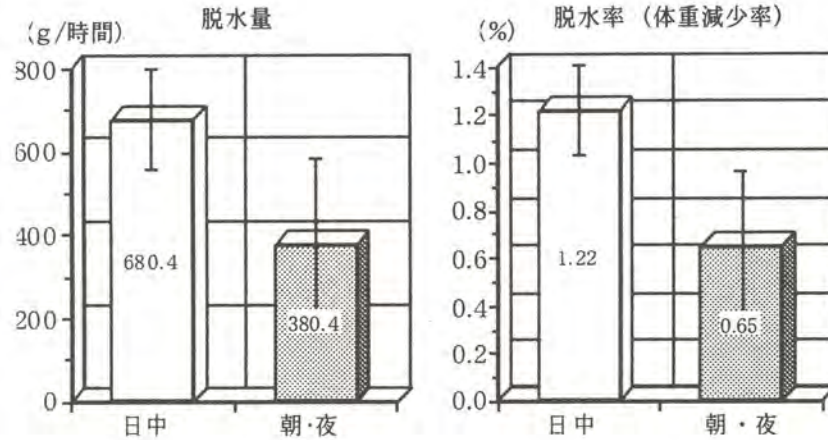


図2 夏季ウォーキング1時間当たりの脱水量と脱水率

と塩分を補給する必要がある。中高年者の場合は体水分量、特に細胞内液が減少してきているので、このような脱水率であってもより積極的な水分摂取が重要であると考えられる<sup>14)</sup>。

### 脱水と運動能力

脱水によって運動能力が低下することは Sawka ら<sup>9)</sup>によって示唆されている。脱水と有酸素能力の関係については Yoshida ら<sup>15)</sup>が夏季運動時に水分補給率を任意に変化させて0.7～3.1%の脱水条件を設定し、有酸素性運動能力の指標である踏み台昇降運動指数 (STS) を測定して脱水の程度と STS 低下との関係について調査した。図3上段に示すように、軽度の脱水であれば STS の低下は認められないが2%を超えると顕著に低下した。このことは脱水により有酸素能力が低下し、その低下には脱水量閾値が存在することを示している。すなわち、運動時に体重の2%を超える脱水は有酸素能力が低下し、早く疲労困憊に至ることを意味する。脱水と無酸素性運動能力との関係については図3下段に示した。スポーツ活動前後に10秒間の最大自転車漕ぎ運動による無酸素パワー (MAP) を測定したところ、中等度までの脱水では MAP の低下は認められな

運動前レベルからの変化率 (%)

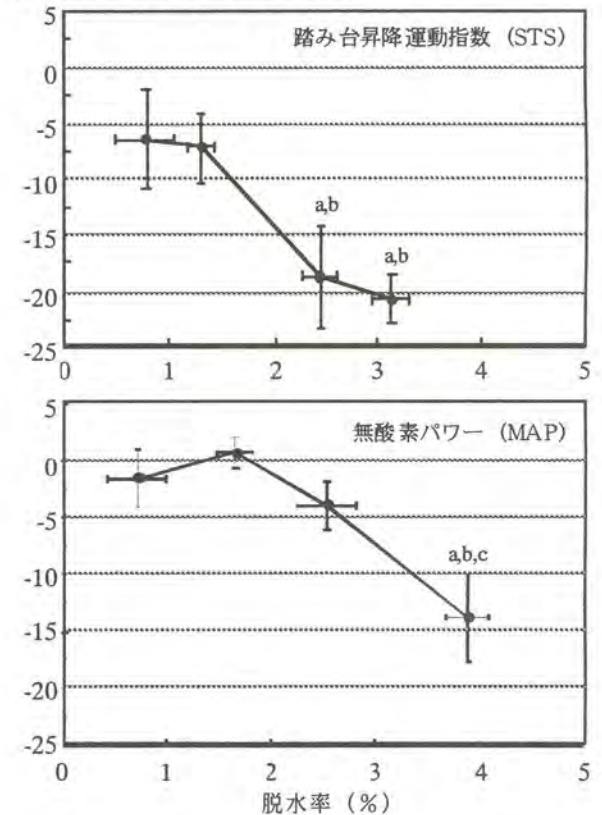


図3 脱水のレベルが有酸素能力および無酸素能力に及ぼす影響

上段図中の a,b は 0.7 および 1.3% の脱水と比較した有意差 ( $p < 0.05$ )

下段図中の a,b,c は 0.7, 1.7 および 2.5% の脱水と比較した有意差 ( $p < 0.05$ )



いが、4 %程度の脱水では無酸素パワーが顕著に低下した<sup>15)</sup>。このように無酸素性の運動能力を低下させる脱水量閾値が存在し、4 %以上の脱水では細胞内の水分損失が増加し、筋肉内の細胞水分減少は細胞内電解質濃度を変化させ、それは活動電位の変化を伴って筋収縮を阻害する可能性があり筋疲労やパワーの低下を引き起こす原因になる。また、このような脱水は筋血流を低下させるため、乳酸等の筋肉内の疲労物質の除去が円滑に行われない。すなわち運動の場面において、体重の 4 %を超える脱水は筋疲労やパワーの低下を引き起こす。

運動中の水分摂取

自由飲水条件で運動（野球練習）を行った際の直腸温変化を図 4 に示した。図中の矢印は飲水を行った時点を示している。練習中の直腸温は時間経過と共に上昇しているが、飲水によりその上昇は抑制されている。図の下段の被験者 C は運動前半飲水をしていないので直腸温は 39.9℃まで上昇しているが、休憩時飲水によって速やかな低下が観察された<sup>12)</sup>。高温下での運動時の体温上昇は体重の約 1%の脱水で直腸温が約 0.3℃上昇するとされており、水分を摂取することで体内温の上昇が抑えられる。

暑熱環境下における歩行（ゴルフプレー）時の飲水状況を調査したところ、水分の補給率は、水、お茶、ジュースを自由に飲用した飲料水で 30.9%、電解質を含んだスポーツドリンクを自由に飲用したスポーツドリンクで 51.3%であり、スポーツドリンクで高くなった<sup>13)</sup>。森本ら<sup>14)</sup>は、高温環境下で運動を負荷し、大量の発汗をしている間には、たとえ自由に水分を摂取しても 40～60%しか水分を補給できないと報告している。また、この水分の補給率は水道水よりもスポーツ飲料や食塩を含んだ溶液の方が高いことが示されている。とくに、体重の 2～3%以上の脱水が

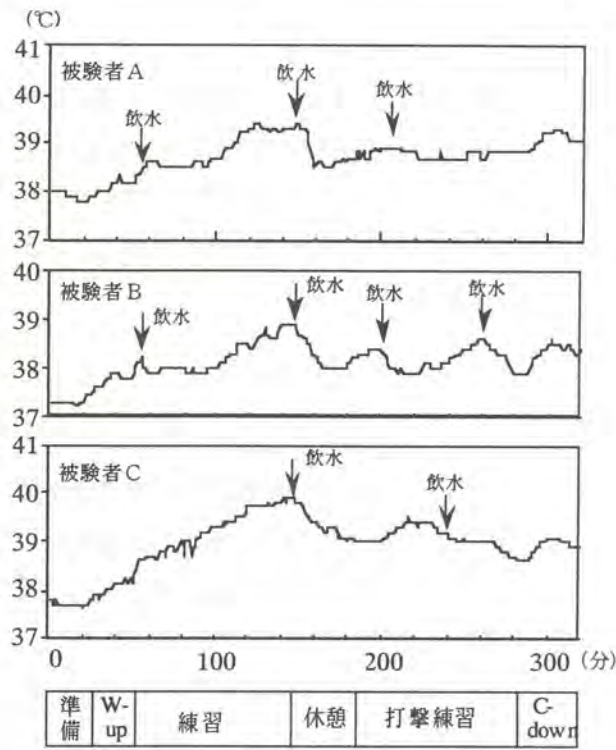


図 4 自由飲水条件での運動（野球練習）時の直腸温の変動  
図中矢印は飲水を行った時点。

起こった場合、さらに運動を継続するためには塩分を補給しないと希釈性の飲水停止が起こり、体液量を保持できなくなる。すなわち、水だけの摂取の場合は体液が薄まり、身体はそれを防ぐためのどの渇きを止め水分補給を拒否し、水利尿等によって自発的脱水（二次的脱水）を起こし、その結果、元の体液量まで回復しない。長時間にわたる運動時にはスポーツドリンクのような電解質を含んだ飲料水を頻繁に摂取する必要があり、スポーツドリンクが水などの飲料水より rehydration（体水分量の回復）を高められる。

このように飲水による脱水の回復は運動能力を低下さすことなく運動を遂行し、熱中症の危険性を減らす。運動時における水分摂取の目安を示すと次のようになる。(1)運動前に 250～500ml 程度の飲水、(2)運動中は飲水休憩を取り、自由飲水（30～60 分毎に 200～500ml 程度）、(3)

摂取する水分は5～15℃の冷水あるいは0.2%の食塩水（スポーツ飲料）、(4)体重の2%を超える場合は必ず食塩水（スポーツ飲料）を摂取。ただし、実施日の温度条件、歩行スピードによっては休憩の回数や水分補給量を増やす必要がある。また、回復時においても水分を摂取することによって体温の回復が早くなる。

## おわりに

高温環境下の運動時には体温上昇を抑えるため主として発汗による熱放散を行う。発汗が多量になると体内の水分量の減少、すなわち血漿量の減少となり高体温や心拍数の増加をもたらす、運動能力の低下や熱中症発生の危険性増加となる。そのためこれらの予防には飲水が重要である。飲水による脱水の回復は運動能力を低下さすことなく運動を遂行し、熱中症の危険性を減らすことになる。また、発汗により水と同時に塩分等も失われており、多量の発汗の場合は塩分の補給も必要である。多量に発汗した場合、水だけを飲むと身体の電解質バランスが崩れ、熱けいれんなどを起こす原因となる。また、水だけの摂取の場合、自発的脱水（二次的脱水）が起こり、元の体液量まで回復しない。このように夏季における運動時には十分な水分・塩分摂取が望まれる。

なお、本論文は第7回日本ウォーキング学会大会フォーラム（2003）において発表した内容の一部である。

## 文 献

- 1) 安藤 満、山元昭二（2003）：地球温暖化と熱中症、日生気誌、40(3)：S70.
- 2) 川原 貴、森本武利（1999）：スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック、（財）日本体育協会、東京.
- 3) 南 利幸（2003）：地球温暖化と熱中症の予報について、日生気誌、40(3)：S69.
- 4) 森本武利、三木健寿、能勢 博、山田誠二、平川和文、松原周信（1981）：発汗時の水分塩分摂取と体液組成の変化、日生気誌、18：31-39.
- 5) Morimoto,T.(1990): Thermoregulation and body fluids: Role of blood volume and central venous pressure. Jpn.J.Physiol., 40: 165-179.
- 6) 中井誠一（1993）：熱中症死亡数と気象条件—日本における21年間の観察—、日生気誌、30：169-177.
- 7) 中井誠一、新里寛英、森本武利（1996）：熱中症発生に関する疫学的検討、日生気誌、33：71-77.
- 8) Nielsen,M.(1938): Die Regulation der Korper temperatur bei Muskelarbeit. Skand.Arch.Physiol., 79: 193-230.
- 9) Sawka,M.N., Pandolf,K.B. (1990): Effects of body water loss on physiological function and exercise performance. In: Gisolfi CV, Lamb DR (eds.). Perspectives in exercise science and sports medicine, volume 3, Fluid homeostasis during exercise. Indianapolis, Benchmark Press, pp 1-38.
- 10) Yaglou,C.P. and Minard,C.D.(1957): Control of heat casualties at military training centers. Am.Med.Ass.Archs.Ind. Health, 16: 302-316.
- 11) 寄本 明（1992）：WBGTを指標とした暑熱下運動時の生体応答と熱ストレスの評価、体力科学、41：477-484.
- 12) 寄本 明、中井誠一、芳田哲也、森本武利（1995）：屋外における暑熱下運動時の飲水行動と体温変動の関係、体力科学、44：357-364.
- 13) 寄本 明、岡本 進、堀井大輔、佐藤智明（1999）：ゴルフプレー中の暑熱障害発生に及ぼす脱水の影響、滋賀県立大学国際教育センター研究紀要、4：197-204.
- 14) 寄本 明（2001）：夏季におけるウォーキン



グ時の水分代謝と体温調節、ウォーキング研究、5 : 75-79.

performance: a practical field study, Eur. J. Appl. Physiol., 87: 529-534

- 15) Yoshida,T., Takanishi,T., Nakai,S., Yorimoto,A., Morimoto,T.(2002): The critical level of water deficit causing a decrease in human exercise

- 16) 渡辺徹一 (1977) : 基礎環境衛生学—増補版一、朝倉書店、東京、pp43 - 46.

## 国際教育センターの活動紹介



## 国際教育センター主催のセミナー

### 2002年度 第1回セミナー

題 目: 自然言語処理の現状及び日中研究者の交流事情

講 師: 馬 青氏 (独立行政法人通信総合研究所けいはんな情報通信融合研究センター  
主任研究員)

日 時: 2002年10月9日(水) 13:10~14:40

場 所: 滋賀県立大学 A1-302講義室

#### 講師紹介:

1983年北京航空航天大学自動制御学部卒業。1987年筑波大学大学院理工学研究科修士課程修了。1990年同大学院工学研究科博士課程修了。工学博士。1990~1993年株式会社小野測器勤務。1993年郵政省通信総合研究所入所。現在独立行政法人通信総合研究所主任研究員。機械学習を用いた自然言語処理の研究に従事。学術雑誌論文20篇以上、国際会議論文30篇以上、国内口頭発表40篇以上の研究業績を挙げておられる。自然言語処理学会誌編集委員・情報処理学会自然言語処理研究会連絡委員などを務めるほか、自然言語処理に関する数多くの国際会議や国内大会のプログラム委員長・委員を務めた経歴をお持ちである。2001年に、日中両国のトップクラスの自然言語処理研究者による、第一回日中自然言語処理共同研究促進会議の開催にも貢献をしておられる。

#### 概 要:

インターネットの普及に伴う本格的な情報化社会の到来はわれわれを取り巻く情報環境、情報空間を質、量ともに大きく変えつつある。急激な変貌を遂げつつあるこの情報空間をわれわれにとって快適なものにするには自然言語処理技術は極めて重要な役割を果たしているといえよう。自然言語処理とは、自然言語、すなわち人間の読み、書き、話す言語を計算機で取り扱うことで、近年すさまじい発展を遂げた新しい分野である。講演では、まず、自然言語処理の手順や主要なアプローチが概説され、そして、情報検索や自動要約といった自然言語処理の最新応用動向について述べられた。最後に、一昨年から始まった日中自然言語処理共同研究促進会議のなど、日中両国研究者の交流事情についても紹介された。

## 2002年度 第2回セミナー

題 目: 日本プロ野球界における選手の体格推移とトレーニングの変遷

講 師: 中山 悌一 氏 (元阪神タイガース トレーニングコーチ)

日 時: 2003年1月15日(木) 16:30~18:00

場 所: 滋賀県立大学 A1-302講義室

### 講師紹介:

1953年福岡県に生まれる。体育学修士。1978年日本体育大学大学院修士課程修了後、同大学大学院の助手を経て、1979年に株式会社阪神タイガースへトレーニングコーチとして入団。1988年プロ野球界初のコンディショニングコーチに就任。国立鹿屋体育大学等で野球に関する講演を多数行う。

### 概 要:

日本のプロ野球界におけるトレーニングは時代と共に変化してきた。東京オリンピックが行われた1964年以降にトレーニングを担当する専門のコーチが巨人軍で初めて採用され、名称をランニングコーチと称した。当時のトレーニングコーチの役割の大半は選手にランニングを課す事であり、その時のランニングコーチは東京オリンピックの陸上10種競技日本代表の鈴木章介氏であった。その後、陸上競技の名選手がトレーニングコーチとして活躍する時代を迎える。1980年代に入ると、野球のトレーニングを科学的に見直そうという気運が高まり、体育学部の大学院等でスポーツ科学を学んだ人達がプロ野球に入団する事となり、ウエイトトレーニングなどのトレーニングが積極的に導入されるようになる。1990年代になると日本、アメリカの両国で肘、肩の手術が頻繁に行われるようになり、アスレティックリハビリテーションの必要性が高まり、理学療法士などがリハビリトレーニングに参加するようになった。更にアメリカの全米アスレチックトレーナーズ協会の資格を有する人達がプロ野球界に入団してくるようになった。21世紀を迎えて、動体視力などを高めるビジョントレーニングなどもプロ野球界に導入されてきている。この様なプロ野球界における選手の50年間の体格推移とトレーニングの変遷をお話頂いた。



## 日本プロ野球界における選手の体格推移とトレーニングの変遷

中山 梯一  
(元阪神タイガース)

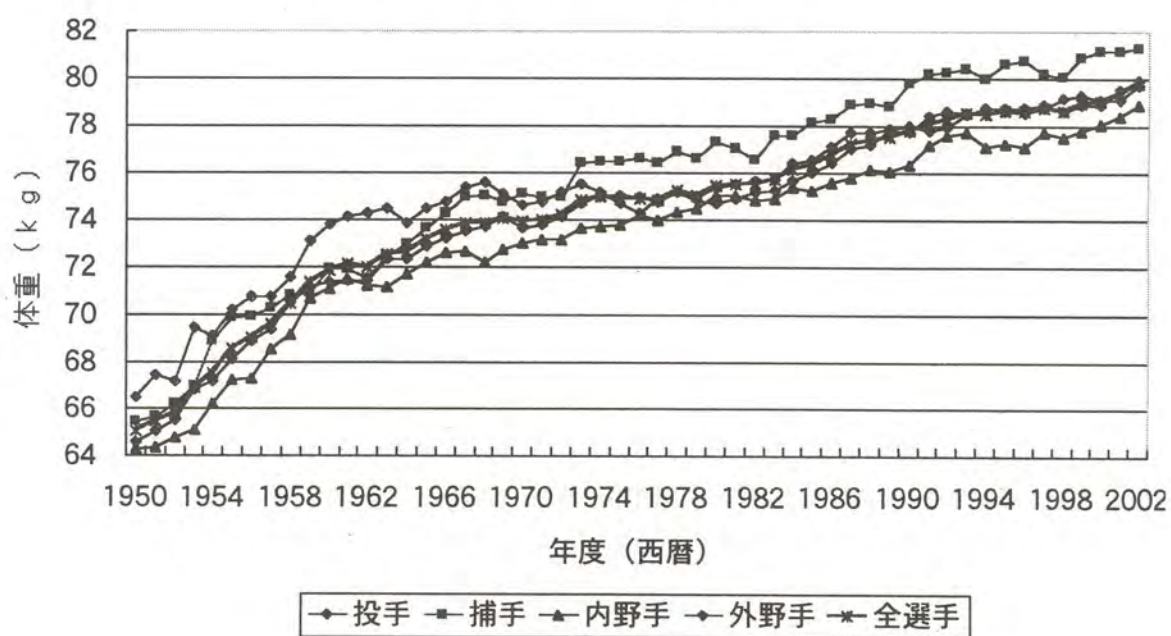
今日、日本のプロ野球は素晴らしい発展を遂げ、我国では最も人気のあるスポーツの一つである。このプロ野球が現行のセ・パ両リーグの2シーズン制を敷いたのが1950年からである。最近では日本人選手が米大リーグ入りし、体格的にも実力的にも他の大リーガー達と遜色なく活躍する時代となった。そこで1950年から2002年までの日本人プロ野球選手の体格の推移について報告する。1950年のプロ野球選手の平均身長は170.7cmであったが、その8年後の1958年には2.5%の急激な増加を示し初の175cm台に達し、その後増加率は低下したものの1996年には180cm台に達し、2002年の現在は180.14cmを記録している。この身長のポジション別の年次推移を見てみると、過去53年間常に投手がそれ以外のポジションの選手よりも高い状態で推移し、現在の平均身長は181.1cmである。他のポジションは殆ど同じような増加傾向を示し、捕手、内野手、外野手とも現在の平均身長は179.3cmである。同様に1950年の平均体重は65.0kgであったが、その8年後の1958年までには8%の急激な増加を示し初の70kg台に達し、その後増加率は低下したものの1978年には75kg台となり、2002年の現在では79.81kgとなっている。体重のポジション別の年次推移を見てみると、1970年位までは外野手が常に一番重い体重を示したが、その後は捕手が一番重く現在に至っている。反対に常に一番体重が軽いのは内野手であった。

日本のプロ野球界におけるトレーニングは時代と共に変化してきた。東京オリンピックが行われた1964年以降にトレーニングを担当する専門のコーチが巨人軍で初めて採用され、名称をランニングコーチと称した。当時のトレーニングコーチの役割の大半は選手にランニングをやらせる事であり、その時のランニングコーチは東京オリンピックの陸上10種競技日本代表の鈴木章介氏であった。その後、陸上競技の名選手がトレーニングコーチとして活躍する時代を迎える。1980年代に入ると、野球のトレーニングを科学的に見直そうという気運が高まり、体育学部の大学院等でスポーツ科学を学んだ人達がプロ野球に入団する事となり、ウエイトトレーニングなどのトレーニング種目が積極的に導入されるようになる。1990年代になると日本、アメリカの両国で肘、肩の手術が頻繁に行われるようになり、アスレティックリハビリテーションの必要性が高まり、理学療法士などがリハビリトレーニングに参加するようになった。更にアメリカの全米アスレチックトレーナーズ協会(National Athletic Trainers Association NATA)の資格を有する人達がプロ野球界に入団してくるようになった。21世紀を迎えて、動体視力などを高めるビジョントレーニングなどもプロ野球界に導入されてきている。

日本人選手のポジション別身長の推移



日本人選手のポジション別体重の推移





## 国際教育センターに関する研究費交付一覧

### 滋賀県立大学特別研究費交付一覧

・平成15年度 (4件、合計1,504千円)

| 区 分 | 氏 名  | 研 究 課 題                                                                        | 金 額<br>(千円) |
|-----|------|--------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 特 別 | 石田法雄 | 道元の「現成公案」「有時」にみられる時間論<br>－親鸞との比較において－                                          | 200         |
| 特 別 | 小栗裕子 | 英語学習の動機づけ－大学一年目と二年目を比較して－                                                      | 200         |
| 特 別 | 山本 薫 | 19世紀末から20世紀初頭にかけての英国の帝国主義政策、<br>国内における出版事情とジョセフ・コンラッドの後期小説で用い<br>られている技法との影響関係 | 304         |
| 特 別 | 宮城茂幸 | 狭帯域長相関モデルによる実画像のスペクトル推定                                                        | 800         |

### 滋賀県立大学在外研修費交付一覧

・平成15年度 (4件、合計 2,881千円)

| 種 類 | 氏 名  | 研 修 先                                                               | 研修期間                 | 研 修 内 容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         | 支 給 額<br>(円) |
|-----|------|---------------------------------------------------------------------|----------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|
| 長 期 | 山本 薫 | グレートブリ<br>テン および<br>北アイルランド<br>連合王国<br><br>ロンドン市<br><br>ケンブリッジ<br>市 | 平成15年7月2日<br>～ 9月30日 | <p>Joseph Conrad Society (U.K.)の第29<br/>回大会に出席し、英国の研究者ばかり<br/>でなく Conradの母国ポーランドの研究<br/>者 Wiesław Krajka博士と情報交換を行<br/>い、自伝的要素が作品理解の上でも特<br/>に重要な作家Conradを研究するうえで<br/>有益であった。</p> <p>大会2日目には会場が大英図書館内<br/>会議室に移動し、書庫において図書館<br/>所蔵のJoseph Conrad、James Joyceの手<br/>書き原稿を閲覧し、原稿管理の責任者<br/>であるChristopher Fletcher博士により<br/>講義を受けた。</p> <p>ケンブリッジ大学では大学図書館で資料<br/>収集をおこなった。</p> <p>また、イングリッシュ・リテラチャー・サマースクール<br/>(アカデミック・プログラム)に参加。ケンブリ<br/>ッジの伝統的なテキスト精読と、ニューヒストリシ<br/>ズムや文化研究の立場からの最新の問題<br/>意識に基づいた折衷的な作品読解・分<br/>析の方法論は非常に刺激的で、英文学<br/>研究の上でも、英語学習・教育を考え<br/>る上でも多くの示唆をうけた。</p> <p>ロンドンではロンドン大学図書館、大英図書<br/>館にて資料収集をおこなった。</p> | 1,842,340    |

| 種 類 | 氏 名  | 研 修 先                                   | 研修期間                   | 研 修 内 容                                                                                                                                                                                                           | 支 給 額<br>(円) |
|-----|------|-----------------------------------------|------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|
| 短 期 | 宮城茂幸 | アメリカ合衆国<br>フロリダ*                        | 平成15年7月26日<br>～ 8月 4日  | SCI2003に参加し研究資料の収集を行った。特に画像処理関連のセッションを中心に出席した。<br>7月29日には研修課題についての発表を画像および多次元信号処理のセッションにて行った。<br>CCCT2003では、主に通信系における信号処理、画像処理に関するセッションに参加し、情報収集を行った。                                                             | 334,610      |
| 短 期 | 石田法雄 | アメリカ合衆国<br>カリフォルニア州<br>バークレー市<br>バロアルト市 | 平成15年9月9日<br>～ 9月23日   | バークレー市にある米国仏教大学院 (Institute of Buddhist Studies) で開催された第11回国際真宗学会 (The 11th Biennial Conference of the IASBS) に参加して論文発表を行った。その後、スタンフォード大学仏教学教授カール・ビレーフェルト* (Carl Bielefeldt) 博士と面談し、カリフォルニア大学バークレー校にても資料収集をおこなった。 | 373,050      |
| 短 期 | 寄本 明 | オーストラリア<br>メルボルン<br>キャンベラ               | 平成15年9月29日<br>～ 10月 9日 | ビクトリア大学人間発達学部運動生理学研究所にて、運動機能や代謝についての測定・実験を研修した。<br>オーストラリアスポーツ研究所では、オーストラリアにおける最近の研究資料収集と意見交換を行った。                                                                                                                | 331,020      |

## 文部科学省科学研究費補助金交付一覧

・平成15年度 (1件、合計 10,000千円)

| 区 分             | 氏 名                        | 研 究 課 題                          | 金 額<br>(千円) |
|-----------------|----------------------------|----------------------------------|-------------|
| 基礎研究<br>(A) (2) | 脇田晴子(代表)<br>亀田彰喜<br>(他16名) | 中世・近世における近江商人の活動と日本海流通の<br>総合的研究 | 10,000      |



## 平成14年度特別研究費研究報告

### 報身 (*Sambhoga-kâya*) 阿弥陀仏に対する道元禪の立場における一考察

石田法雄

Buddhism, based on the teachings of Śākyamuni the Buddha 釈迦牟尼仏, teaches the path(s) or discipline(s) by which one becomes a Buddha or an “enlightened one.” Śākyamuni the Buddha was born some 2,500 years ago in India. The word *buddha* in Sanskrit is the past passive participle of the verb  $\sqrt{\text{budh}}$  meaning to “wake” or to “become aware of.” *Buddha* therefore means “awakened” or “enlightened,” and, in noun form, an “awakened one 覚者” or an “enlightened one.” Thus, one who becomes awakened or enlightened is called the Buddha. Since Śākyamuni the Buddha was the very first person in human history to attain Buddhahood, people claim him as the Buddha.

The term *buddha*, then, can have two connotations—“that which is awakened or enlightened” and “that which becomes awakened or enlightened.” The former is enlightenment itself, which is Dharma 法; the latter, the receptacle or vessel that realizes Dharma within; i.e., the Buddha as a being. *Buddha* as “that which is awakened or enlightened” or enlightenment itself is *dharma-kâya* 法身, the dharma-body that “has neither color nor form; thus, the mind cannot grasp it nor words describe it,” as Shinran 親鸞 says in *Notes on ‘Essential of Faith Alone* 唯信鈔文意.’ Buddha as the receptacle or vessel is *nirmâna-kâya* 応身 or the personified-body, one who has realized *dharma-kâya* within oneself, like Śākyamuni the Buddha. There is another connotation of the Buddha, *buddha* “as something in between the two,” as Edward Conze put it. Here the Buddha is *sambhoga-kâya* 報身 or the fulfilled-body, such as Amida Tathagata 阿弥陀如来 in Shin Buddhism or Pure Land Buddhism. Shinran says in *Notes on ‘Essentials of Faith Alone’*:

From this oneness was manifested form, called dhrama-kaya-as-compassion. Taking this form, the Buddha proclaimed his name as Bhikṣu Dharmākara and established the forty-eight great Vows that surpass conceptual understanding. Among these Vows are the primal Vow of immeasurable light and the universal Vow of immeasurable life, and to the form manifesting these two Vows

Bodhisattva Vasubandhu gave the title, 'Tathagata of unhindered light filling the ten quarters.' This Tathagata has fulfilled the Vows, which are the cause of his Buddhahood, and thus is called 'Tathagata of the fulfilled body.' This is none other than Amida Tathagata. (*The Collected Works of Shinran*, Vol. I, p. 461)

The notion of *sambohga-kâya* plays an important role in understanding Shinran's religious experience of encountering Amida Buddha called *shinjin* 信心 ("entrusting heart/mind" or "awakened heart/mind"), which is enlightenment. Dôgen's 道元 enlightenment does not, however, resort to *sambohga-kâya* or the Fulfilled-body of the Buddha such as Amida Buddha. Dôgen instead talks about *kenshō* 見性 or *satori* 悟, which is intuitive realization of enlightenment emerging from within oneself. In this regard, Shinran and Dôgen differ from each other in doctrine, having understood the historical process and man's nature differently and thus selected their own practices and ways—*nembutsu* 念仏 ("recitation of the Name of Amida Buddha") for Shinran, and *zazen* 坐禪 ("seated-meditation") for Dôgen. Whereas Shinran's experience comes about through negating himself as a result of encountering something unbound named immeasurable light and life (Amida) in form of *sambohga-kâya*, Dôgen straightforwardly seeks after and realizes his Buddha-nature revealed or manifested within himself in the present or in the here and now. Dôgen's experience of enlightenment emerges not relying on *upâya* 方便 ("skillful means") such as *sambohga-kâya*. Yet it should be said that their teachings are not of a different nature, when viewed from a fundamental and universal perspective of Buddhism or what *buddha* fundamentally means—awakening, enlightenment or realization.

This issue has been partially discussed in the paper, "Shinjin and Satori in the Here and Now—Flowers Yet Fall as People Lament," and will be further dealt in a forthcoming book (a collection of essays) published by Columbia University Press.



## 平成14年度特別研究費研究報告

### 大学生の英語学習と動機づけ —入学時と1年後を比較して—

小栗裕子

#### 1. 目的

英語学習の動機づけ研究は、ある時点における学習者の動機づけがどのようなものかを探る横断的研究が多く、学習者を長期的に捉えた研究はあまりなされていない。しかし、学習者を取りまく社会的環境の変化や学力の向上により、学習者の動機づけも少しずつ変わっていくものと考えられる。そこで本研究では、大学入試という大きな「目的」を終えた後の学習者に焦点を当て、彼らの動機づけが、リスニング力向上に伴い入学時と1年後ではどのように変化したのかを調査分析した。

#### 2. 分析結果

各動機づけ項目ごとに分散分析を行った結果、自発的言語使用動機の入学時において、上位群は下位群と比較して5%水準で有意 ( $F_{(2, 134)} = 3.56$ ) に得点の高いことが認められた。次に教科動機に関しては、入学時における上位群と中位群の学習者の得点が下位群と比べて5%水準で高く ( $F_{(2, 134)} = 9.48$ )、1年後も上位群と下位群の間には有意な差 ( $p < 0.05$ ) が認められた。さらに、下位群の学習者は入学時と1年後を比較すると1%水準の有意差 ( $F_{(1, 134)} = 12.83$ ) で、この動機づけ得点が上昇した。

統合的動機に関しては、入学時における下位群の伸びた学習者とそうでない学習者の間に1%水準 ( $F_{(1, 134)} = 10.60$ ) で有意な差が認められたばかりでなく、伸びなかった学習者の入学時と1年後では1%水準で有意な得点の上昇 ( $F_{(1, 134)} = 9.01$ ) が見られた。

#### 参考文献

- 小栗裕子. (2001). 「理系学生のリスニング能力にみる動機づけの違い」『英語教育研究』24号, 91-104. 関西英語教育学会紀要
- 詳細については、下記に掲載。
- 小栗裕子. (2003). 「大学生の英語学習と動機づけ—入学時と1年後を比較して—」『英語教育研究』26号, 21-32. 関西英語教育学会紀要

## 平成14年度短期在外研修報告

石田法雄

研修課題：The 2002 European Conference of the International Association of Shin Buddhist Studies での論文  
発表

研修地：スイス、ローザンヌ市、ローザンヌ大学

研修期間：2002年9月1日～9月8日（8日間）

研修内容：

I. 9月1日関西空港を発ち、オーストリアのウィーン空港経由でスイスのジュネーブ空港に到着した。そこで列車に乗り換え、ローザンヌ市に辿り着く。すでに夕刻になっていたが、予約していたホテルは駅の近くだったのでチェックインを済ませ、食事を取りすぐに就寝する。翌日9月2日は、同じホテルに宿を取っていた学会・会議の他の参加者達と出会い、さらにホストであるローザンヌ大学のジェローム・デュコール（Jerome Ducor）博士と面談した。午後は、開催地であるローザンヌ大学を訪問し、図書館と学会開催会場を見学した。

II. 9月3日4日の両日にわたり、第9回国際真宗学会ヨーロッパ支部大会（The International Association of Shin Buddhist Studies 9th European Block Conference）がローザンヌ大学において開催された。2日かけて開催されたこの学会には、ヨーロッパを中心として、アメリカ合衆国本土、ハワイ、さらに日本の大学より参加した計14名による発表があった。学会のテーマは Pure Land and Shinshū Studies at the Dawn of the 21st Century で、私は “Time-Space Interformation of Myth into the Here and Now—The Zen Lineage and Dharmākara—” のタイトルで論文を発表した。それぞれの発表論文は、学会開催2ヶ月前にホストのデュコール教授に提出が義務づけられており、学会当日にそれらが纏められた冊子が、発表者・参加者に配布された。また、発表論文は学会のホームページに掲載されていたので、発表者は発表時においては限られた持ち時間しかが与えられず、質疑応答に主な時間がさかれた。

III. 9月5日6日の両日にわたり、第12回欧州真宗会議（The 12th Conference of European Shinshū Communities）が、学会開催場とは場所を変えてローザンヌ大学において開催された。テーマは “Shinshū in Europe: Present and Future” で、この会議は学会とは異なり学術的というより実践的に宗教を考えるという論文発表会で、ヨーロッパを中心として世界各地から新たな発表者・参加者が集まり開催された。ここでは、真宗がヨーロッパにどの様に流入してきたか、どの様な形で求められているか、今後どの様な形で役割を果たしていけるかと、盛んな論議がなされた。特に、IT 技術の導入が不可避であ



るとの紹介等、興味深い発表が多くあった。

#### IV. 発表論文：“Time-Space Interformation of Myth into the Here and Now—The Zen Lineage and Dharmākara—”

発表論文は、「いま、ここ; the here and now」という観点から宗教的神話 (myth) を解説しながら、時空論を講じた。特に、禪に於ける系譜 (lineage) と『大無量寿経』における法蔵菩薩 (Dharmākara) に焦点を絞って論じた。まず、禪の系譜を、実践者 (信者) の立場からのみならず、歴史的方法論なるものを用いて検証していった。禪の継承は、人から人へ (師匠から弟子へ) 直接なされるもので、系譜は極めて重要な位置を占めている。しかし、系譜なるものは、どの宗教にしても、後ほど書き換えられたり創り上げられたりすることがよくある。宗教団体 (教団) は、いかなる宗教にせよ歴史の流れのなか、それぞれの伝説、伝統を築きあげる上において、ときに創造の過程をたどる。歴史家はある種客観的な史実をもとに、宗教教団が創り上げた伝説を、時には学問の科学的方法論の名のもと暴いていく。この問題に焦点をあて、宗教・宗教学を学ぶ上における歴史学的方法論の功罪、さらに、実践者の歴史観なるものを考察した。つまり、系譜に焦点を当てるとき、そこに流れている別の歴史 (時には myth と呼ばれるもの) の中に、科学では解明できない人間の営みがあり、その「個別性」の習得を通して「普遍性」の世界、さらに「共通性」の世界へと導かれていくことがあるのではないか、と示唆していった。そこで、『大無量寿経』における法蔵菩薩を取り上げ、科学的事実 (fact) という観点のみで宗教的体験の世界を取り上げるのではなく、宗教的真理 (truth) として検証することの意味を論述した。

次に、それらの神話を、仏教思想 (縁起の思想) に基軸を置き、時間と空間という存在論を解説しながら、「いま、ここ」に問題を引き寄せ検証していった。特に時間論においては、実存的時間論に基づき、過去からの限定と未来からの限定を同時媒介的に受けた現在が現在化している「いま」という中で時間を把握し、親鸞の往生 (birth in the Pure Land) も死後にあると単に片づけるのではなく、覚知体験 (信心) をしたところに現成していくものであると主張した。さらに、道元にも触れ、『正法眼蔵』の「現成公案」においても「いま、ここ」を語っていると指摘した。このような理解の中から、科学技術が著しく発達してきた21世紀において、様々な大きな問題を抱える世界状況の中で個々の人間が、ささやかながら何が出来るのであろうかと問いかけた。結論としては、単に社会を変革していかなければと訴えていくのではなく、自己が主体的に幾ばくかでも社会で還元できるものはないか、と求めて行く中に何らかの道が開けてくるのではなかろうかと述べた。

## 平成 14 年度短期在外研修報告

### 寄本 明

研修課題：第 5 回アジアスポーツ医学会大会への参加と研究発表

研修地：大韓民国、ソウル、COEX コンベンションセンター

研修期間：2002 年 9 月 24 日～29 日（6 日間）

研修内容：

第 5 回アジアスポーツ医学会大会 AFSMC (The 5<sup>th</sup> Asian Federation of Sports Medicine Congress) が大韓民国ソウルにある COEX コンベンションセンターにおいて開催された。今回、短期在外研修によってこの大会に参加及び発表する機会を得たので報告する。

AFSMC は 5 年前からアジア地域でのスポーツ医学研究を深めるために開催されるようになった国際会議である。筆者は AFSMC への参加ははじめてであり、非常に興味を持って大会に参加した。この大会で扱っている研究領域は大きく分けて 4 領域である。スポーツ医学（疾患）領域ではスポーツ障害、スポーツリハビリテーション、スポーツ療法、救急処置法、急性及び慢性の筋肉障害を、スポーツ・運動科学領域では運動の生理、体力テスト法、バイオメカニックス、小児の運動生理を、体力科学・スポーツ生理学領域では体力、スポーツ心理、コンディショニング、パフォーマンスとトレーニングを、スポーツ医学（一般）領域では、女性とスポーツ、子供とスポーツ、加齢、ドーピング、使いすぎによる障害、スポーツ心臓、スポーツ視力、スポーツ栄養を対象としている。

学会大会は基調講演、特別講演、シンポジウム、教育講演、一般講演の部門で構成されていた。基調講演は元 AFSM の会長である K.M.Chan が“Sports Medicine –A Global Perspective in the New Millennium”という題目で発表を行い、特別講演はドーピングの現状と未来、骨粗鬆症の最近の傾向、身体活動の動向についてそれぞれ 3 演題ずつ発表が行われた。教育講演はスポーツドクターの養成のための講演でもあり、競技者トレーニングコース、チームドクターコース、教育コース、運動専門家コースの四つの専攻コースで実施され、講演者はアジア、欧米各国から招へいされていたが参加者は主に主催国の韓国の人たちであり、韓国語への同時通訳も行われていた。シンポジウムは“New Approach of Sports Injury”および“ACL injury in Sports Medicine”であり、いずれも整形外科的なスポーツ医学シンポジウムであった。一方、一般講演は口頭発表とポスター発表があり、前者は 87 演題、後者は 83 演題であった。筆者は“Effect of Walking and Physical Conditioning Exercise on risk Factors of Falling and Physical Fitness in the Elderly”という演題でポスター発表を行った。アジア各国でも高齢者の健康及び体力問題についての研究は最近関心もたれはじめ、貴重な意見交換ができ、また共同研究実施への足がかりが得られた。今後、アジア各国の研究者との交流の必要性を感じた大会であった。



## 平成14年度短期在学研修報告

### 小栗裕子

研修課題：英語教育と動機づけの関係を多面的に探る

研修地：米国（主にアーリントン・ボルティモア）

研修期間：平成15年3月16日～3月31日（16日）

研修内容：

米国で開催されたアメリカ応用言語学会（American Association for Applied Linguistics）及び、外国語使用者に英語を教える教師の学会（Teachers of English to Speakers of Other Languages）に参加した。この2つは、英語教育を専門としている教員にとって AAAL が理論的、TESOL は実践的であることから、学ぶところが非常に多い学会であった。この報告では動機づけという観点から、英語教員として特に印象に残った2つの出来事について報告することにする。

AAAL の会議で、リスニングの論文を多く書いておられる Dr.Vandergrift の “Second language listening: Listening ability or language ability?” の研究発表の後、「リスニングは最近まであまり ESL で注目されなかったが、当然大切なスキルで…」とコメントした女性がいた。彼女が “My name is Wilga Rivers.” と話しだすと、会場は急に静かになり全員の目が質問の主が集まった。Rivers といえば、私が「英語教授法」のクラスで最初に覚えた大切な研究者の名前であり、彼女の書いた *Communicating Naturally in a Second Language* は何度も読み返した本の一つである。彼女の年齢は定かでないが、78～79 年までこの学会の会長を務められたことやその他から推測すると、かなり高齢である。まさかその女史がここに出席しておられるとは夢にも思わなかったもので、非常に驚いた。と同時に、その「いつまでも研究者」という姿勢は、私に畏敬の念を覚えさせた。

別の AAAL 会議で、Dr. Julian Edge の “Non-judgmental interaction in a discourse of development” の発表に興味があり、会場に早めに行くと彼が先にきていて自己紹介をしてくれた。発表が始まる時間がきても数人しか聴衆は現れなかった。この学会は、アーリントンで開催されたが、イラク開戦時と重なり、海外からの参加者の欠席が多かったせいであろう。しかし、発表者は、その少ない人たちに向かって問いかけるようなプレゼンテーションを展開したのである。動機づけと Non-judgmental interaction は、特に EFL と関連していると思い出席したが、熟練したその発表の仕方に言葉を教える者として多くのことを教えられた。

研修中、米国は大変は緊張状態にあり、特に首都の警戒は物々しく、DC からボルティモアに行く列車の切符を購入するのに身分証明者が必要であった。こうした経験も含め、新学期を前に論文を読んででは得られない、多くの貴重な体験をもつことができた。

## 平成 15 年度短期在外研修報告

宮城茂幸

研修課題：Estiation of Spectral Peak Location for Texture Images by Using Narrow Band Long-Correlation Models

研 修 地：アメリカ合衆国, フロリダ, オーランド, The 7<sup>th</sup> World Multiconference on Systemics, Cybernetics and Informatics

研修期間：2003 年 7 月 26 日～8 月 4 日 (10 日間)

研修内容：

短期在外研修の補助を受け International Institute of Informatics and Systemics(IIS)が主催する国際会議 The 7<sup>th</sup> World Multiconference on Systemics, Cybernetics and Informatics(SCI2003)および International Conference on Computer, Communication and Contorl Technologies(CCCT'03)に参加することができた。以下では特に SCI2003 について、会議で発表に至った経緯および会議の内容について説明する。

今回 SCI2003 に参加することになったきっかけは 1 通の電子メールからであった。最近では何らかの国際会議に出席すると大抵電子メールアドレスの登録がある。おそらくそのアドレスを利用して Call for Paper の案内が電子メールの形で届いたものと思われる。我々の分野では比較的規模の大きな国際会議は 5, 6 月頃および 10 月頃に設定される。しかしこの国際会議は 7 月末ということで、授業休講についての配慮を考える必要がない。また論文の締め切り設定も 3 月 14 日であり比較的余裕があったことや、参加費が比較的安いこともあり、昨年度より続けてきた研究の一部を会議で報告できると考え投稿を決めた。

SCI は 1995 年から毎年開催され今回で 7 回目を数えるに至っている。しかし実は今回この会議に参加するまで、筆者自身はこの会議のことも IIS のことも知らなかった。IIS は理論と実践を通して情報、システム理論の発展に寄与することを目的としており、そのために分野横断的な国際会議やアカデミックな機関である大学と企業との意見交換の場としての国際会議を開催したりしている。もちろん今年度開催された SCI2003 および CCCT'03 もその目的の一端である。SCI は特に人工知能、情報、システムに関する分野を扱うことになっているが、Call for Papers に記述されていた会議で扱われる分野は、情報システム技術とその応用、通信ネットワークシステムとその応用、制御システムとその応用、コンピュータ科学とその応用、光学システムとその応用、画像・音声信号処理、科学・工学における情報、人工知能の応用、創発システムなどとなっており、情報系に関するほぼ全ての分野であると考えてよい。主催者の発表によると約 2650 の論文が投稿され、匿名査読を経て予稿集には 1400 の論文が掲載された。またプログラム委員会、査読者も含めた会議への参加者は 130 ヶ国にのぼる。1995



年に初めて開催されたときの論文数 55 に比較するといかに会議の規模が大きくなってきたかがうかがい知れよう。

筆者は主に画像、音声信号処理に関するセッションを中心に会議に参加し、研修課題である論文の発表も画像および多次元信号処理に関するセッションで行った。当該セッションは 7 月 29 日の午前 9:30 より行われた。このセッションでは 7 件の発表があったが、そのほとんどがアプリケーションよりの内容であった。例えばビデオ映像から頭部のジェスチャを認識するシステム、ソナーからの信号の到着時刻の差をウェーブレットを用いて解析した結果、動画像のスペククルノイズ除去、あるいは単一画素の追跡方法などである。筆者の発表は終わってから 2 件目で昼食の時間も近かった頃もあり、若干聴衆が少なかったのは残念であった。しかし、2、3 名の方から質問をうけ現在の研究の進展状況について説明できた。

会議の内容とは直接関係ないが、会議運営や会場についても記しておきたい。まず初日に少々驚かされたのは受付についてである。初日の早い時間帯に受付に出かけたが、既に長蛇の列で、列に並んでから受付が済むまで 2 時間近くかかってしまった。名簿での名前の確認と予稿集の巻番号の確認をするため、一人当たりにかかる時間が長かったように感じた。会場は Sheraton ホテルであったが、セッションによっては狭い部屋を使っていたため大変窮屈であった。筆者が主に参加した画像、音声信号処理に関するセッションが開かれた部屋は 30〜40 名程度収容できる部屋であったと思われる。セッションの初日には立ち見がでるほどであった。参加費の安さ、分野の広さという有利な点と、応用的な話題が数多く提供されており非常に面白い国際会議であるだけに、もう少し運営方法を改善すればより快適な会議になると思われる。

さて、フロリダといえばディズニーワールドで有名であるが、会議の合間にいくつかのテーマパークを訪れる事ができた。マジックキングダムはほぼ東京ディズニーランドと同じような構成であるが、フロリダならではの場所としてダウントウンディズニーがあげられるであろう。ここは一部入場に際し年齢制限がある。そのかわり夜遅くまで営業しており、アルコール飲料等も売られている。特に日本人は若く見られがちなので、入場の際係員に年齢を当てられるかどうかクイズを出すのはなかなか面白い。もし機会があれば試してみられるとよい。

## 国際教育センター教員による学界ならびに社会における活動

(前号以降)

著書、論文、発表、翻訳、その他（印刷物＜監編修、教材、事典、書評、一般雑誌など＞、講演、社会活動、地域社会への参加・貢献など）

[寺島 廸子]

児馬 修・寺島廸子編：『変化する英語』中尾俊夫著、ひつじ書房、2003年7月、206

寺島廸子：書評「歴史から読み解く英語の謎」、岸田隆之・早坂信・奥村直史著（教育出版）、『英語教育』、大修館書店、2003年1月、89-90

[上村盛人]

Morito Uemura: "Walter Pater's Aestheticism Seen through His 'Dante Gabriel Rossetti'," *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 7, December 2002, 17-31

上村盛人：発表「Pater, "Dante Gabriel Rossetti"について」、日本ペイター協会、北海学園大学、2002年10月

[石田法雄]

Hoyu Ishida: "A Bodhisattva Ideal in the Here and Now," *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 7, December 2002, 33-53

Hoyu Ishida: Presentation 'Where in the Contemporary World Can Pure Land Be?,' The 11th Biennial Conference of the International Association of Shin Buddhist Studies, Institute of Buddhist Studies (Graduate Theological Union), Berkeley, California, USA, September 13, 2003

Hoyu Ishida: Lecture 'Japanese Religion and Culture,' Seminar on Japanese Culture and Society, Japan Center for Michigan Universities, Hikone, October, 2002

石田法雄：財団法人滋賀県国際協会評議員、滋賀県国際施策推進懇談会委員、滋賀県TOEIC推進協議会委員、財団法人国際仏教文化協会評議員・研究員

[外狩章夫]

外狩章夫：翻訳『図説ジョウゼフ・コンラッド』クリス・フレッチャー著、大英図書館シリーズ作家の生涯、大英図書館・ミュージアム図書、2002年8月、128

[クリンガー ウォルター]

Walter Klinger: "Factors for Success in Second Language Learning," *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No.7, December 2002, 55-74



Walter Klinger: Presentation 'Movie Musical Songs for EFL: Oklahoma!,' The 9th Annual Conference of the Association for Teaching English through Movies, Seinan Jo Gakuin University, Kitakyushu, Fukuoka, Japan, June 3, 2003

[小栗裕子]

小栗裕子：論文「英語学習の動機づけ—大学2年次の初めと終わりを比較して—」、「国際教育センター研究紀要」、滋賀県立大学国際教育センター、第7号、2002年12月、75-83

小栗裕子：論文「大学生の英語学習と動機づけ—入学時と1年後を比較して—」、関西英語教育学会『英語教育研究』26、2003年7月、21-32

小栗裕子：発表「大学生の英語学習と動機づけ—1年生と2年生を比較して—」、第29回全国英語教育学会南東北研究大会、宮城教育大学、2003年8月10日

小栗裕子：講演「Communication Activities」、北九州教育センター英語教員研修プログラム、2003年7月30日

Oguri Yuko: Presentation 'A Longitudinal Study of Learners' Motivation for English after Entering University,' The 13th World Congress of Applied Linguistics, Singapore, December 16, 2002

[山本 薫]

山本 薫：論文「『台風』—MacWhirr船長の性格描写について—」、「国際教育センター研究紀要」、滋賀県立大学国際教育センター、第7号、2002年12月、85-98

富山太佳夫（訳者代表）山本 薫他12名：『現代思想芸術事典』アンドリュー・エドガー、ピーター・セジック編、青土社、2002年11月、447

[深見 茂]

深見 茂：論文「シュトルムの短篇小説『遅咲きの薔薇』におけるトリスタン・モティーフについて」、「国際教育センター研究紀要」、滋賀県立大学国際教育センター、第7号、2002年12月、99-118

深見 茂：財団法人祇園祭山鉾連合会理事長、2003年

[長島律子]

Ritsuko Nagashima: *Aperçus sur l'Épisode de la « Conversion de la Comtesse » dans le Journal d'un curé de campagne*, Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture, No. 7, December 2002, 119-29

[呉 凌非]

呉 凌非：論文「動詞の周期から見る「一」に係する副詞」、「国際教育センター研究紀要」、滋賀県立大学国際教育センター、第7号、2002年12月、131-7

呉 凌非：論文「动词的最大周期和最小周期及其应用」、「現代中国語研究」 朋友書店 2002 年、第

4期、34-9

呉 凌非：滋賀県行政経営改革・施策評価委員会委員、2003年4月1日～2004年3月31日

[亀田彰喜]

亀田彰喜・岡田章彦：論文「情報化社会における情報倫理の意義」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第7号、2002年12月、139-47

亀田彰喜・吉田勝廣・岡田章彦：論文「メディアと情報ネットワークにおける情報倫理」、『情報問題研究』、第15号、晃洋書房、2003年6月、39-52

亀田彰喜：講演「情報ネットワークと生活情報」、平成15年度滋賀県立大学公開講座、2003年6月14日

脇田晴子（代表）・亀田彰喜・他16名：文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）（2）14201034「中世・近世における近江商人の活動と日本海流通の総合的研究」

[宮城成幸]

Hideaki Sakai and Shigeyuki Miyagi: "Analysis of the Adaptive Filter Algorithm for Feedback-Type Active Noise Control," *Signal Processing*, Vol. 83, 1291-8, 2003

Shigeyuki Miyagi: "Estimation of Spectral Peak Location for Texture Images by Using Narrow Band Long-Correlation Models," *Proc. of SCI2003*, 170-5, Orlando, Florida, USA, July 27-30, 2003

宮城成幸・酒井英昭：論文「通過域外乱を低減した周期的ANCシステムの安定解析」『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第7号、2002年12月、149-56

宮城茂幸：電子情報通信学会2003年度ディジタル信号処理研究専門委員会委員

[岡本 進]

岡本 進：論文「大学スキー実習におけるスノーボードの運動強度」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第7号、2002年12月、157-64

宮本 孝、岡本 進、佐藤尚武：論文「山岳競技に対する科学的サポート(6)一少年女子選手においても縦走タイムに有酸素パワーが反映する一」、『滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要』、No. 21・22、2003年2月、79-85

岡本 進、宮本 孝、佐藤尚武：論文「スキー（ノルディック）強化選手の体力一大学クロスカントリー選手との比較から一」、『滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要』、No. 21・22、2003年2月、87-92

岡本 進：発表「インドアローイング成績にみる国際比較」、第17回日本体力医学会近畿地方会、2003年1月

岡本 進：講演「運動と心拍数」、滋賀県レイカディア大学選択講座、2002年12月3日

岡本 進：講演「高齢社会におけるニュースポーツの役割」、滋賀県レイカディア大学選択講座、



2003年4月21日

岡本 進：講演「ニュースポーツのプログラム」、滋賀県レイカディア大学選択講座、2003年5月19日

岡本 進：講演・実技「高齢者の健康スポーツを考える」・「フリーブロー（吹き矢）」、レイカディアシニアサークル合同研修会、県立社会福祉長寿センター、2003年7月15日

岡本 進：講演「スポーツ生理学－健康体力づくり－」、滋賀県障害者スポーツ指導員養成講座、2003年8月2日

岡本 進：講演・実技「運動とからだの仕組み、運動とストレッチング」、滋賀県レイカディア大学選択講座、2003年10月27日

[寄本 明]

寄本 明（主婦の友社編集）：『体脂肪を減らす100のコツ』、主婦の友新実用BOOKS、主婦の友社、2002年12月、115-6

寄本 明（主婦の友社編集）：『コレステロールを下げる知恵とコツ』、主婦の友新実用BOOKS、主婦の友社、2003年9月、38-40

Tetsuya Yoshida, Toshimasa Takanishi, Seiichi Nakai, Akira Yorimoto, and Taketoshi Morimoto: "The Critical Level of Water Deficit Causing a Decrease in Human Exercise Performance: A Practical Field Study," *Eur.J.Appl.Physiol*, Vol.87, 2002, 529-34

Tetsuya Yoshida, Toshimasa Takanishi, Seiichi Nakai, Akira Yorimoto and Taketoshi Morimoto: "Relationship between Dehydration, Rehydration and Decreases in Exercise Performance During Various Sports in Hot Environments," *Adv.Exerc.Sports Physiol.*, Vol.8, No.3, 2002, 71-6

寄本 明、岡本 進、分木ひとみ、姜 徳鍋：論文「中高年女性の心拍数変動およびエネルギー消費量からみた運動処方としての歩行運動」、『ウォーキング研究』、第6号、2002年11月、103-8

分木ひとみ、寄本 明：論文「中年者および高齢者の運動機能に及ぼすウォーキング効果の相違」、『ウォーキング研究』、第6号、2002年11月、121-5

寄本 明：論文「高齢者の転倒危険因子および体力に及ぼすウォーキングと転倒予防体操の効果」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第7号、2002年12月、165-71

分木ひとみ、寄本 明：論文「高齢女性の転倒と運動機能」、『滋賀県理学療法士会学術誌』、第22号、2003年3月、45-8

伊丹君和、藤田きみゑ、久留島美紀子、森下妙子、寄本 明、古株ひろみ、横井和美、下野俊哉、矢口潤哉：論文「洗髪作業における看護者の腰部負担研究－ボディメカニクス活用の有無を中心とした検討－」、『滋賀県立大学看護短期大学部学術雑誌』、第7号、2003年3月、30-5

横井和美、藤田きみゑ、伊丹君和、寄本 明、下野俊哉、矢口潤哉、久留島美紀子、前川直美：発表「安全なベッドからの立ち上がりに関する研究（その1）－青年者と中高年者のベッドの高さによる立ち上がり筋活動の比較－」、『滋賀県立大学看護短期大学部学術雑誌』、第7号、2003年3月、



寄本 明、芳田哲也、中井誠一、新矢博美、森本武利：発表「中高年者のウォーキング運動時における水分および汗中Na損失」、第41回日本生気象学会大会、2002年11月1日

芳田哲也、中井誠一、寄本 明、森本武利：発表「体重計測から求めた大学生による水分出納の季節差」、第41回日本生気象学会大会、2002年11月1日

伊丹君和、藤田きみゑ、古株ひろみ、横井和美、久留島美紀子、森下妙子、寄本 明：発表「看護作業における腰腹部筋への影響—ベッドメイキングでの検討—」、第22回日本看護科学学会学術集会、東京国際フォーラム、2002年12月6日

芳田哲也、中井誠一、新矢博美、寄本 明：発表「運動時における頭部・頸部冷却の効果」、日本体力医学会第17回近畿地方会、ピアザ淡海、2003年1月25日

新矢博美、芳田哲也、寄本 明、中井誠一：発表「着衣条件による皮膚温の変化が運動時の温熱ストレスに与える影響」、日本体力医学会第17回近畿地方、ピアザ淡海、2003年1月25日

分木ひとみ、寄本 明、白星伸一、砂川 勇：発表「在宅高齢者に対する転倒予防アプローチによる運動機能の変化」、第38回日本理学療法学術大会、長野、2003年5月23日

寄本 明：発表「長距離ウォーキングにとっての飲水の必要性和その飲料」、第7回日本ウォーキング学会大会、国立オリンピック記念青少年総合センター、2003年6月21日

分木ひとみ、寄本 明：発表「高齢女性の歩行持続距離と運動機能および転倒リスクとの関係」、第7回日本ウォーキング学会大会、国立オリンピック記念青少年総合センター、2003年6月21日

横井和美、藤田きみゑ、伊丹君和、久留島美紀子、前川直美、竹村節子、寄本 明：発表「安全なベッドからの立ち上がりに関する研究（その1）—青年者と中高年者のベッドの高さによる立ち上がり筋活動の比較—」、第29回日本看護研究学会学術集会、大阪国際会議場、2003年7月24日

伊丹君和、藤田きみゑ、久留島美紀子、森下妙子、横井和美、古株ひろみ、寄本 明：発表「洗髪作業における看護者の腰部負担研究—ボディメカニクス活用の有無を中心とした検討—」、第29回日本看護研究学会学術集会、大阪国際会議場、2003年7月25日

寄本 明、芳田哲也、中井誠一、新矢博美、森本武利：発表「夏期日常生活時の発汗量と汗中Na濃度」、第11回日本運動生理学会大会、中京大学、2003年8月2日

芳田哲也、中井誠一、寄本 明、森本武利、陶山徹、桜井政夫：発表「運動時の汗中Na濃度と血中アルドステロンとの関係」、第11回日本運動生理学会大会、中京大学、2003年8月2日

寄本 明：発表「中高年女性の生活習慣病予防としてのウォーキングの取り組みとその生理学的効果」、第58回日本体力医学会大会、静岡コンベンションアーツセンター、2003年9月19日

坂手誠治、寄本 明：発表「10年間にわたる勤労者体力の推移と相異」、第58回日本体力医学会大会、静岡コンベンションアーツセンター、2003年9月19日

寄本 明：「実験で証明！最大脈拍の50%の強さで歩く「さっさ歩き」は、コレステロール値を下げるだけでなく、強くしなやかな血管をつくる！」、『健康』、2003年、2月号付録、24-5

寄本 明：「長距離ウォーキングと水分の摂り方」、『ウォーキングマガジン』、2003年8月、72



寄本 明：講演「運動と休養」、近江八幡市健康推進員養成講座、近江八幡市立市民保健センター、  
2002年7月11日

寄本 明：講演「運動生理学」、近江八幡市健康推進員養成講座、近江八幡市立市民保健センター、  
2002年7月22日

寄本 明：講演「生活習慣病および転倒予防としての運動」、甲西町健康推進員現任者研修会、甲西  
町保健センター、2002年7月23日

寄本 明：講演「運動医学の基礎、健康づくりと運動」、7市町合同健康推進員養成講座、東近江地  
域振興局、2002年9月10日

寄本 明：講演・身体機能測定「転倒の原因と予防について」、転倒予防教室、今津町東新町草の根  
ハウス、2002年9月11日

寄本 明：講演「運動と健康について」、彦根市健康推進員養成講座、彦根市障害者福祉センター、  
2002年9月12日

寄本 明：講演「転倒の原因と予防について」、びわ町転倒予防教室、リュートプラザ、2002年9月  
20日

寄本 明：講演・実技「Healthy & Diet サイクリング」、ひこねと遊ぼう 大人の学校2002、彦根青  
年会議所、2002年10月12日

寄本 明：講演「健康づくりと運動」、甲賀地域合同健康推進員養成講座、サントピア水口、2002年  
10月17日

寄本 明：講演「運動生理学」、甲賀地域合同健康推進員養成講座、サントピア水口、2002年11月7  
日

寄本 明：講演「自分らしくイキイキ生活をおくるために」、余呉町転ばぬ教室、余呉町ふれあい会  
館、2002年12月5日

寄本 明：講演「ウォーキングあれこれ一朝の散歩、夜の散歩」、京都の健康と運動セミナー、みや  
こめっせ、2003年3月8日

寄本 明：講演「転倒を予防して元気に過ごすために」、今津町健康学習会、今津町保健センター、  
2003年3月13日

## あ と が き

国際教育センター研究紀要第8号を無事発行できますことは、関係各位のご協力のお陰と編集委員一同感謝申し上げます。初代学長の日高先生は、国際教育センターを外国語、情報科学、健康・体力科学による globalize をイメージされ、どこかの学部に分属させては出来ないものと考えておられました。さらに、当紀要に関しては「国際教育センターの英語名 The University Center for Intercultural Education の Intercultural とは何か、を知らせる興味深い紀要に育っていくかを楽しみにしている」と述べられています。これに答えるがごとく初代センター長の栗山先生は様々な分野が集まっている当センターの研究紀要について、それぞれ関連分野の所属学会の機関誌等に研究を発表する方が効率的ではあるが、センター所属教員全員のセンター研究紀要への寄稿を提唱され、創刊号以来原則全員寄稿で現在に至っています。この様な経緯を経て第8号を発行するにあたり、その原点を見つめ、さらに激しく変化する大学教育の中で当センターの在り方および紀要の在り方についてその方向性を再確認する時期に来ているように思います。

さて、このように激動する時代に当センターの舵取りをされ、我々の指導者としてボスの存在であり、和の中心的人物でもある深見茂教授が今年度をもって定年退職されることになりました。退職されることは分かっていたはいましたが、いざその時期を間もなく迎えるとなると深見教授の存在の大きさをあらためて感ぜずにはおれません。深見教授は平成8年に滋賀県立大学国際教育センター教授として着任され、交流センター運営委員、大学院開設専門部会委員、評議員など重要な学内の諸委員を歴任、平成13年度からご定年を迎える平成15年度まで国際教育センター長としてご尽力されています。深見教授はドイツ文学を専門とされ、ドイツ近代文学の中心的課題である人間観についてドイツ・ロマン派および19世紀ドイツ語圏全般の文学を手がかりとして長年にわたり研究をすすめられています。研究で培われた人間観に基づく深見教授のお言葉は、我々に多くの示唆を与えるものであり、ものの見方・考え方を多角的にみることをご教授いただきました。また、いつもユーモアたっぷりのお話の中に、暖かさややすらぎを感じ、同時に現実の問題を鋭く指摘されていると感じさせられることが多々ありました。一方、特筆すべきこととしてお住まいの京都においては祇園祭山鉾連合会理事長、さらに全国山・鉾・屋台保存連合会副会長および祭屋台等制作修理技術者会会長を務められ、日本の伝統的祭事の支援事業に従事されているというご活躍は当センターの誇りでありました。深見教授は国際教育センターの創設期および充実期の功労者であり、そのご退職は当センターにとって非常に大きな打撃であります。しかし、これも定めであれば是非もなく、我々一同、晴れやかな笑顔をもってお見送りし、今後の一層のご清栄と益々のご活躍をお祈り申し上げる次第です。

平成15年12月25日

国際教育センター研究紀要編集委員会



『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』

編集委員（〇印代表）

|        |       |
|--------|-------|
| 語学系    | 小栗裕子  |
|        | 山本 薫  |
| 情報系    | 〇亀田彰喜 |
|        | 宮城茂幸  |
| 健康・体力系 | 〇寄本 明 |

2003 年 12 月 25 日印刷

2003 年 12 月 25 日発行

編集、発行

滋賀県立大学国際教育センター

522-8533 彦根市八坂町 2500

Phone: (0749) 28-8251

Facsimile: (0749) 28-8480

E-mail: [report@ice.usp.ac.jp](mailto:report@ice.usp.ac.jp)

(<http://www.ice.usp.ac.jp/>)

印刷

（有）東呉竹堂 ひがし印刷

滋賀県蒲生郡安土町下豊浦 2700

Phone: 0749-46-2108

The University of Shiga Prefecture  
The University Center for Intercultural Education  
2500 Hassaka-cho  
Hikone, Shiga 522-8533 JAPAN